

主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 14

十郎丸長谷古遺跡Ⅱ

福岡県久留米市北野町今山所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第 287 集

2025

九州歴史資料館



(1) 調査地空中写真（西上空から）



(2) II区1号大溝（西から）

巻頭図版2



(1) I 区 2号竪穴住居（南から）



(2) I 区12号土坑（北東から）

序

本書は、令和4・5年度に主要地方道久留米筑紫野線建設事業に伴い福岡県県土整備部久留米県土整備事務所から執行委任を受けて発掘調査を行った、久留米市北野町今山に所在する十郎丸長谷古遺跡の発掘調査報告書です。

本書には、令和4年度に発掘調査を実施しました第2次調査の記録、及び令和5年度に実施しました第3次調査の記録を所収しており、十郎丸長谷古遺跡の第2冊目の報告書となります。

今回の十郎丸長谷古遺跡の調査では、第1次調査に引き続き弥生時代の遺構として竪穴住居・土坑・甕棺墓を、奈良時代の遺構として竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などを確認し、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器・鉄器などの遺物が出土しました。また、江戸時代の大溝は幅2~5メートル、深さ1.2~1.6メートルと大規模なもので、物資運搬用の運河として開削した可能性が考えられるなど、新たな知見を得ることができました。

本書が、筑後地域における埋蔵文化財及び歴史についての認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び整理・報告書作成にあたり、多大なる御協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係機関・関係各位に深く感謝いたします。

令和7年3月31日

九州歴史資料館

館長 吉田 法稔

例　言

1. 本書は、主要地方道久留米筑紫野線建設事業に伴い、令和4・5年度に九州歴史資料館が発掘調査を実施した十郎丸長谷古遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び報告書作成は、福岡県県土整備部久留米県土整備事務所から執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書には、令和4年度に発掘調査を実施した十郎丸長谷古遺跡の第2次調査及び令和5年度に発掘調査を実施した第3次調査の記録を所収しており、十郎丸長谷古遺跡の第2冊目の報告書になる。
4. 遺構の実測は、平川真保・小田が行い、福岡県文化財保護課及び九州歴史資料館職員の応援を得た。
5. 出土遺物の実測は、岡島雅美・坂田順子・寺岡和子・中川眞理子・中川陽子・原富子・小田により、浄書は江上佳子・桑野暢子による。
6. 本書掲載の写真は、遺構を小田が撮影し、遺物は西宏明の撮影による。なお、ドローンによる空中写真の撮影は、ワールド・フォト・サービスに委託した。
7. 第2次調査1号甕棺墓検出の赤色顔料の分析は、九州国立博物館志賀智史氏に依頼し、分析結果の玉稿を頂戴した。
出土遺物及び図面・写真等の記録類は、総て九州歴史資料館で保管している。
8. 挿図で使用する方位は、日本測地系2011の座標北による。
9. 出土土器の縮尺は、弥生土器が1/4、須恵器・土師器・陶磁器が1/3を基本とした。
なお、須恵器は断面を黒く塗りつぶし、他の土器と区別した。
10. 遺跡分布図は、平成8年国土地理院発行「甘木」・「久留米」1/50,000を使用した。
11. 本書の執筆は、Ⅱ・V章を小田が、IV章を志賀が行い、I・III章は坂元・小田で分担し、文末に名前を明記した。
12. 本書の編集は、小田が担当した。

凡　例

付図・遺構配置図・挿図及び図版では、以下の略号を用いた。

住：竪穴住居　　建：掘立柱建物　　豎：方形竪穴　　D：土坑　　M：溝
UM：畝溝　　墓：土壙墓・近世墓　　P：柱穴若しくはPit

目 次

I 調査組織と調査経過	1
1 調査経過	1
2 調査組織	3
II 遺跡の位置と歴史的環境	4
III 検出遺構と出土遺物	9
1 調査と遺構の概要	9
(1) 2次調査の概要	9
(2) 3次調査の概要	9
2 I区東・西側調査地の遺構と遺物	11
(1) 壺穴住居	11
(2) 土 坑	13
(3) 大 溝	16
(4) 溝	16
(5) 墓	19
(6) 落 返	20
(7) 谷 部	21
(8) ピット、その他出土の土器	24
3 I区中央調査地の遺構と遺物	26
(1) 壺穴住居	26
(2) 掘立柱建物	32
(3) 方形壙	34
(4) 土 坑	35
(5) 大 溝	47
(6) 溝	50
(7) 畝 溝	59
(8) 近世墓	64
(9) ピット、その他出土の遺物	64
4 II区調査地の遺構と遺物	71
(1) 掘立柱建物	71
(2) 土 坑	71
(3) 焼土坑	73
(4) 大 溝	73

(5) 杭 列	75
(6) 溝	77
(7) 畝 溝	83
(8) 土壙墓	89
(9) その他出土の遺物	89
5 III区調査地の遺構と遺物	90
(1) 掘立柱建物	90
(2) 土 坑	91
(3) 区画溝	91
(4) 溝	95
(5) 畝 溝	98
(6) その他出土の遺物	99
IV 十郎丸長谷古遺跡から出土した赤色顔料について	100
V 総 括	105
1 検出遺構	105
2 出土遺物	106
3 十郎丸長谷古遺跡の変遷	106

図版目次

卷頭図版 1 (1) 調査地空中写真（西上空から）

(2) II区1号大溝（西から）

卷頭図版 2 (1) I区2号竪穴住居（南から）

(2) I区12号土坑（北東から）

本文対象頁

図版 1 (1) 2次調査地遠景（東上空から）	9
(2) 2次I区調査地（北上空から）	9
図版 2 (1) I区東側調査区北半（真上から）	9
(2) I区東側調査区南半（南上空から）	9
図版 3 (1) I区西側調査区北半（真上から）	9
(2) I区西側調査区南半（上空から）	9

図版4	(1) 1号竪穴住居（南から）	11
	(2) 1号竪穴住居（西から）	11
	(3) 1号竪穴住居カマド（南から）	11
図版5	(1) 1号土坑（東から）	13
	(2) 2号土坑（北東から）	13
	(3) 3号土坑（南から）	14
図版6	(1) 1号大溝土層（東から）	16
	(2) 1号溝土層①（東から）	16
	(3) 1号溝土層②（西から）	16
	(4) 1号溝土層③（西から）	16
図版7	(1) 2号溝土層①（南から）	17
	(2) 2号溝土層②（南から）	17
	(3) 5号溝（南東から）	17
	(4) 6号溝（東から）	18
	(5) 6号溝東壁土層（西から）	18
図版8	(1) 1号甕棺墓検出状況（南から）	19
	(2) 掘方半裁状況（南から）	19
	(3) 棺外赤色顔料検出状況（東から）	19
	(4) 完掘状況（南から）	19
図版9	(1) 1号竪穴住居出土鞴羽口	12
	(2) 1・2号土坑出土土器	13
	(3) 5号溝出土土器	17
	(4) 3号落込出土土器	20
図版10	(1) 1号甕棺	20
	(2) 谷部出土土器①	21
図版11	(1) 谷部出土土器②	21
	(2) ピット、その他出土の土器	24
図版12	(1) 3次調査地遠景（西上空から）	9
	(2) 3次調査地遠景（東上空から）	9
図版13	(1) I区中央調査区、II・III区遠景（西上空から）	9
	(2) I区中央調査区下層、II・III区遠景（西上空から）	9
図版14	(1) I区中央調査区、II・III区（真上から）	9
	(2) I区中央調査区全景（南上空から）	9
図版15	(1) 2号竪穴住居（南から）	26
	(2) 2号竪穴住居貼床下部（南から）	26
図版16	(1) 2号竪穴住居カマド（南から）	26

(2) カマド完掘状況（南から）	26
(3) 土器出土状況（南から）	26
図版 17 (1) I 区中央調査区下層遺構（真上から）	29
(2) 3～5号竪穴住居（真上から）	29
(3) 3～5号竪穴住居（北東から）	29
図版 18 (1) 3・4号竪穴住居（南東から）	29
(2) 3号竪穴住居（南東から）	29
(3) 3号竪穴住居土器出土状況（北東から）	29
図版 19 (1) 4号竪穴住居（北東から）	31
(2) 4号竪穴住居炉跡（南東から）	31
(3) 5号竪穴住居（東から）	31
図版 20 (1) 1号掘立柱建物、畝溝群（東上空から）	32
(2) 1号方形竪穴、2号竪穴住居、8・9・12・14・15号溝（東上空から）	34
図版 21 (1) 4号土坑（西から）	35
(2) 4号土坑土器出土状況（南西から）	35
(3) 9号土坑（南東から）	42
(4) 9号土坑鉄鎌出土状況（西から）	42
図版 22 (1) 7号土坑（東から）	38
(2) 7号土坑東半部土器出土状況（北から）	38
(3) 7号土坑西半部土器出土状況（北から）	38
図版 23 (1) 8号土坑（北から）	42
(2) 12号土坑（東から）	45
(3) 12号土坑（南から）	45
図版 24 (1) I 区中央調査区、2号大溝（南から）	47
(2) 2号大溝北壁土層（南から）	47
(3) 2号大溝中央部土層（南から）	47
図版 25 (1) 上層1号小溝（南から）	50
(2) 上層1号小溝（北から）	50
(3) 上層1号小溝（西から）	50
(4) 上層1号小溝南端土層（北から）	50
図版 26 (1) I 区中央調査区（真上から）	50
(2) 溝・畝溝群（南から）	59
図版 27 (1) 近世墓群A（南上空から）	64
(2) 近世墓群A（西から）	64
(3) 11号近世墓（東から）	64
(4) 11号近世墓位牌出土状況（北から）	64

図版 28	(1) 2号堅穴住居出土土器	27
	(2) 3号堅穴住居出土土器①	29
図版 29	(1) 3号堅穴住居出土土器②	29
	(2) 5号堅穴住居出土土器	32
	(3) 1号方形堅穴出土土器	34
	(4) 4号土坑出土土器	35
	(5) 7号土坑出土土器	38
図版 30	(1) 8号土坑出土土器	42
	(2) 9号土坑出土土器	42
	(3) 10号土坑出土土器	45
	(4) 12号土坑出土土器	46
図版 31	(1) 6号溝出土土器	50
	(2) 8号溝出土土器	53
	(3) 16号溝出土土器	58
	(4) ピット他出土土器	64
	(5) 層位等出土土器	67
図版 32	(1) 11号近世墓出土位牌	64
	(2) I区出土土製品・石製品	67
	(3) I区出土鉄製品	67
	(4) I区出土石器・石製品	68
図版 33	(1) 3次II・III区調査地遠景（西上空から）	71
	(2) 3次II・III区調査地遠景（南上空から）	71
図版 34	(1) II区調査地全景（真上から）	71
	(2) II区調査地全景（南上空から）	71
図版 35	(1) 1号掘立柱建物（南から）	71
	(2) 1号土坑（南から）	71
	(3) 1号土壙墓（南から）	89
	(4) 人骨出土状況（東から）	89
図版 36	(1) 1号大溝（西から）	73
	(2) 1号大溝西壁土層（東から）	74
	(3) 1号大溝東端部土層（東から）	74
図版 37	(1) 溝、畝溝群（北から）	77
	(2) 1号溝北壁土層（南から）	77
	(3) 1・5号溝土層（南から）	77
図版 38	(1) 1～5号溝、畝溝群、杭列（西上空から）	77
	(2) 1～5号杭列（南から）	75

(3) 3号土坑出土土器	73
(4) II区検出時出土土器	89
図版 39 (1) 3次I～III区調査地遠景（手前がIII区、東から）	90
(2) 3次III区調査地全景（真上から）	90
図版 40 (1) III区調査地全景（北上空から）	90
(2) III区調査地全景（東上空から）	90
図版 41 (1) 1号掘立柱建物（西から）	91
(2) 1～3号溝（東から）	91
(3) 1号溝中央部土層（南から）	91
(4) 3号溝木杭出土状況（南東から）	94
図版 42 (1) 4号溝（南東から）	95
(2) 4号溝（北東から）	95
(3) 2・3号溝間出土土器	99
(4) III区出土石器・石製品・鉄器	99

挿図目次

第1図 十郎丸長谷古遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）	7
第2図 十郎丸長谷古遺跡調査区域図（1/1,000）	8
第3図 I区遺構配置図（1/400）	10
第4図 1号竪穴住居実測図（1/60）	11
第5図 1号竪穴住居カマド実測図（1/30）	12
第6図 1号竪穴住居出土土器他実測図（1/3、5は1/4、6は1/2）	12
第7図 1～3号土坑実測図（1/30）	13
第8図 1号土坑出土土器実測図（1/3）	14
第9図 2・3号土坑出土土器実測図（1/3）	15
第10図 1～3・6号溝、大溝土層実測図（1/40）	16
第11図 1・2・5・6号溝、大溝出土土器実測図（1/3、5～10は1/4）	18
第12図 1号甕棺墓実測図（1/20）	19
第13図 1号甕棺実測図（1/6）	19
第14図 1～3号落込出土土器実測図（1/3）	21
第15図 谷部出土土器実測図①（1/3）	22
第16図 谷部出土土器実測図②（1/3、10・11は1/4）	23
第17図 ピット、その他出土の土器実測図（1/3、10～12は1/4）	25

第18図	2号竪穴住居実測図(1/60).....	26
第19図	2号竪穴住居カマド実測図(1/30).....	27
第20図	2号竪穴住居出土土器実測図(1/3)	28
第21図	3号竪穴住居実測図(1/60).....	29
第22図	3号竪穴住居出土土器実測図(1/4)	30
第23図	4号竪穴住居実測図(1/60).....	31
第24図	5号竪穴住居実測図(1/60).....	31
第25図	4・5号竪穴住居出土土器実測図(1/4)	32
第26図	1号掘立柱建物出土土器実測図(1/3)	32
第27図	1号掘立柱建物・6号土坑実測図(1/80).....	33
第28図	1号方形竪穴、10・12・15号畝溝実測図(1/60)	34
第29図	1号方形竪穴出土土器実測図(1/3)	35
第30図	4・9・12・14号土坑実測図(1/20)	36
第31図	4～6号土坑出土土器実測図(1/4)	37
第32図	5・7・8・11・13号土坑実測図(1/40)	39
第33図	7号土坑出土土器実測図①(1/3)	40
第34図	7号土坑出土土器実測図②(1/3)	41
第35図	8・9号土坑出土土器実測図(1/4)	43
第36図	10・15～17号土坑実測図(1/40)	44
第37図	10・11・13・16号土坑出土土器実測図(1/4)	45
第38図	12号土坑出土土器実測図(1/8)	46
第39図	2号大溝土層実測図(1/40).....	47
第40図	2号大溝出土土器・陶磁器他実測図(1/3)	48
第41図	1号小溝土層実測図(1/40).....	50
第42図	4・7・13・16号溝、1～3号畝溝実測図(1/40)	51
第43図	4・6～9号溝出土土器・陶磁器実測図(1/3)	52
第44図	7～9号溝、4～6・11・16・17号畝溝実測図(1/40)	54
第45図	6・11・12・15号溝実測図(1/40)	55
第46図	10・11・15・16号溝出土土器実測図(1/3)	56
第47図	12号溝出土土器実測図(1/3)	57
第48図	5～12号畝溝実測図(1/40)	59
第49図	1～3・5～10・12・13・17号畝溝出土土器実測図(1/3).....	63
第50図	11号墓出土位牌実測図(1/3)	64
第51図	Pit等出土土器他実測図(1/3).....	65
第52図	層位等出土土器他実測図(1/3)	66
第53図	I区出土土製品・石製品・鉄製品実測図(1/2、8は1/4).....	68

第 54 図	I 区出土石器・石製品実測図 (1/4)	69
第 55 図	II・III区遺構配置図 (1/400)	70
第 56 図	1号掘立柱建物、14・15号畝溝実測図 (1/60)	71
第 57 図	1～3号土坑実測図 (1/40)	72
第 58 図	1・3号土坑出土土器実測図 (1/3)	73
第 59 図	1号大溝西壁土層実測図 (1/80)	73
第 60 図	1号大溝階段状遺構実測図 (1/40)	74
第 61 図	1号大溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	75
第 62 図	杭列、3号溝土層実測図 (1/80)	76
第 63 図	杭列出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	76
第 64 図	1号溝北壁土層、2・4号溝実測図 (1/60)	77
第 65 図	1～3・5・13・15号溝出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1/3、3は1/4)	78
第 66 図	6～9・14～16号溝実測図 (1/80)	81
第 67 図	10～13号溝、1号焼土坑実測図 (1/60)	82
第 68 図	17号溝、2～4・6・12・13号畝溝実測図 (1/60)	84
第 69 図	1・5・6・13号畝溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	85
第 70 図	5・7～12号畝溝実測図 (1/60)	86
第 71 図	16～21号畝溝実測図 (1/80)	88
第 72 図	21～23号畝溝実測図 (1/60)	89
第 73 図	1号土壙墓実測図 (1/40)	89
第 74 図	検出時出土土器実測図 (1/3)	89
第 75 図	1・2号掘立柱建物、4・12・13号溝実測図 (1/60)	90
第 76 図	1号土坑実測図 (1/40)	91
第 77 図	1・11号溝実測図 (1/60)	92
第 78 図	2号溝西壁土層実測図 (1/40)	93
第 79 図	3号溝東端部実測図 (1/60)	93
第 80 図	1～3号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	94
第 81 図	4～6・13号溝出土土器・陶器実測図 (1/3、5は1/4)	95
第 82 図	4・5・9・10号溝、1～5号畝溝実測図 (1/60)	96
第 83 図	6・7号溝、6号畝溝実測図 (1/60)	97
第 84 図	2～3号溝間出土土器実測図 (1/3)	99
第 85 図	1・2号溝出土石製品・鉄器実測図 (1/4、1・2は1/2)	99
第 86 図	遺構変遷図 (1/600)	107

表目次

表1 赤色顔料の分析結果一覧	104
表2 弥生時代後期～古墳時代前期の甕棺墓出土の赤色顔料	104
表3 遺構番号新旧対照表	108

付 図

付図 十郎丸長谷吉遺跡2・3次調査遺構配置図（1/200）



I 区 2 号大溝掘削状況（北から）



水没した I 区

I 調査組織と調査経過

1 調査経過

(1) 調査に至る経過

主要地方道久留米筑紫野線（福岡県道53号）は、福岡県久留米市御井旗崎1丁目の国道322号との交点を起点とし、筑紫野市大字永岡の福岡県道・大分県道112号福岡日田線との交点を終点とする実長19.236kmの道路で^(註1)、福岡県南部と北部とを繋ぐ重要な幹線道路である。起点の久留米市御井旗崎から三井郡大刀洗町彼坪の国道322号との交差点までの区間には幅員が狭い箇所が存在し、福岡県久留米県土整備事務所による道路改良事業が継続してなされている。一方、筑後川に架かる神代橋は、老朽化が著しかったため改築工事がなされ、新橋は平成30年3月に供用を開始している。

一方、十郎丸長谷古遺跡が所在する旧北野町十郎丸地区には、古町遺跡・十郎丸遺跡・十郎丸長谷古遺跡等の周知の埋蔵文化財が存在する。^(註2) 県道久留米筑紫野線に係る埋蔵文化財の試掘・確認調査は、当該の久留米市文化財保護課が対応していたが、市域においては民間開発による発掘調査件数が増加し、県道久留米筑紫野線の改良事業に係る発掘調査には対応困難である旨の連絡が福岡県文化財保護課にあった。これを受け、令和2年9月14日に福岡県久留米県土整備事務所・久留米市文化財保護課・福岡県文化財保護課・九州歴史資料館の四者で発掘調査に関する協議を行った。協議の結果、発掘調査は福岡県久留米県土整備事務所の執行委任を受け九州歴史資料館が実施することとなり、調査期間は稻作の時期を避けた令和2年11月～令和3年6月で行うことを確認した。

1次調査の成果は、弥生時代の竪穴2基・甕棺墓1基・土坑3基、奈良時代の竪穴住居11軒・掘立柱建物1棟・土坑1基、鎌倉時代の溝1条、江戸時代以降の溝18条、ピット約260個を検出し、^(註3) 弥生土器・須恵器・土師器等の土器を中心にパンケース約60箱の遺物が出土した。これにより、本跡は、標高約8mの低地に形成された弥生・奈良・江戸時代の複合遺跡であることが判明し、不明瞭であった久留米市北東部における歴史解明の一助となすことになった。 (小田)

(2) 2次調査の経過

2次調査地は、令和2～3年度に発掘調査を実施した1次調査地の北東約100mに位置する。当初、南北に通る道路に挟まれた区域全体（I区）を調査対象地とする予定であったが、中央部分の畠地が翌年度の調査対象地となつたため東側・西側二つの調査区に分けて調査を実施した。また、調査区内で排土処理を行う必要があったため、各々南側半分の調査を行い、終了後、反転して北側半分の調査に移ると言う行程で進めた。

調査の着手は、令和4年10月24日で、調査対象地にバックホーを搬入した。10月27日に建機類を搬入して作業ヤードを設営し、作業員による人力の作業も開始した。先ず、東側調査区南半で除草後にバックホーによる表土掘削を10月31日まで行った。11月4日からは西側調査区の表土掘削を始め、人力による掘削、遺構の写真撮影・図化作業も並行して進めた。11月18日にはバックホーによる南半の掘削が終了し、11月21日～22日の午前中に調査区の清掃を行い、22日の午後から東側・西側調査区南半のドローンによる空中撮影を行った。

西側調査区で残った掘削作業と記録作成を進めつつ、記録作成の終了した東側調査区の反転のた

めの埋め戻しと北半部の掘削を11月24日から始めた。12月1日には東側調査区の反転が完了し、その間、記録作成の終了した西側調査区の反転のためのバックホーの稼働を12月28日まで行った。12月中に東・西調査区北半の掘削、記録作成をほぼ完了することができ、令和4年内の調査完了を目指としていたが、月後半に雨・雪が多くなり断念し、正月前後の休みで作業を一旦中断した。

年が明けた令和5年1月4日から作業を再開し、4日～5日の午前中にかけて東・西調査区北半の清掃を行い、5日の午後に2回目のドローンによる空中撮影を行った。5日中に残った記録の作成と道具類の片付け後、現場から道具類を搬出したことで作業員による諸作業も完了し、1月10日に建機類を撤収した。バックホーによる調査区北半の埋め戻しは、2月15日に完了し、令和4年度の2次調査が終了した。調査面積は、約1,510m²であった。(坂元)

(3) 3次調査の経過

3次調査地は、2次調査地の東側隣接地及び2次調査で未調査となった箇所である。便宜上、西側からⅠ区中央部（2次未調査箇所）、道路を挟んだ東側をⅡ区、さらに東端側をⅢ区とした。なお、稲作期間中は湧水が著しいため、稲刈りの終了を待って調査に着手することになった。令和5年10月10日にバックホー・建機類を搬入し、同日からⅠ区中央部の表土剥ぎを開始した。

2次調査の結果により、表土下約1.5mで遺構面に達すると言うことだったので、昨年度の調査区を確認しつつバックホーによる掘削を行った。表土から床下までは約80cmの深さがあり、床直下で検出した南北方向の小溝は、写真撮影・平板測量による記録を取った後に掘り下げた。作業員を投入できる程度に掘削が進捗したので、10月26日から作業員を投入し、遺構検出・掘削作業に着手した。10月30日には南北大溝・近世墓群を検出し、両者の掘り下げに掛かった。また、11月1日からはバックホーによるⅡ区の客土除去を開始した。

11月に入ても30度を超える暑い日の最中、8日には吉田法稔福岡県教育委員会教育長（現九州歴史資料館長）をはじめとする文化財安全パトロールがあり、現場の安全点検が行われた。12月5日からはⅢ区の表土剥ぎを開始した。Ⅰ区においては、12月6日に測量杭を打ち、遺構図化の準備に取り掛かる。年内の調査は12月27日で終了した。年明けの1月5日から調査を再開するが、寒波の襲来により9日は遺構面が凍結し、23・24日は積雪により現場作業を休止した。一方、2月は雨天が続き、20・26～27日と降雨により現場が冠水し、排水作業に数日を費やす有様であった。また、29日は雨天であったが、明日のドローンによる空中写真撮影に備えてⅠ～Ⅲ区の水汲み及び環境整備を行った。3月1日午前中も水汲みを継続し、午後から何とか写真撮影に漕ぎ着けた。

なお、Ⅰ区の南半部においては弥生土器を包含しており、下層遺構の存在が予測されたため上層遺構の実測作業が終了した3月4日から再度バックホーを投入し掘削を行った。その結果、3軒の竪穴住居及び土坑を検出するに至った。しかし、5日の降雨により現場が完全に水没し、6・7日は終始水汲み作業となった。3月に入ってからは、Ⅰ～Ⅲ区大溝の水汲み作業が日課となる。

年度末が迫った3月19日にはⅠ区下層遺構及びⅡ・Ⅲ区の空中写真を撮影し、調査終了の目処を付けることができた。3月21日から図化作業が終了したⅡ区の埋戻し作業に掛かり、22日には建機の一部を返却し、25日で作業員は終了した。27日からはⅠ区の埋戻しを開始した。また、Ⅲ区は図化作業が一部残っていたが、福岡県文化財保護課職員の応援を得て終了することができた。29日には残っていた機材を撤収し、調査を完了した。3次の調査面積は、約2,560m²であった。

2 調査組織

主要地方道久留米筑紫野線（福岡県道53号）道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、事業主体である福岡県久留米県土整備事務所の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。本書で報告する内容は、令和4年度に実施した十郎丸長谷古遺跡の2次調査及び令和5年度に実施した3次調査の成果である。出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において行った。

十郎丸長谷古遺跡の2次・3次調査及び報告書作成関係者は、下記のとおりである。

		〔本調査〕令和4年度	令和5年度	〔報告書作成〕令和6年度
福岡県久留米県土整備事務所				
所 長	喜多島礼和	山口甲秀	北野 靖	
道路建設課長	宮地伊織	坂井健太郎	菅野栄次	
同 建設第一係長	富士原展美	行武靖二	大川沙織	
同 主任技師	有澤謙一	有澤謙一	有澤謙一	
九州歴史資料館				
(総括)	館 長	城戸秀明	城戸秀明（前任） 吉田法稔（後任）	吉田法稔
	副館長	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
(庶務)	総務室長	黒岩計光	黒岩計光	山下雄二
	総務班長	高山美保子	岡本裕子	岡本裕子
	総務班	小原大輔	徳永裕美	徳永裕美
	同	古賀知香	古賀知香	池松幸一郎
	同	原口美紀	原口美紀	原口美紀
	埋蔵文化財調査室長	吉村靖徳（兼務）	吉田東明	吉田東明
	文化財調査班長	森井啓次	進村真之	進村真之
(調査・報告)	同 企画主査			坂元雄紀
	同 技術主査	坂元雄紀	小田和利	企画推進班 小田和利

発掘調査に際しては、発掘作業員の方々をはじめ、福岡県久留米県土整備事務所、久留米市文化財保護課、福岡県文化財保護課及び地権者の御協力を得た。なお、3次調査の終盤は大雨に見舞われ、調査区が幾度か水没するという憂き目に遭遇したが、無事に発掘調査を終了することができた。記して感謝したい。

(小田)

註1 福岡県久留米県土整備事務所ホームページ

「久留米県土整備事務所が管理する道路及び河川一覧」より

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/kurume-kanrishisetsu-ichiran2024.html>

なお、本報告書では、久留米筑紫野線の実延長 19,236 m をkmの表記とした。

註2 北野町教育委員会 1997 『北野町遺跡等詳細分布調査報告書』（北野町文化財調査報告書第6集）

註3 九州歴史資料館 2023 『十郎丸長谷古遺跡』（福岡県文化財調査報告書第280集）

II 遺跡の位置と歴史的環境

旧久留米市は、福岡県南部の筑後地方に属し、日本有数の穀倉地帯である筑紫平野の中央部を占めていた。現在の久留米市は、平成17年に三井郡北野町、三潴郡三潴町・城島町、浮羽郡田主丸町の4町を編入し、市域が東西方向に拡大したため県下では政令指定都市の福岡市・北九州市に次ぐ人口約30万人を擁し、平成20年には中核市に移行した。

市域北縁の大半は、筑紫次郎の異名を持つ九州最大の一級河川である筑後川で限られ、同河川は筑紫平野のほぼ中央を西に貫流し、有明海に注いでいる。一方、市域の南東縁には耳納山地が聳え、西から高良山（標高312.0m）・耳納山（標高367.6m）・発心山（標高697.4m）・鷹取山（801.6m）と山々が連なり、稜線はうきは市・八女市との境界をなしている。

遺跡の位置

十郎丸長谷古遺跡は、久留米市北野町十郎丸・今山に所在する。地番は1次調査地が北野町十郎丸字野屋敷1096～1098番地で、2次調査地が同今山字今山後1089・1090・1092・1093番地で、3次調査地が同今山字今山後1066～1068・1091-1・1091-2・1110～1114番地であり、十郎丸地区と今山地区^(註1)に跨がる。

遺跡は筑後川の支流である陣屋川と大刀洗川に挟まれた標高約8mの沖積地に立地し、十郎丸長谷古遺跡から筑後川までの距離は約1.8kmを測る。1次調査地は圃場整備が既になされた場所であり削平を受けているが、2・3次調査地は今山集落の北縁部と言うこともあり、圃場整備が未実施の場所であった。なお、発掘調査以前の地目は、宅地・田・畠である。

地理的環境

十郎丸長谷古遺跡が所在する旧三井郡北野町は、筑後川中流部平野（筑紫平野の両筑平野と呼ばれる地域^(註2)）の南縁部に位置し、東～北縁は三井郡大刀洗町と接し、北～西縁は小郡市と接し、南縁は筑後川で限られる。この筑後川中流部平野は、筑後川を主に、宝満川・小石原川・佐田川・荷原川・桂川等の河川による堆積作用で形成された沖積平野で、低平な地形をなしている。古くからある集落は、これら河川の自然堤防上に立地するが、標高は北野天満宮付近で26.3mと最も高く、次いで西鉄金鳥駅付近で20.8m、西鉄大城駅付近で18.7mであり、その他の場所は9～14m程度と低い。そのために豪雨の度に幾度となく冠水し、甚大な被害を被ってきた地域もある。

歴史的環境

ここでは、旧北野町に所在する弥生時代から奈良時代の遺跡を中心に周辺の遺跡を概観する。
弥生時代を主体とする遺跡には、定格遺跡・餅田遺跡・今寺遺跡・良積遺跡・仁王丸遺跡・北大手木遺跡・彼坪遺跡・大城中筒井遺跡等多くの遺跡が存在し、集落や墓地を形成している。

定格遺跡は、十郎丸長谷古遺跡の北東約3.7kmに位置する。圃場整備事業に伴い、平成3年度に発掘調査が実施された。検出した遺構には、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴住居3軒、弥生時代中期の貯蔵穴1基、古墳時代初頭の土壙墓1基・木棺墓1基、平安時代の井戸1基、溝19条等がある。出土土器には、弥生土器・須恵器・土師器・B類黒色土器等があり、2号竪穴住居からは鉄鎌が、3号竪穴住居からは鉄鏃が出土している。また、包含層からの出土ではあるものの縄文時代後～晩期の深鉢形土器片もみられる。

餅田遺跡は定格遺跡の北側約250mに位置し、本跡も圃場整備事業に伴い平成2年度に発掘調査が実施された。弥生時代中期の墓地を主体とする遺跡で、甕棺墓43基・土壙墓9基・箱式石棺墓1基及び甕棺墓に伴う祭祀土坑2基がある。他には弥生時代後期の竪穴住居1基、時期不詳の掘立柱建物1棟、溝2条等を検出している。^(註4)特筆されるのが、2号祭祀土坑を中心に1～4・13・14・21号甕棺墓の7基を放射状に埋葬している点であり、一家族の墓域を成すものとみられる。

今寺遺跡は十郎丸長谷古遺跡の東側約2.7kmに位置する。宅地造成に伴い、平成7年度に調査された。弥生時代前期及び後期の集落を主体とするが、前期の小児甕棺墓9基も検出されている。1号竪穴住居の床面からは白色瑪瑙製の錐・スクリーパー及び多量の剥片が出土しており、瑪瑙石器製作工房の可能性が指摘されている。^(註5)また、特筆される点として、7世紀末の地震に伴うとみられる噴砂痕跡が住居・甕棺墓と重複して確認されたことである。

良積遺跡は先に紹介した餅田遺跡の西側約600mに位置し、圃場整備事業に伴い平成4～6年度に発掘調査が実施された。縄文時代後期～鎌倉時代初頭に至る複合遺跡で、旧北野町域において中心となる大規模な遺跡である。検出遺構には、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居160軒・掘立柱建物36棟・周溝含む溝40条・井戸250基（奈良・平安期含む）、弥生時代中期～古墳時代初頭の甕棺墓35基・土壙墓6基・石棺墓2基、大型方形遺構（平安時代か）^(註6)等がある。主体となる時期は、弥生時代後期～古墳時代前期であるが、弥生時代前期の段階で既に環濠集落が営まれ、後期段階では二重環濠へと変容する。

また、本跡の甕棺墓は副葬品を豊富に有し、13号甕棺墓は棺外に小型丸底壺を安置していた。14号甕棺墓は棺内に管玉1点、棺外に方格規矩鳥文鏡1面を副葬していた。16号甕棺墓は棺内副葬品として勾玉1点・管玉14点・ガラス小玉2点の玉類、棺外副葬品として鉄鉗2点がみられた。18号甕棺墓も棺内に管玉1点、高坏2点を副葬していた。20号甕棺墓は棺内副葬品として翡翠製勾玉1点・管玉4点があり、棺外副葬品として台付鉢1点、鉄鏃17点・鉈2点、・鎌2点の鉄器がみられた。28号甕棺墓からは仿製の内行花文鏡1面が出土している。29号甕棺墓内からはガラス製勾玉2点が、30号甕棺墓外からは不明鉄製品が出土した。^(註7)この様に、良積遺跡の甕棺墓の副葬品は、近隣の遺跡に比して極めて豊富であり、同遺跡の優位性を示すものである。

北大手木遺跡は、筑後川の一支流である大刀洗川左岸の後背湿地に立地し、遺構検出面の標高は7m前後と低い。主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴い、平成9年度に福岡県教育委員会が発掘調査を行った。十郎丸長谷古遺跡の約1.6km北側に当たる箇所である。調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居5軒及び土坑、時期不詳の掘立柱建物2棟、道路状遺構等が検出された。^(註8)道路状遺構は、2条の溝が約8mの心々距離で併走するもので、方位は北から西に37°振っている。なお、路面は圃場整備による削平を受け、遺存していなかった。

彼坪遺跡は、北大手木遺跡の北側約250mに位置し、主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴い平成9～13年度に福岡県教育委員会が発掘調査を行った。検出した遺構は、弥生時代中期を主体とする竪穴住居80軒・掘立柱建物7棟・土坑260基・甕棺墓1基・環濠・溝17条等があり、土器、土製品（勾玉・土錘・投弾・円盤）、打製石器（石鏃・石錐・石斧・石匙・剥片等）、磨製石器（石鏃・石劍・石斧）及び石製品（石包丁・石鎌・砥石・叩石・投弾）が出土している。^(註9)集落は弥生時代中期を主体に営まれるが、墓としては甕棺墓1基が存在するのみで、墓地は近辺に存在するとみられる。また、北大手木遺跡との間には空閑地が存在し、両者は別遺跡と捉えられる。

大城中筒井遺跡は、今寺遺跡の南側500mで、筑後川右岸の自然堤防上に立地する。弥生時代の墓地を主体とし、甕棺墓68基・石棺墓20基、祭祀土坑4基、中世の火葬土坑が検出された。また、墓域の南側では、^(註10)弥生時代中期の水田が確認されている。

古墳時代～平安時代の遺跡としては、^{（註11）}古賀ノ上遺跡・陣屋堂出遺跡がある。

古賀ノ上遺跡は、餅田遺跡の東側約1kmに位置し、圃場整備事業に伴い平成3・4年度に発掘調査が実施された。調査区はI-A・B及びII-A・Bに分けられ、II-B区では古墳時代～奈良時代の堅穴住居6軒、奈良～平安時代の掘立柱建物30棟・井戸・溝等を検出した。^(註12)22～25号掘立柱建物の4棟は口字形配列をなし、南東隅には3間×3間の総柱建物（21号建物）を配置している。建物の柱穴内からは玉縁の丸瓦、繩目叩きの平瓦が、建物群の中央空閑地からは綠釉陶器片が出土しており、官衙的性格の施設と考えられる。なお、II-A・B区では、7世紀の集落が確認されている。

陣屋堂出遺跡は、十郎丸長谷古遺跡の北東約1.2kmの場所に位置し、宅地造成に伴い発掘調査が行われた。「陣屋」地名は大友氏家臣の戸次鑑連（立花道雪）が当地に陣を構えたことに起因する。検出した遺構には、掘立柱建物1棟・井戸1基・土坑1基・溝1条があり、9～13世紀の土器・陶磁器が出土した。^(註13)中でもS X02からは「次成」と記した墨書き器が出土しており注目される。なお、調査範囲が狭小なこともあってか、陣跡に関する遺構は確認されなかった。

この他に、古町遺跡は十郎丸長谷古遺跡の約500m南西側に位置し、江戸時代の建物や積土遺構が調査されている。^(註14)

参考文献

北野町教育委員会 1997 『北野町遺跡等詳細分布調査報告書』（北野町文化財調査報告書第6集）

註1 十郎丸長谷古遺跡2・3次調査地の遺跡名は、本来なら今山今山後遺跡とすべき所であるが、1次調査地と一連の遺跡とみられることから、遺跡名は敢えて変更せず従来の名称とした。

註2 甘木市史編さん委員会 1982 『甘木市史 上巻』「第二章 地形」

註3 北野町教育委員会 1993 『定格遺跡 餅田遺跡 付篇八勝負遺跡』（北野町文化財調査報告第1集）

註4 註3と同じ。

註5 北野町教育委員会 1996 『今寺遺跡』（北野町文化財調査報告書第3集）

註6 北野町教育委員会 1996 『良積遺跡I』（北野町文化財調査報告書第5集）

北野町教育委員会 1999 『良積遺跡III』（北野町文化財調査報告書第12集）

註7 北野町教育委員会 1998 『良積遺跡II』（北野町文化財調査報告書第11集）

註8 福岡県教育委員会 2000 『北大手木遺跡』（福岡県文化財調査報告書第151集）

註9 福岡県教育委員会 2002 『彼坪遺跡I』（福岡県文化財調査報告書第167集）

福岡県教育委員会 2003 『彼坪遺跡II』（福岡県文化財調査報告書第182集）

福岡県教育委員会 2005 『彼坪遺跡III』（福岡県文化財調査報告書第202集）

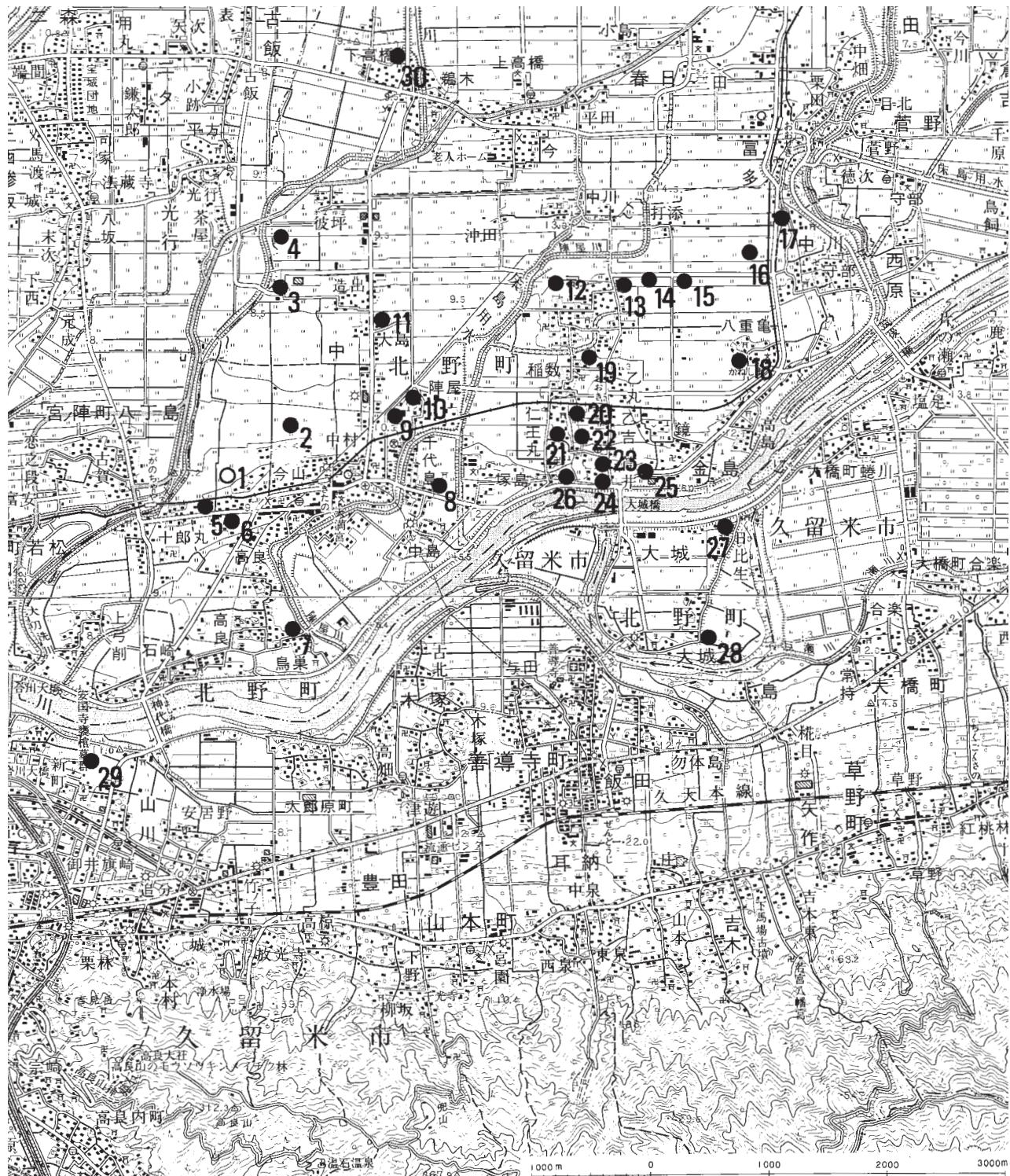
註10 北野町教育委員会 2003 『大城中筒井遺跡』（北野町文化財調査報告書第17集）

註11 北野町教育委員会 1995 『古賀ノ上遺跡1』（北野町文化財調査報告書第2集）

註12 北野町教育委員会 2001 『古賀ノ上遺跡2』（北野町文化財調査報告書第14集）

註13 北野町教育委員会 1997 『陣屋堂出遺跡』（北野町文化財調査報告書第8集）

註14 久留米市教育委員会 2018 『古町遺跡第1次調査報告』（久留米市文化財調査報告書第396集）



- | | | | | |
|------------|------------|--------------|------------|------------|
| 1 十郎丸長谷古遺跡 | 2 今山向才ノ木遺跡 | 3 北大手木遺跡 | 4 彼坪遺跡 | 5 古町遺跡 |
| 6 十郎丸遺跡 | 7 鳥巣遺跡 | 8 千代島遺跡 | 9 茶屋敷遺跡 | 10 陣屋堂出遺跡 |
| 11 大島遺跡 | 12 良積遺跡 | 13 八勝負遺跡 | 14 餅田遺跡 | 15 石町遺跡 |
| 16 古賀ノ上遺跡 | 17 箕ノ城遺跡 | 18 中木戸遺跡 | 19 稲数遺跡 | 20 仁王丸古墳 |
| 21 仁王丸遺跡 | 22 今寺遺跡 | 23 大城小学校校庭遺跡 | 24 大城中筒井遺跡 | 25 金島馬場遺跡 |
| 26 塚島遺跡 | 27 日比生遺跡 | 28 土居遺跡 | 29 安国寺甕棺墓群 | 30 下高橋官衙遺跡 |

第1図 十郎丸長谷古遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第2図 十郎丸長谷古遺跡調査区域図 (1/1,000)



III 検出遺構と出土遺物

1 調査と遺構の概要

(1) 2次調査の概要

十郎丸長谷古遺跡の2次調査箇所は、令和2～3年度に実施した1次調査箇所の北東側約100mの位置に当たる。当該遺跡は筑後川と大刀洗川との間に位置し、これら河川の堆積作用によって形成された自然堤防上の立地と考えられる。現状の集落地の北側縁辺に当たり、圃場整備の範囲内にあった1次調査箇所に対し、2次調査地点は境界と隣接した範囲外である。現地表の標高は9m前後で、遺構面までの堆積層は厚く、遺構面の標高は7.6m前後で、現在の集落地のある南側が高く、農地の広がる北側へとやや低くなる傾向にある。

調査区が東西で分かれ、調査面積は東側で約660m²、西側で約850m²の計約1,510m²である。東側調査区では、竪穴住居1軒、溝3条、大溝1条、甕棺墓1基を検出し、西側の調査区では土坑3基、溝2条が主な遺構で、他に多数のピットがある。また、東側では不整な平面形で、非常に浅い落込が3基、西側の中央には不整な平面形で大きな谷部と人為的な掘削とはみられない遺構もある。なお、個別の報告は行わないが、近世墓群が調査区南側に位置する。弥生土器、土師器、須恵器を中心パックケース15箱の遺物が出土している（弥生時代終末から古墳時代初頭の土器は、まとめて土師器と表記）。調査成果は1次調査と同様であり、遺跡の範囲が当該地まで及んでいることが判明した。

なお、報告に際しては、溝の遺構番号を下記のように再整理している。 (坂元)

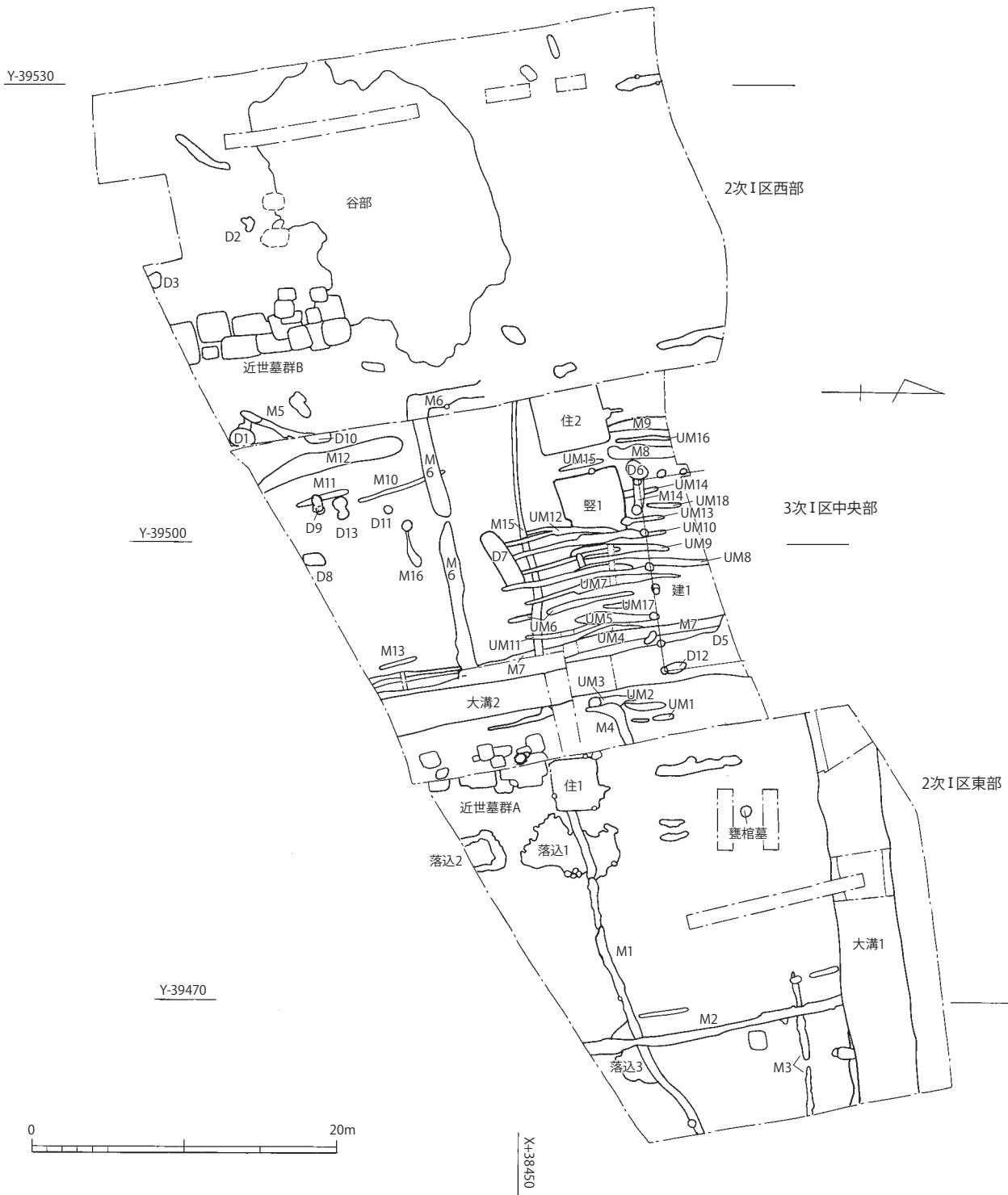
〈調査時〉	→	〈報告時〉
1～3号溝	→	1号溝
4号溝	→	2号溝
7・8号溝	→	3号溝

(2) 3次調査の概要

十郎丸長谷古遺跡の3次調査箇所は、2次調査地の東側隣接地及び2次調査で未調査となった箇所で、便宜上、西側からI区中央部（2次未調査箇所）、道路を挟んだ東側をII区、さらに東端側をIII区とした。遺構面は表土下約1.5mにあり、稻作期間中は湧水により調査ができないため稻刈りの終了を待って10月10日から調査に着手した。3次の調査面積は、I区が約1,304m²（2層分）、II区が約707m²、III区が約549m²の合計約2,560m²であった。

検出した遺構は、I区中央部では弥生時代の竪穴住居3軒、奈良時代の竪穴住居1軒・掘立柱建物1棟、弥生・奈良時代の土坑9基、溝29条、江戸時代の大溝1条、近世墓11基がある。弥生時代の竪穴住居は下層遺構にあたり、上層遺構の調査後に検出したものである。弥生土器・須恵器・土師器・青磁・白磁、鉄器等が出土した。II区においては、奈良時代の掘立柱建物1棟、江戸時代の大溝・杭列等を検出し、III区においては、掘立柱建物（時期不詳）2棟、江戸時代の区画溝、東西溝2条等を検出した。今回の調査により、遺跡の範囲がさらに東側に拡大することを確認した。

次項では、令和4年度調査のI区東・西側調査区、令和5年度調査のI区中央調査区、II区・III区の順番で調査成果を報告するが、遺構番号の付け方は区域分けを優先した。 (小田)



第3図 I区遺構配置図 (1/400)

2 I区東・西側調査地の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

1号竪穴住居（図版4、第4図）

東側調査区の西端で確認され、1号落込の西側に位置し、1号溝を切る。北壁の東寄りに突出型のカマドを付設する。主軸は南北方向で3.1m、東西方向で3.5mを測り、平面形はやや東西に長い長方形に近いが、カマドの右袖付近は外側へ張り出す。住居の壁高は7cm程度と残りは僅かである。主柱穴は4個とみられるが、何れも径が小さいとともに浅く、判然としない。掘方の明瞭なものとして、北東隅に床面からの深さが30cm近いピットを伴う。中央部以外は広い範囲で貼床され、最深部で掘方まで10cm程度の厚さとなる。出土遺物は、須恵器・土師器・弥生土器とピットの一つから出土した鉄滓の付着した鞴羽口片がある。

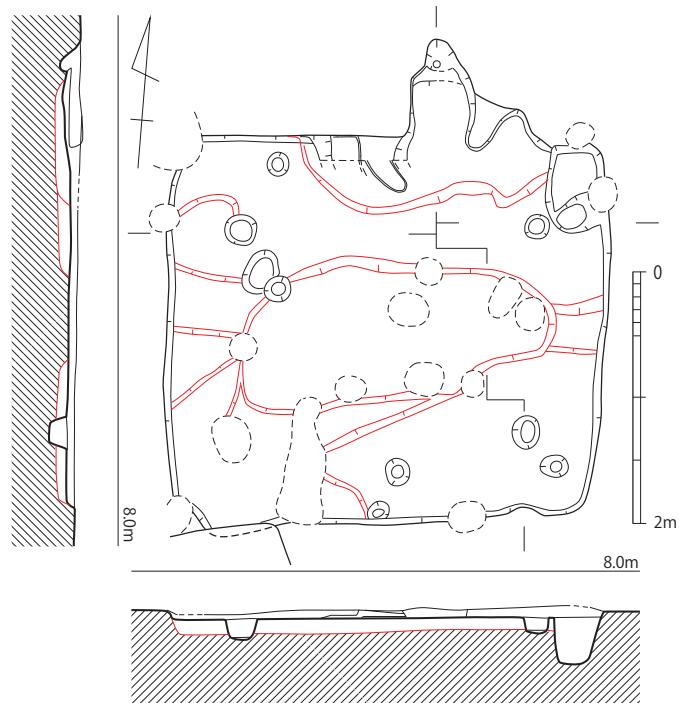
カマド（図版4-3、第5図）

住居北壁の東寄りに突出型のカマドが確認された。住居北壁が、左袖付近から西側が直線的であるのに対し、右袖は外側へ張り出した壁に付されているため、住居東西主軸から面した場合、左袖が非常に内へ突出する。ただ、両袖ともにカマド中央へ湾曲し、左袖の反りが強いため、焚口は主軸よりもやや東側を向いた構造とみられる。右袖先端から測った燃焼部、左袖付け根から測った突出部は、ほぼ同規模の80~90cm程度である。突出部の端部は、やや緩やかな傾斜で立ち上がりつつ、部分的に窪んで再度立ち上がる。この窪んだ部分は、下層の別遺構の可能性も捨てきれない。また、特徴的であるのは、カマド構築前に周辺を床面より低く掘り下げており、粘土を含み、部分的に地山に近似した層（6層）を貼り、その上にカマドを構築している点である。

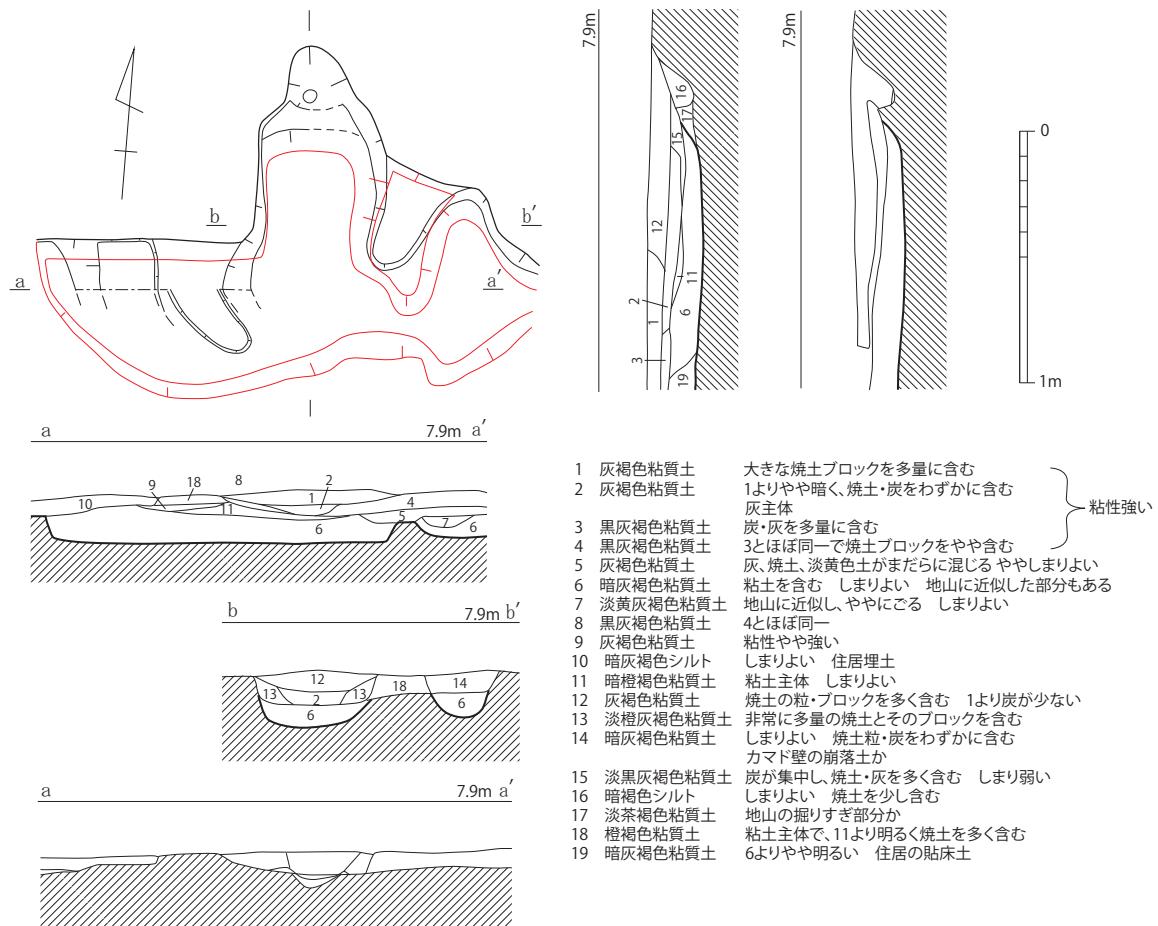
右袖の下位のみは地山が掘り残されており、その上に右袖が構築されている。なお、この貼土を土層確認の際に東側でやや掘り過ぎており、また当初右袖下位の9層が1・2層と近似していたため、袖外の堆積土と誤認して掘削してしまっており、土層の確認位置より南側の左袖は、本来よりも掘り過ぎである。燃焼部の埋土は、灰褐色・黒灰褐色の粘質土が主体で、焼土・炭・灰を含む。

出土土器他（図版9-1、第6図1~6）

1は須恵器壊身で、底部には高台が付される。2~4は土師器甕で、外面ハケ目、内面ケズリを施す。2・3は口縁部が短く外反し、僅かに開き、口縁下の胴部は直線的な立ち上がりである。2は3よりも口縁部の開きがやや大きい。4は2・3よりも口径が大きく器壁も厚い。口縁下のくび



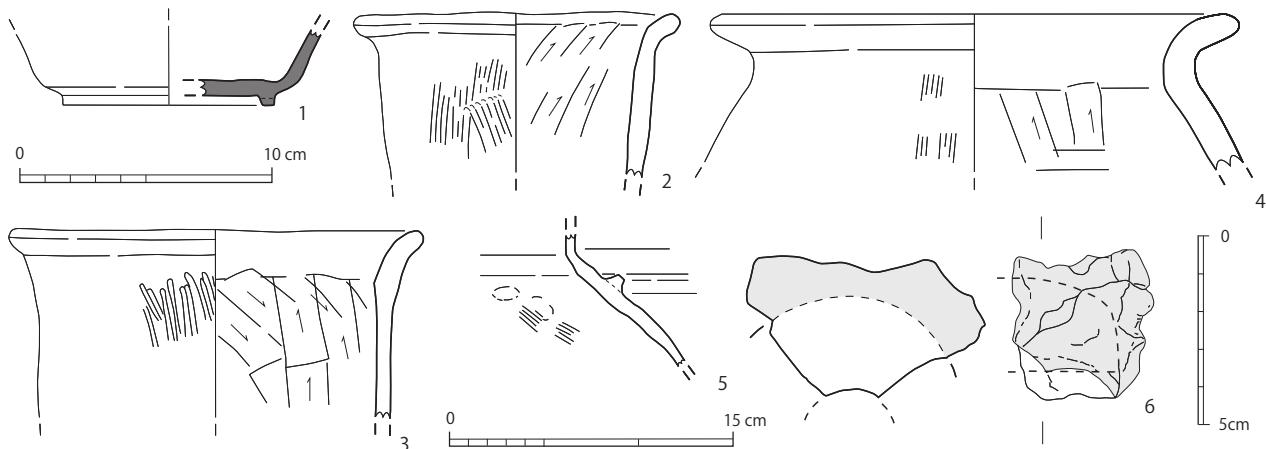
第4図 1号竪穴住居実測図 (1/60)



第5図 1号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

れがやや強い。1～4は何れもカマドの周辺から出土した。

5は貼床内出土の弥生土器壺である。頸部から肩部の破片で、断面台形のキザミ目を施した小さな突帯が付される。6は轍の羽口先端部で、欠損面以外には厚く鉄滓が付着する。羽口本体の残存部は2.8cm程度で、径7.5cm程度、孔径2.5cm程度に復元される。



第6図 1号竪穴住居出土土器他実測図 (1/3、5は1/4、6は1/2)

(2) 土 坑

1号土坑（図版5-1、第7図）

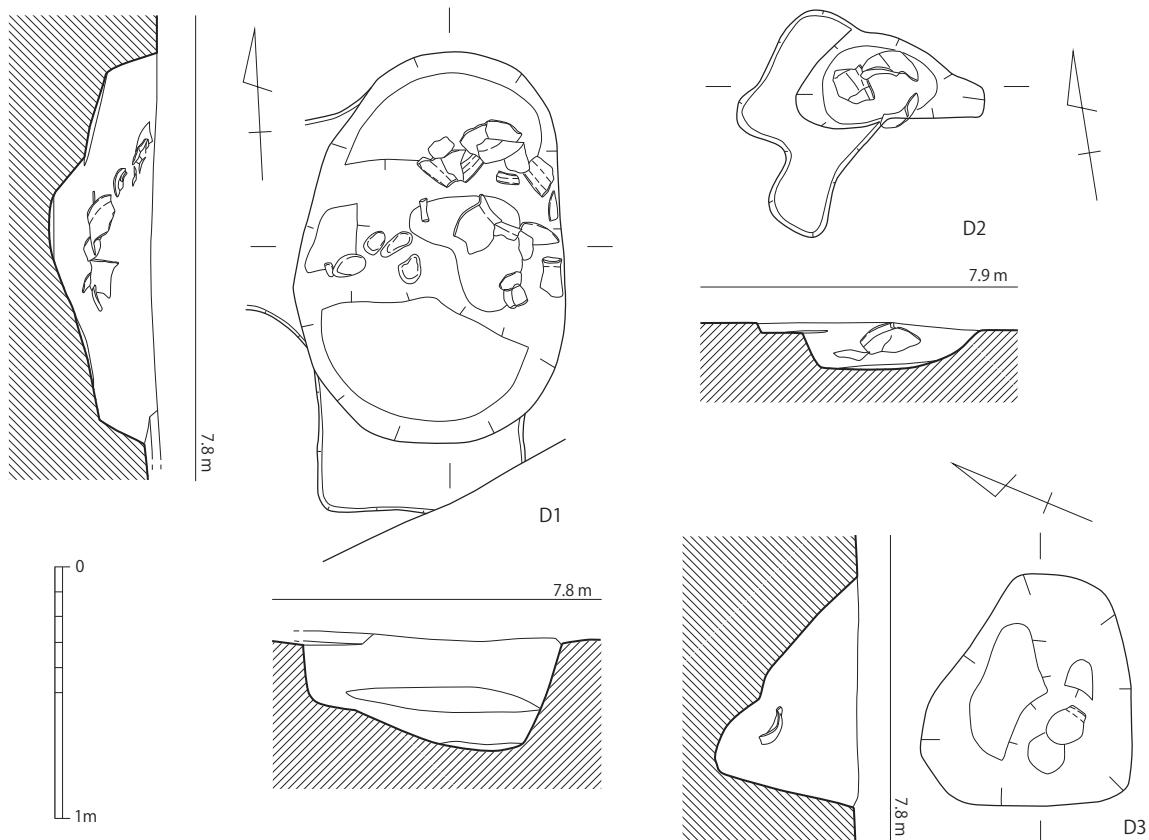
西側調査区の南東端で確認され、5号溝の東側に位置する。主軸は南北方向で1.55m程度、東西方向で1.1m程度を測り、南北方向に長い楕円形の平面である。深さ40cm程度の壁が残り、南北と西にテラス部分があって中央東寄りが最深部である。テラス部の深さより上位の東側でまとまって土師器が出土しており、西側で複数の礫が出土した。

出土土器（図版9-2、第8図1～8）

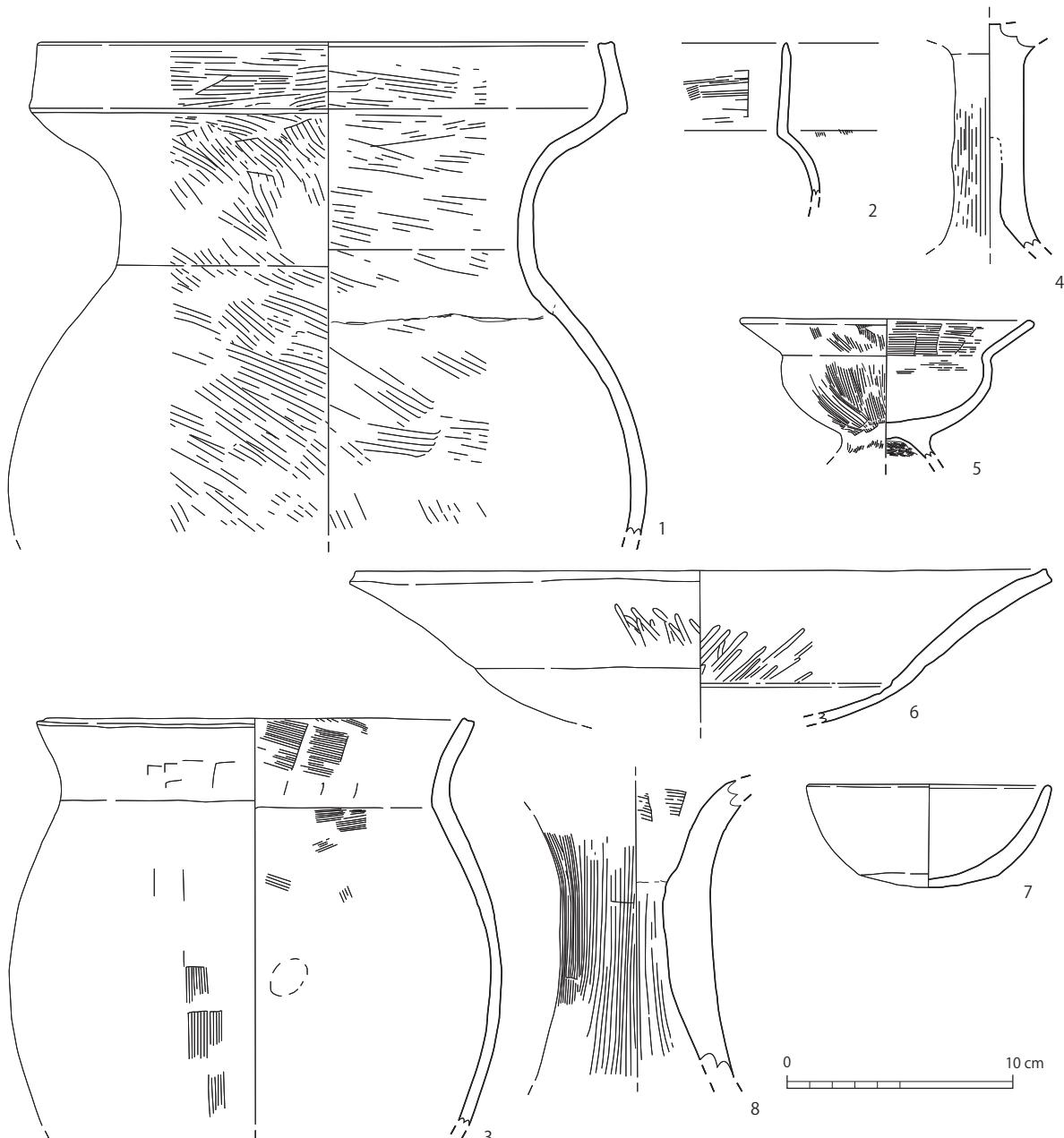
1は土師器複合口縁壺で、内外面ともにやや粗いハケ目が施される。頸部内面には明瞭に接合痕が残る。2は土師器直口壺の破片で、口縁部は直線的に伸び、頸部で強く屈曲して胴部が張る器形である。器壁は非常に薄く、淡黄灰褐色の胎土は精製気味である。3は土師器甕で、口縁部の屈曲はあまり強くなく、緩やかに開く。外面器表の剥落が目立つ。4は土師器高壺の細い脚柱部で、上半は中実である。5は土師器高壺の壺部から脚の接合部で、上半は直線的に伸びて開き、強い屈曲より下は張って接合部につながる。内外面ともにハケ目調整である。6は土師器高壺の壺部で、緩い屈曲部から上位は外反気味に大きく開く。胎土は精製され、内外面ともにミガキが残る。7は土師器の素口縁の鉢で、外面下位にケズリの痕跡が残る。8は土師器の中位がくびれる器台で、上下端を欠失する。

2号土坑（図版5-2、第7図）

西側調査区の南側で確認され、谷部の南に隣接する位置である。主軸は南北方向で90cm程度、東



第7図 1～3号土坑実測図 (1/30)



第8図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)

西方向で1m程度の不整な平面形であるが、西半は殆どが深さ5cm未満の浅いテラス部で、南北軸35cm程度、東西軸75cm程度の範囲で明瞭な掘方である。そこは深さ18cm程度の壁が残り、南側ではオーバーハングして、土器が調査面の下位に入り込む。3片の土師器甕が出土した。これらは、全て別個体である。

出土土器（図版9-2、第9図1～3）

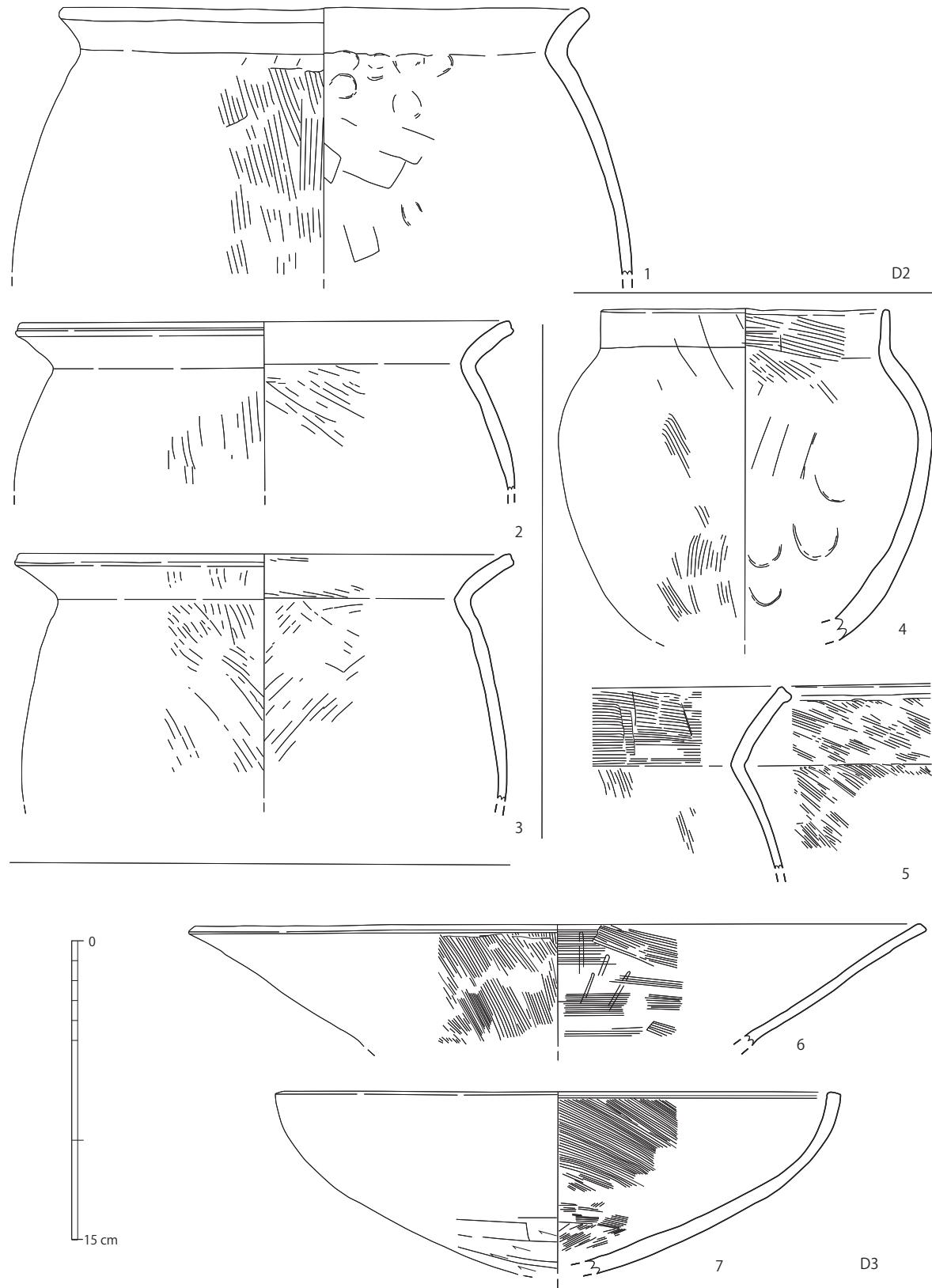
1～3は全て土師器甕で、口縁部から胴部にかけての破片である。1は屈曲した口縁部の伸びは短く、外面ハケ目、内面ナデが施される。2・3は内外面ともにハケ目が施される。

3号土坑（図版5-3、第7図）

西側調査区の南端部で確認された。主軸は南北方向で80cm程度、東西方向で90cm程度の不整な隅丸五角形の平面である。北側から東側にかけてテラス部分があり、南側の狭い範囲が底面で、55cm程度の壁が残る。複数の土師器が出土し、最も残りの良い壺がテラス部分と同じ深さで出土した。

出土土器（第9図4～7）

4は土師器直口壺で、短い口縁部が直線的に上方に伸びる。頸部の屈曲はあまり強くなく、胴も強くは張らない。器壁は全体的に厚めである。5は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、内外面ともにハケ目が施される。つまんでの強いナデにより口縁端部は下方に僅かに突出気味である。6は土師器高壺の壺部上半で、直線的に大きく開く。7は土師器鉢で、口縁端部は面をなし、外面下位でケズリが施される。



第9図 2・3号土坑出土土器実測図 (1/3)

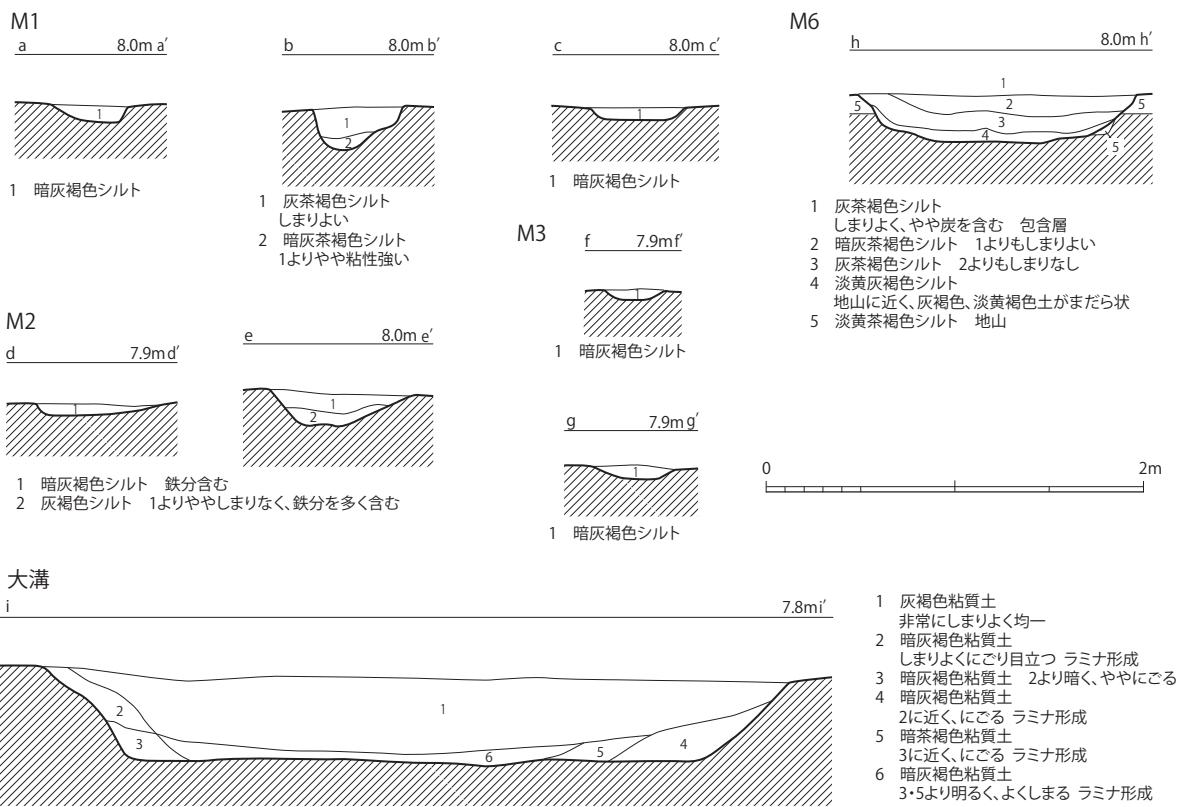
(3) 大溝

1号大溝（図版2-1・6-1、第10図）

東側調査区の北端近くで東西に近い軸で伸び、26m程度に渡って検出した。東西両側で調査区外へ伸びる。規模は検出面で4m程度の幅で、下端で3m程度、確認した部分では深さ50cm程度である。埋土は灰褐色から暗灰褐色の粘質土主体で、他の溝より粘性が強く、均質で締まりのよい埋土が厚く堆積し、主に下層ではラミナの形成が見られる。同様の埋土が西側調査区北端で僅かに検出されており、この部分に繋がる可能性がある。遺物が著しく少ないため、調査では部分的な掘削に留めている。図示できる出土遺物は、ごく僅かである。

出土土器（第11図12・13）

12は須恵器提瓶の口縁部小片で、やや内湾気味に立ち上がる。13は土師器鍋の口縁部小片で、外面で玉縁状に肥厚する。



第10図 1～3・6号溝、大溝土層実測図 (1/40)

(4) 溝

1号溝（図版6-2～4、第10図）

東側調査区の南側を東北東－西南西の軸で伸び、23m程度に渡って検出した。調査段階では、途切れや切り合いを基に、東から1・2・3号溝と分けていたが、方向軸の共通性などから連続した同一の遺構と判断して報告する。調査区東端から調査区外に及び、西側は1号竪穴住居によって切られるが、更に西側の3次調査区まで連続する。規模は概ね幅50cm程度、深さは5～20cm程度で、東西で底面の標高差は殆どない。暗灰褐色から灰褐色のシルト質の埋土である。少数の土師器片が出土した。

出土土器（第11図1～3）

1は五様式系土師器甕で、口縁部は外反して開き、端部付近の器壁は薄くなる。胴部内面にケズリの痕跡が残る。2は在地系甕の口縁部で、外反気味に僅かに開く。3は土師器鉢の口縁部で、端部は面をなして肥厚気味である。

2号溝（図版2-2、7-1・2、第10図）

東側調査区の東側をほぼ南北の軸で伸び、34m程度に渡って検出した。調査段階では4号溝としていたが、報告での整理で2号溝として報告する。溝の南側は調査区外に及び、北側は1号大溝によって切られるが、大溝の更に北側には伸びていない。規模は、幅が30～90cm程度と差があり、部分的に深くなる箇所もあるものの基本的に5～10cm程度の深さで、南北で底面の標高差は殆どない。埋土は灰褐色から暗灰褐色のシルト質で、上層では鉄分の含有が目立つ。小片の土器のみが出土した。

出土土器（第11図4）

4は土師器土鍋の口縁部小片で、粘土帯を貼り付けた玉縁状の外面には煤が付着する。

3号溝（図版2-1、第10図）

東側調査区の東側をほぼ東西の軸で伸び、9.5m程度に渡って検出した。調査段階では、溝が途切れることから東から7・8号溝と分けていたが、方向軸の共通性などから連続した同一の遺構と判断して報告する。調査区東端から調査区外に及ぶ。規模は概ね幅30～50cm程度、深さは5～15cm程度で、底面の標高は西側へと僅かに低くなる傾向にある。暗灰褐色のシルト質の埋土である。図化できる出土土器はない。

5号溝（図版7-3）

西側調査区の南東隅を北東－南西に近い軸で伸び、4～5m程度に渡って検出した。南端では途切れ、北端は3次調査区へ伸びると想定されたが、結果的に3次調査区内では検出できず、限られた範囲の検出に留まった。なお、狭い範囲としてはやや多くの土師器が出土したため、土層の記録に良好な箇所がなく、予定していた3次調査での記録が適わなかったが、埋土は1・2号溝と近似した灰褐色のシルト質であった。規模は、50～70cm程度の幅で、深さは10～15cm程度である。

出土土器（図版9-3、第11図5～10）

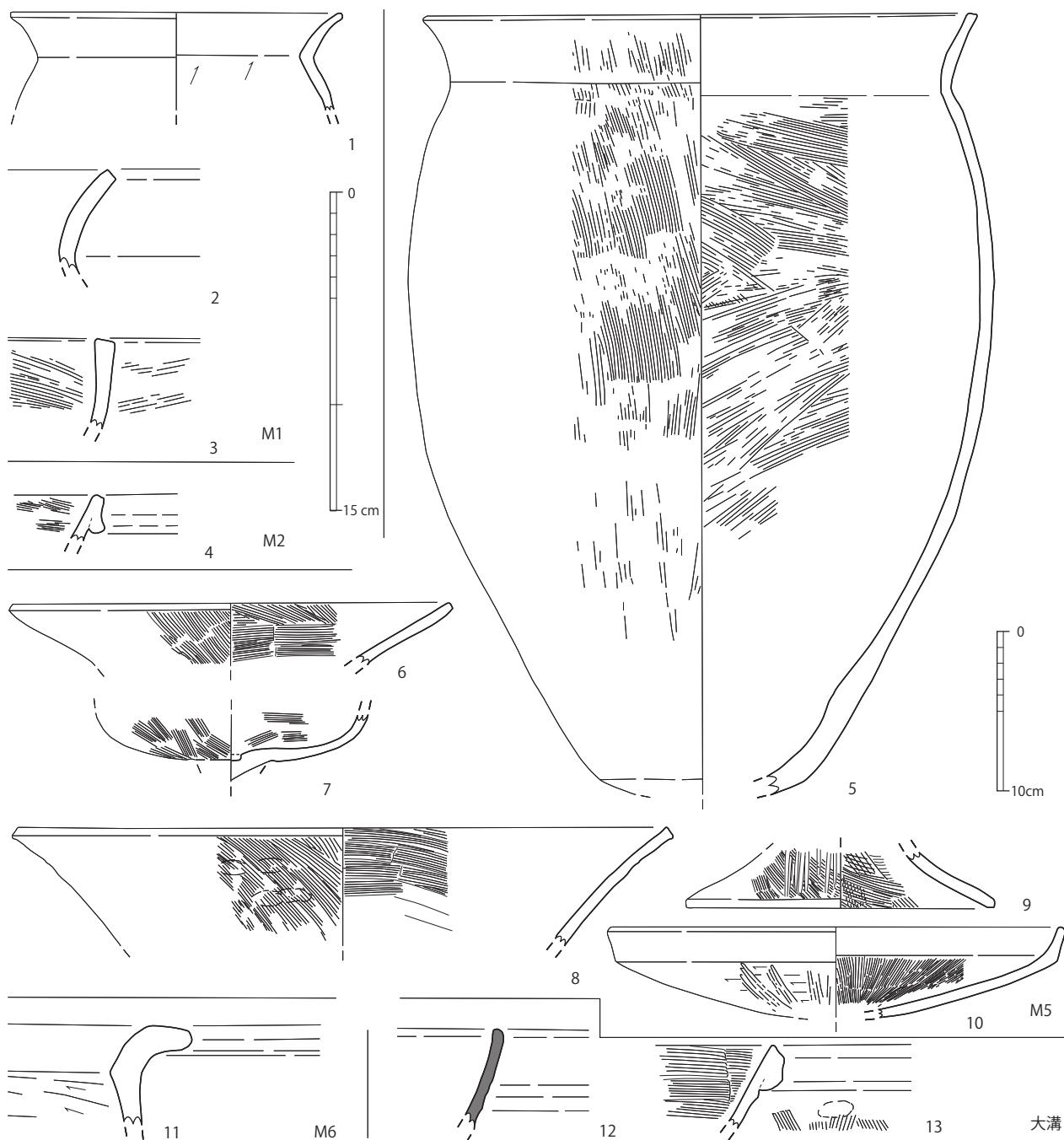
5は土師器甕で、底部以外でほぼ完形に復元される。口縁部は僅かに屈曲してからやや外反気味に僅かに開く。内外面ともにハケ目が施される。6は高壙口縁部で、直線的に開く。7は高壙壙部下半で、内面には軸痕とみられる小さな窪みがあり、外面には脚部の剥落痕が残る。6・7は胎土が精製気味で、同一個体の可能性がある。8は高壙壙部上半で、外反気味に大きく開く。9は高壙脚裾部で、内外面ともにハケ目が施され、外面は更に縦位のミガキが施される。10は弥生土器高壙で、壙部のみが残り、壙部上位では立ち上がりがやや強くなり、外面には稜を生じて伸びる。下半は内外面ともにハケ目を施すが、外面のみハケ目前のケズリが残る。淡茶褐色の胎土で、外面下端に黒斑が見られる。

6号溝（図版7-4・5）

西側調査区の東端で南北に5m程度の範囲で検出し、南端で東方へ屈曲して3次調査区内へ伸びる。一方、反転前の調査区南側でも北側との境界付近で検出し、北側にも伸びるとみられたが、反転後に確認できなかった。規模は、幅70～120cm程度と差があり、底の起伏が目立つ部分がある。深さは5～20cm程度で、特に北側で浅い点は、北側への伸長が確認できなかった点と関連すると考えられる。埋土は上層で灰茶褐色系のシルト質で、下層では地山に近似する淡黄茶褐色のシルトである。土師器が1点のみ出土した。

出土土器（第11図11）

11は土師器甕の小片で、短い口縁部は強く外反して開く。内面には明瞭なケズリが残る。



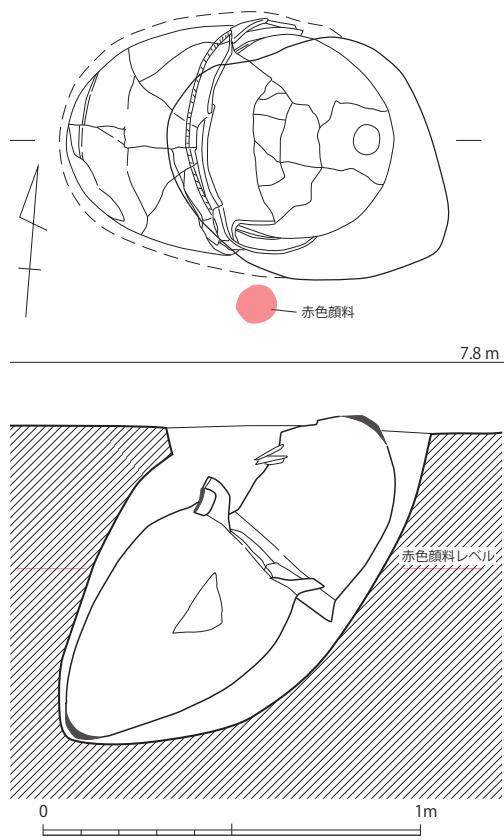
第11図 1・2・5・6号溝、大溝出土土器実測図 (1/3、5~10は1/4)

(5) 蔕棺墓

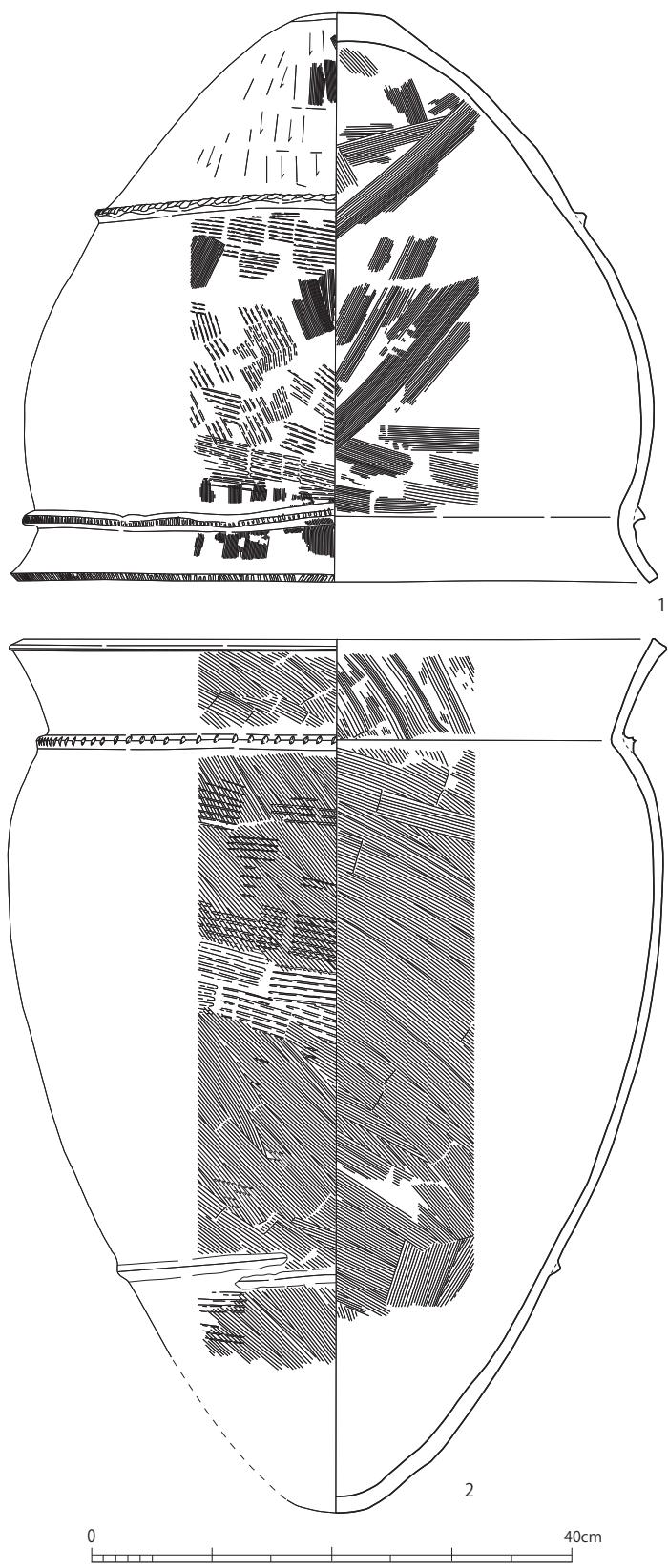
1号甕棺墓（図版8、第12図）

東側調査区の中央よりやや西側で検出した。主軸はほぼ東西方向に沿っており、墓壙は検出面で南北60cm程度、東西70cm程度の不整な円形の平面である。下位では西側へ大きくオーバーハンプして掘り込んでおり、東から西へと上下棺を差し込んで埋置した合わせ口の甕棺墓である。東側の上端と西側の最深部までの平面の長さはほぼ1mで、検出面からの深さは85cm程度である。上甕の上面側の一部は内部へと落ち込んでいた。棺内の埋土を別置して精査したが、副葬品は確認できなかつた。

下部の記録のため、南西側の地山と考えられる部分の掘削を行ったところ、両棺口縁部南端とほぼ同様の標高



第12図 1号甕棺墓実測図 (1/20)



第13図 1号甕棺実測図 (1/6)

で南側へ10~20cm程度の範囲に集中する赤色顔料を確認した。墓壙外と想定されるため、掘削部の壁面の精査を行ったが、顔料埋置に伴う掘方を確認できなかった。そのため、墓壙掘削時に墓壙内から横方向へ掘り込みをして埋置した可能性がある。また、棺内からも赤色顔料が確認された。なお、墓壙埋土の検出は必ずしも明瞭にできたわけではなく、顔料に関わる掘方も確認できなかったため、認識が困難な掘方の有無を確認するために、甕棺墓の南北両側にトレンチを掘削したが、遺構等を確認することはできなかった。

出土土器（図版10-1、第13図1・2）

1は上甕で、器高が低いため鉢に近い器形である。口縁下はあまり強くくびれず、やや外反気味に短く立ち上って開く。口径が最大径で、口縁端部は面をなす。底部は丸底に近い稜の不明瞭なレンズ状である。口縁下と胴部下位に突帯が巡り、口縁端部と口縁下の突帯には、浅く細いキザミ目が付され、胴部突帯には棒状工具を押し当てたような太いキザミ目が付される。胴部外面上位には、タタキ後にハケ目が施され、胴部外面下位はケズリ後にハケ目が施される。胴部内面及び口縁部外面にはハケ目が施される。胴部外面下位に黒斑が部分的に見られ、対応する内面にもそれよりやや狭い黒斑が見られる。赤色顔料が塗布された痕跡は、内面全体に及ぶ。淡茶褐色の胎土である。

2は下甕で、口縁は僅かに外反気味ながら直線的に近い上方への伸びとなり、口縁端部へとやや肥厚気味で、端部は面をなす。口径が最大径ではあるが、口縁部下、胴部上位の径との差はごく僅かである。ただし、土中での土圧の影響もあるためか、接合後の口縁部は楕円で、口径は長軸と短軸で51~57.5cmの差異がある。口縁下外面と胴部下位に断面三角形の突帯が巡り、前者にはキザミ目が付され、後者は終始点が互い違いとなって輪状ではない。内面の口縁部・胴部の境には、明瞭な稜が生じる。口縁部、胴部の内外面にはハケ目が施され、胴部外面にはハケ目前のタタキ目が残る。胴部外面の広範囲に黒斑が見られる。赤色顔料が塗布された痕跡は、内面全体に及ぶ。淡黄灰褐色の胎土である。

（6）落込

東側調査区の平面が不整形で、壁の立ち上がりが不明瞭で浅い遺構を1~3号落込としたが、土器が出土するもの人為的なものとは判断されないため、出土土器のみを報告する。

1号落込出土土器（第14図1）

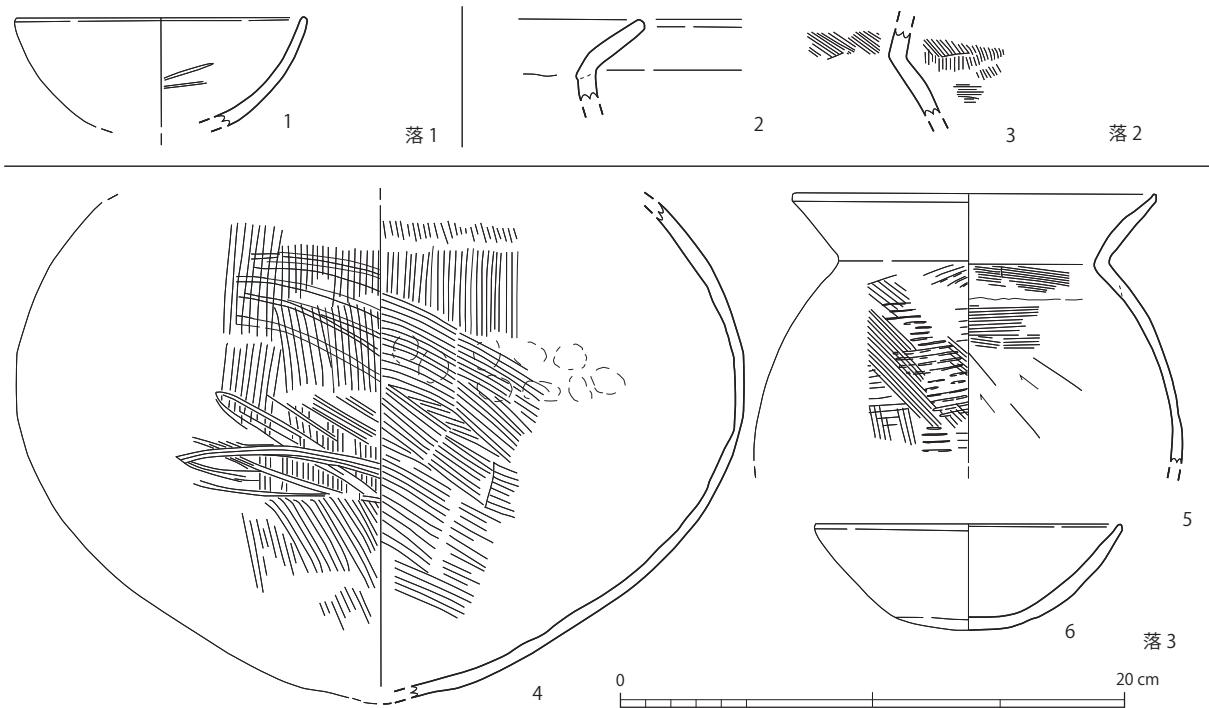
1は素口縁の土師器鉢で、内外面ともにナデが施される。

2号落込出土土器（第14図2・3）

2は土師器甕の口縁部小片である。3は土師器壺の肩部から口縁部にかけての小片で、口縁部は屈曲して上方へ伸びる。外面にハケ目が施される。

3号落込出土土器（図版9-4、第14図4~6）

4は土師器壺で、肩部から底部にかけて残る。底部の下端は残存しないが、やや突出気味の丸底で、胴の張る偏球形の器形である。上位と下位で縦位のハケ目が施され、中位ではナデや粗い斜めハケ目が施される。内面はハケ目で、最大径の位置で指頭圧痕が並ぶ。5は土師器庄内系の甕で上



第14図 1～3号落込出土土器実測図 (1/3)

半が残存する。口縁部は僅かに外反気味に伸びて開く。胴部外面はタタキ後ハケ目が施され、胴部内面は上位でハケ目が残り、下位でケズリが見られる。暗茶褐色の胎土である。6は土師器鉢で、素口縁でほぼ完形である。

(7) 谷 部

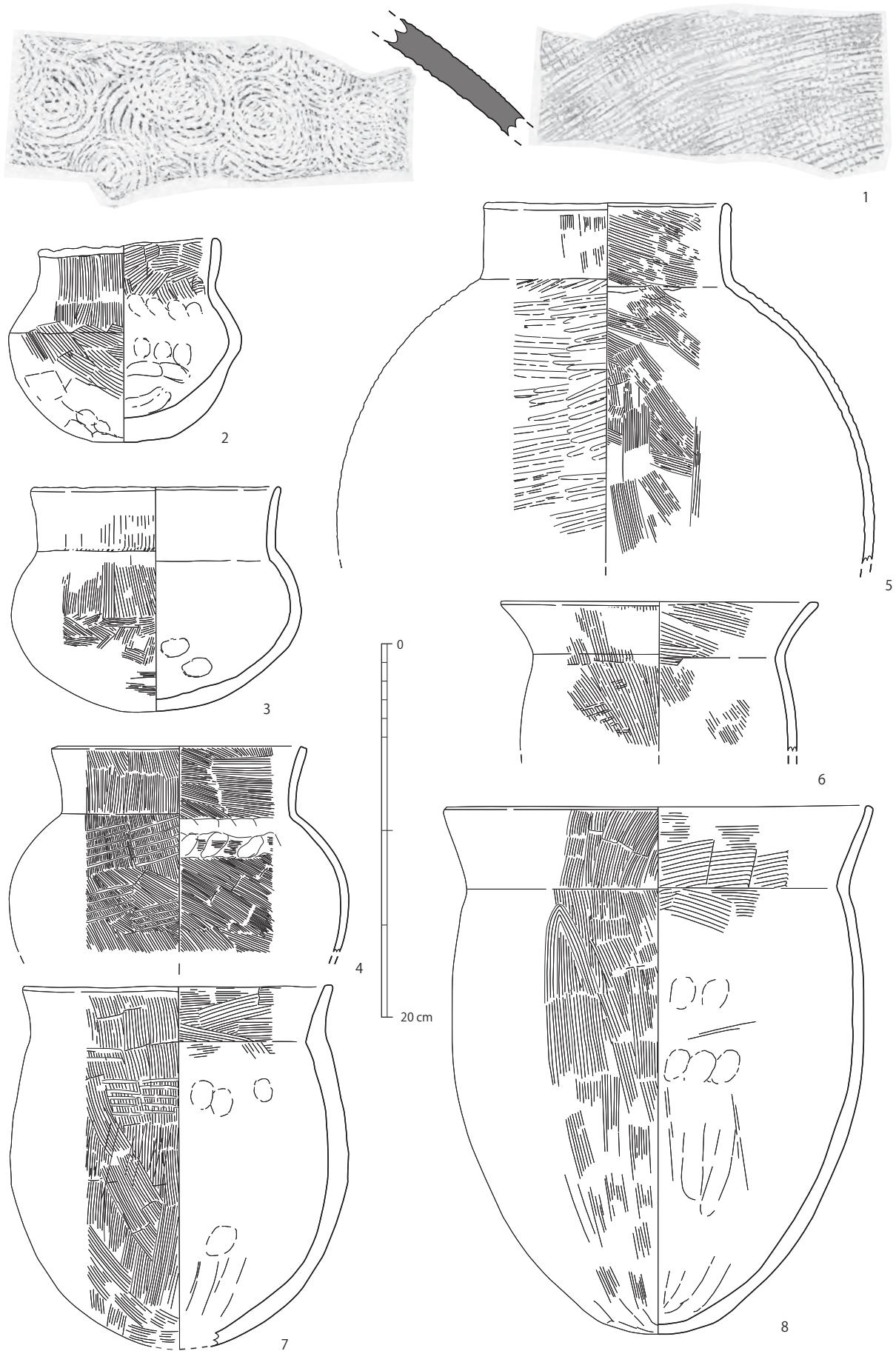
西側調査区の中央部では、検出面で地山が途切れる範囲が広く認められた。大部分で緩やかな傾斜で深くなり、東から南西部にかけて一部急激に深くなるものの、その地形の変化が不規則であるとともに平面が非常に不整形であるため自然地形の谷部として判断し、出土土器のみを報告する。

谷部出土土器 (図版10-2・11-1、第15図1～8・16図9～16)

1は須恵器の大形壺の肩部片である。外面に格子タタキ目、内面に同心円の当て具痕が見られる。

2～4は何れも土師器壺で、口縁がほぼ上方へ伸びて胴部がやや張る偏球形の器形である。2はほぼ完形で、粗雑な作りで全体に歪である。外面にハケ目を施し、その後下半にケズリを施すため、胴部の張り出し部で稜が生じる。外面胴部下半から底部にかけて黒斑が残る。3はほぼ完形で、外面は被熱し、全体的に煤が付着して、内面底部付近は炭化物で微かに黒変する。4は外面の肩部から胴部にタタキ目が残り、全体的に密にハケ目が施される。肩部内面には接合痕が顕著に残る。5は土師器直口壺で、2～4よりも長胴とみられる。肩部から胴部にかけての外面に1条の単位が太いタタキ目が密に残る。口縁部と胴部内面にはハケ目が見られる。

6～9は土師器甕で、何れも口縁部の屈曲は強くなく、やや外反気味もしくは直線的に伸びて僅かに開く。7の外面胴部下半から底部にかけて黒斑が残る。8は外面で全体的に煤が付着し、一部に黒斑が見られる。9は外面に1条の単位が太いタタキ目が密に残り、下端部でケズリが見られ



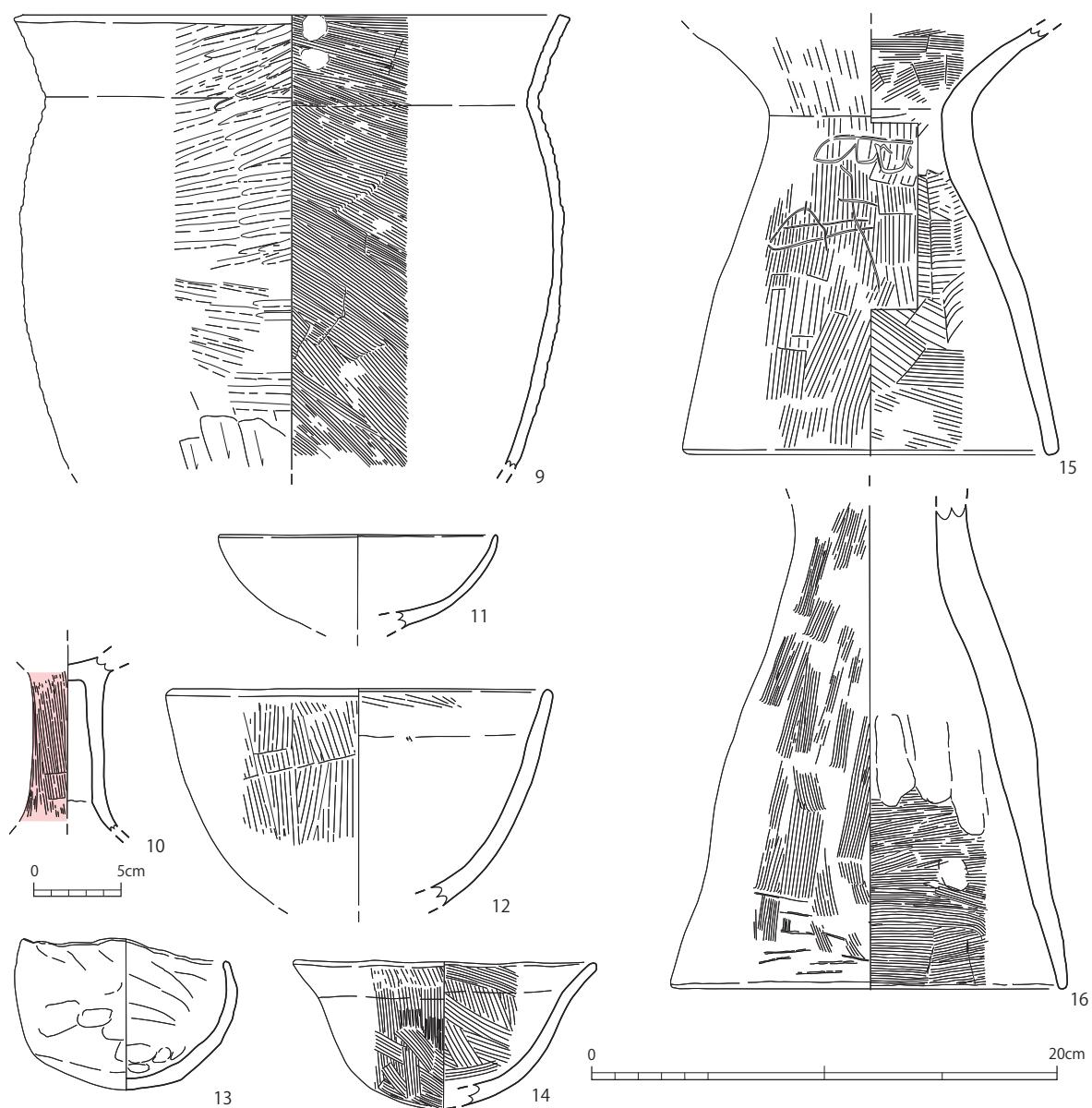
第15図 谷部出土土器実測図① (1/3)

る。内面には全体的に密なハケ目が残る。

10は弥生土器高坏で、ほぼ脚柱部のみ残存し、坏部は内面下端のみ遺存する。外面に縦位のハケ目が見られ、部分的に丹が残存する。

11～14は土師器鉢である。11は素口縁で、内外面ともに丁寧なナデで仕上げられる。下端部の厚みが急に増すため、脚部が付くと考えられる。12は素口縁で、外面に縦位のハケ目が施され黒斑が残る。13はほぼ完形で、手捏ねによる成形で全体に歪である。14は弱く屈曲して開く口縁部で、内外面ともにハケ目が見られ、外底部付近に黒斑が残る。

15・16は器台である。15は内外面ともに全体的にハケ目が見られる。外面のくびれ部からややその下位にかけて、非常に細い沈線によるヘラ描きが見られる。16はくびれ部から下位のみが残存する。内外面ともにハケ目が見られるが、内面上位では強いナデとなる。全体に粗雑な作りで、ハケ目は粗く、器壁が非常に厚い。



第16図 谷部出土土器実測図② (1/3、10・11は1/4)

(8) ピット、その他出土の土器（図版11-2、第17図1~13）

1~4は土師器壺である。1はピット出土の複合口縁壺で、上部の口縁部は欠失する。直上に伸びる頸部の基部には断面三角形の低い突帯が巡る。2はピット出土の大形の広口壺の口縁部片で、内外面ともにハケ目が見られる。口縁端部は面をなし、斜位の太いキザミ目が付される。3はピット出土の広口壺で、口縁部は僅かに外反気味に開いて伸びる。頸基部を巡る突帯には細かいキザミ目が付される。器表は摩滅する。4は検出時出土の小形の直口壺で、短い口縁部が直上に伸びる。外面にはハケ目が見られる。

5はピット出土の土師器甕で、口縁部の屈曲は緩やかで、外反して開く。端部が面をなすように外方へつまみ出して仕上げられる。内外面ともにハケ目が見られ、器壁は非常に薄い。

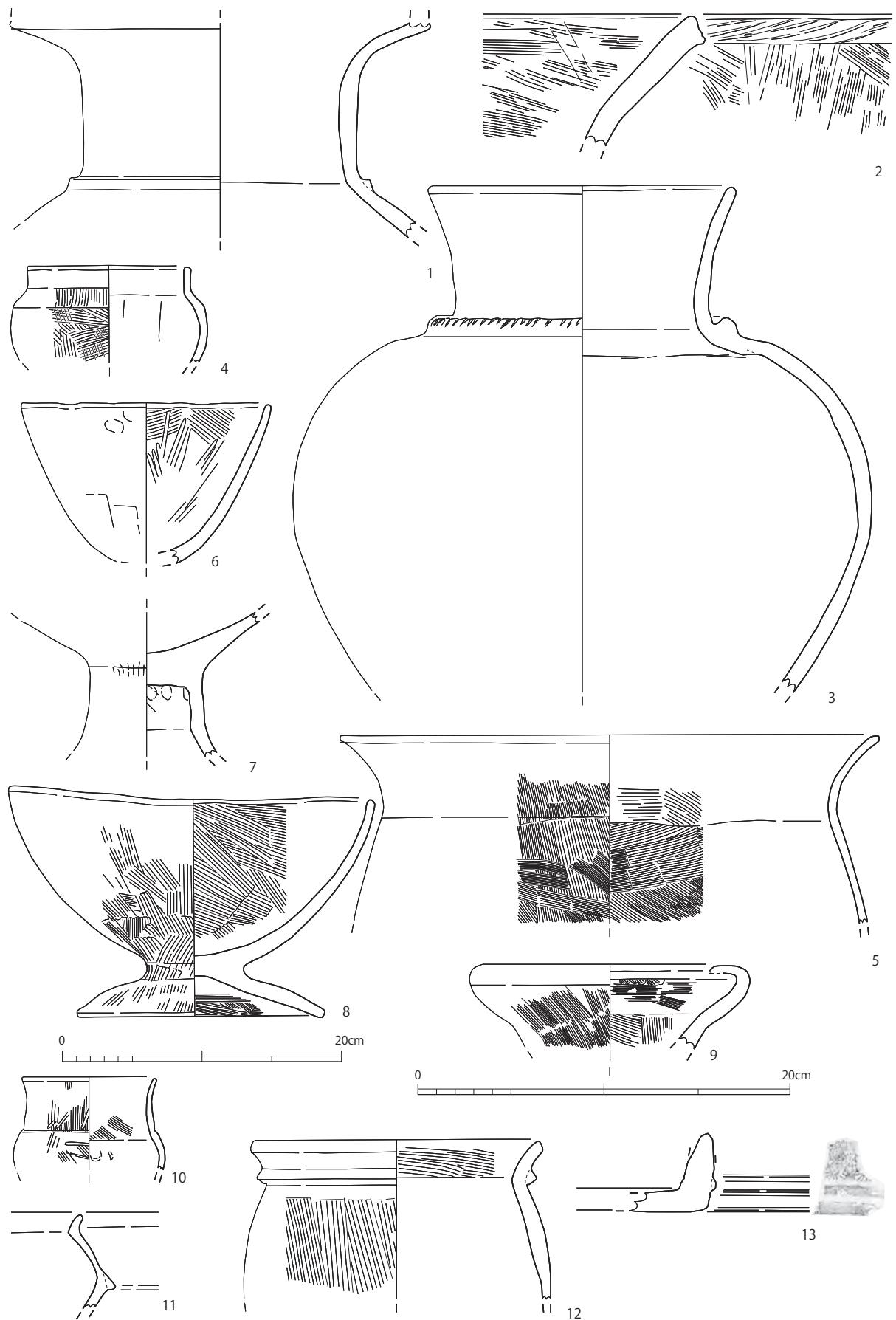
6~8は土師器鉢である。6はピット出土の素口縁鉢で、口縁端部は薄く仕上げられる。全体に歪な整形である。7は検出時出土の脚付鉢で、太い脚部を有す。器表の摩滅が著しい。8はピット出土の脚付鉢で、内外面ともにハケ目が見られ、素口縁で低い脚部の裾は僅かに内湾気味に伸びる。

9は土師器器台の受部で袋状である。内外ともにハケ目が見られる。

10・12は弥生土器である。10は谷部西端の検出時出土の壺で、頸基部に僅かな段を有し、口縁部は僅かに開き、胴部の張りは強くない。内外面ともにハケ目が見られる。11は谷部西端の検出時出土の甕で胴部の屈曲部で最大径となり、口縁部は屈曲して外上方へ短く伸びる。胴部の屈曲部には突帯が付される。

12・13は西側調査区の攪乱として扱った近世墓群からの出土土器である。12は短い口縁部が屈曲して開き、屈曲部外面には断面三角形の突帯が付される。口縁部内外面と胴部外面にハケ目が見られ、胴部内面はハケ目が施される。外面は全体的に煤が付着する。弥生土器甕の可能性があるが、器表の残存状態が過度に良好であり、同時期の弥生土器が殆ど調査区内で出土しておらず、近世の所産である可能性が高い。13は瓦質土器火鉢の底部片である。突帯が1条残るとともに、菊花文のスタンプを押捺する。

(坂元)



第17図 ピット、その他出土の土器実測図 (1/3、10~12は1/4)

3 I区中央調査地の遺構と遺物

前述した如く、十郎丸長谷古遺跡3次調査の箇所は、2次調査地の東側隣接地（II・III区）及び2次調査で未調査となった箇所（I区中央部）である。I区中央部では、弥生時代の竪穴住居及び土坑、奈良時代の竪穴住居及び方形竪穴・土坑・溝・畝溝、江戸時代の大溝、近世墓を検出した。

なお、遺構番号は、調査時点では各々1番から付していたが、旧17号溝はI区西側調査地で検出した6号溝と一連の溝であることから整理段階では同一番号とし、他の遺構は2次調査の遺構番号の連番とした。表3の遺構番号新旧対照表を参照されたい。

（1）竪穴住居

調査区の中央部から北西側にかけて3軒検出した。3～5号竪穴住居は、下層遺構に当たる。

2号竪穴住居（図版15-1・2、16-3、第18図）

調査区の北西端に位置し、9号溝を切る。住居壁の北西隅部は、西側調査区と重複する。後日、その箇所を拡幅して住居壁の検出に努めたが、既に掘り下げられており、確認できなかった。北壁長・西壁長は不明であるが、東壁長4.53m、南壁長3.57mを測る南北方向に長い長方形を呈する。壁高は15cm程度であるが、バックフォーによる堆積層掘削の際に下げ過ぎたきらいがあり、住居壁はもっと高かったものとみられる。

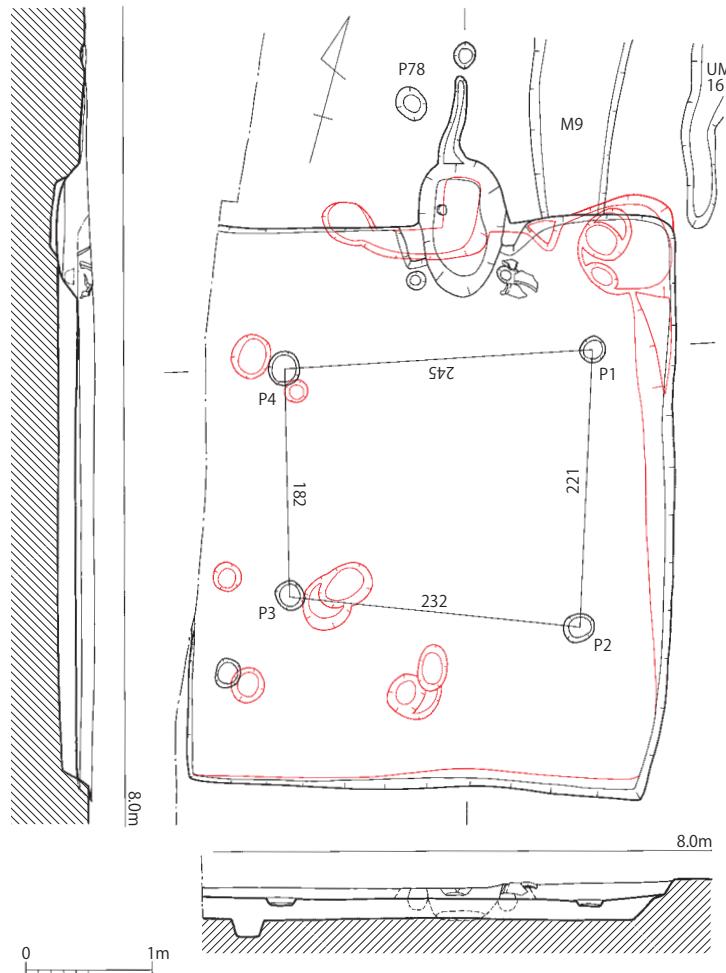
主柱穴はP1～4の4本で、径20～27cm、深さは5cm前後と極めて浅い。柱間はP1～4間2.45m、P1～2間2.21mを測り、主柱穴を結んだ線は横位長方形をなす。

床面は平坦で、厚さ15cm程の暗灰色土による貼床を施している。貼床下部の竪穴掘方面ではピットを数個検出したが、これらも浅く、柱穴にはなり得ない。

住居埋土・貼床中・カマド前面及びカマド内からは土師器が、また埋土・貼床中・貼床下部ピットからは製塩土器が出土している。

カマド（図版16-1・2、第19図）

住居壁を掘込み構築する突出型で、北壁のやや東寄りに付設する。堆積層を下げ過ぎたものの、煙道・煙出し穴は辛うじて留める。壁体は住居壁を逆U字形に幅70cm、奥行50



第18図 2号竪穴住居実測図 (1/60)

cm掘込み、両角部に灰黄色土・暗緑灰色土を貼付し、袖部を形成する。右袖は長さ24cm、幅28cmで、左袖は長さ32cm、幅20cmの遺存状態であった。

なお、袖部の上に貼床の暗灰色土(第19図⑪層)が載っており、カマド構築と貼床作業が同時に行われたと考えられる。両袖先端部には径15cm、深さ7cm程の小ピットがあり、袖石の抜取り穴とみられ、焚口幅は56cmに復元できる。壁体は良く焼けて赤化しており、第19図⑤層には焼土・灰が比較的厚く堆積しているが、火床はそれ程明瞭ではなく、支脚も明らかではない。

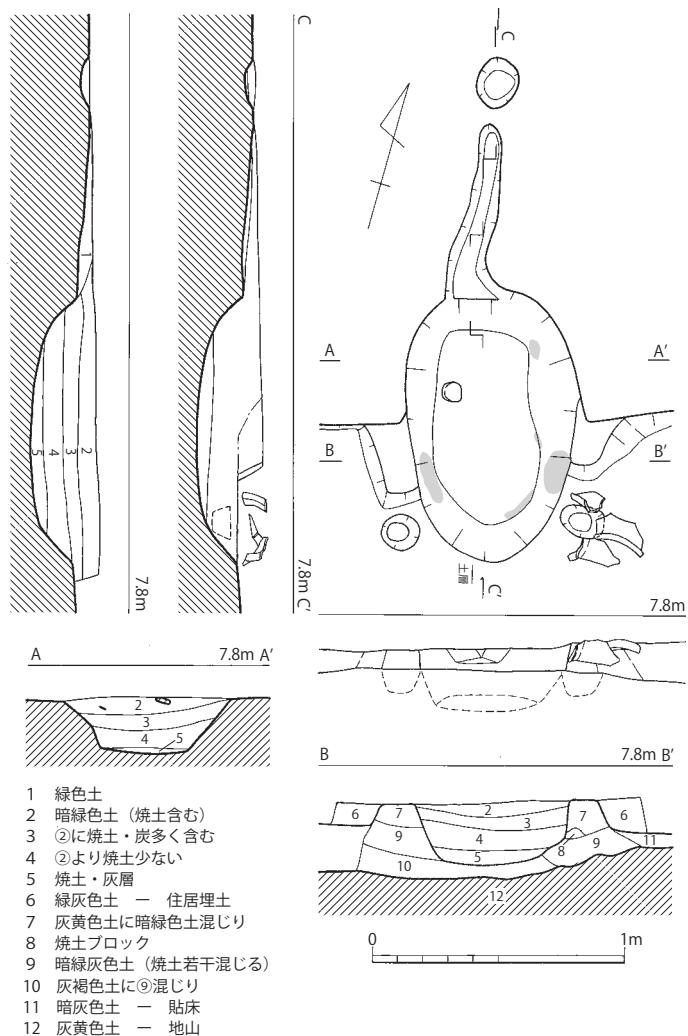
煙道は壁体奥から蛇行気味に70cm程伸び、基部幅20cm、先端幅9cmを測り、その先端に煙出しの穴を設けている。煙出し穴の底面は煙道底面より若干下がり、雨水が直接カマド内に流れ込まない工夫をしている。カマド内からは磨石が、右袖石の抜取り穴の上部からは浮いた状態で土師器甕が出土した。

出土遺物（図版28-1、第20図）

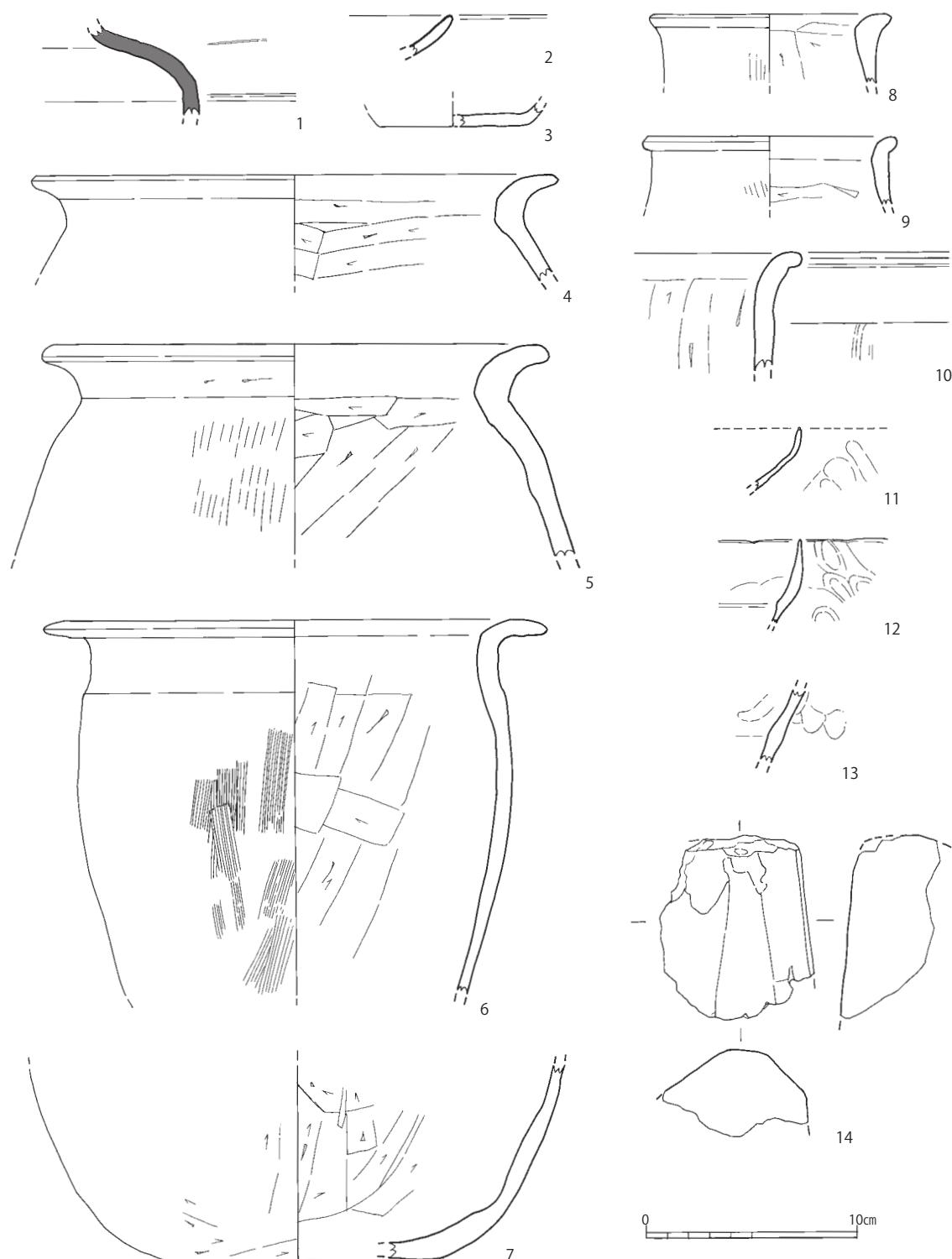
1は須恵器の肩部破片で、平瓶になるか。胴部中位に1条の沈線を施している。カマド内から出土した。2～10は土師器である。2は壊或いは皿の口縁部小片で、口唇部は丸く收める。貼床中の出土。3も壊或いは皿の底部破片。器面の磨滅が著しいが、底部は糸切りの様であり、混入品か。底径は6.9cmに復元した。

4～7は甕で、4・5が口縁部から肩部、6が口縁部から胴下半部、7は底部の破片。4・5の口縁部は鉤形をなし、頸部の締まりは比較的良い。器面調整は口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリで、頸部内面にはケズリによる稜を持つ。5の頸部内面には煤が遺存している。6は口縁部が水平に屈曲するもので、頸部の締まりは悪い。内面粗いヘラケズリ、外ハケ目による。口径は4が24.8cm、5が24.0cm、6は23.6cmに復元した。7は平底を残す底部破片。内面は縦方向のヘラケズリで、外ハケ目による。また、外ハケ目による擦過を施す。また、外ハケ目による黒斑が見られる。4はカマド内最下層、5は袖石抜取り穴の上部、6はカマド内、7は貼床下部のピット出土。

8・9は小型甕の口縁部破片で、8の口縁部は肥厚し、9は外方に小さく突出する。口径は8が11.4cm、9は12.0cmに復元した。8が袖石抜取り穴の上部、9は住居埋土中の出土。10は口縁部の小片であるが、屈曲が弱いことから甕になるか。内面は縦方向のヘラケズリで、外ハケ目による。西壁付近の出土。



第19図 2号堅穴住居カマド実測図 (1/30)



第20図 2号堅穴住居出土土器実測図 (1/3)

11～13は製塩土器の小破片である。逆円錐形をなし、胴部中位で一旦屈曲する形態で、小田分類のIV b類に該当する。11・12の口唇部はシャープで、外面には指頭圧痕が顕著に見られる。何れも砂粒を多く含み、器面がざらつく。11が貼床中、12が貼床下部ピット、13は埋土中から出土した。14は土製支脚の破片で、側面は面取りを施し、都合4面を数える。また、上部は2次加熱により剥落し、薄黒くなっている。貼床下部ピットの出土。

3号竪穴住居（図版17-2・3、18-2・3、第21図）

下層で検出した竪穴住居で、調査区の中央に位置する。丁度、7号土坑の下位に当たる。平面は隅丸方形を呈し、西壁長4.1m、北壁長3.7mと南北方向にやや長い。壁高は南壁側で30cmを測る。

主柱穴はP1～4の4本で、径30cm前後、深さは20cm前後を測る。柱間間隔はP2～3間2.93m、P3～4間1.77mで、主柱穴を結んだ線は台形をなす。床面はほぼ水平で、中央やや南寄りに径46cmの炉を設けており、炉を中心として炭層が120cmの範囲で広がる。

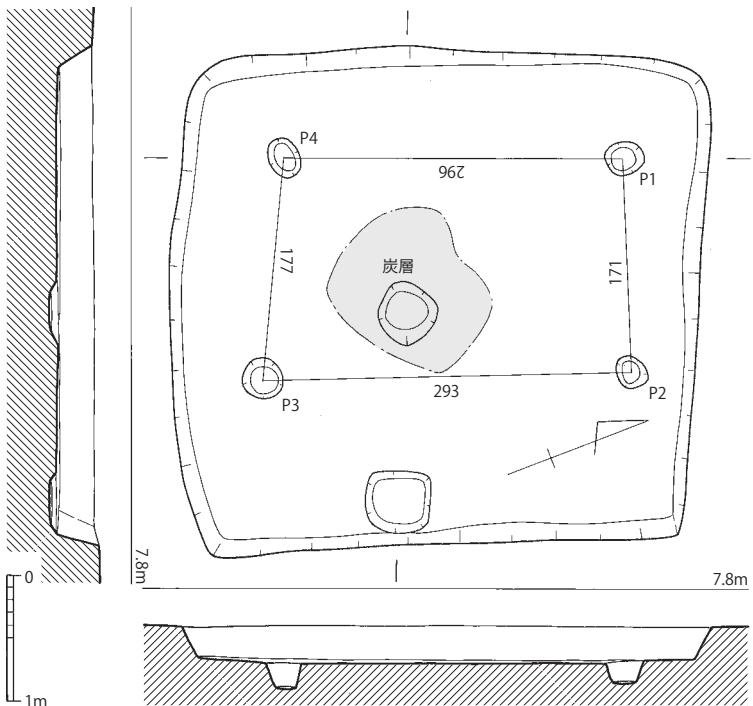
東壁際のやや南側で一辺50cmの方形の穴を検出した。当初は屋内土坑としたが、深さが5cmと浅いことから屋内土坑とは考え難い。また、南壁側から纏まって土器が出土しているが、床面から浮いた状態であり、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

出土遺物（図版28-2・29-1、第22図）

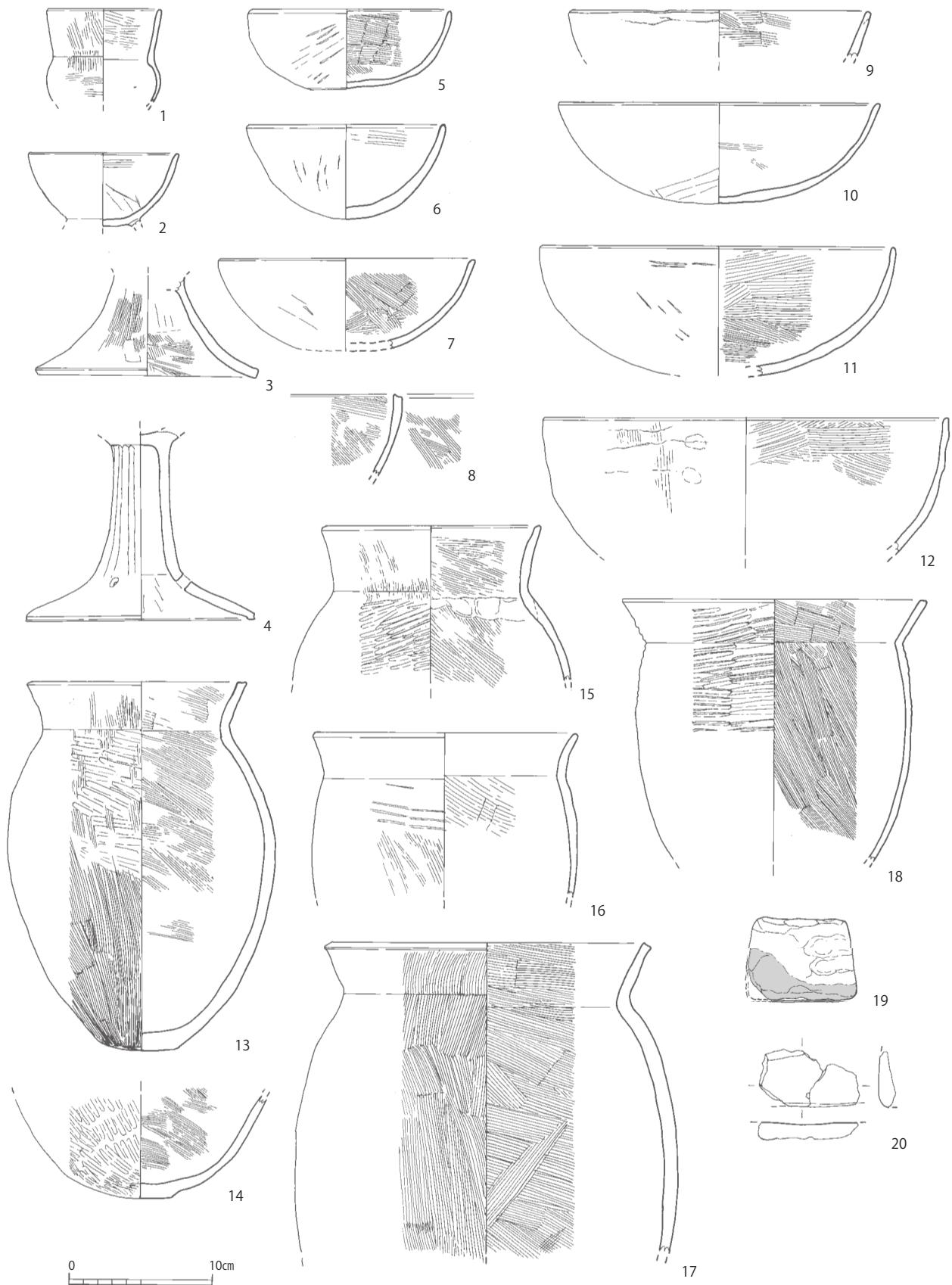
1～20は弥生土器で、1・4～7・10～13・16・17・19が南壁側の出土、3は炉付近、他は東半埋土中から出土した。1は小型丸底壺で、底部を欠く。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともハケ目調整による。口径は8.0cmに復元した。2は小型の脚付椀であるが、脚部を欠損する。内外面ともナデを基調とし、口唇部は丸く收める。復元口径は10.6cm。3は脚部の破片で、脚高が7cm程と低いことから脚付椀の脚部になるか。内外面ともハケ目を基調とする。4は高壊の脚柱部から裾部にかけての破片で、脚裾径は15.0cmを測る。裾部に円孔を3箇所穿つ。

5・6は椀で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く收める。5の底部は丸みを帯びた平底をなすが、6は丸底。器面調整は、内面ハケ目、外面工具による擦過を基調とする。器高は5が5.5cm、6が6.6cmで、復元口径は5が14.2cm、6が14.0cmを測る。7～12は鉢で、12は復元口径28.4cmの大型品。8は口唇部に平坦面を持つが、それ以外のものは丸く收める。器面調整は、内面ハケ目、外面工具による擦過或いはヘラケズリを基調とするが、8の外面はハケ目による。また、12の外面はタタキ目を指頭でナデ消しており、器面の凹凸が顕著に見られる雑な作り。7の外面には黒斑が付く。10は器高7.0cm、口径22.5cmを測る。

13～18は甕で、14は底部の破片、15～18は胴下半部を欠く。口頸部は何れも「く」字形をなすが、15・16は外反気味で、13・17・18は直線的に開く。また、13・17の口唇部は面を持つ。器面調整は内面ハケ目、外面はタタキ目の後にハケ目を基調とするが、17は外面もハケ目調整による。13は器高25.6cm、口径15.4cmを測り、底部は平底気味で、煤が遺存する。14は平底を残す底部。19・20は支脚で、19は器高5.8cmを測る。また、19は二次加熱を受け、20は本体から剥落した破片。



第21図 3号竪穴住居実測図（1/60）



第22図 3号堅穴住居出土土器実測図 (1/4)

4号竪穴住居（図版17-2・3、18-1、19-1・2、第23図）

下層で検出した一群の竪穴住居で、3号竪穴住居の0.5m南東側に近接して位置する。平面は長軸5.04m、短軸2.74mを測る長方形を呈し、長軸は北から東に33°振る。

主柱穴はP1・2の2個で、径はP1が25cm、P2が36cmで、深さはP1が18cm、P2が

14cmであった。床面中央には90cmの範囲で炭層が広がるが、炉の掘込みは見られなかった。底面は緩やかに北側に傾斜してお

り、壁高は南側で12cm、北側で18cmを測る。また、北壁と南壁際にはベット状遺構を付設しているが、南側は住居壁と平行であるのに対し、北壁のそれは半分程度であった。ベット状遺構の幅は南側が1.7mで、北側は1.0mを測る。床面及びP1から土器が出土している。

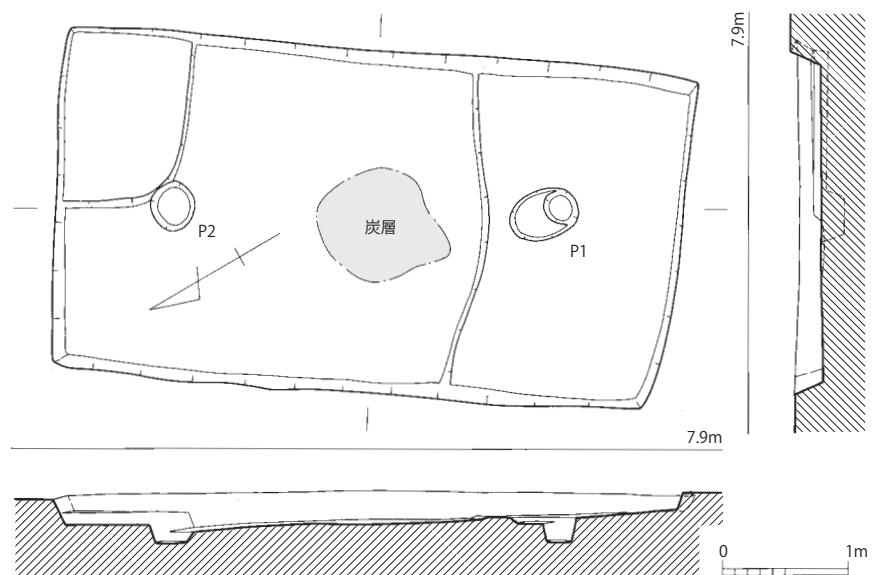
出土遺物（第25図）

1は袋状口縁壺の屈曲部破片であろうか、屈曲部に細かなキザミ目を施す。2・3は甕の口縁部破片で、「く」字形に外反する。3の口唇部には面を持つ。

5号竪穴住居（図版17-2・3、19-3、第24図）

当竪穴住居も下層で検出した竪穴住居の一群で、3号竪穴住居とは南東側2.5m、4号竪穴住居とは西側1mの距離に位置し、15号土坑を切っている。平面は方形を呈し、北壁長3.25m、西壁長3.16mで、壁高は南壁中央部で0.32mを測る。

主柱穴はP1～4で、径20cm前後、深さは15cm～25cmであった。柱間はP1～2間2.07m、P1～4間1.77mを測り、主柱穴を結んだ線は不整長方形をなす。床面はほぼ水平で、中央やや南西寄りに径70cm範囲で炭層が広がるもの明瞭な炉の掘込みは見られない。

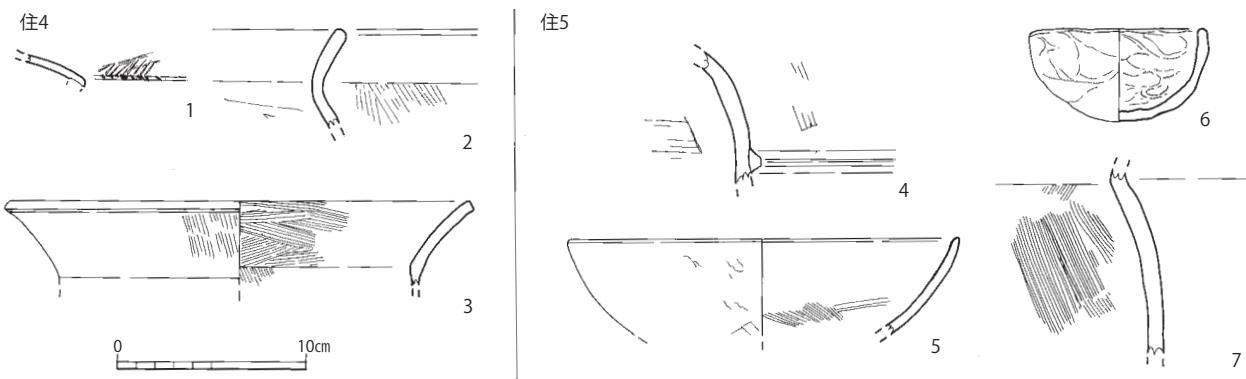


第23図 4号竪穴住居実測図 (1/60)

第24図 5号竪穴住居実測図 (1/60)

出土遺物（図版29-2、第25図）

何れも住居埋土中の出土である。4は胴部の小破片で、断面台形の凸帯を貼付する。5は鉢の口縁部破片で、口唇部は丸く收める。口縁部ヨコナデ、内面ハケ目、外面ヘラケズリによる。口径は20.6cmに復元した。6は椀で、全体的に指頭圧痕を留め、手捏ね気味の雑な作り。器高4.8cm、口径9.4cmを測る。7は甕の頸部から胴部にかけての破片で、内面はハケ目調整による。なお、7は12号溝（第47図10）と接合した。



第25図 4・5号堅穴住居出土土器実測図（1/4）

（2）掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版20-1・26、第27図）

調査区の北端に位置する。柱穴は14号溝及び5・8・10号畝溝を切り、6号土坑、2号大溝に切られる。また、12号土坑、7号溝及び7・9・13・18号畝溝と重複するが、畝溝より当建物が後出するか。なお、調査区の北側には耕作地が存在するため、当建物の全容は検出し得ていない。

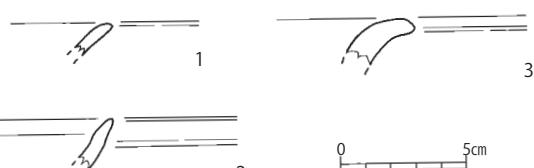
桁行を東西方向に取る東西棟建物で、南側桁行の柱列は2号大溝より東側には伸びていないことから桁行は7間とみられるが、東側梁行の2番目の柱穴は検出し得ない。梁行は2間以上で、北側桁行の柱列は調査区外になる。柱間は桁行側が1.67～2.02mとばらつきがみられるが、総長12.67m、柱間平均1.81m（6尺）で、梁行の柱間は1.56m（5.2尺）である。梁行方位は北から西に12°振っている。

柱穴は0.5～0.9mの不整円形を呈し、検出面からの深さは0.2～0.4m程度であるが、南東隅の柱穴の深さは0.5mで、南西隅の柱穴の深さは0.7mと隅部の柱穴は深く掘っている。また、大半の柱穴は掘方の何れかの箇所にテラスを持っている。柱痕は確認できなかったが、柱穴底面が径20cm余りの段掘りとなっている柱穴が4個あり、これを柱の沈下痕跡と捉えると柱径は20cm位になる。出土遺物は、柱穴埋土中から土師器小片が出土している程度である。

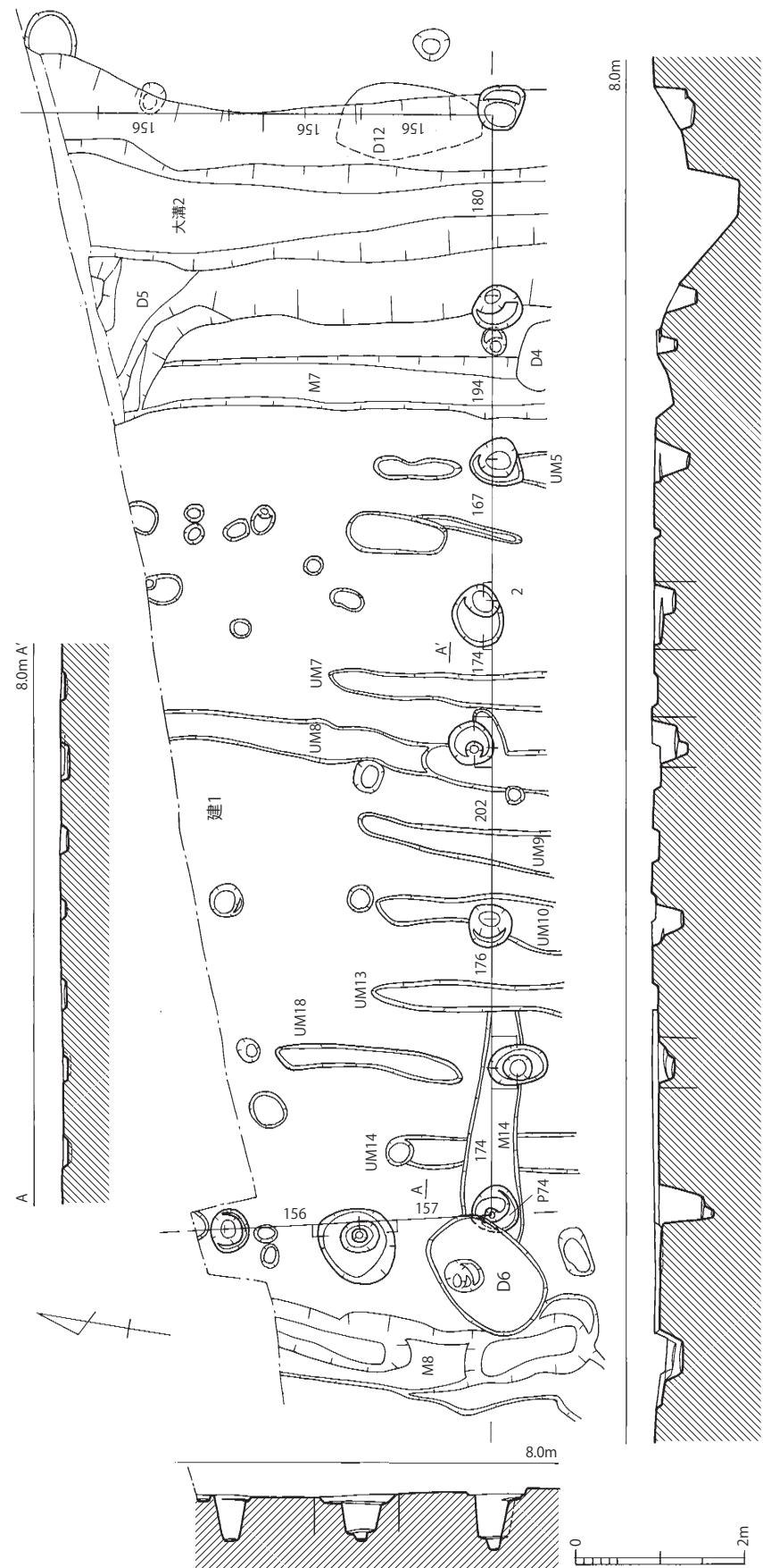
出土遺物（第26図）

何れも小破片で、1が南西隅柱穴から北に2番目の梁行側柱穴から出土した。2・3は南西隅柱穴から東に4番目の桁行側柱穴から出土している。1は壊或いは皿の口縁部で、若干外湾する。

口唇部は丸く收める。2は壊の口縁部で、端部を指で摘まみ、横方向に強く撫でている。3は甕の



第26図 1号掘立柱建物出土土器実測図（1/3）



第27図 1号掘立柱建物・6号土坑実測図 (1/80)

口縁部で、大きく外反する。口唇部は丸く收める。

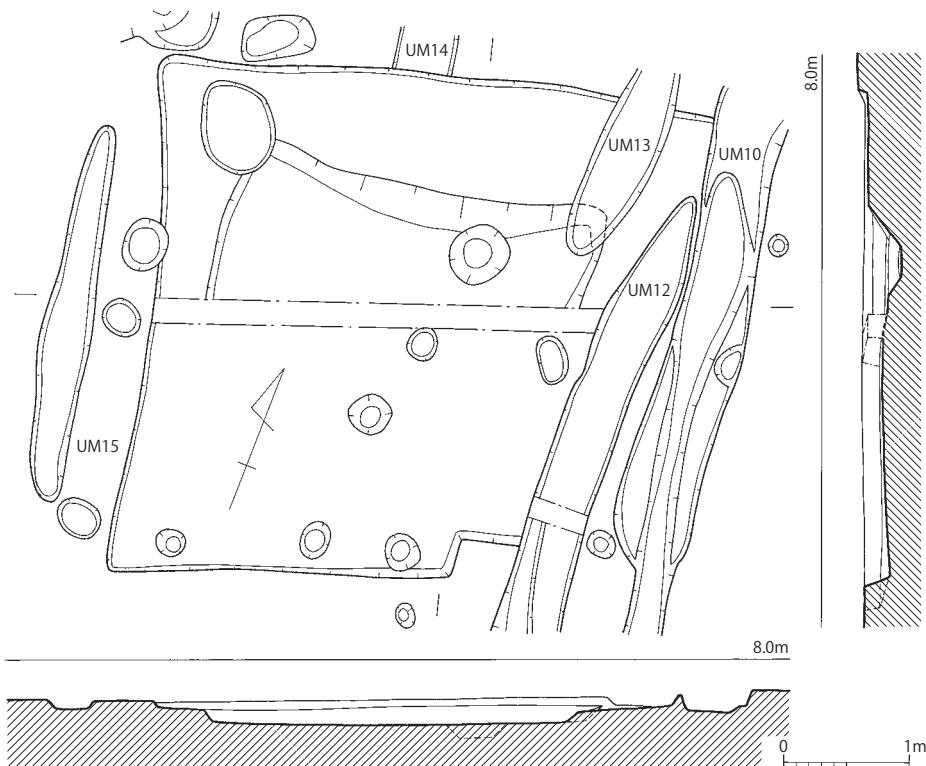
(3) 方形堅穴

調査区の北西側において1基検出した。

1号方形堅穴（図版20-1・2、26-2、第28図）

2号堅穴住居の2.6m東側に位置し、10・12・13号畝溝に東壁側を切られ、14号畝溝を切っている。当初、2号堅穴住居と並列した状態で検出したため、同時期の堅穴住居と想定し掘削を進めた。掘り下げの過程で、壁際にベット状遺構の高まりを確認したため、弥生時代の堅穴住居と認定したが、炉は付設されておらず、柱穴も判然としないことから方形堅穴に遺構番号を変更した。

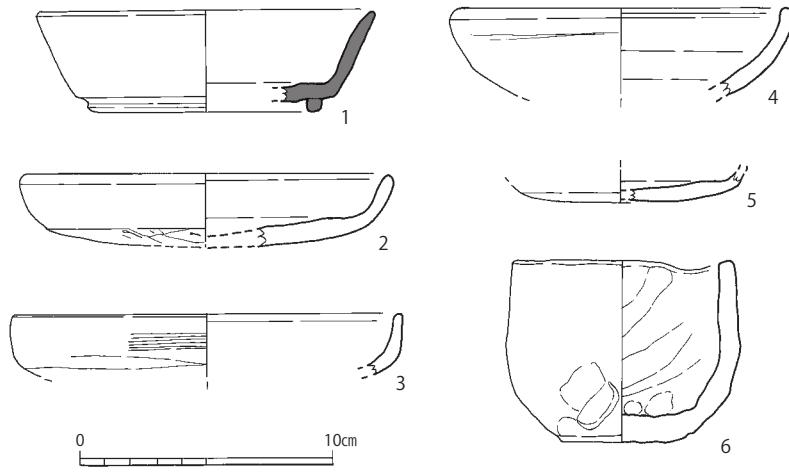
東西長は東壁側が畝溝に切られるため4.4mの検出に留まるが、10号畝溝内で収まるものとみられる。南北長は4.1mを測り、長軸を東西方向に持つ。また、12号畝溝側で0.3m程狭まる。西壁から東壁にかけて高さ10cm程の段があるが、幅は一定ではなく、西壁側が37cm、北壁側が90cmで、東壁側は80cm以上を測る。底面は中央部がやや窪み、8個程のピットがあるものの当堅穴に伴うかは不詳。埋土中から須恵器、土師器、弥生土器が出土している。



出
第28図 1号方形堅穴、10・12・15号畝溝実測図 (1/60)
土遺物 (図版29-3、第29図)

1は須恵器、2～5が土師器、6は弥生土器である。1は有高台坏で、口縁部は斜め上方に立ち上がる。底部屈曲部に稜を有し、底部端からやや内側に断面方形の低い高台を貼付する。やや肉厚の器壁であるため口唇部はシャープな感がある。内外面ともヨコナデ調整。器高は4.0cmで、口径は13.6cm、高台径は9.4cmに復元した。2～4は坏で、2・3は浅め、4は深めの器形で、何れも口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外底面手持ちヘラケズリによる。2の外面

には赤色顔料を塗布している。復元口径は2が14.6cm、3は15.4cm、4は13.2cmを測る。5は壊或いは皿の底部破片で、底部は平底をなす。混入品の可能性がある。6はコップ形の椀で、内外面とも指頭によるナデを留め、手捏ね封の作り。底部は平底を残す。器高は7.1cmで、口径は8.8cm、底径は4.9cmに復元した。なお、2号竪穴住居出土土器とは、器種的に重複していないため時期の比較はできないが、両者は同時併存の可能性を否定できない。



第29図 1号方形竪穴出土土器実測図（1/3）

(4) 土 坑

調査区の全域に分布するが、弥生時代の土坑（4・5・8～16号）が11基で、調査区の北端側と南西部に集中する傾向にある。奈良時代の土坑（7号）は1基で、調査区の中央に位置する。また、時期不詳の土坑（6・17号）が2基あり、合計14基検出した。

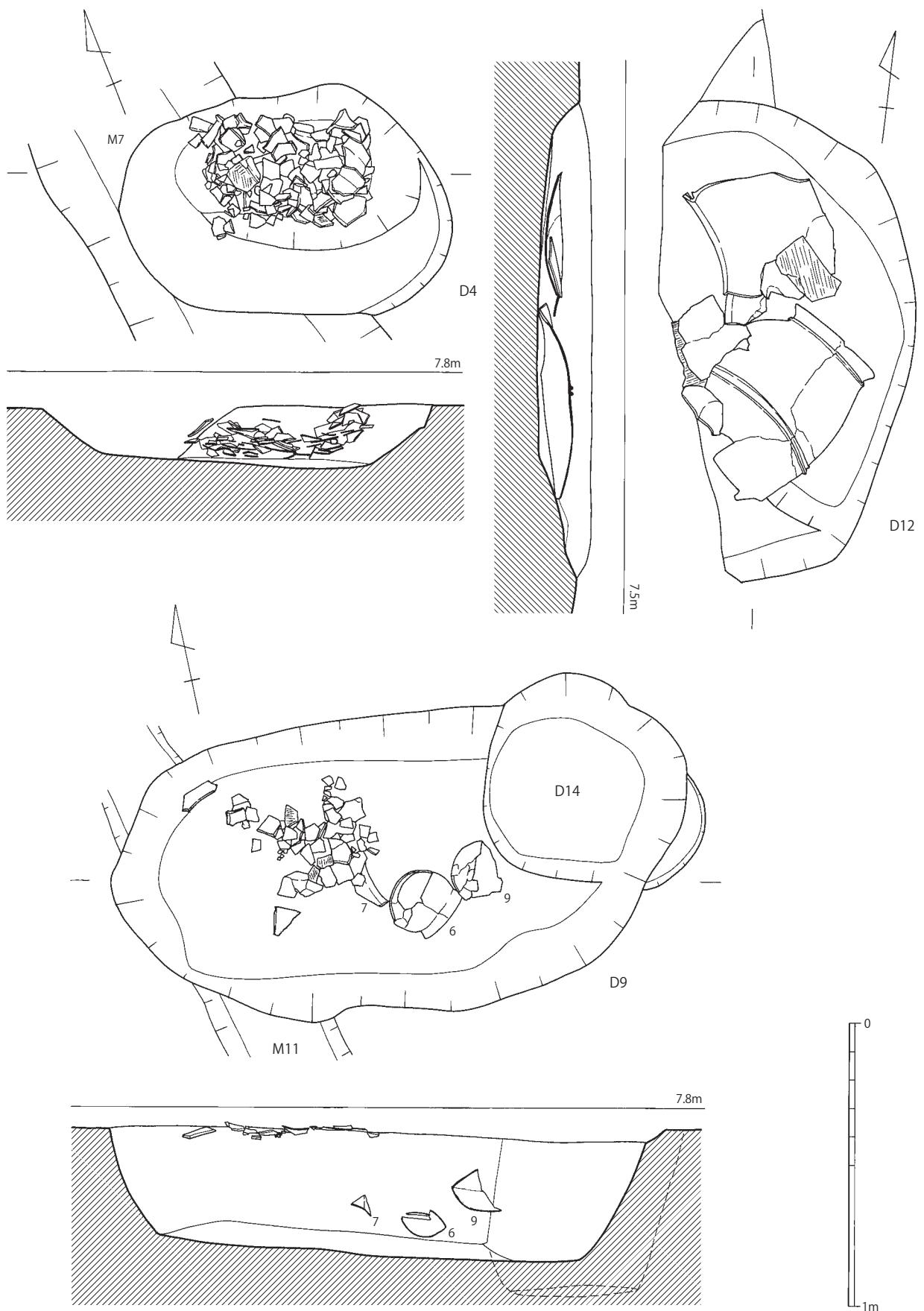
4号土坑（図版21-1・2、第30図）

調査区の北東部に位置し、7号溝に西半部を切られる。平面は橢円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.82m、検出面からの深さ0.22mを測る。底面は平坦で、南側には20cm程のテラスを有する。小さい土坑ながら多量の土器小片が重なり合った状態で出土した。長軸方位は北から西に70° 振る。

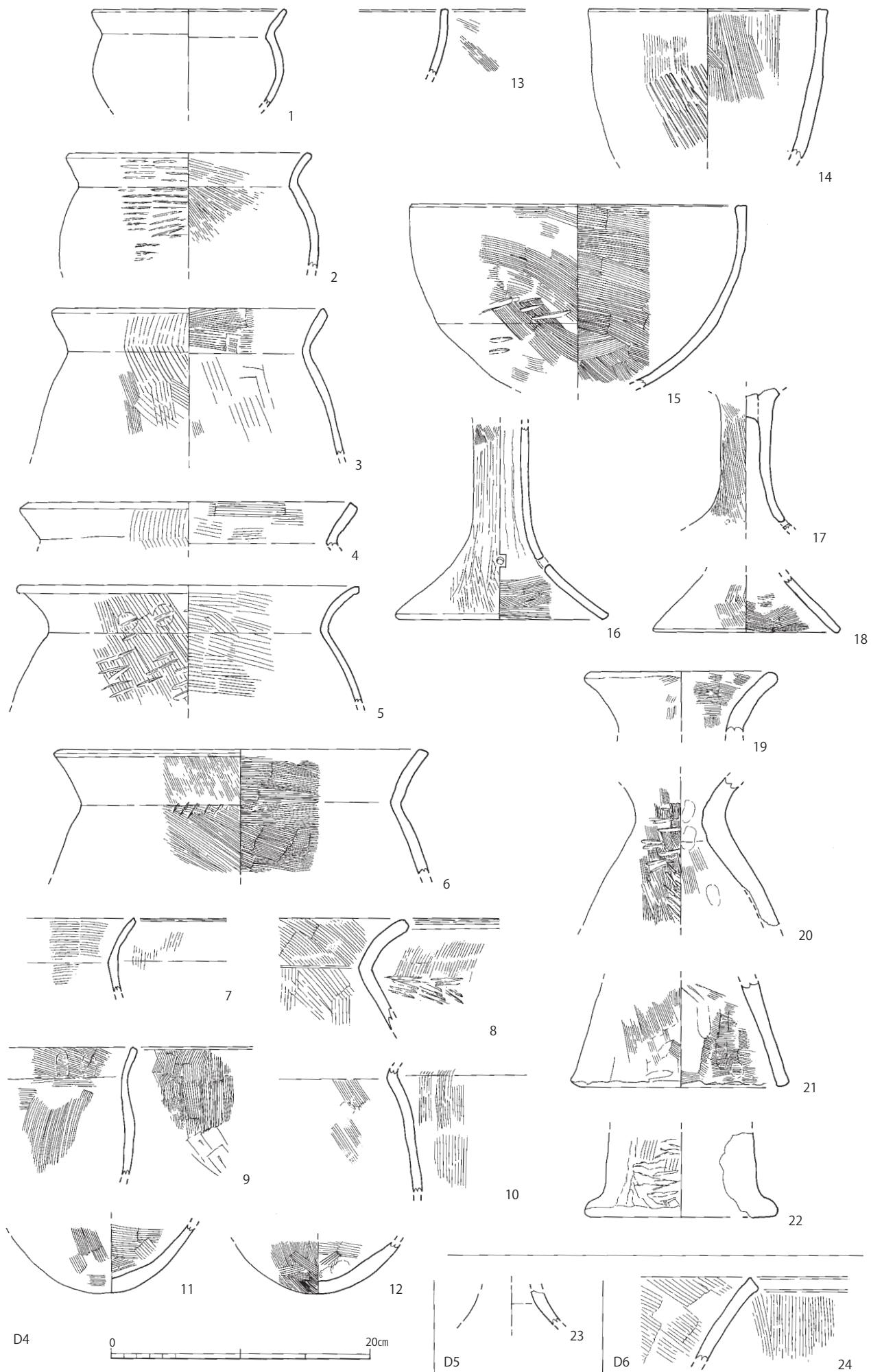
出土遺物（図版29-4、第31図）

何れも弥生土器で、1～12は甕、13～15は鉢、16～18は高壊、19～21は器台、22は支脚である。1～6・8の口縁部は「く」字形を呈し、2・5・8は外反気味に開く。1は小型の器形。1～6の口唇部は面を持ち、8は沈線状に若干窪ませる。7・9の口縁部は緩やかに外反する。10は口縁部を欠くが、「く」字形を呈するか。11・12は丸底の底部破片。調整は口縁部がハケ目後ヨコナデ、内面ハケ目、外面タタキ目後ハケ目を基調とする。10の器面には煤が遺存し、3・4・11には黒斑が見られる。復原口径は1が15.2cm、3が21.4cm、6が29.0cmを測る。

13～15の口唇部は平坦な面を持つ。14の口径は18.6cmに復原したが、もう少し大きくなるか。16～18は脚部破片で、16は壊部を欠き、17は脚柱部、18は脚裾部。16・17は脚裾部に3箇所穿孔しているが、18の残存部位には円孔は見られない。16の脚裾径は16.6cmを測る。19は口縁部破片、20は口縁部と脚裾部を欠き、21は脚裾部破片で、何れも肉厚の器形をなす。22は器台の裾部破片で、端部は突出する。手捏ね風の雑な作りで、焼成も甘い。



第30図 4・9・12・14号土坑実測図 (1/20)



第31図 4～6号土坑出土土器実測図 (1/4)

5号土坑（図版24-2、第32図）

調査区の北東端部に位置する。2号大溝掘り下げ時に存在を確認した土坑で、埋土中から弥生土器が出土し、2号大溝に切られていることから大溝とは別遺構とした。また、西壁が調査区外となるため詳細は不明であるが、短軸1.1m、深さは0.55mの溝状をなす。弥生土器が出土した。

出土遺物（第31図）

23は高壺の脚部上位破片で、壺部との接合部で剥離している。脚部はハ字形に開く。器面調整は磨滅が顕著で不詳。

6号土坑（図版20-2、第27図）

調査区の北西側に位置し、1号掘立柱建物、8・14号溝を切る。当土坑検出時点では、東側のピット（P74）を1号掘立柱建物の柱穴とは認識していなかったため、両者の前後関係には些か疑問が残るもの当初のままとしておく。平面は楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸1.07mで、検出面からの深さは14cmと浅い。底面は平坦で、中央に小ピットがあるものの当土坑とは直接関係はない。長軸方位は北から東に38° 振っている。埋土中から弥生土器が出土している。

出土遺物（第31図）

24は大型甕の口縁部破片で、口唇部を窪めている。内外面ともハケ目調整による。

7号土坑（図版22-1～3、26-2、第32図）

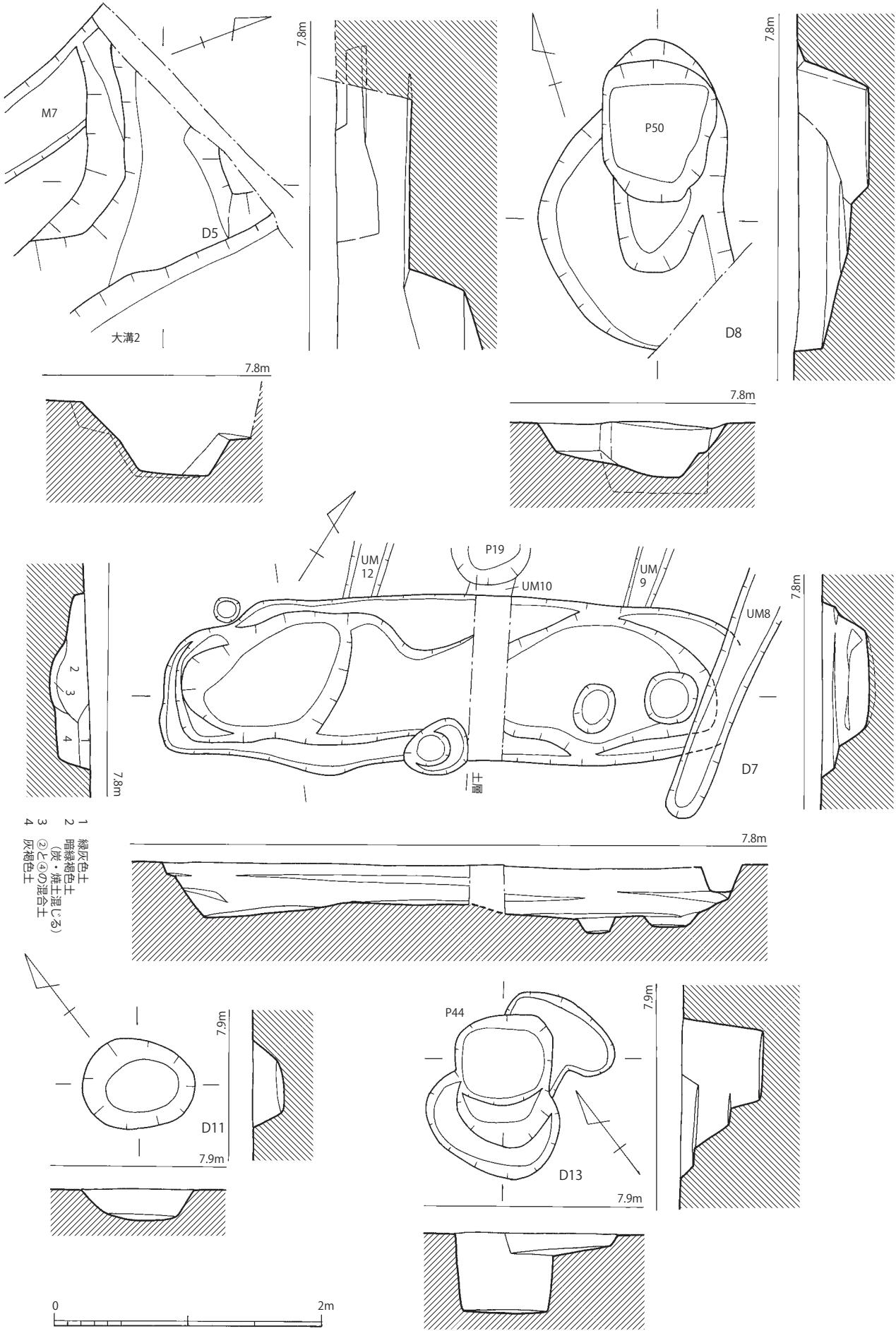
調査区の中央部に位置し、9・10・12号畝溝を切り、8号畝溝に北東側先端部を切られる。平面は隅丸長方形を呈するが、8号畝溝以東には伸びないことから推定長4.3m、中央部幅1.25m、深さ0.3～0.4mを測る。底面は中央部が高く、東・西側に下がる。東側の底面にはピットが2個掘り込まれる。埋土は上層から①緑灰色土、②暗緑褐色土、④灰褐色土で、②層には炭・焼土塊が多く含まれていた。また、当土坑からは須恵器・土師器片が多量に出土し、製塩土器も見られた。埋土中に焼土塊・炭が含まれることから、竪穴住居のカマド等に関わる廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（図版29-5、第33・34図）

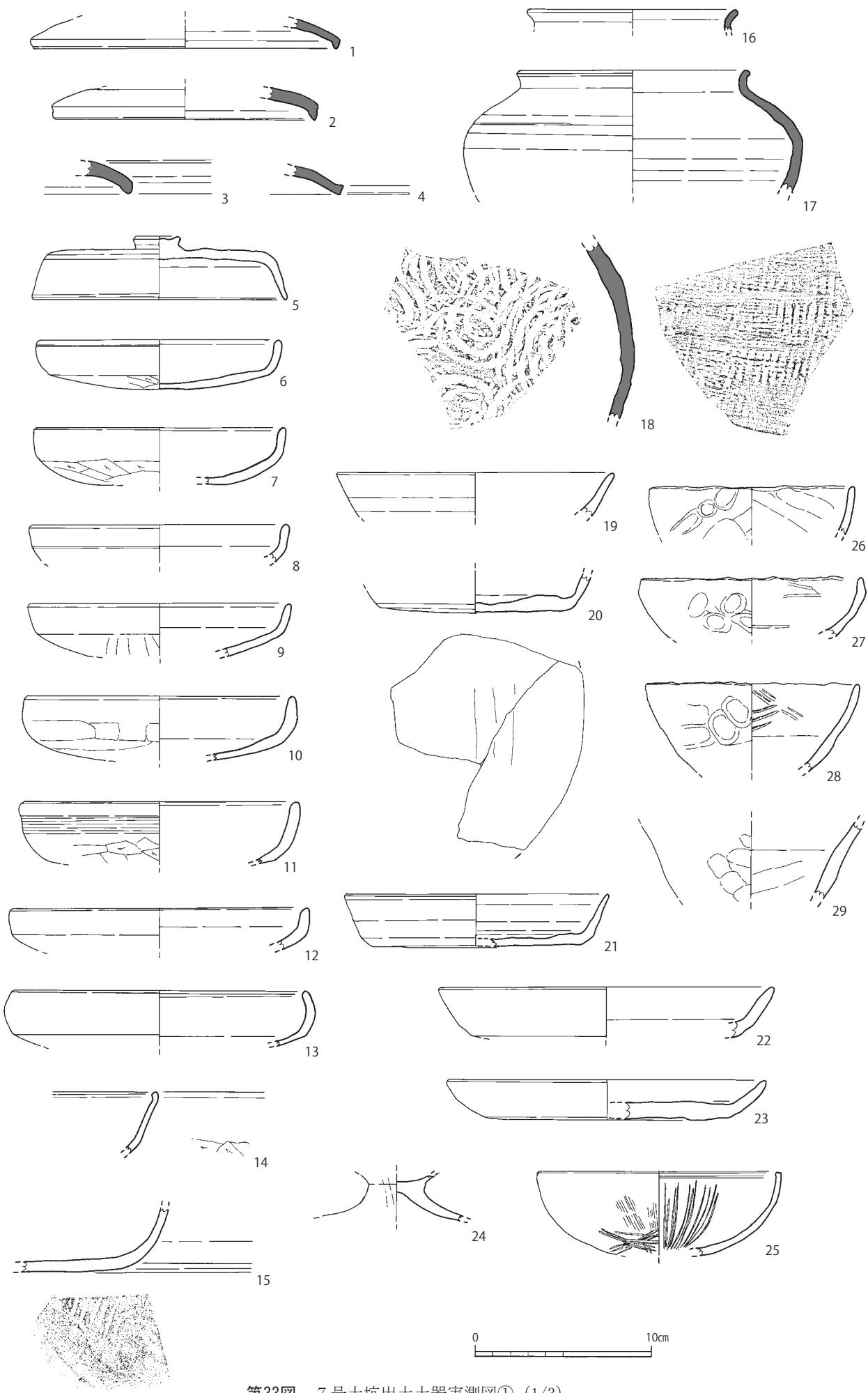
1～4・16～18が須恵器、5～15・19～24・30～46が土師器、26～29は製塩土器で、25は弥生土器である。1～4は蓋で、1～3の口唇部は鳥嘴状をなし、端部は小さく立つ。4の口縁端部は外方に撥ねる。5は須恵器模倣の壺蓋で、天井部にボタン形の摘まみを貼付する。口唇部はシャープで、丸く収める。器高3.6cm、口径14.6cmを測る。

6～13は底部が丸みを帯びる壺で、6～12の口縁部は直立気味に立ち上がるが、13は内湾する。何れも口唇部は丸く収める。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面手持ちヘラケズリを基調とするが、11の口縁部外面には工具ナデによる線条痕が付く。14・15は深めの壺で、器壁が薄くシャープな作り。また、15の底部外面には板状圧痕が見られる。

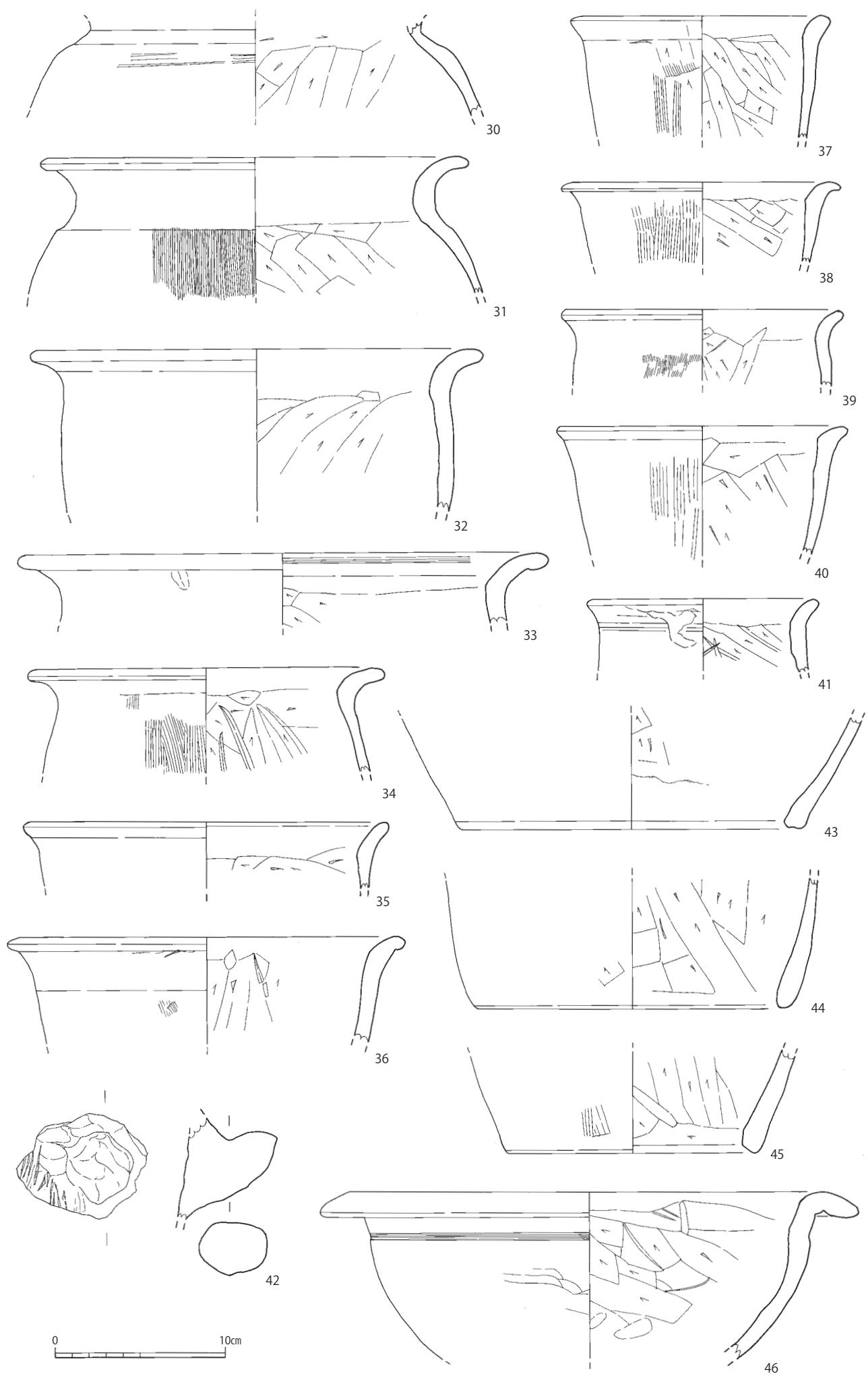
16は口縁部小片であるが、短頸壺の口縁部になるか。17は短頸壺の口縁部から胴下半部の破片で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部は外方に小さく突出する。胴部外面は回転ヘラケズリによる。18は甕の胴部破片で、内面には同心円文当具痕が付き、外面は格子目タタキ後カキ目を施す。19～23は皿で、21の口縁部はシャープな作り。20・21・23の底部は平底で、20の底部外面には針描きによる3本線の記号が見られる。24は壺部と裾部を欠くが、脚付椀になるか。25は球体を半裁し



第32図 5・7・8・11・13号土坑実測図 (1/40)



第33図 7号土坑出土土器実測図① (1/3)



第34図 7号土坑出土土器実測図② (1/3)

た様な椀で、弥生土器とみられることから混入品であろう。口唇部は中央部がやや窪む。口縁部ヨコナデ、内面暗文状の細いミガキ、外面ハケ目後ミガキを施す。口径は28cmに復原した。

30～35は甕で、31～34の口縁部は鉤形に大きく外反する。35・36の外反度合いは弱く、36は甕になる可能性がある。器面調整は口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目を基調とする。31・34は外面に煤が遺存する。37～41は小型の甕で、37・41の口縁部は肥厚する。38の口唇部はシャープ。また、38・41の外面には煤が遺存し、38・40の口縁部内面には黒変が見られる。42～45は甕で、42が把手、43～45は下半部の破片。43の底部には黒変が見られる。46は鍋で、口縁部は逆L字形に屈曲する。頸部下には沈線状の段を持つ。外面には煤が厚く付着しており、使用頻度が高かつたことが覗われる。

8号土坑（図版23-1、第32図）

調査区南端中央で検出した。当土坑は、検出時点では橢円形をなしていたが、掘方・深さともに掘り足りないことが判り、最終的に写真に映っている左上のピット（P49）は当土坑に取り込まれ、左下のピット（P50）は拡大することになった。底面にはテラスがあり、一段深くなっている。P50を含む長軸は2.32m、幅1.4m、深さ0.4mを測る。埋土中から弥生土器が出土している。

出土遺物（図版30-1、第35図）

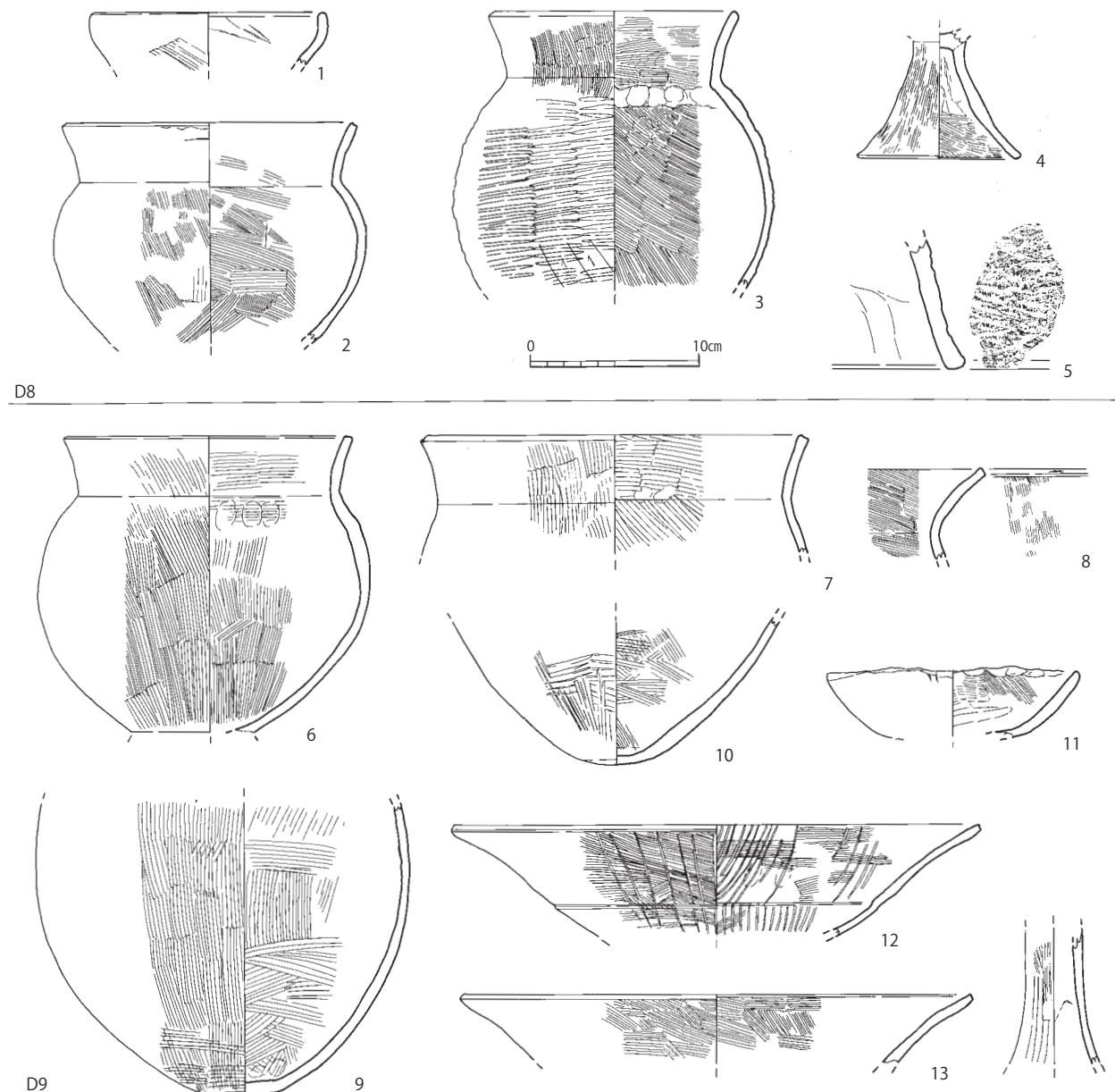
1は壺の口縁部破片で、上方に立つ。2・3は広口壺で、ともに底部を欠く。口縁部は「く」字形に大きく開く。胴部最大径は2の方が上位にあり、3の方は中程にある。2の器面調整は口縁部ヨコナデ、内外面ともハケ目により、3は外面に平行タタキ目を残す。口径は2が17.6cm、3は14.8cmに復原した。4は脚部の破片で、脚裾径は9.6cmを測る。5は支脚の脚裾部破片で、外面にはタタキ目を留め、作りの雑な土器。

9号土坑（図版21-3・4、第30図）

調査区の南西部に位置し、11号溝を切り、14号土坑と重複する。埋土を掘り下げてゆく過程で下位の土器群を検出し、結果的に掘方が拡大した。平面は橢円形を呈し、14号土坑を含む長軸は2.06m、短軸は1.08mで、検出面からの深さは0.43mを測る。底面は14号土坑側にやや傾斜しており、西壁は内湾気味に立ち上がる。埋土上位からは土器と鉄鎌が、下位からは土器が出土した。長軸方位は北から西に77° 振っている。

出土遺物（図版30-2、第35図）

6は脚付壺で、底部を欠く。小型ながら肉厚の器形。口縁部はやや外反して開き、口唇部に面を持つ。内外面ともハケ目による。口径は18.2cmに復原した。7～10は甕で、7・8は口縁部破片で、9は口縁部を欠く。10は底部の破片。7の口縁部は緩やかに外反する。8の口縁部は「く」字形をなす。9の底部は平底を残すが、10は丸底に仕上げる。11は椀で、底部を欠く。12～14は高壺で、12・13が壺部、14は脚柱部の破片。12・13の口縁部は緩やかに外反し、13の口唇部は窪ませる。12はハケ目の後に放射状のヘラミガキを施している。口径は12が31.2cm、13は30.0cmに復原した。14の脚柱部は、10号土坑出土高壺と同一個体かと思われる資料。



第35図 8・9号土坑出土土器実測図 (1/4)

10号土坑（第36図）

調査区の南西端に位置し、西側調査区で検出した5号溝の北東側延長部に当たるが、調査区境であったため前後関係は確認し得ていない。掘方は2段で、上面は橢円形を呈し、長軸2.67m、短軸1.0m以上で、深さは0.46mを測る。下段は方形を呈し、南北長1.02m、東西長0.8m以上で、深さは0.7mを測るが、埋土と地山の差異が僅かであったため掘り過ぎたきらいがある。上段からは比較的多くの土器が出土している。

出土遺物（図版30-3、第37図）

1は直口壺で、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部を欠くが、丸底を呈するか。器壁が薄く、丁寧な作りの土器。調整は内外面ともハケ目による。口径は17.8cmに復原した。2・3は甕で、2の口縁部は緩やかに外反する。3の口縁部は「く」字形を呈し、やや外反気味に開く。外面には煤

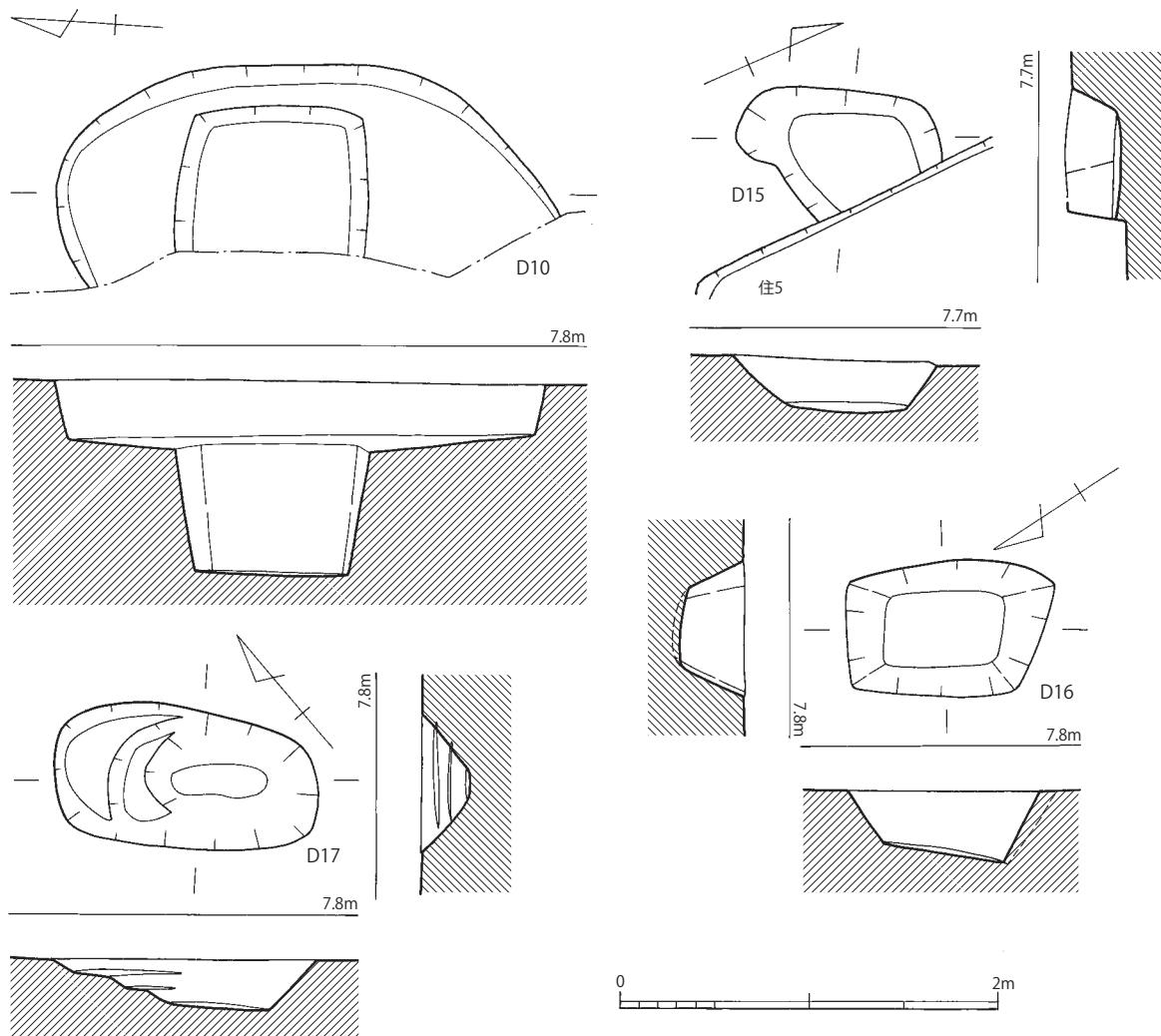
が厚く遺存する。4・5は高坏で、4が坏部、5は坏部から脚柱部にかけての破片。4の坏部はやや内湾気味に大きく開き、口唇部に面を持つ。内外面ともミガキを施す。胎土は精製されたきめ細かなもの。6・7は脚付椀で、6は脚柱部の破片。7は口縁部と裾端部を欠く。坏部が大きく、脚付鉢とした方が妥当か。

11号土坑（第32図）

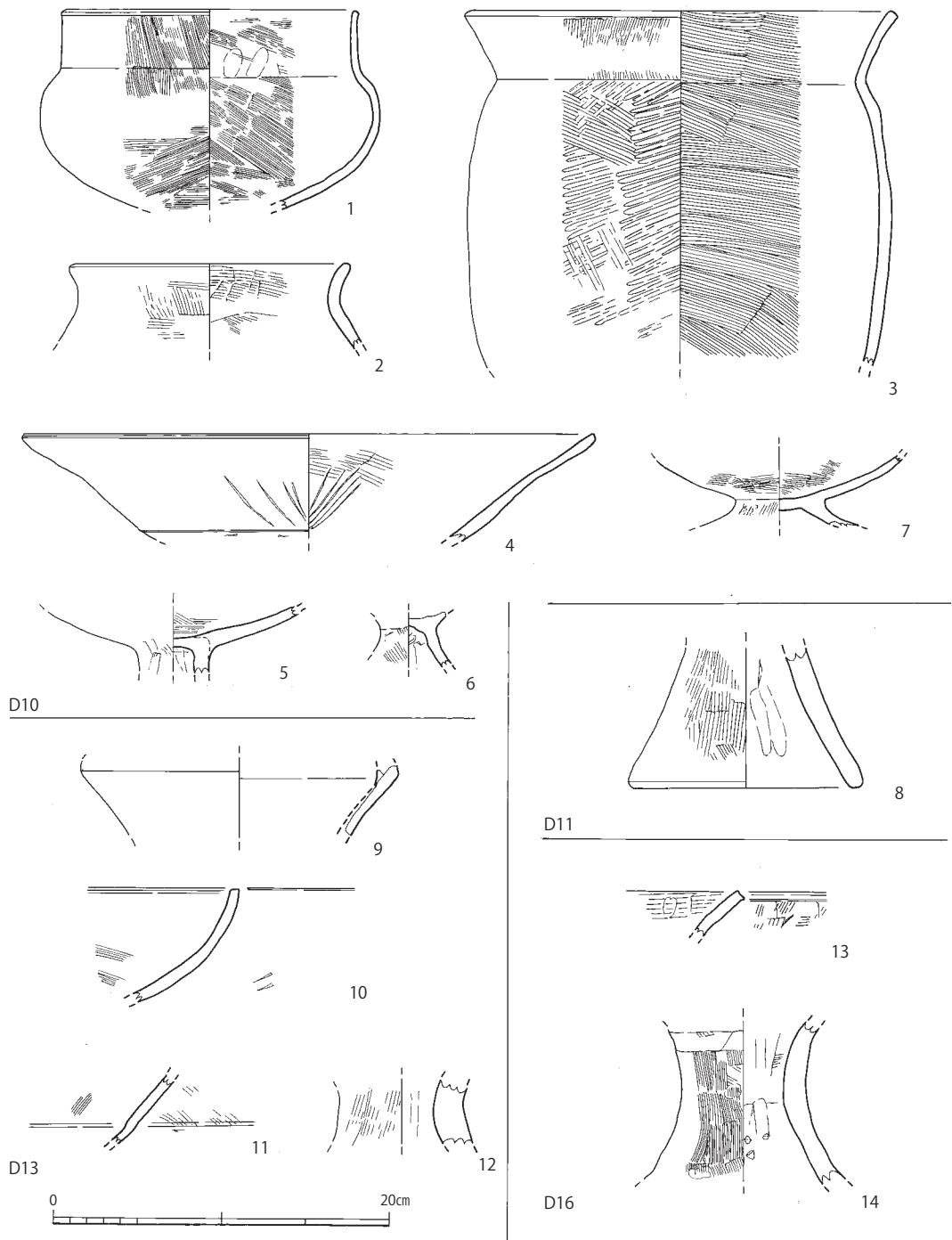
調査区の南西部で、10号溝の0.4m西側に位置する。橢円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.66m、深さ0.24mの小規模なものであるが、ピットにしては大きいので、一応土坑として報告する。

出土遺物（第37図）

8は器台の脚裾部破片で、口縁部を欠く。脚径は14.0cmに復原した。外面縦方向のハケ目、内面は指頭によるナデアゲ。



第36図 10・15～17号土坑実測図 (1/40)



第37図 10・11・13・16号土坑出土土器実測図 (1/4)

12号土坑 (図版23-2・3、第30図)

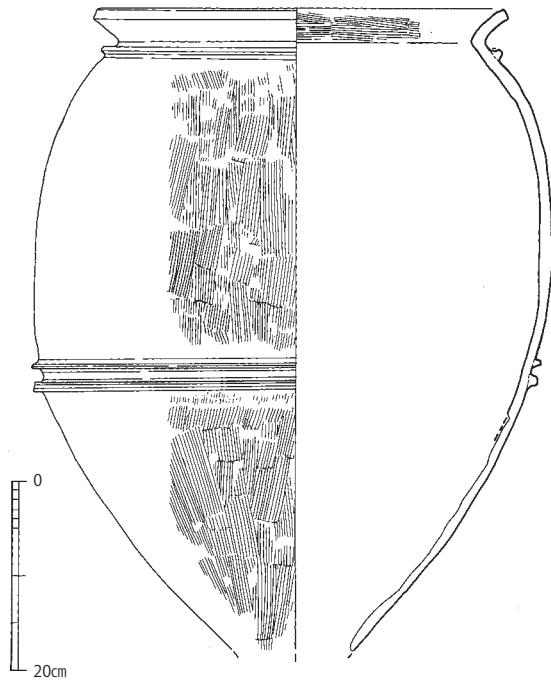
調査区の北東部に位置し、2号大溝に西半部を切られる。2号大溝北端部を掘り下げている最中、大溝の東壁断面に大甕の器面が露出し、その存在に気づいた。当初は甕棺墓かと思われたが、調査の結果、半裁した大甕を投棄した土坑であることが判明した。

掘方の西半部を失うため平面は不詳ながら楕円形を呈するか。長軸1.7m、短軸は0.9mの遺存で、重機による下層遺構検出後に掘り下げたため検出面からの深さは0.2mとなったが、本来は0.5m以上はあったとみられる。掘方の北側には内面を上に向けた状態で半裁した大甕破片を置き、南側には逆に外面を上に向けた状態で半裁した大甕破片を置いていた。調査期間の制約上、大甕の取り上げ

は雨天時に行ったため、掘方下端は確実と言えるものではない。なお、出土遺物の整理作業において、北側と南側の大甕の破片は接合し、同一固体となった。

出土遺物（図版30-4、第38図）

残存器高67.5cmの中型甕で、底部を欠損する。口径は43.3cmを測る。口縁部は「く」字形に外反し、口唇部に面を持つ。頸部のやや直下に1条、胴部中程のやや下位に2条の断面コ字形凸帯を巡らせる。胴部最大径が上位にあるので、全体としてスマートな感がある。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面縦方向のハケ目（5条/cm）により、口縁部内面にも横方向のハケ目が一部見られる。



第38図 12号土坑出土土器実測図（1/8）

13号土坑（第32図）

調査区の南西部で、9号土坑の1m北側に位置する。当土坑はP44とP45が重複し、更に中央にはそれより一段深い方形の穴（P113）があり、それらを含めて13号土坑として報告する。平面は不整形をなし、東西にテラスを設ける。中央の穴は一辺0.7m程の隅丸方形を呈し、深さは0.6mを測る。埋土中からは僅かであるが、弥生土器が出土した。

出土遺物（第37図）

9は袋状口縁壺の破片で、口縁端部を欠く。屈曲部には稜を持つ。10は鉢の口縁部から胴部下位にかけての破片で、口唇部に面を持つ。胴部下半は擦過による。11は高壺の壊部破片で、内面には放射状のミガキを施している。12は器台の中位破片。9・11・12が中央の穴（P113）出土で、2は旧P44から出土した。

14号土坑（第30図）

調査区の南西部に位置し、9号土坑と重複する。当初、14号土坑は単なるピット（P46）として掘り下げていたが、9号土坑の掘方が拡大するのに伴い、再検出した所、掘方が広がったため土坑とした。南北長0.72m、東西長0.72mの隅丸方形を呈し、深さは0.55mであった。埋土中から弥生土器片が出土している。

15号土坑（図版17-2、第36図）

下層遺構に該当する。調査区の南側に位置し、5号竪穴住居に東半部を切られる。当初、P130としていたものである。平面は不整形をなし、長軸1.07m、短軸0.7m以上、深さ0.3mを測る。埋土中から弥生土器小片が出土している。

16号土坑（図版17-2、第36図）

当土坑も下層遺構に該当し、規模の点からP125としていた。調査区南側で、5号竪穴住居の0.5m南東に位置する。平面は不整長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.37mを測る。底面は北東側に傾斜している。埋土中から器台が出土した。主軸方位は北から東に35°振る。

出土遺物（第37図）

13は甕の口縁部小片で、口唇部中央を若干窪ませる。14は器台で、口縁部と脚裾部を欠く。外面ハケ目、内面ナデによる。また、内面には浅い刺突痕が見られる。

17号土坑（図版17-2、第36図）

下層遺構に該当し、4号竪穴住居の0.3m南西側に位置する。当初、ピット（P126）としていたが、長さが1mを超える規模であることから土坑とした。平面は橢円形を呈し、長軸1.42m、短軸0.75m、深さ0.26mを測り、北西面に2段のテラスを有する。長軸方位は北から西に45°振っている。なお、第51図P126の出土土器は、当土坑からの出土であることを記しておく。

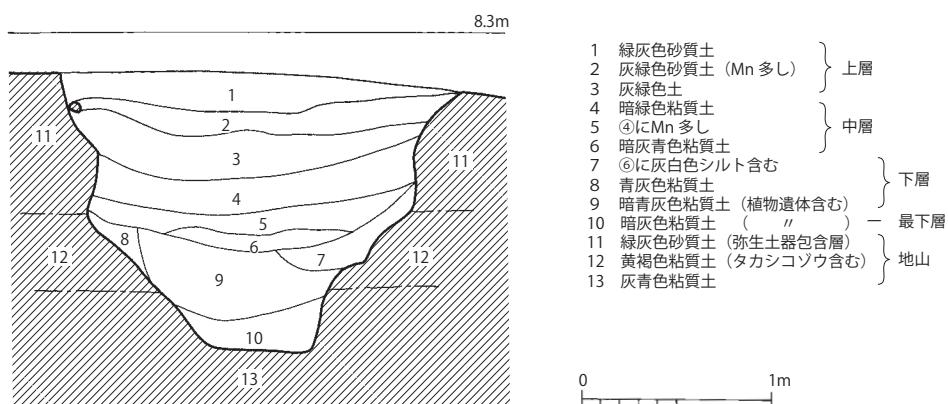
（5）大 溝

調査区の東側で1条検出した。

2号大溝（図版24-1～3、26-1・2、第3・39図、付図）

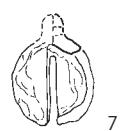
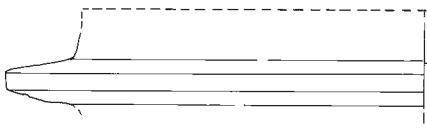
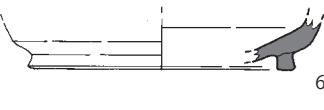
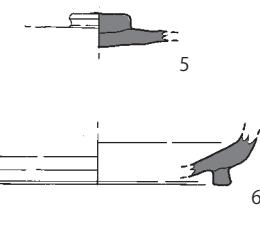
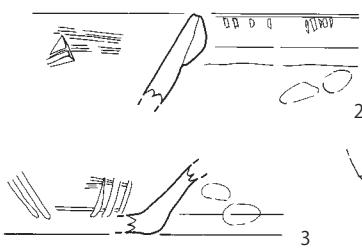
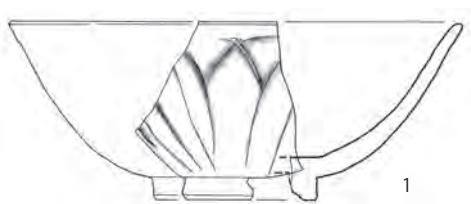
調査区の東側を南北方向に24m程走り、1号掘立柱建物、5・12号土坑を切る。大溝の南北両端部は調査区外に伸びる。2次調査の東側調査区では、調査区の北側を東西方向に走る1号大溝を検出しており、今回は耕作地の関係で確認できていないものの、両者は同一の大溝である可能性を有する。北端部での上面幅は2.6m、底面幅0.6m、検出面からの深さ1.6mで、中央部の上面幅は2.1m、底面幅0.5m、検出面からの深さ1.46mで、南端部の上面幅は2.8m、底面幅0.6m、検出面からの深さ1.4mを測り、北端部は東側に湾曲する様相を見せる。

中央部での埋土は、上・中・下・最下層に大別され、最下層及び下層の暗灰色粘質土（⑨・⑩層）は地山の崩壊土で、中層は暗緑色粘質土（④層）を主体とし、上層には包含層である緑灰色砂質土が堆積している。埋土中からは、陶磁器・瓦器・須恵器・土師器・土製品等が出土した。

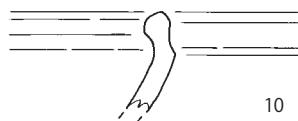
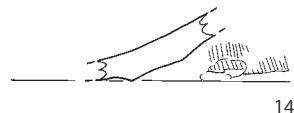
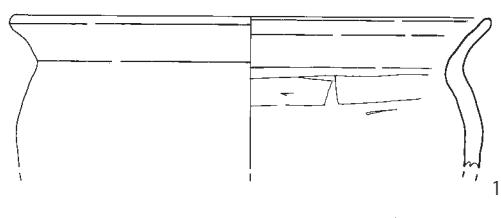
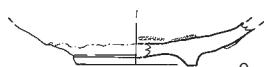
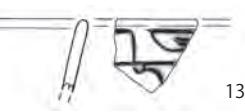
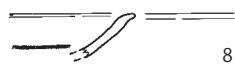


第39図 2号大溝土層実測図 (1/40)

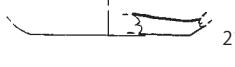
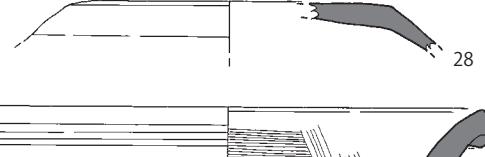
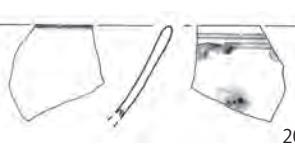
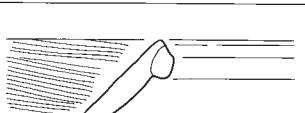
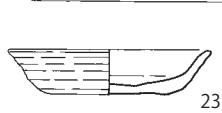
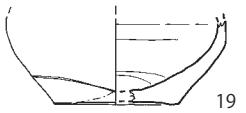
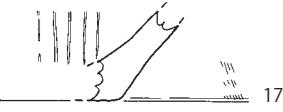
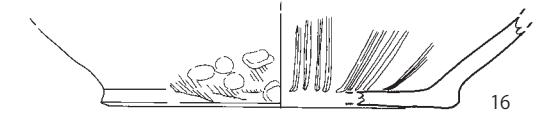
上層



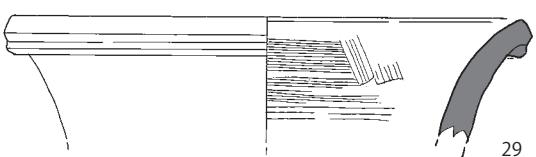
上層下部



中層下位

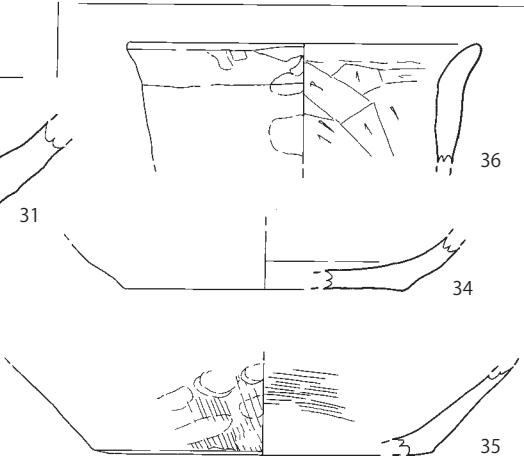
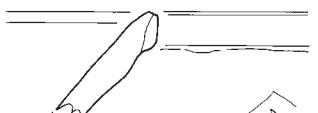
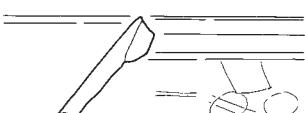
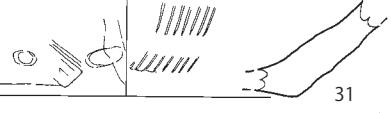
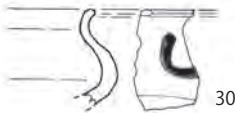


26



10cm

最下層



第40図 2号大溝出土土器・陶磁器他実測図 (1/3)

出土遺物（第40図）

1～7は上層の出土。1は龍泉窯系青磁碗で、蓮弁は鎬を持つが、鎬はシャープさに欠ける。全体に施釉するが、疊付は釉剥ぎ。胎土は灰色で、縁がかかった透明釉を施す。2～4は土師質土器で、2は鍋、3は擂鉢、4は羽釜。2は口縁外面に山形の粘土帯を貼付し、口唇部にはヘラ先による圧痕が残る。外面は黒変し、煤が付着する。3は底部小片であるが、平底をなすか。内面には3本一単位の櫛目を施す。内面から外面にかけて黒化しており、2次加熱を受けている。4は鍔部から口縁部にかけての破片で、鍔部に円孔を穿つが、破片のため個数は不明。5・6は須恵器で、5は天井部にボタン形の摘込みを貼付する。6は有高台坏の底部破片で、高台は底部屈曲部からやや内側に貼付する。7は土製鈴の半欠品で、頭部を欠く。上位まで切り込みを入れている。

8～12は上層下部の出土。8は白磁皿の口縁部小片。器厚は薄く、シャープな作り。透明釉を施す。9は陶器碗の底部破片で、高台付近は露胎。見込には目跡が見られる。胎土は灰黄色で、黄緑色の釉薬を施す。10・11は瓦質土器。10は鉢の口縁部破片。口縁部内外面を指で挟み横方向の強い指ナデを施し、内外面を窪ませ、更に内側に傾けている。11は口頸部破片で、口縁部は短く内方に立ち、肩部は怒り肩をなすようである。湯釜になるか。12は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は「く」字形に外反する。胎土は比較的精良で、色調は黄橙色を呈する。

13～17は中層下位の出土。13は青磁の口縁部小片で、外面には饕餮文風の文様を施している。胎土は灰色で、淡緑色の透明釉を施す。14は瓦質土器で、鉢の底部破片。内面は工具によるナデで、外面はハケ目及びユビオサエによる。15は瓦器の胴部破片で、鉢になるか。断面蒲鉾形の凸帯を貼付している。16・17は須恵質の擂鉢で、16は4本一単位の櫛目、17は5本一単位の櫛目を施す。

18～29は下層の出土。18は陶器碗で、底部の破片。高台は削出しによるが低い。胎土は緑灰色で、灰色の釉薬を施すが、外面には釉垂れが見られる。また、見込と疊付には目跡が残る。19も陶器で、口縁部を欠く。胴部は張りをみせ、やや上げ底の底部に移行する。また、底部付近にはヘラ先による曲線を描く。内面は露胎で、外面には暗緑褐色土の釉薬を施している。底部外面には糸切り痕がみられる。底径は5.0cmに復原した。20は染付碗の口縁部小片で、内面に1条、外面に2条の横線を描く。その下位にも何かの文様を描く。胎土は乳白色で、釉調は透明。21は青磁皿の底部破片。外面は露胎で、板状圧痕が見られる。22は磁器の口縁部小片で、台付皿になるか。23は土師器小皿。口縁部は割とシャープで、ナデによる稜が付く。器高1.8cm、復原口径8.0cm、底径4.6cmを測る。

24・25は土師質土器で、鍋の口縁部破片。口縁端部外面には24が断面方形、25が断面台形の粘土帯を貼付する。何れも内面はハケ目による。26は瓦器の擂鉢で、口縁部外面直下を若干窪ませる。内面には数条の櫛目が見られる。27は須恵質土器の鉢で、口縁部内面に稜を持つ。28・29は須恵器で、29が蓋、29は広口壺の口縁部破片。29の口縁部は大きく開き、口縁端部に断面台形の粘土帯を貼付する。口径は20.1cmに復原した。

30～36は最下層の暗灰色粘質土の出土。30は陶器碗で、口縁部は如意形に屈曲する。外面に文様が施されるも不明。内面下部はケズリによる。31は陶器擂鉢の底部破片で、内面には8本一単位の櫛目を施す。外面には指頭圧痕を留める。32・33は土師質土器で、鉢の口縁部小片。口縁端部外面に断面台形の粘土帯を貼付する。ともに煤が付着している。34・35は須恵質土器で、34は捏ね鉢の底部破片で、平底をなす。内面は良く擂れている。35は鉢の底部破片で、内外面ともハケ目調整により、外面には指頭圧痕を留める。36は土師器小型甕の口縁部から胴部上位の破片。内面はヘラケ

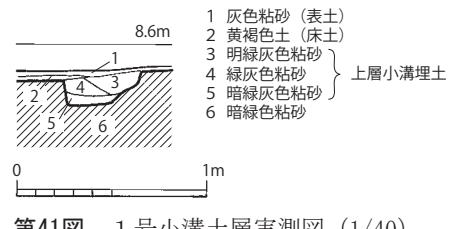
ズリによる。

(6) 溝

調査区の全域において12条程検出した。6号溝は2次調査で検出した溝の東側延長部にあたるため2次と同一番号とした。他の溝の番号は、2次調査の連番としている。

上層小溝（図版25-1～4、第41図）

表土剥ぎの初期段階で調査区を南北に走る小溝を4条程検出した。1号小溝（図版25）は、調査区の西側に位置する。幅40cm、深さ25cm程で、床土の直下で確認した。埋土は緑灰色砂質土を主体とする。2・3号小溝は、2号大溝埋土を切り込んでいる。4号小溝は2号大溝の東側を並走して走り、長さ16m余りを検出した。これらの小溝は、平板による測量を行った後、バックホーで掘り下げた。1号小溝の土層のみを図示する。



第41図 1号小溝土層実測図 (1/40)

4号溝（図版26-1、第42図）

調査区の東側中央部に位置し、3号畠溝を切っている。東端は東側調査区に伸びるが、2次調査では確認し得ていない。L字形を呈し、中央での最大幅0.85m、東端幅0.56mで、壁高は8cmと浅い。埋土中から弥生土器、土師器が出土している。

出土遺物（第43図）

1は土師器壺で、底部は丸底をなす。口縁端部は内側に突出する。口縁部ヨコナデ、内面ハケ目状の工具痕、外面手持ちヘラケズリによる。内面中央には「十」と多角形のヘラ記号を施している。復原口径12.8cm、器高4.5cmを測る。2は弥生土器で、頸部付近の破片。口縁部は「く」字形に屈曲する。内面ハケ目、外面にはタタキ目を留める。

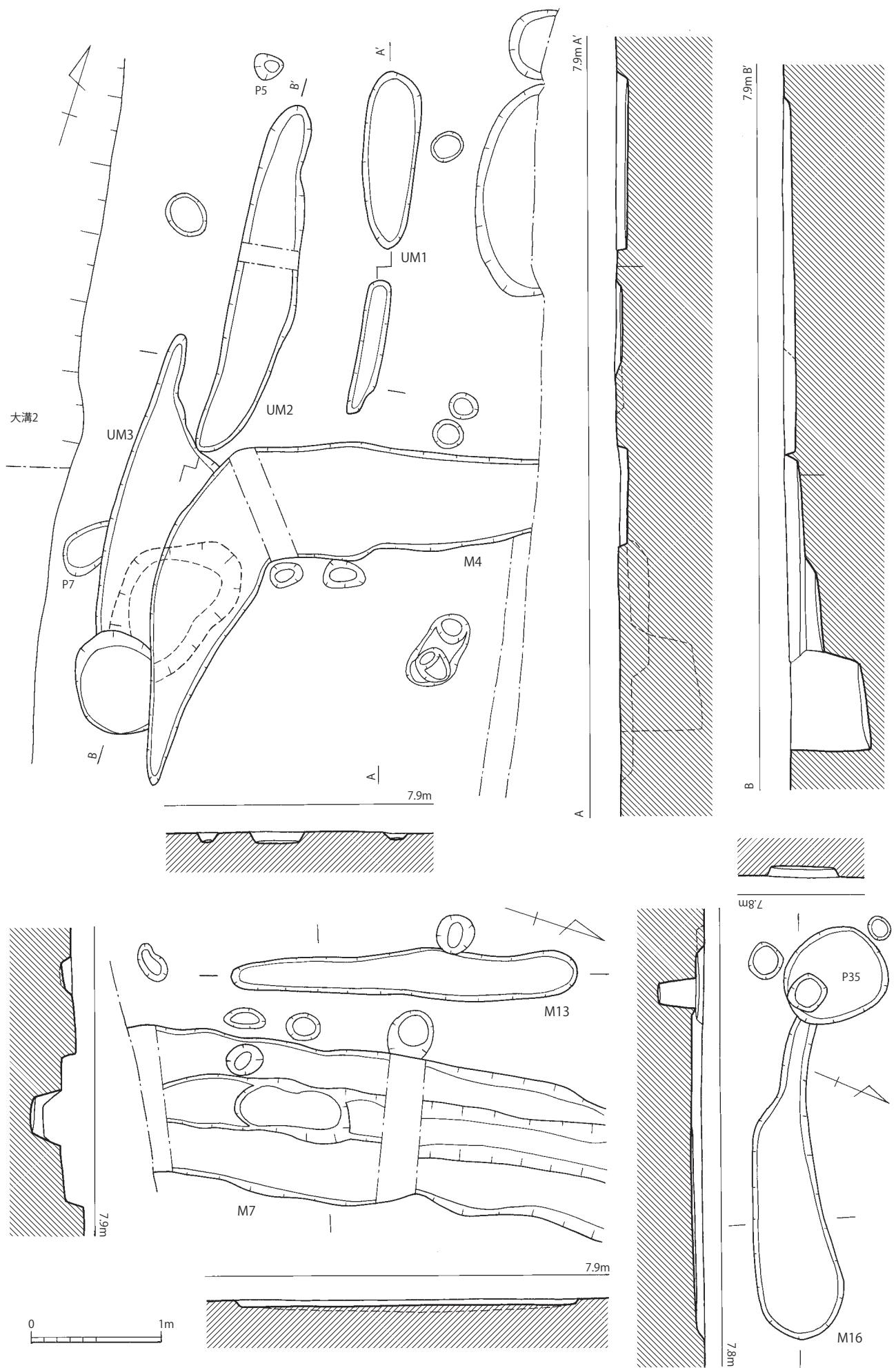
6号溝（図版24-1、26-1、第45図）

調査区の中央やや南側を東西方向に走る溝で、中程で東西に途切れる。西半は10号溝を切り、2次調査区の6号溝に接続する。一方、東半は7号溝と重複するが、2号大溝以東には伸びない。2次調査成果と総合すると、平面はL字形を呈し、東西推定長21m、南北残存長5mの規模となる。また、当溝の北側延伸部にあたる2次調査北東隅部には、方向を等しくする番号を付していない溝状遺構が存在し、この遺構を当溝と一連のものと捉えることが可能ならば南北長は21.5m以上となり、区画溝的な性格を有するのかも知れない。

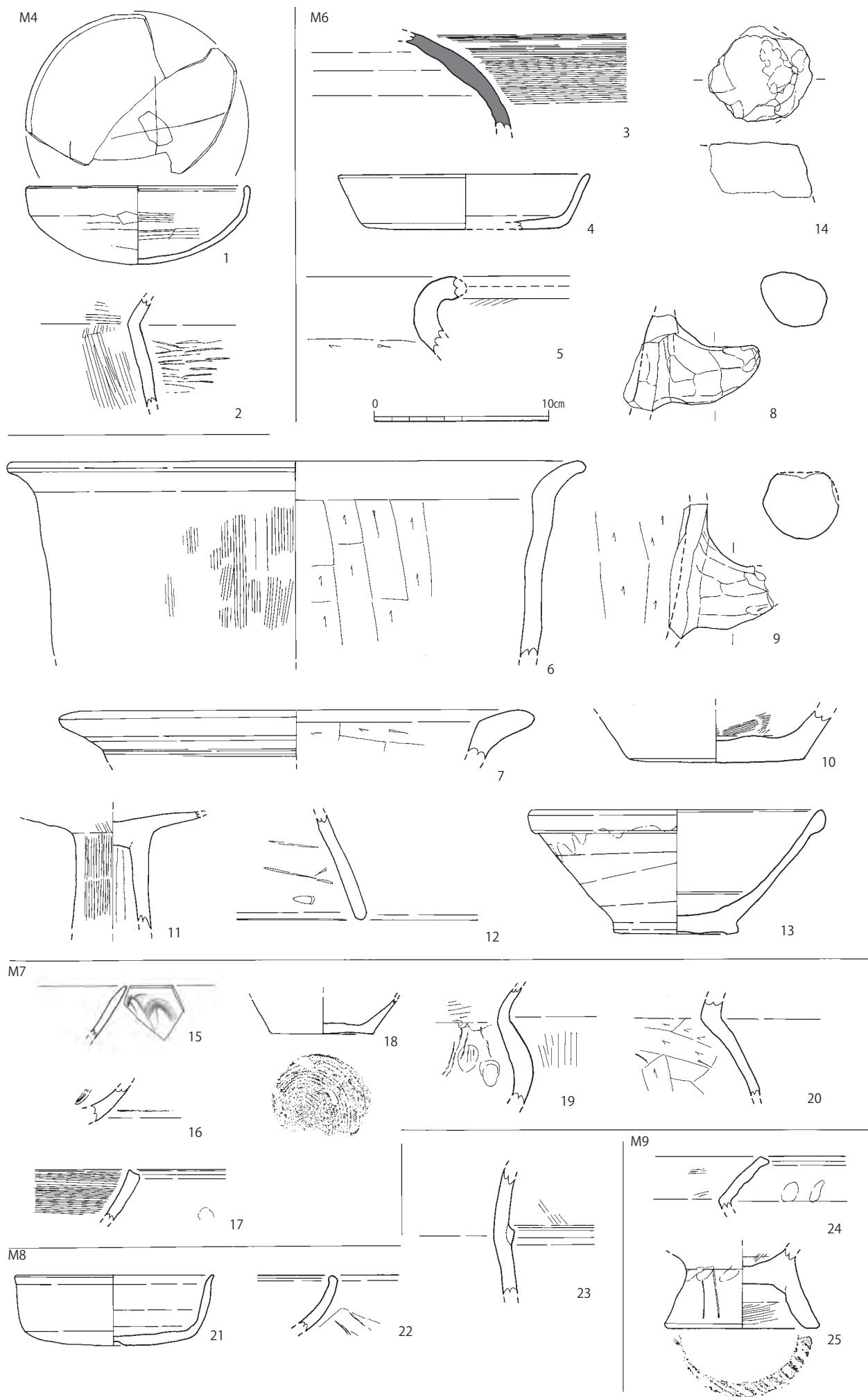
第45図は西半部分を図示した。最大幅1.2m、壁高0.2mを測り、上層に暗緑褐色土、下層に灰褐色土が堆積していた。溝内からは弥生土器、須恵器、土師器、白磁碗等比較的多くの土器が出土しているが、奈良時代の土器が主体をなす。また、溝内の●印は完形の白磁碗が出土した箇所であるが、恐らく別遺構が存在したものと思われる。

出土遺物（図版31-1、第43図）

3～9・14が東半部、10～13が西半部から出土した。3は須恵器の肩部破片で、外面はカキ目を



第42図 4・7・13・16号溝、1～3号畠溝実測図 (1/40)



第43図 4・6～9号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

施す。平瓶になるか。4～9は土師器。4は須恵器模倣の土師器坏で、口唇部は丸く收める。焼成は軟質で、橙褐色を呈する。器高3.1cmで、口径は14.4cm、底径は10.8cmに復原した。5は甕の口縁部破片で、端部を欠く。口縁部は鉤形に外反する。6は残存部位に把手は見られないが、器形からして甕になろう。口縁部は緩やかに外反する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目による。口径は32.0cmに復原した。7は鍋の口縁部破片で、肥厚する。口縁部内面のヘラケズリによる稜はシャープ。8・9は甕或いは把手付甕の把手部破片。把手部側面は面取りを施す。

10～12・14は弥生土器。10は甕の底部破片で、平底をなす。底径は10.0cmに復原した。11は高坏の坏部から脚柱部にかけての破片で、外面はハケ目調整。内面には絞り痕がみられる。12は器台の脚裾部破片で、端部は丸く收める。磨滅が著しいが、内面は工具によるナデ。14は支脚で、図示した上面のみ生きており、他は欠損する。砂粒を殆ど含まず精良な胎土で、焼成はやや軟質。

13は白磁碗の完形品。口縁部は端部を折り曲げた玉縁を呈する。高台の削り出しが弱いため高台は低い。口縁部から内面にかけては施釉するが、それ以外は露胎のまま。また、内底面付近には沈線を1条巡らしている。器高7.1cm、口径16.6cm、高台径7.2cmを測る。

7号溝（図版20-1、26-1・2、第27・42・44図）

調査区の東側を南北方向に走る溝で、両端部は調査区外に伸びる。都合、南北長23.5m分を検出した。北端部では5号土坑と重複し、1号掘立柱建物付近では4号土坑を切り、建物とは重複する。また、中央部では15号溝を切り、6号溝と重複する。なお、第27図は建物との重複箇所で、第44図は4号土坑付近、第42図は南端部分を図示した。

北端部での幅0.55m、壁高0.1m、4号土坑付近での幅0.75m、壁高0.18m、南端部での幅1.13m、壁高0.27mを測り、南側に向かって拡大し、底面も下がっている。埋土は暗緑褐色土で、土師器、土師質土器、青磁が出土しており、2次調査検出の2号溝と関連する可能性がある。因みに両者の心々距離は26mを測る。北端部での方位は、北から西に7°振っている。

出土遺物（第43図）

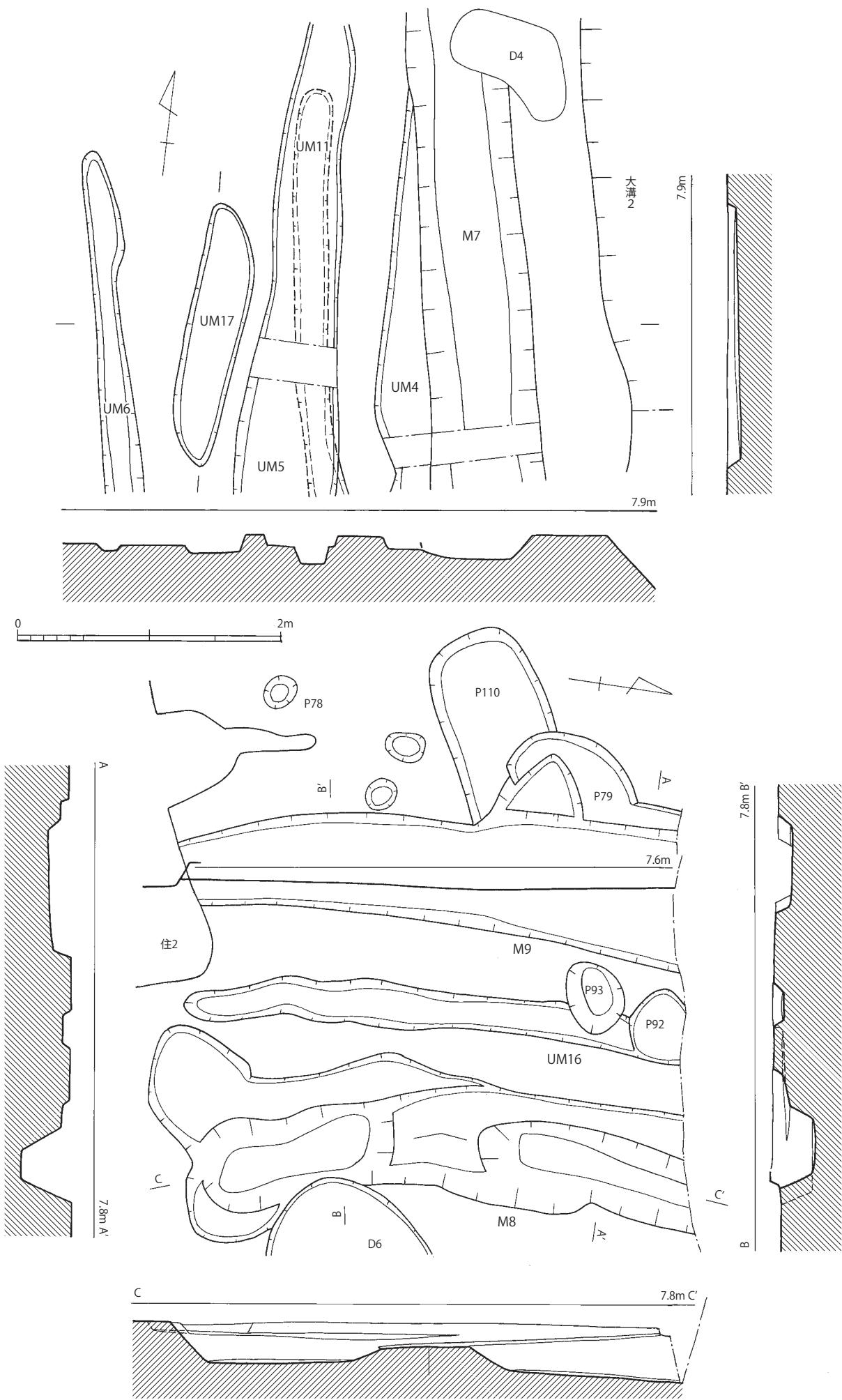
15・16は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、15は鎬蓮弁を施す。灰色の胎で、灰緑色の透明釉を施す。16も青磁碗であるが、内面に櫛目が見られることから同安窯系になろう。17は土師質土器の鉢で、口縁部内面はハケ目による。18は土師器小皿で、口縁端部を欠く。底部は糸切りにより、底径は5.8cmを測る。19・20は土師器で、19は断面S字形の器形をなし、壺とすべきか。外面ハケ目、内面には指オサエが見られる。20は甕の口頸部破片で、端部を欠くが、「く」字形を呈しよう。外面ナデ、内面はヘラケズリによる。

8号溝（図版26-2、第27・44図）

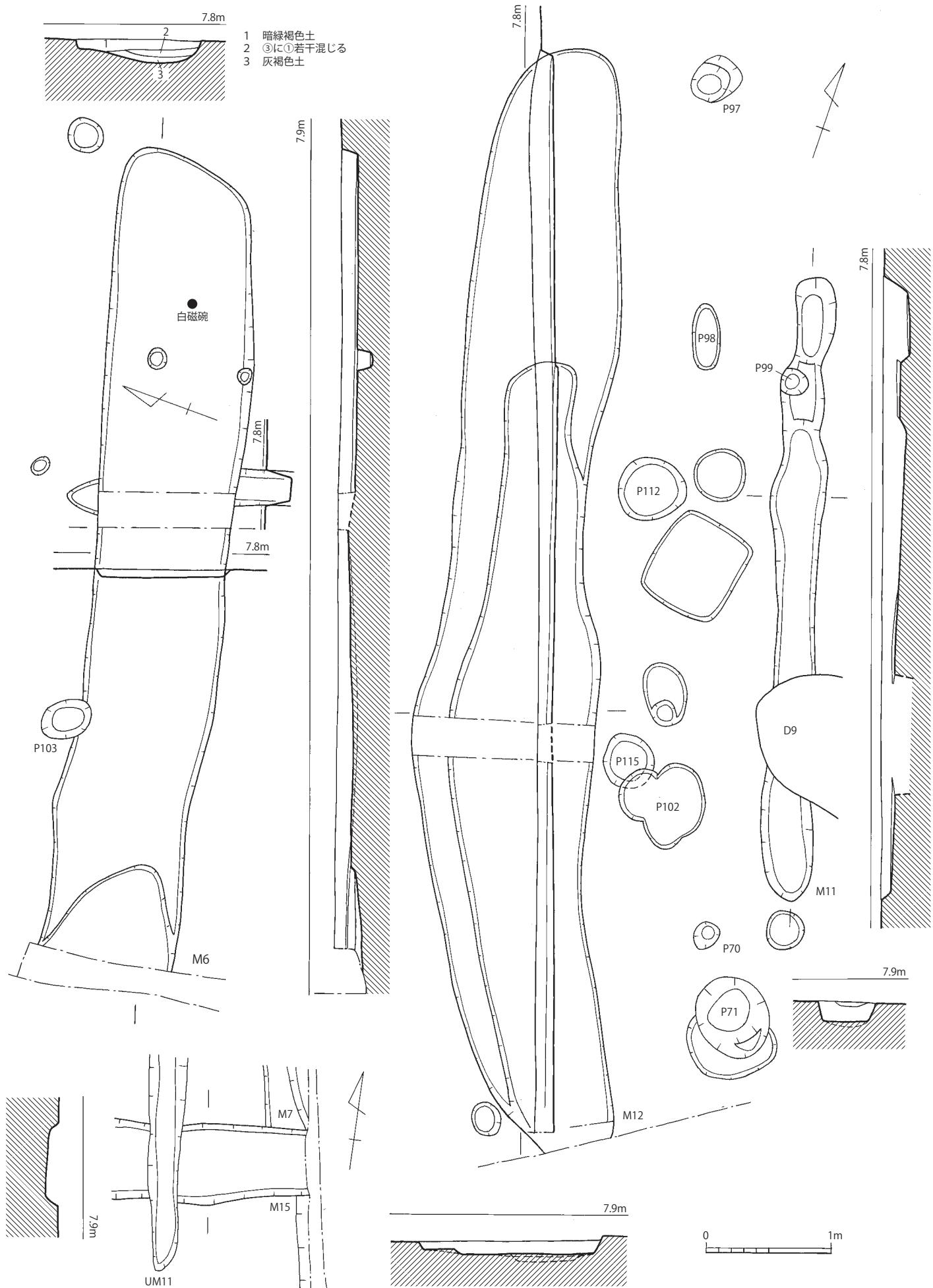
調査区の北西端部で、1号掘立柱建物の0.5m西側に位置し、6号土坑に切られる。北端部は調査区外にある。北端部での幅0.87m、壁高0.4mを測り、中央がテラス状に一段高くなる。

出土遺物（図版31-2、第43図）

21は須恵器模倣の土師器坏で、口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部を強く撫でるため外面が窪む。底部は丸みを帯びる。焼成は不良で、色調は橙褐色を呈する。器高4.0cm、口径11.3cmを測る。22は土師器坏の口縁部小片。口唇部は内側に小さく突出する。口縁部ヨコナデ、外面手持ちへ



第44図 7～9号溝、4～6・11・16・17号畝溝実測図 (1/40)



第45図 6・11・12・15号溝実測図 (1/40)

ラケズリによる。23は弥生土器甕の口頸部破片で、頸部の締まりは悪い。頸部外面に断面三角形の凸帯を貼付している。

9号溝（図版20-2、26-1・2、第44図）

調査区の北西隅部に位置し、北端部は調査区外にあり、南端部は2号堅穴住居に切られるため、残存長3.7m、北端部での幅1.22m、壁高0.23mを測る程度。畝溝に比して幅が大きいことから通常の溝として番号を付した。溝底部は緩やかに北側に下がっている。埋土中からは弥生土器が出土している。

出土遺物（第43図）

24は甕の口縁部小片で、「く」字形をなす。口縁端部に面を持つ。25は台付甕の脚台部破片で、割と高い。畳付部には製作時の板状圧痕を留める。

10号溝（図版26-1、付図）

調査区の南西部に位置し、6号溝に北端部を切られる。長さ6.0m、幅0.28m、壁高0.16mを測り、長軸方位は北から西に18° 振っている。埋土中から弥生土器が出土した。

出土遺物（第46図）

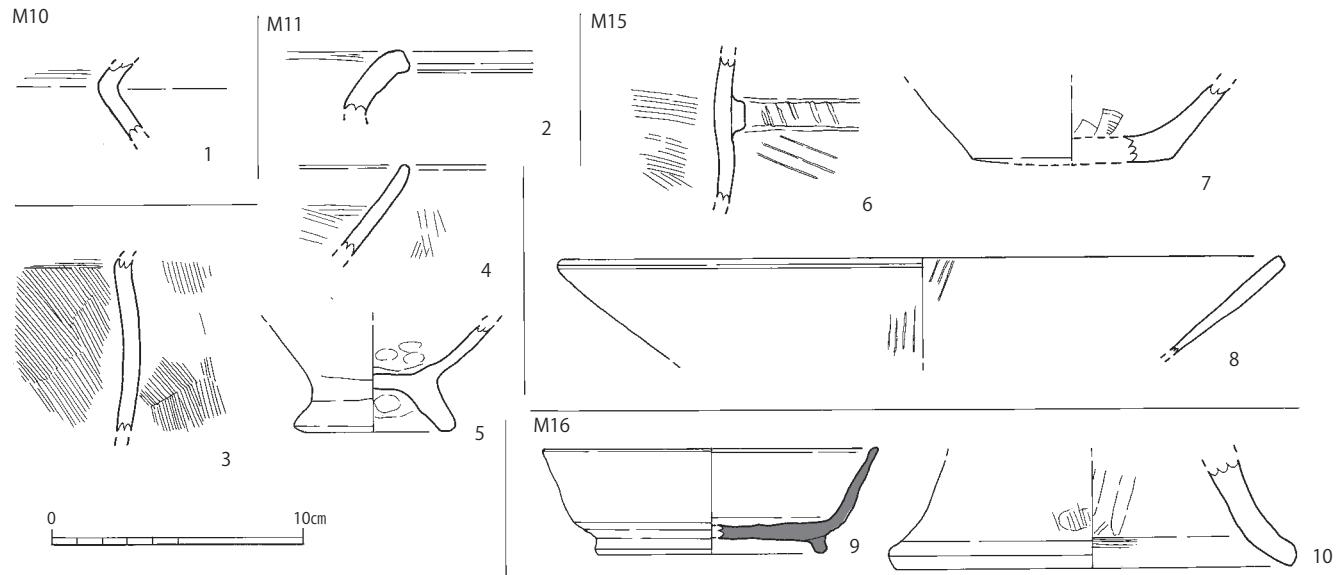
1は甕の頸部破片で、「く」字形を呈する。内外面ともナデで、口縁部内面にはハケ目を留める。

11号溝（図版26-1、付図）

調査区の南西部に位置し、12号溝の1.5m東側を並走する。南側を9号土坑に切られる。長さ5.0m、最大幅0.45mで、壁高は0.2mを測る。底面は北側に緩やかに傾斜する。長軸方位は北から西に16° 振っている。埋土中から弥生土器が出土した。

出土遺物（第46図）

2～5は甕で、2は口縁部小片で、口唇部を若干窪ませる。3は胴部破片で、内外面ともハケ目による。4も口縁部破片で、口唇部は丸く収める。5は脚付甕の脚部破片。内外面ともナデを主体

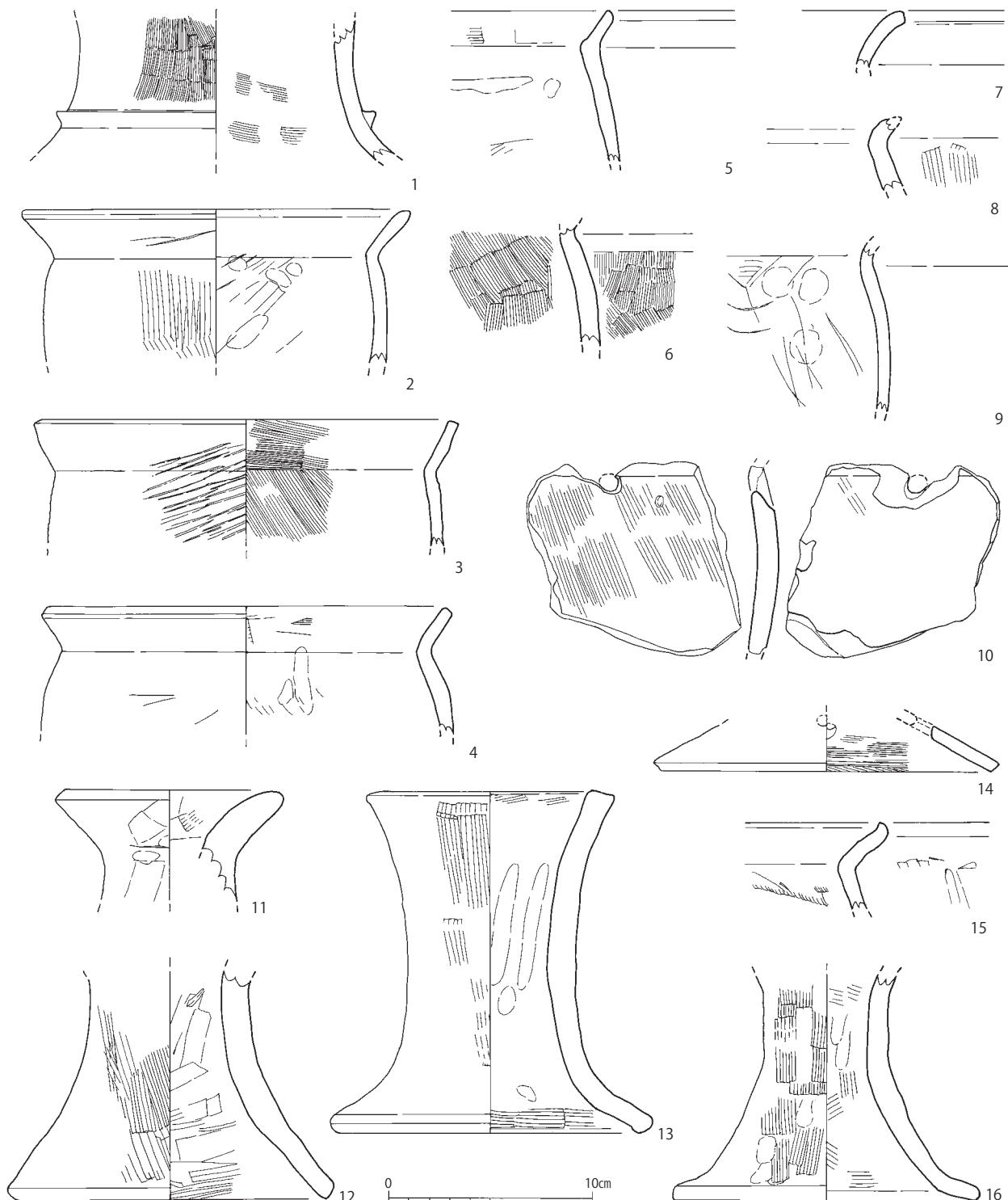


第46図 10・11・15・16号溝出土土器実測図 (1/3)

とするが、ユビオサエが見られる。脚裾径は6.5cmを測る。

12号溝（図版14-2、26-1、第45図）

調査区の南西隅に位置し、11号溝の1.5m西側を並走する。南端部は調査区際に設けた排水溝に切られるため長さ8.8mの残存となる。最大幅は1.5mで、最深部は0.15mを測る。底面はほぼフラットで、先端から2/3以降は2段掘りとなるが浅い。長軸方位は、北から西に16° 振っている。埋土中からは、比較的多くの弥生土器が出土した。



第47図 12号溝出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第47図）

1は壺の頸部破片で、シャープな断面三角形の凸帯を貼付する。外面は細かいハケ目調整による。胎土には黒曜石の粒子を含んでいる。2～10は甕で、2・4・7の口縁部は「く」字形をなし、3・5の口縁部は内湾する。8の口縁部は鈎形に屈曲するが、端部を欠く。6・9・10は口縁部を欠くが、「く」字形を呈するか。なお、10は頸部に焼成後の円孔を施している。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目を基調とするが、3・6の内面はハケ目により、3は外面にタタキ目を留める。11～13は器台。11は受部の破片で、外方に屈曲する。12は脚裾部破片で、受部を欠く。13は径の大きい方を一応下にして実測した。器高22.4cm、口径16.2cm、脚裾径21.2cmを測る。

14～16は溝検出時の土器で、14は高坏裾部で円孔を施す。15は甕で、口縁端部は内側に突出する。16は器台で、受部を欠く。脚柱部で締まり、安定感のある形状をなす。

13号溝（図版27-1、第42図）

調査区の南東側で、7号溝南半部の西側0.5mを並走する。長さ2.65m、幅0.4mで、壁高は5cm程と浅い。長軸方位は、北から西に13°振っている。弥生土器甕の小片が出土した。

14号溝（図版20-1・2、第27図）

1号掘立柱建物の南側柱列と重複し、14号畝溝を切る。当初、建物の布掘りとも考えたが、柱穴とずれることから別遺構とした。西側での幅70cmで、壁高は5cmと浅い。

15号溝（図版20-1・2、26-1・2、第45図）

調査区の中央を東西方向に走る溝で、7～12号畝溝に切られる。第45図は7号溝との接続部分の図で、当溝が7号溝を切る表現にしているが、本来は7号溝の方が後出する。東端部での幅は0.53mで、壁高は0.1m程度であった。2号大溝以東では検出できていないのは、浅い壁高によるものと考えられる。なお、2次調査では1号溝として長さ23m分を検出しており、一連の溝とするならば、全長48.6m程の規模になる。埋土中からは、弥生土器が数点出土している。

出土遺物（第46図）

6は甕の胴部破片で、キザミ目を施した断面方形の凸帯を貼付する。内面ハケ目で、外面にはタタキ目を施す。7は底部破片で、平底をなす。内面には工具によるオサエが見られる。8は高坏の坏部で、口径は28.8cmに復原した。端部側は肥厚する。磨滅が顕著であるが、ヘラミガキを留める。

16号溝（図版24-1・26-1、第42図）

調査区の中央やや南側に位置し、P35・36と重複する。東西方向の溝で、残存長2.45m、東端幅0.66m、西端幅0.18mで、壁高は8cm程度の遺存状況。弥生土器と須恵器が出土している。

出土遺物（図版31-3、第46図）

9は有高台坏で、口縁部は斜め上方に立ち上がる。口唇部は丸く収める。底部の屈曲部は不明瞭で、断面方形の高台を貼付する。口縁部ヨコナデ、内面ナデで、外底面はヘラケズリ後未調整。器高4.1cmで、口径は13.0cmに、高台径は9.0cmに復原した。10は器台の脚裾部破片で、脚裾径は16.2cmに復原した。端部は丸く収める。内面は指頭によるナデアゲ。

(7) 敵 溝

3次調査Ⅰ～Ⅲ区では、1m程の間隔で並走する溝の一群を検出している。これら一群の溝は、敵と敵との間の低くなった溝状の部分に該当すると考えられ、敵溝として報告する。Ⅰ区においては、中央調査区の北半部に集中している。

1号敵溝（図版26-1、第42図）

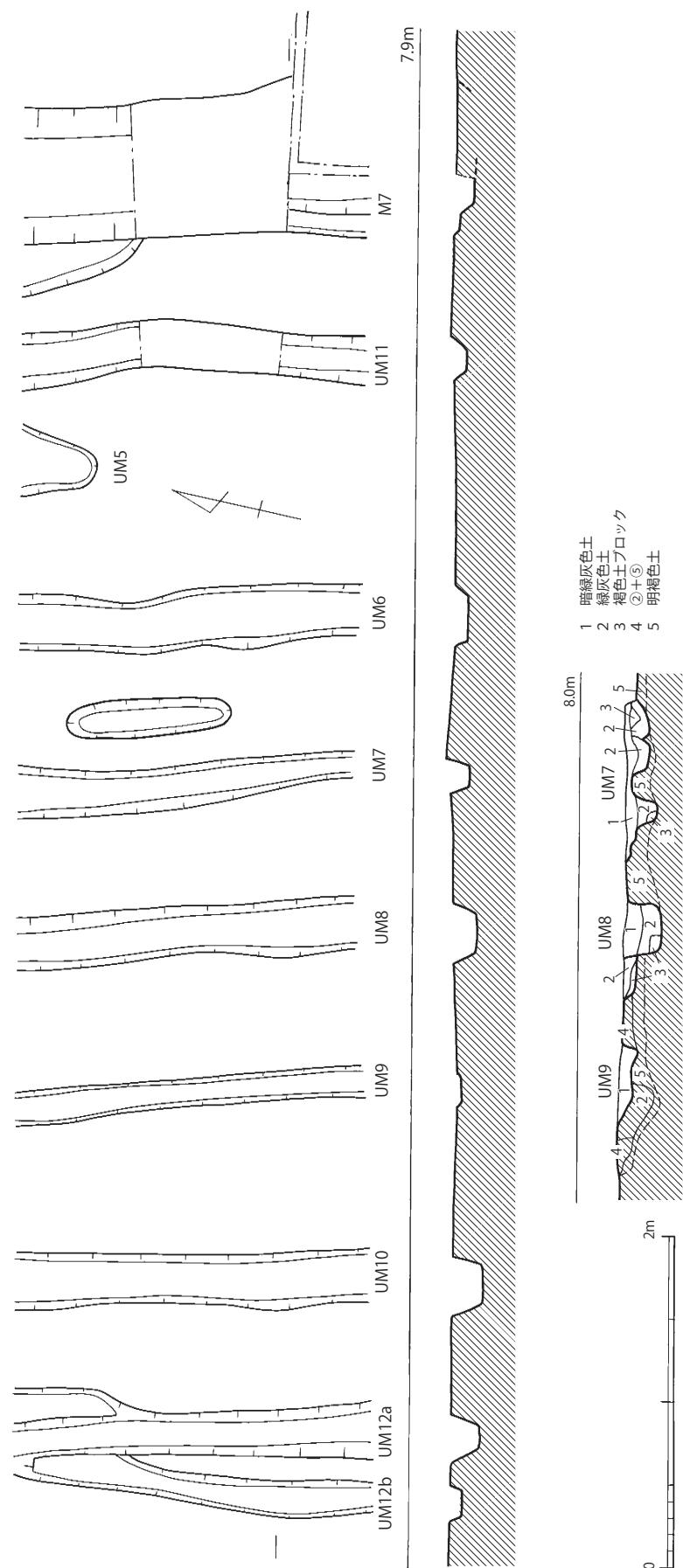
調査区の北東部で、4号溝のすぐ北側に位置する。縦長のピットが南北に途切れた形状をなすが、一連の遺構とした。北側溝は長さ1.36m、幅0.46mで、南側溝は長さ1.06m、幅0.18mで、両者の間隔は25cmを測る。壁高は5cm程の遺存状態であった。

出土遺物（第49図）

1は南側溝から出土した高壇の脚裾部破片で、裾端部は面を持つ。内面ハケ目、外面ヘラミガキで、径8mmの円孔を穿つ。脚裾径は15.8cmに復原した。

2号敵溝（図版26-1、第42図）

調査区の北東部で、1号敵溝の西側0.4mに位置し、南端は3号敵溝と接する。長さ2.75m、幅0.5mで、壁高は8cm程度。長軸方位は北から西に2°振っている。埋土は緑灰色粘質砂で、弥生土器片が出土している。



第48図 5～12号敵溝実測図 (1/40)

出土遺物（第49図）

2は甕の口縁部小片で、口唇部に面を持つ。内外面ともハケ目による。

3号畝溝（図版26-1、第42図）

調査区の北東部に位置する。2号畝溝と接し、4号溝に東壁側を、ピットに南端を切られる。残存長2.32m、最大幅0.7mを測る。なお、当畝溝から4号溝にかけての下部にはピットが存在する。埋土中からは弥生土器が出土した。

出土遺物（第49図）

3は高壺の脚柱部破片で、外面はヘラミガキによる。胎土は砂粒を殆ど含まない精良なもの。

4号畝溝（図版26-1・2、第44図）

調査区の北側に位置するが、大半を7号溝に切られるため長さ4.65m、幅0.43m、壁高0.12mの遺存状況で、5号畝溝との間隔は0.3mを測る。埋土中からは弥生土器片が出土している。

5号畝溝（図版26-1・2、第44・48図）

調査区の北側で、4号畝溝と6号畝溝との中間に位置する。北端は1号掘立柱建物柱穴と重複し、途切れる。検出長6.74m、最大幅1.0m、壁高0.1mで、6号畝溝との間隔は1.1m～1.4mを測る。なお、下部には途中から東側に軸を振る11号畝溝があることから、5号畝溝は11号畝溝の掘り直しの可能性がある。長軸方位は北から西に1°振っている。埋土中からは、弥生土器の小片や土師器が出土した。

出土遺物（第49図）

4は甕の口縁部小破片で、口唇部は丸く収める。下位にはハケ目を留める。

6号畝溝（図版26-1・2、第44・48図）

調査区の中央北側で、5号畝溝と8号畝溝との中間に位置し、南側を15号溝に切られる。検出長8.4m、最大幅0.4mで、壁高は10cmと浅い。長軸方位は北から西に13°振っている。埋土中からは弥生土器片、土師器片が出土した。

出土遺物（第49図）

5は甕の口縁部小片で、口唇部は丸く収める。

7号畝溝（図版20-1、26-1・2、第27・48図）

6号畝溝と8号畝溝との中間に位置し、北側は1号掘立柱建物と重複し、南側は15号溝を切っている。検出長10.6m、最大幅0.84m、壁高0.1mを測る。当畝溝も下部に畝溝があり、掘り直しの可能性を有する。長軸方位は北から西に9°振っている。弥生土器、軽石が出土した。

出土遺物（第49図）

6～8は弥生土器。6は甕の口縁部小片で、口唇部は丸く収める。7は口頸部破片で、口縁端部を欠く。8は頸部に櫛状工具による「へ」字形キザミ目を施した凸帯を貼付するが、小破片なので壺か甕かは不詳。

8号畝溝（図版20-1・2、26-1・2、第27・48図）

調査区の中央北半にあり、7号畝溝と9号畝溝との間に位置する。北側は1号掘立柱建物と重複し、更に調査区外に伸びる。南側は15号溝及び7号土坑を切る。検出長13.5m、最大幅0.7mで、壁高は最深部で0.2mを測る。当畝溝も5・7号畝溝同様、下部に畝溝があり、掘り直しが考えられる。長軸方位は、北から西に4°振っている。埋土中から弥生土器、土師器が出土した。

出土遺物（第49図）

9～12は土師器。9・10は壊で、口唇部は丸く収める。9の口径は14.4cmに復原した。11は甕の口縁部小片で、端部は丸く収める。12は甕の底部破片。

9号畝溝（図版20-1・2、26-1、第27・48図）

調査区の中央北側にあり、8号畝溝と10号畝溝の中間に位置する。北側は1号掘立柱建物と重複し、南側は15号溝を切り、7号土坑に切られる。検出長9.9m、最大幅0.8m、壁高0.1mを測る。8号畝溝とは0.3～0.6mの間隔がある。当溝も下部に畝溝の掘込みがある。長軸方位は、北から西に4°振っている。弥生土器、須恵器が出土している。

出土遺物（第49図）

13・14は須恵器。13は高壊の脚部破片で、裾端部を欠く。14は鉢で、口縁部は斜め外方に立ち上がる。色調は暗灰色を呈する。15・16は弥生土器の甕で、15の口縁部は緩やかに外反する。16はやや内湾する「く」字形口縁をなす。口唇部にはキザミ目を施す。

10号畝溝（図版20-1、26-1・2、第27・48図）

調査区の中央北側にあり、9号畝溝と13号畝溝の中間に位置し、9号畝溝とは0.5m、13号畝溝とは0.7mの間隔を有する。北側は1号掘立柱建物と重複し、1号方形竪穴を切る。南側は15号溝を切り、7号土坑に切られる。検出長10.0m、最大幅0.6m、壁高0.1mを測る。長軸方位は北から西に10°振っている。弥生土器、須恵器が出土している。

出土遺物（第49図）

17は須恵器蓋の口縁部小片。口唇部は鳥嘴状をなす。18・19は壊の口縁部破片で、18の口唇部はシャープな作り。19は口唇部を丸く収める。

11号畝溝（図版26-1・2、第44・48図）

調査区の中央部に位置し、5号畝溝の下部にあたる。南側は15号溝を切っている。検出長7.92m、最大幅0.32m、壁高0.1mを測る。直線的に掘削されておらず、緩やかにうねっている。遺物は出土していない。

12号畝溝（図版26-1・2、第48図）

調査区の中央北側にあり、10号畝溝に近接して位置する。北半部は1号方形竪穴を切り、南側は15号溝と7号土坑に切られる。検出長7.5m、最大幅0.5mで、壁高は6cmと浅い。下部は畝溝と重複しており、掘り直しの可能性がある。長軸方位は、北から西に4°振っている。弥生土器、土師器が出土した。

出土遺物（第49図）

20・21は弥生土器の甕で、20の口縁部は短く外反し、口縁端部に面を持つ。外面には黒斑が見られる。21は口縁端部を欠く。両者とも肉厚の器形をなす。

13号畝溝（図版20-1・2、第27図）

10号畝溝の0.8m西側に並走し、1号方形竪穴を切り、1号掘立柱建物と重複する。検出長3.66m、最大幅0.5m、壁高0.1mを測る。長軸方位は北から西に6°振る。弥生土器が出土した。

出土遺物（第49図）

22は器台の裾部破片で、端部を内側に折り曲げている。内外面ともハケ目による。

14号畝溝（図版20-1・2、26-1・2、第27図）

調査区の北側で、13号畝溝の1.5m西側に位置する。14号溝、1号方形竪穴に切られるため残存長2.3m、最大幅0.48mで、壁高は6cmと浅い。なお、当畝溝は7・9・10・13号畝溝と頭を揃えている。長軸方位は北から西に9°振る。埋土中からは弥生土器の小片が出土した。

15号畝溝（図版20-1・2、26-1・2、第28図）

調査区の北西部で、1号方形竪穴と2号竪穴住居との間に位置する。検出長3.03m、最大幅0.42mで、壁高は5cmと浅い。当畝溝の先端は6号畝溝、7～9号畝溝下部、12号畝溝と頭を揃えている。長軸方位は北から西に11°振っている。弥生土器の小片が出土した。

16号畝溝（図版26-1・2、第44図）

調査区の北西隅部で、8号溝と9号溝との間に位置する。北半部は調査区外に伸び、検出長3.8m、最大幅0.38mで、壁高は6cmと浅い。長軸方位は北から西に3°振っている。埋土中からは弥生土器の細片が出土した。

17号畝溝（図版26-1・2、第44図）

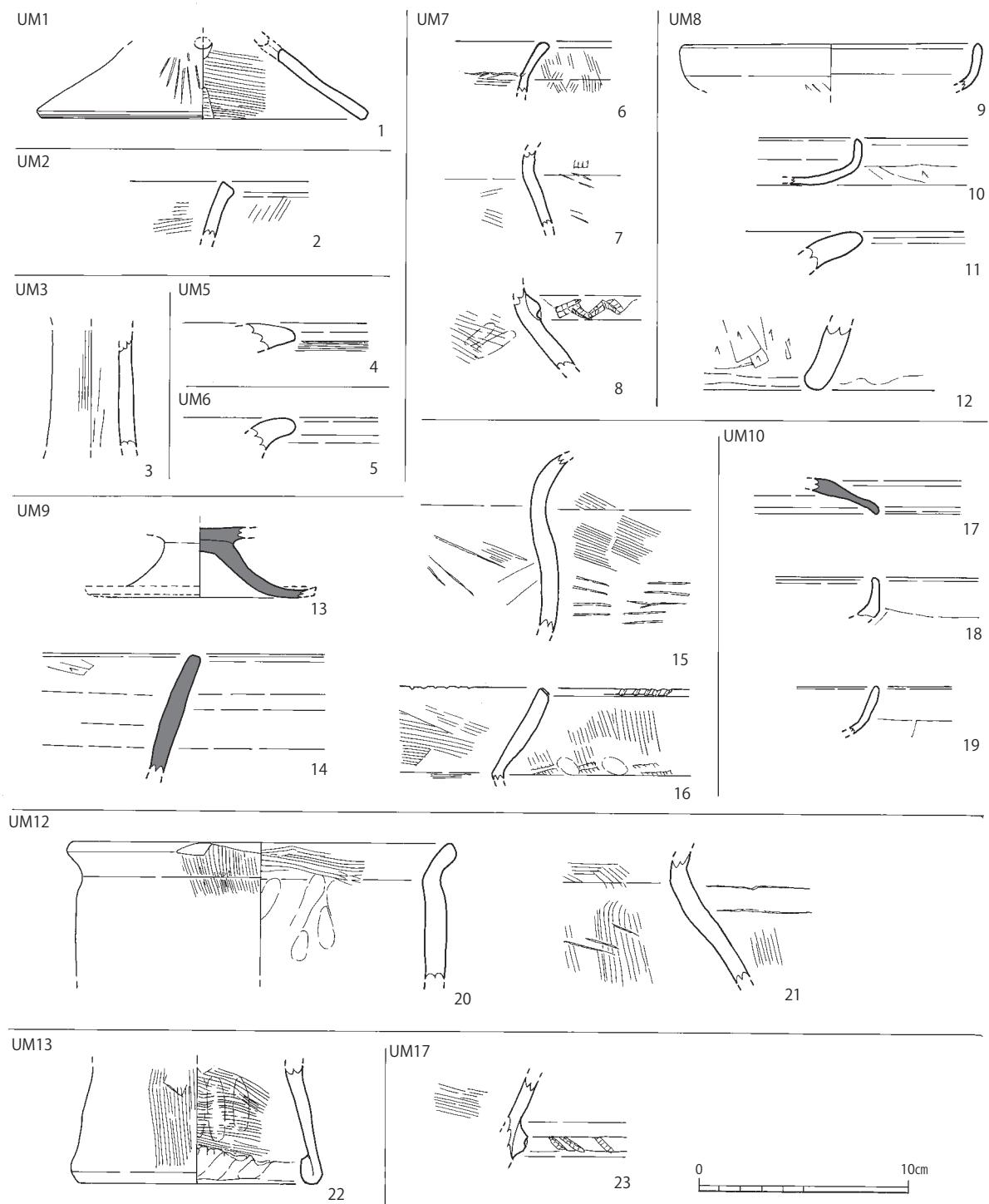
調査区の中央やや北側で、5号畝溝と6号畝溝との間に位置する。長さ2.0m、幅0.43m、深さ0.15mを検出したが、その1.3m北側にも同様な溝があり、両者は一連の畝溝と考えられる。長軸方位は北から東に4°振っている。埋土中から弥生土器が出土した。

出土遺物（第49図）

23は甕の胴部破片で、キザミ目を施した断面台形の凸帯を貼付する。

18号畝溝（図版20-1・2、第27図）

調査区の北側で、13・14号畝溝の中間に位置し、1号掘立柱建物と重複する。検出長2.24m、最大幅0.3m、壁高0.1mを測る。長軸方位は、北から西に4°振っている。遺物は出土していない。



第49図 1～3・5～10・12・13・17号畠溝出土土器実測図 (1/3)

(8) 近世墓

近世墓群は、2次調査I区東側調査地の南西隅部（近世墓群A）とI区西側調査地の南中央部（近世墓群B）、それに3次調査I区中央調査地の南東部（近世墓群A）において確認した。2次調査では、近世墓自体の掘削は実施されなかったが、3次調査においては墓壙の輪郭をつかむ程度の掘り下げを行っている。

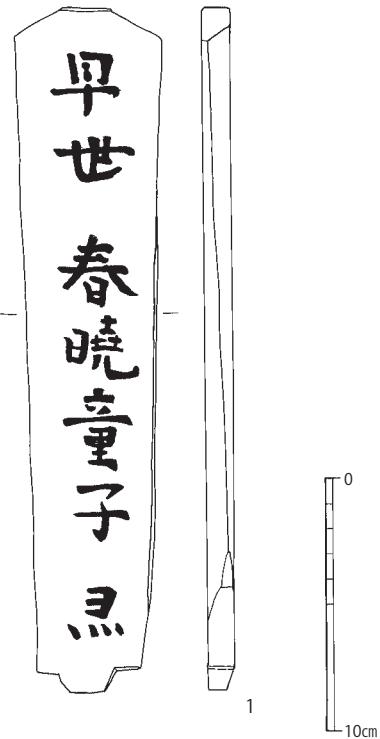
近世墓群A（図版27-1～3）

調査区の南東隅部に埋葬される一群で、2号大溝との前後関係を把握する意味において、墓壙の検出及び数基の掘り下げを行った。その結果、11基の墓壙を検出したが、墓域は調査区外の東側（2次I区東側調査地）から南側へと広がり、南北に長い墓地を形成する。また、近世墓群Bも南北に長い墓域の様相をみせ、両者間の距離は27mの間隔をもつて造墓されている。

出土遺物（図版32-1、第50・51図）

第50図1は、11号近世墓埋土下位出土の位牌本体部分で、長さ27.1cm、頭部幅5.7cm、基部幅4.0cm、厚さ1.1cmを測る。頭部は3面をカットした圭頭状をなし、基部には台座に差し込むための出臍を持つ。表面のみ7文字あり、「早世春暁童子冥」（若くして亡くなった（早世）春の暁（春暁）の様な男の子（童子）の靈）と記されている。

第51図20は9号墓掘方埋土中の陶器碗で、口縁部を欠く。灰白色の胎土に明白色の釉薬をかける。高台は部分的に露胎。高台径は3.5cmを測る。



第50図 11号墓出土位牌実測図 (1/3)

(9) ピット、その他出土の遺物

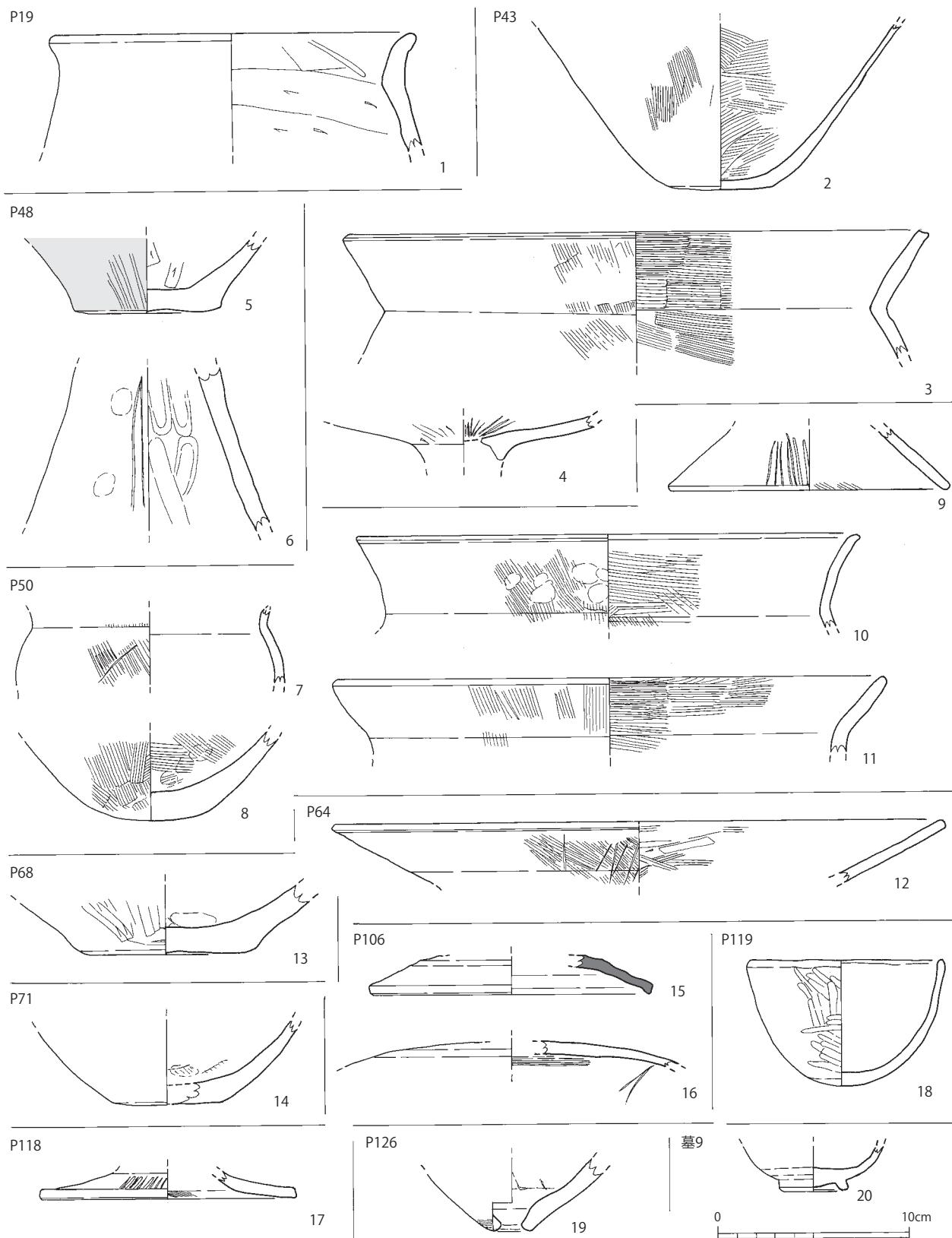
I区中央調査地では、130個余りのピットから弥生土器・須恵器・土師器が出土した。また、層位等出土の土器及び遺構出土の石製品・土製品・鉄器等の特殊遺物をここで報告する。

ピット他出土遺物（図版31-4、第51図）

1は土師器甕の口頸部破片で、口縁部は緩やかに外反する。内面のケズリは横方向に施す。内面には黒変が見られる。口径は19.2cmに復原した。P19の出土。2～4は弥生土器で、2は甕の胴下半部から底部にかけての資料。底部は平底を残す。3は甕の口頸部破片で、口縁部は「く」字形に屈曲する。2・3は内外面ともハケ目による。4は高坏の坏部破片で、脚部との接合部位で剥離している。内面には放射状のヘラミガキを施す。P43の出土。5・6は弥生土器で、5は甕の底部破片で、平底をなす。外面には赤色顔料を塗布している。6は器台の脚部破片で、外面には2本線のヘラ記号を施す。P48の出土。7～11は弥生土器で、7・8・10・11が甕、9は高坏。7は口頸部の破片で、口縁部は短く外反する。8は丸底の底部破片。10・11は口縁部破片で、10は外反、11はやや内湾する。9は脚裾部破片で、外面にはミガキを施す。P50の出土。12は弥生土器高坏の坏部

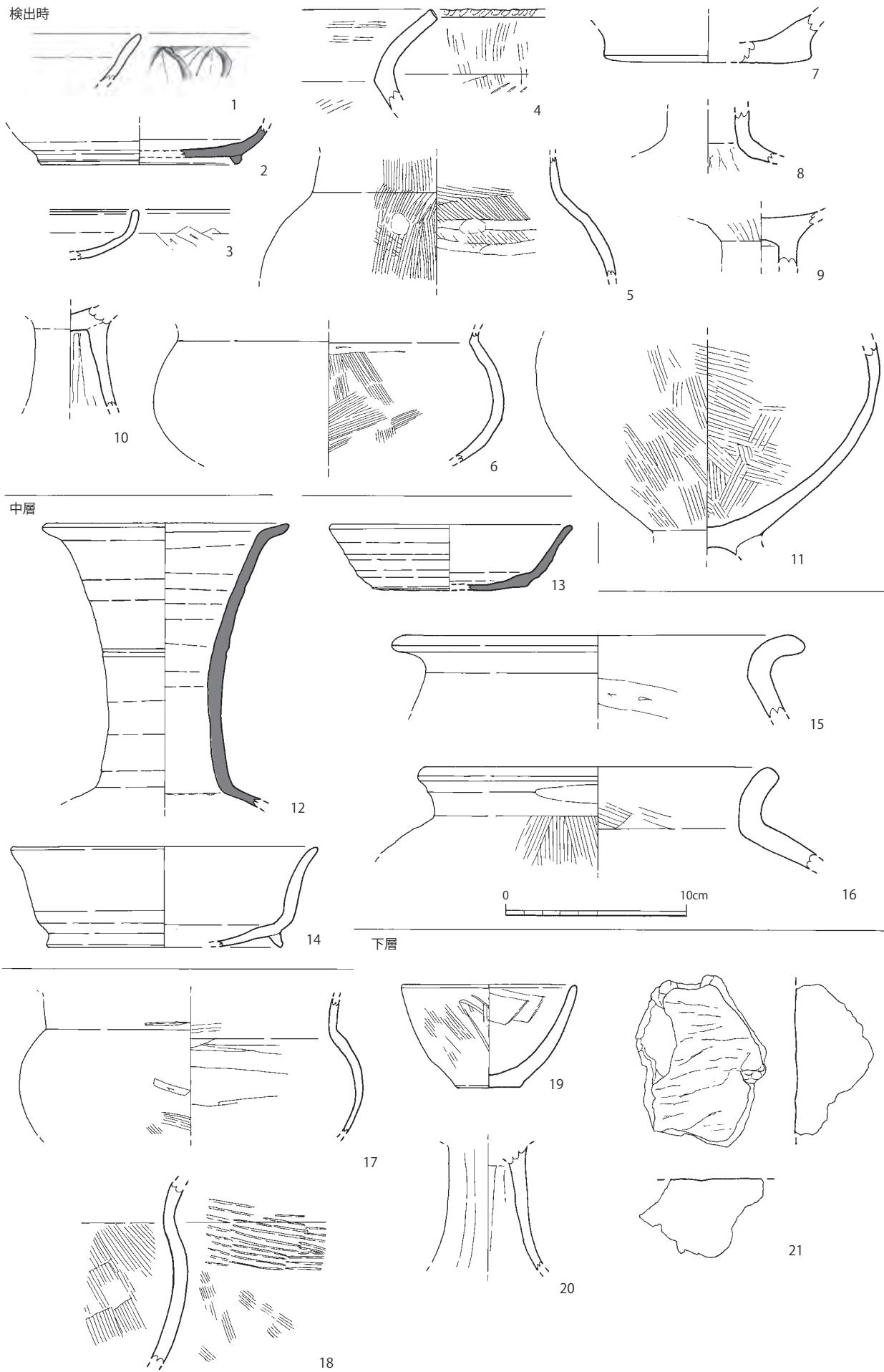
破片で、口唇部は面を持つ。内面ハケ目で、外面はハケ目の後ヘラミガキを施す。口径は32cmに復原した。P 64の出土。13は弥生土器で、甕の底部破片。底部は平底をなす。P 68の出土。14も平底の底部破片。胴部は丸みを帯びて立ち上がるところから碗になるか。P 71の出土。

15・16はP 106の出土。15は須恵器の坏蓋で、口唇部は鳥嘴状を呈する。口縁部はヨコナデで、



第51図 Pit等出土土器他実測図 (1/3)

検出時



第52図 層位等出土土器他実測図 (1/3)

天井部にはヘラケズリを留める。16は土師器で、蓋として実測した。内面回転ヘラミガキ、外面ヘラケズリによる。17は弥生土器の脚裾部破片であるが、脚裾径が13.4cmと小さいことから台付椀の脚裾部になるか。P118の出土。18は弥生土器の椀で、口唇部は丸く収める。外面調整は、ヘラミガキ状の工具ナデによる。P119の出土。19は甌の底部破片で、径1cm程の円孔を穿つ。P126の出土であるが、P126は17号土坑に番号を変更したことを付記しておく。

層位等出土遺物（図版31-5、第52図）

1～11は上層遺構検出時の出土土器。1は龍泉窯系青磁碗で、鎬蓮弁を施す。床土直下の出土。2は須恵器有高台坏の底部破片で、断面台形の高台を底部端に貼付している。3は土師器坏の口縁部小片。口唇部は丸く収める。4～11は弥生土器で、4は「く」字形口縁甌の小片で、口唇部にはキザミ目を施している。5は直口壺の口頸部破片で、内外面ともハケ目による。6は胴部破片で、球体をなす。広口壺になるか。7は平底の底部破片。8は頸部破片で、口縁部は直立する。9・10は高坏の坏部から脚柱部にかけての破片。11は口縁部及び脚部を欠くが、脚付甌の胴部破片で、胴部は球形をなす。内外面ともハケ目による。

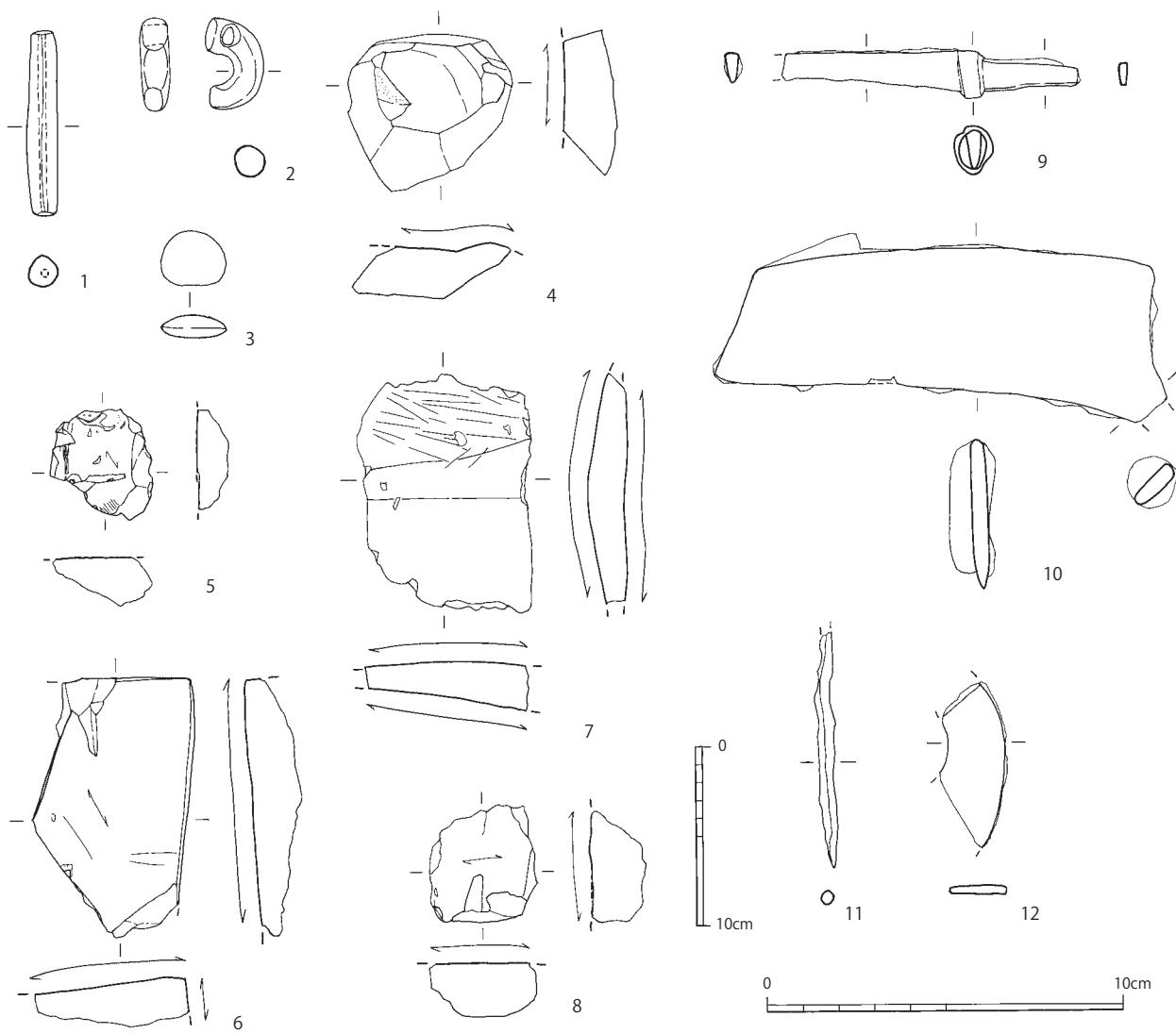
12～16は中層暗緑色シルトの掘り下げ時に出土した土器。12は須恵器長頸壺の口頸部破片で、口縁端部は水平気味に屈曲する。頸部中程にヘラ描沈線を1条巡らす。焼成は堅緻で、色調は暗灰青色を呈する。牛頸窯産であろう。14は須恵器模倣の土師器坏。口唇部はシャープな作り。15・16は土師器の甌で、15の口縁部は鉤形をなし、16の口縁部は「く」字形に外反する。

17～21は下層の暗緑色土掘り下げ時に出土した弥生土器。17は直口壺で、口唇部を僅かに欠く。18は甌の頸部から胴部上位の破片。口縁部は緩やかに外反する。19は椀で、底部は平底をなす。内面は工具ナデによる。20は高坏の脚柱部破片で、内面には絞り痕がみられる。21は面取りを持つ土製品で、図示した上面以外は欠損する。上面は平坦で、ナデによる。

石製品・土製品・鉄製品（図版32-2～4、第53・54図）

1は管状土錘で、長さ5.2cm、幅0.9cm、重さ3.9gを測る。径1mm程の小孔を開けている。I区出土品。2は7号溝南半部出土の勾玉で、U字形をなす。長さ1.6cm、中央幅0.8cm、重さ4.67gを測る。淡緑色を呈し、翡翠製。3は2号大溝北辺下位出土の碁石で、長径1.8cm、短径1.5cm、厚さ0.6cm、重さ2.5gを測る。漆黒色を呈する粘板岩製。4～8は砥石で、4は図示した上面のみ使用面を留める。色調は灰色を呈する。5も図示した上面のみ使用面を留める小片。灰黄色を呈し、部分的に2次加熱による黒変部がみられる。6は上面と右側面を研面とする。灰色を呈する堆積岩。7の上面は山形をなし、稜をもつ。裏面は中程が窪む。表裏両面を研面としている。砂岩質の石材。8は図示した上面のみ使用面が遺存する。砂岩製。4は2号竪穴住居埋土出土。5～8は2号溝出土で、5が中層下位、6は最下層暗灰粘質土、7が北半部上層、8は下層から出土した。

9は刀子で、鋒を欠損する。棟区タイプで、口金を留める。残存長8.4cm、幅1.1cm、棟の厚さ0.4cm、口金長径1.3cm、同短径1.1cmで、茎は長さ2.8cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。奈良時代の7号土坑西半部の出土。10は弥生時代の9号土坑出土の鉄鎌で、直刃タイプのもの。先端部は直線的で、背は丸みを帯びる。身の先端部は茎状に伸びるが、端部を欠損する。長さ12.2cm、先端幅3.2cm、基部幅4.3cm、背の厚さ0.4cmで、重さ99.06gを量る。11は2号大溝下層出土の鉄釘で、残存長6.7cm、厚さ4cmで、断面形は方形をなす。12は下層暗緑色土中出土の鉄製品で、円環状を呈する。残存長4.6cm、幅1.7cm、厚さ0.2cmを測る。用途不明品。



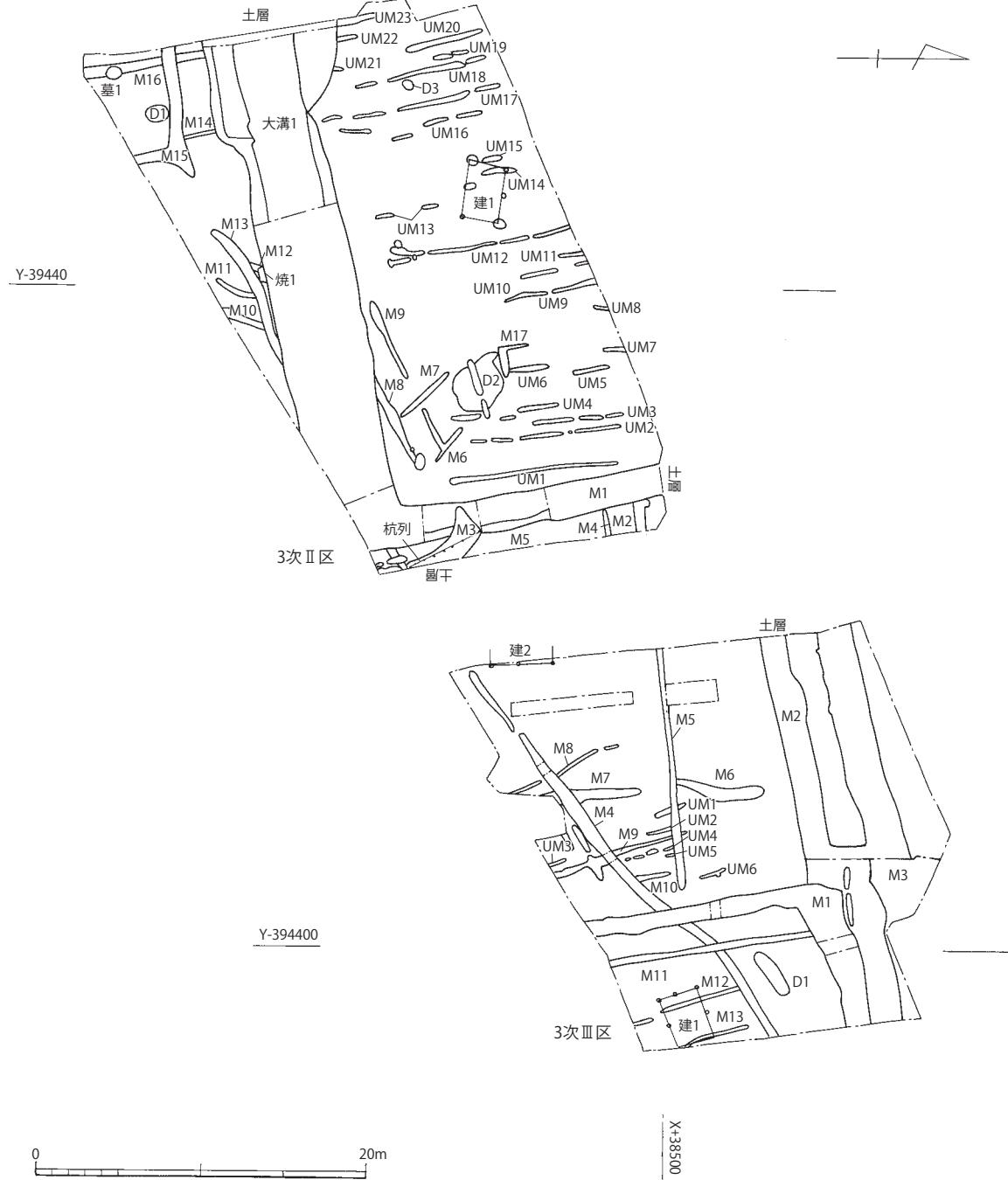
第53図 I区出土土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/2、8は1/4)

第54図 1～13は、堅穴住居、土坑、大溝、ピット等から出土した石器・石製品。1は2号堅穴住居のカマド内から出土した磨石。円形を呈し、長径9.2cm、短径8.3cm、重さ274.5gを量る。全体的に擦れています。2・3は3号堅穴住居出土の磨石で、2は半欠品。3は長さ14.3cm、幅6.0cm、重さ440.5g。ともに安山岩製。4は4号堅穴住居出土の石器で、お結び形をなす。全体的に擦れており、長軸16.1cm、短軸10.1cm、重さ1.74kgを量る。5は1号方形堅穴出土の円礫で、両端部を欠損し、敲打石として使用したか。全体的に擦れています。6は4号土坑出土の磨石で、方形に近い円形をなす。全体的にやや擦れています。7・8は10号土坑出土の石器で、7はお結び形、8は下部が太く、石杵状をなす。7は全体的に擦れており、8の基部先端には敲打痕が見られる。長さ16.5cm、基部幅7.2cm、重さ936.4gを測る。9・10は2号大溝出土で、9は磨石、10は面取り加工を施した石材で、凝灰岩製。11は15号溝から出土した磨石。12は扁平な三角形状をなす石器で、全体的に擦れています。P19の出土。13は楕円形を呈する磨石で、先端部には敲打痕がみられる。長さ9.9cm、幅5.6cm、重さ384.7gを測る。安山岩製で、P110から出土した。

註1 小田和利 1996 「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』
九州歴史資料館



第54図 I区出土石器・石製品実測図 (1/4)



第55図 II・III区遺構配置図 (1/400)

4 II区調査地の遺構と遺物

II区調査地は、I区東側調査地との間の道路を挟んだ東側にあたる。調査地は畠であり、里芋等の作物収穫後に発掘調査に着手した。掘削土は地権者の好意により北側隣接地の水田に仮置きすることができ、調査終了後速やかに復旧することとした。なお、II区とIII区との間には、民家への進入路が現存していたため幅4m程を残し、そこまでをII区調査範囲の東限とした。さらに、III区の表土搬出のため、II区調査予定地の南側に幅4m程の搬出路を設定し、調査範囲の南限とした。

II区はI区に比して遺構密度は低く、掘立柱建物1棟、溝・畝溝、土坑、江戸時代の大溝・杭列等を検出した程度であった。なお、遺構検出面の標高は、I区同様7.5~7.7mである。

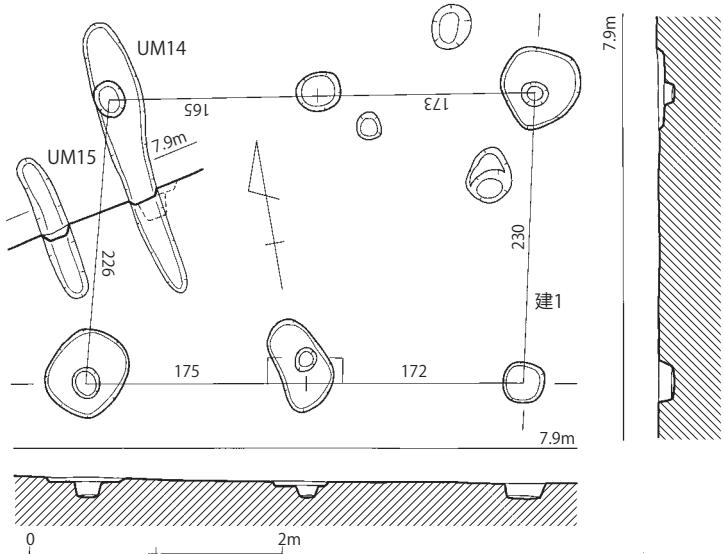
(1) 掘立柱建物

調査区の北側において1棟のみ検出した。

1号掘立柱建物（図版35-1、第56図）

調査区の北側中央に位置し、14号畝溝と切り合い、15号畝溝とは重複するようであるが、畝溝の方が後出するものとみられる。

桁行2間（3.47m）、梁行1間（2.3m）の小規模な建物である。掘方は0.7m程の隅丸方形ないしは不整形を呈し、その中程に径20cm、深さ10cm余りの柱痕が確認できた。桁行の柱間は1.65m~1.75mで、梁行の柱間は2.26m・2.30mを測る。東側の梁行方位は北から東に12°振っている。掘方及び柱痕からの出土遺物は無く、時期は不詳。



第56図 1号掘立柱建物、14・15号畝溝実測図（1/60）

(2) 土坑

調査区の全域に展開し、3基検出した。

1号土坑（図版35-2、第57図）

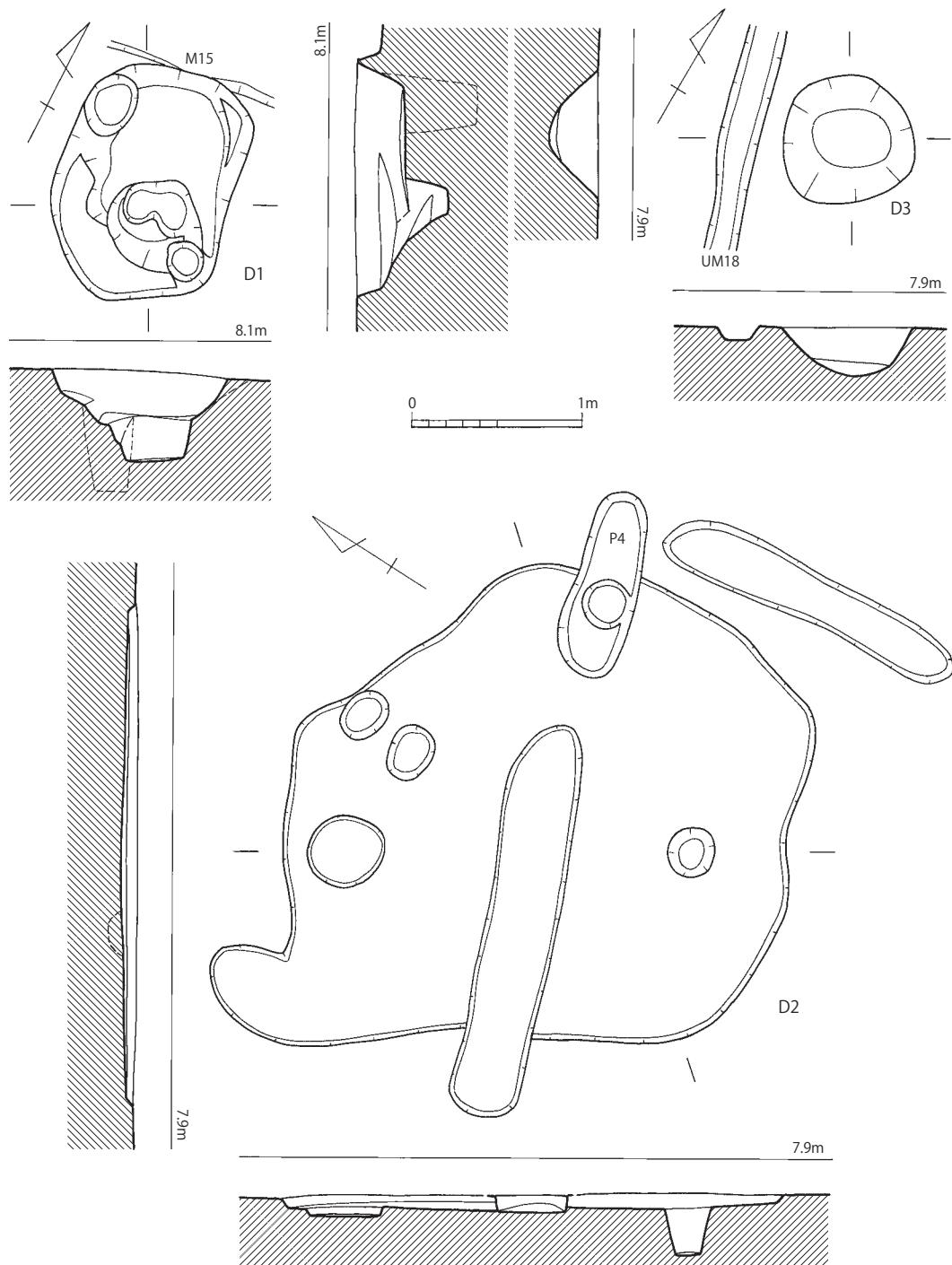
調査区の南西隅部で、15号溝に近接して位置する。隅丸方形を呈し、長軸1.42m、短軸1.03m、深さ0.29mを測る。北東側と南西側にテラスを有する。また、北西側と南東側にピットが掘り込まれている。長軸方位は北から西に9°振っている。埋土中から弥生土器が出土した。

出土遺物（第58図）

1は弥生土器の肩部破片で、頸部が直立気味であることから、直口壺になるか。磨滅が著しいが、内外面にハケ目を留める。

2号土坑（図版34-2・37-1、第57図）

調査区の東側に位置する。不整形を呈し、中程は溝状遺構（P4）に切られる。東西長2.85m、南北長3.0mで、壁高は8cmと低い。弥生土器の小片が出土している。



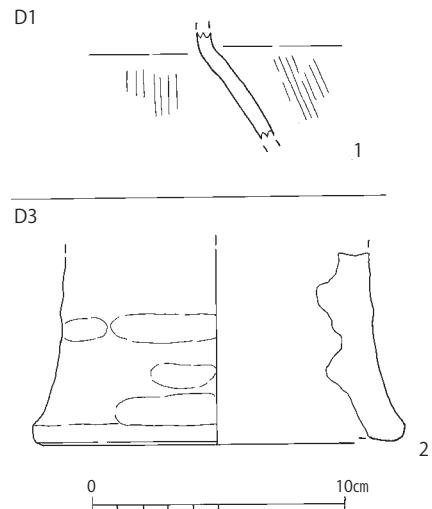
第57図 1～3号土坑実測図（1/40）

3号土坑（図版34-1・36-1、第57図）

調査区の西側で18号畝溝の東側に近接して位置する。径0.8mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。弥生土器・青磁片が出土している。

出土遺物（図版38-3、第58図）

2は支脚の底部半欠品。指頭によるナデで仕上げるが、手捏ね風の雑な作り。胎土は砂粒を余り含まない緻密なもので、焼成は軟質。



(3) 焼土坑

1号焼土坑（第67図）

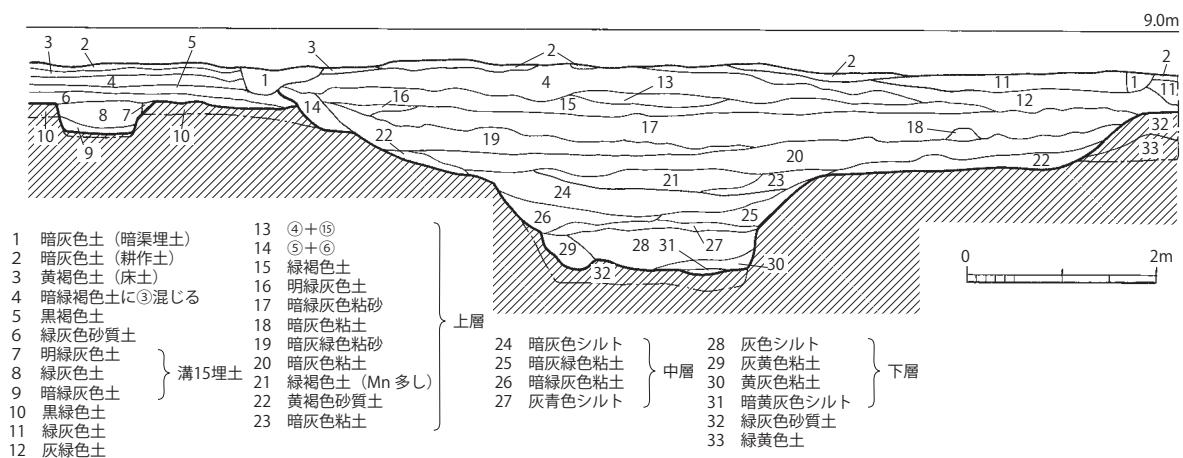
第58図 1・3号土坑出土土器実測図（1/3）

調査区の南側に位置し、1号大溝に切られ、12号溝を切る、東西の長さは86cmで、南北の長さは1号大溝に切られるため52cmで、壁高は16cmの遺存状況。埋土は炭・焼土を含む黒灰色土で、弥生土器甕片、土塊が出土している。

(4) 大 溝

1号大溝（図版34-1・2、36-1～3、第59・60図）

調査区の南側を東西方向に走る大溝で、8・13・14・16号溝、21～23号畝溝を切っている。また、南東隅で南側に屈曲するものとみられる。当大溝とI区東側調査地検出の1号大溝との間には8mの未調査部分（道路）があるが、方向・規模・位置的に同一の大溝と考えられ、I区検出分を含めると100mを超える長さとなる。また、調査区の東端部で南北方向に走る1号溝と接続するが、この溝も一連の遺構と捉えられる。調査期間の制約上、東西両端部を掘削したのに留まるが、東西長32mの検出で、西端部での上面幅3.6m、底面幅2.0m、深さ2.0mを測る。なお、大溝の北縁部には幅3.2m、深さ0.7m、検出長4.8mのテラスがあり、テラスを含めた上面幅は5.8mを測る。一方、テラスの対岸には、階段状遺構を付設している。

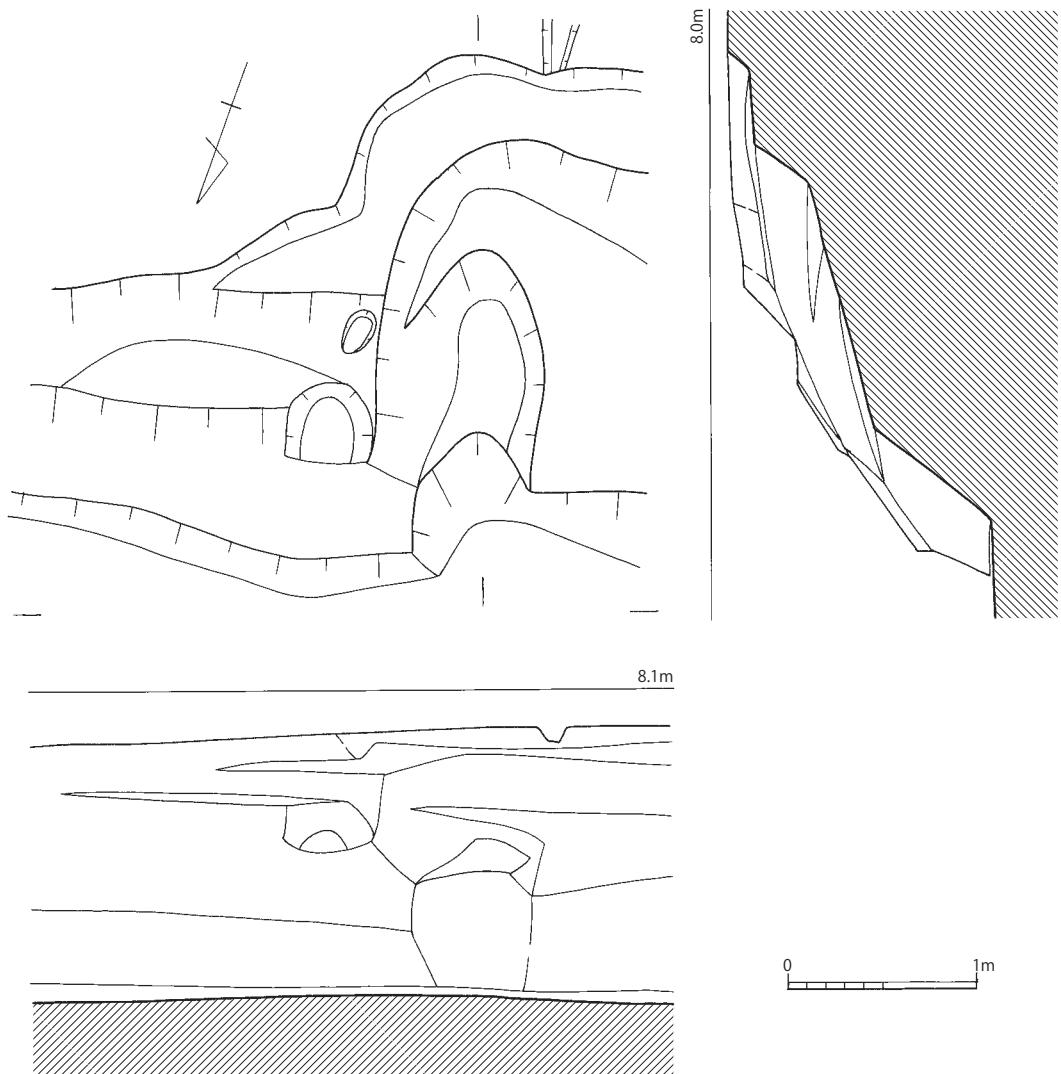


第59図 1号大溝西壁土層実測図（1/80）

1号大溝の西端部での堆積土は、上層（第59図13～23層）、中層（同24～27層）、下層（同28～31層）に大別でき、上層は暗緑灰色粘土を主体とし、中層は暗灰色シルト、下層は灰色シルトを主体とする。テラスの埋土は大溝の上層堆積土と同じで、同時期に埋没したことが窺われる。なお、遺物の大半は上層中の出土である。

第60図は階段状遺構の図面で、大溝上面までは3段のステップを有する。最下段のステップは、底面幅36cm、蹴上げ6cmで、2段目のステップは踏み幅32cm、蹴上げ26cm、最上段のステップは踏み幅38cm、蹴上げ12cmの遺存状況で、均一ではない。

当大溝の性格に関しては、長さ100m以上で、上面幅3.6m、深さ2.0mと大規模で、テラスと階段状遺構を付設することから、小規模な荷船を用いた物資運搬用の運河と考えたい。穿った見方をすると、テラスは物資の積込場で、階段状遺構は荷船に乗り込む際の足場とみられ、相対する箇所に付設しているのも首肯されよう。因みに、十郎丸長谷古遺跡から筑後川までの距離は約1.8kmで、筑後川を流下すると久留米城に至る位置関係にある。



第60図 1号大溝階段状遺構実測図 (1/40)

出土遺物（第61図）

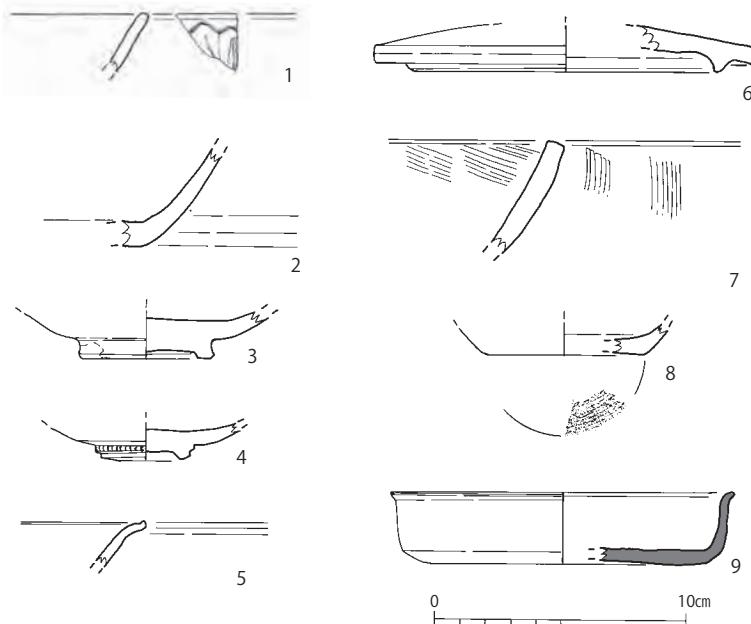
1～3は龍泉窯系青磁碗。

1は口縁部小片で、蓮弁を施すが退化した形態。破面に漆が遺存することから漆接土器とみられる。2は胴部下位の破片で、内外面とも無文。3は高台部の破片で、高台は露胎。高台径は5.4cmを測る。

4は白磁碗の高台部破片で、高台外面はケズリによる段を持つ。5は陶器の口縁部小片で、口縁部は水平気味に屈曲し、端部が小さく立つ。

皿であろうか。胎土は淡黄茶色で、透明釉を掛ける。

6・7は瓦器で、6は内面に断面三角形のかえりを付した壺蓋か。かえり径は12.0cmに復原した。色調は外面黒紫色で、内面は灰色を呈する。7は鉢の口縁部小片で、緩やかに内湾し、端部に面を持つ。8は土師器皿の底部小破片で、底部は糸切りによる。底径は6.3cmに復原した。9は須恵器坏で、口唇部は外方に小さく突出する。底部は平底で、回転ヘラケズリによる。器高2.8cmで、口径13.6cm、底径10.6cmに復原した。1・3・4・6・8・9は上層から出土している。



第61図 1号大溝出土土器・陶磁器実測図（1/3）

（5）杭列

調査区の南東隅部において5列検出した。遺構的には耕作土下の最上位の新期溝に伴うもので、護岸のための杭列と考えられる。

1号杭列（図版38-1・2、第62図）

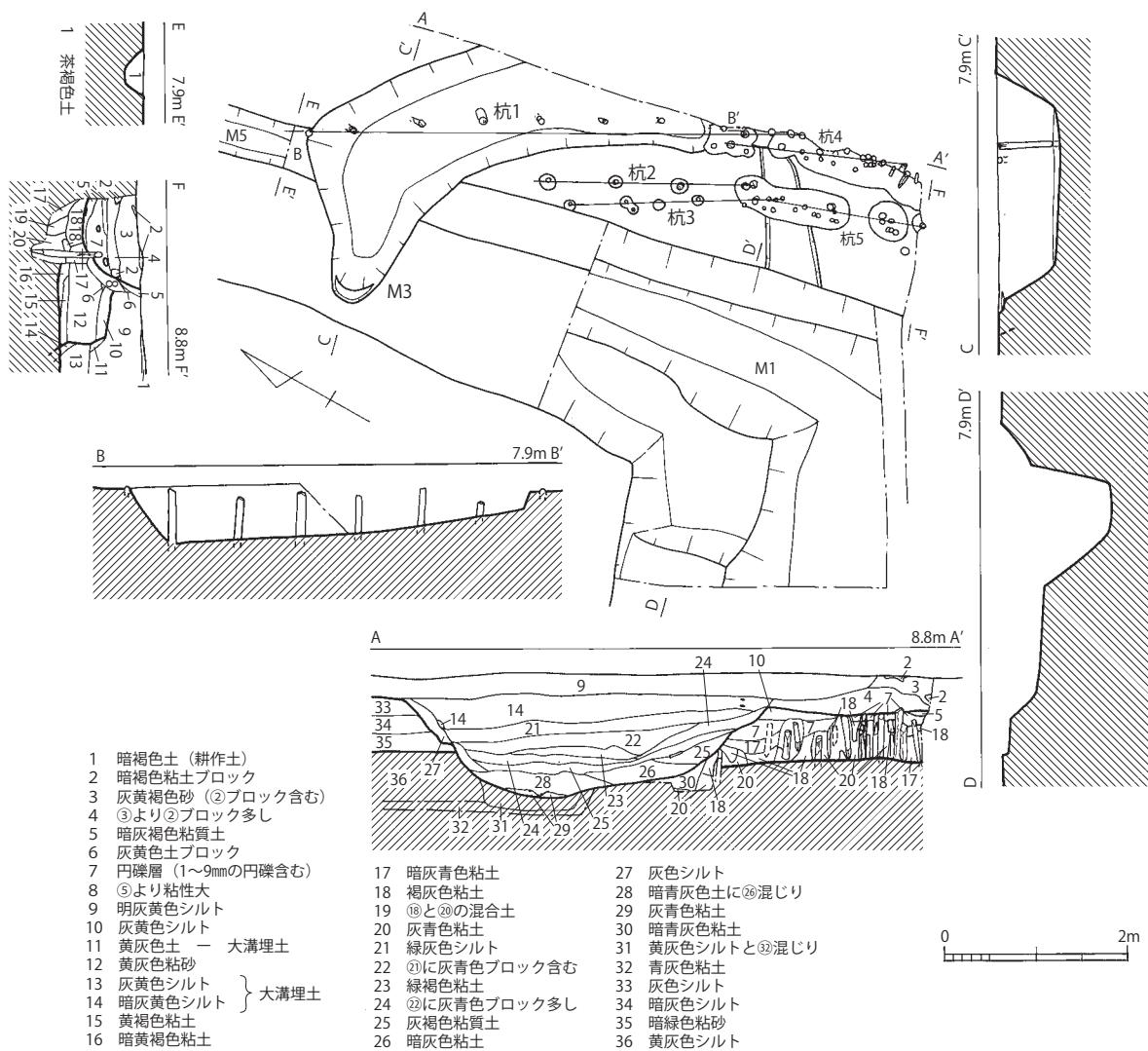
一番東側の杭列で、3号溝の埋土中に打ち込まれる。長さ5.3mの検出で、0.5～0.7mの間隔で打ち込み、都合11本を数えるが、南端は調査区外に伸びるか。杭の長さは80cm、径10cm程で、他の杭列の杭に比して大きめであった。杭列の方位は、北から西に28° 振っている。

2号杭列（図版38-1・2、第62図）

1号杭列の60cm西側に位置し、同杭列と並列して打ち込まれるが、3号溝以北には伸びていない。長さ2.2mで、0.7mの間隔を持って5本打ち込まれている。杭の太さは1号杭列とほぼ同じ。杭列の方位は、北から西に27° 振っている。

3号杭列（図版38-1・2、第62図）

2号杭列のすぐ西側に位置し、長さ2.3m分、7本余りを検出した。杭の間隔は0.6～0.8mで、径6cm程のやや小さめな杭を打ち込んでいる。杭列の方位は、北から西に30° 振っている。



第62図 杭列、3号溝土層実測図 (1/80)

4号杭列 (図版38-1・2、第62図)

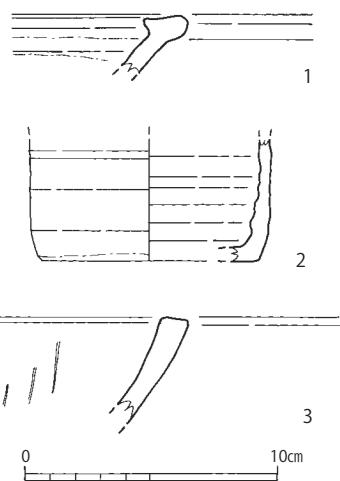
1号杭列と2号杭列の中間に位置し、南端は調査区外に伸びる。長さ2.1mで、基本0.4~0.5mの間隔で打ち込む。周囲にも小さな杭が数本あり、補強のためかと思われる。杭列の方位は、北から西に30°振っている。

5号杭列 (図版38-1・2、第62図)

4号杭列の0.6m西側に位置し、南端は調査区外に伸びる。検出長1.8mで、0.4~0.6mの間隔で打ち込んでいる。当杭列も周囲に小さな杭があり、補強のためか。杭列の方位は、北から西に30°振っている。

出土遺物 (第63図)

1は5号杭列に関わる上層溝最下位出土の陶器擂鉢で、口縁端部は内側に突出する。2・3は3号溝の埋土上位出土で、1号杭列に関わる遺物。2は陶器瓶の底部破片で、3は土師器擂鉢の口縁部小片。櫛目が3本見られる。



第63図 杭列出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

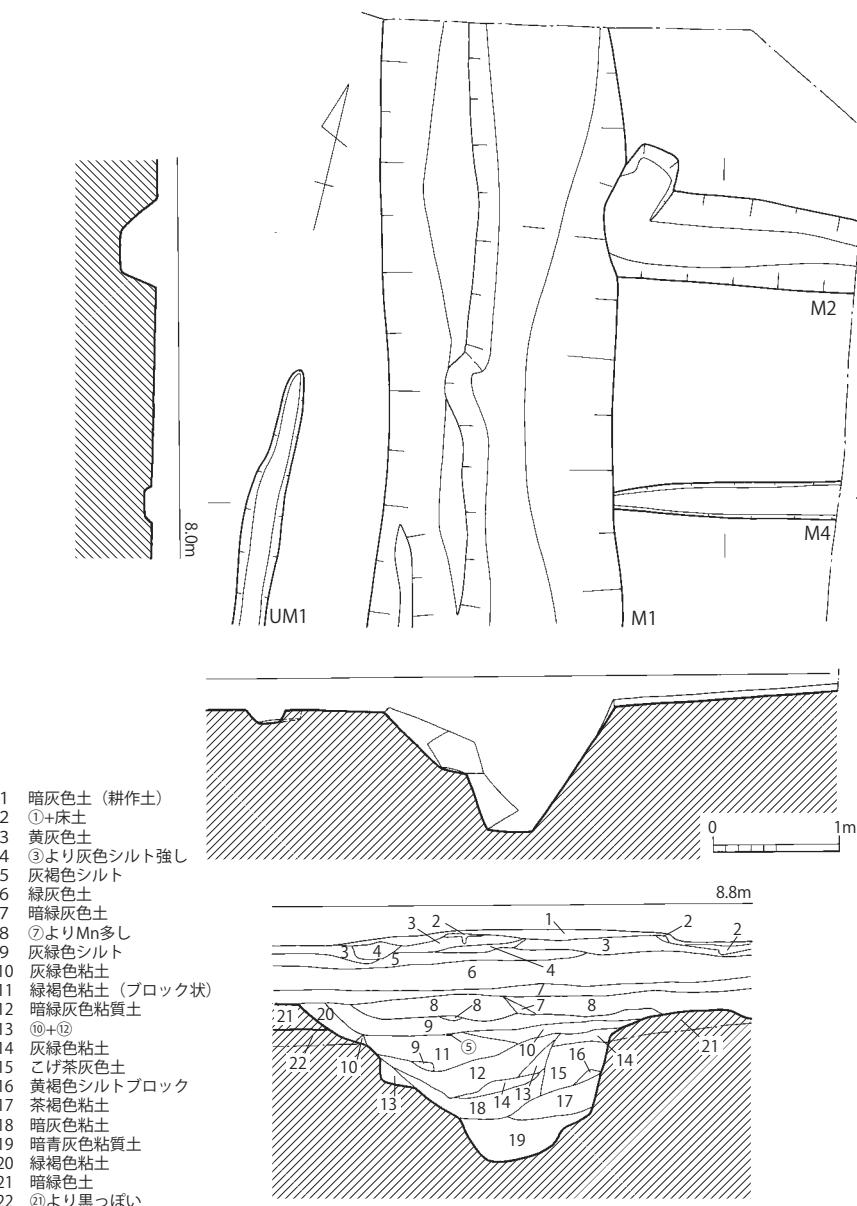
(6) 溝

調査区の全域に展開し、東西方向に走る溝及びL字形を呈する溝を畠溝と区別して番号を付した。合計16条検出した。

1号溝（図版37-1～3、第64図）

調査区の東端部を南北方向に走る溝で、17.5mを検出したが、北端は調査区外に伸び、南端部は1号大溝に接続する。2・4号溝を切り、3・5号溝に切られる。北端部での上面幅1.8m、底面幅0.9m、検出面からの深さ1.2mで、南側での上面幅2.15m、底面幅0.4～0.5m、検出面からの深さ1.1mを測り、底面は南側に傾斜する。また、西壁側には部分的にテラスを設けている。長軸方位は、北から西に12°振っている。埋土中からは、青磁・陶器・土師器、石鍋等が出土した。

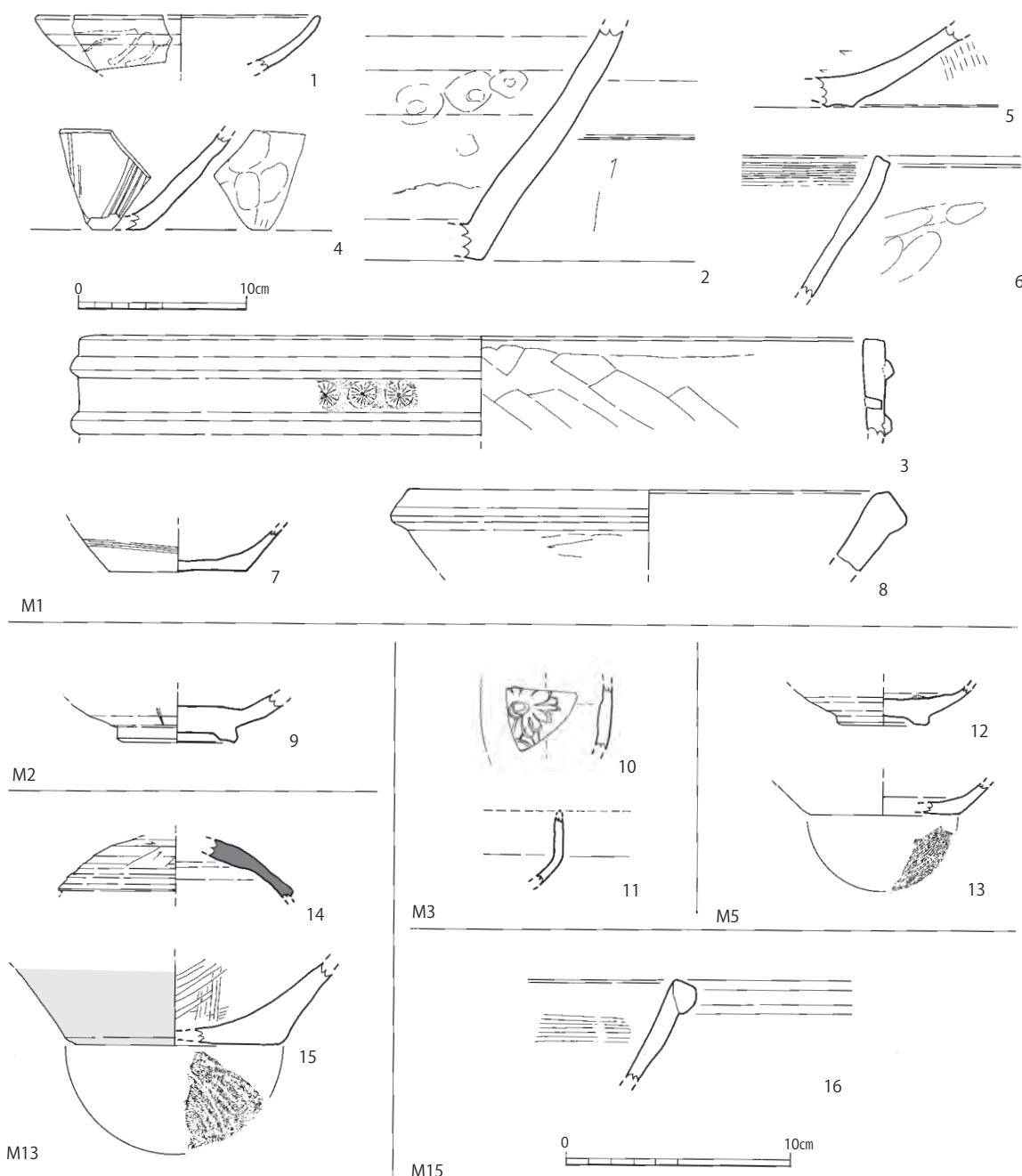
埋土上位は灰緑色シルト（第64図9層）、中程は暗緑灰色粘質土（同図12層）、下層は暗青灰色粘質土で、主として東側からの流入により埋没している。



第64図 1号溝北壁土層、2・4号溝実測図 (1/60)

出土遺物（第65図）

1・2は陶器、3は瓦器、4は瓦質土器。5は須恵質土器、6は土師質土器、7は土師器で、8が石鍋。1は皿の口縁部破片で、口唇部は丸く收める。内外面とも青緑色の釉を掛けるが、釉垂れしている。口径は12.7cmに復原した。2は甕の底部で、下位に沈線を施している。内面には指頭圧痕がみられる。3は火鉢の口縁部破片で、口縁端部直下とその下方に断面蒲鉾形の凸帯を貼付し、その間に菊花文のスタンプを押捺する。また、内面から貫通しない円孔を穿つ。内面は工具によるナデ。口径は48cmに復原した。4は擂鉢の底部破片で、内面に5条一単位の櫛目を施す。外面はユビオサエによる。5は須恵質捏ね鉢の底部破片で、内面はよく擦れている。6は鉢の口縁部破片で、端部に面を持つ。7は小皿の底部破片で、底部は糸切り。底径は6.0cmに復原した。8は石鍋の口縁部破片で、端部は三角形に突出する。外面には削痕と煤が見られる。



第65図 1～3・5・13・15号溝出土土器・陶磁器・石製品実測図 (1/3、3は1/4)

2号溝（図版34-1・2、37-1・38-1、第64図）

調査区の北東隅部に位置し、1号溝に切られる。東西方向の溝で、東側が調査区外に伸びるため長さ2.0m、幅0.7m、壁高0.26mの検出状況。埋土中から青磁が出土している。

出土遺物（第65図）

9は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、蓮弁の一部を留める。高台は低く、畳付から高台内は露胎。胎土は灰黄色で、緑を帯びた透明釉を施している。高台径は5.4cmに復原した。

3号溝（図版34-1・2、38-1、第62図）

調査区の南東部に位置する。北西側の先端部は1号溝を切り、南東部は調査区外にある。長軸4.3m、幅1.3m、壁高0.6mを測り、底面は北側に向かって傾斜している。1号杭列は当溝の埋没後に打ち込まれており、直接的な関係はない。埋土上層は1号大溝の上位堆積土と同じ暗灰黄色シルト（第62図14層）であり、埋土中からは陶磁器が出土している。

出土遺物（第65図）

10は染付の小碗破片で、胴部には青灰色で花文が描かれる。内面は露胎。11は陶器碗の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は屈曲部から直立する。明灰白色の胎に緑を帯びた透明釉を掛けた。また、内面は貫入が著しい。

4号溝（図版38-1、第64図）

2号溝の1.6m南側に並走して位置する。西端部は1号溝に切られ、東側は調査区外に伸びる。検出長1.78m、東端部幅0.3mで、壁高は5cmと浅い。埋土中から陶磁器小片が出土した。

5号溝（図版38-1、付図）

調査区の東端部に位置する。1号溝の埋没後に同溝の東壁側に掘削している。1号溝の北半部を掘り下げたため11m余りの検出長となったが、1号溝北壁土層図（第64図）では確認し得ておらず、そこまでは伸びていない。幅0.5~0.6m、壁高は0.2m程度で、陶器・土師器が出土した。

出土遺物（第65図）

12は陶器碗の底部破片で、高台は低い。見込に2箇所、畠付に3箇所の目跡が見られる。高台径は4.2cmに復原した。13は土師器皿で、底部は糸切りによる。復原底径は6.6cm。

6号溝（図版34-1・2、38-1、第66図）

調査区の東側で、1号溝の3m西側に位置する。北東側で別溝と重複するためT字形をなす。北東側の溝をM6a、南西側の溝をM6bとしておく。M6aは長さ2.6m、幅0.34mで、M6bは長さ3.06m、幅0.26mで、壁高はともに7cmと浅い。また、当溝の2m南西側に位置する9号溝は、規模・方位を等しくすることからM6bと同一の溝となる可能性を有する。長軸方位はM6aが北から西に52°振り、M6bは北から東に62°振り。埋土中からは弥生土器片が出土している。

7号溝（図版34-1・2、38-1、第66図）

6号溝と9号溝との間に位置し、8号溝と近接する。M6aとは並列にあるが、関係性は不明。

長さ4.16m、幅0.36mで、壁高は8cmと浅い。底面はほぼ水平で、長軸方位は北から西に45° 振っている。弥生土器小片が出土した。

8号溝（図版34-1・2、38-1、第66図）

調査区の中央やや東側に位置し、南西側は1号大溝に切られ、北東部はP3と重複する。検出長5.1m、最大幅0.56mで、当溝も壁高は8cmと浅い。底面はほぼ水平で、長軸方位は北から東に62° 振っており、M6bと軸を等しくする。埋土からは須恵質土器の鉢小片が出土した。

9号溝（図版34-1・2、37-1、第66図）

調査区の中央で、7号溝の1.3m西側に位置する。前述した如く、M6bの2.05m南西に位置する。長さ5.2m、最大幅0.55mで、壁高は6cmの遺存状態。底面は南西側に若干傾斜している。長軸方位は北から東に64° 振り、M6bの方方位とほぼ等しい。

10号溝（図版34-1、第67図）

調査区の南端中央に位置し、北側は13号溝に切られ、南側は調査区外に伸びるため長さ2.3m、幅0.53mの検出状況であった。底面は13号溝側に傾斜する。土師器甕の細片が出土した程度。

11号溝（図版36-1、第67図）

調査区の南端中央で、10号溝の1.2m西側に並列して位置する。北端側は13号溝に切られるが、それより北側には伸びない。検出長2.5m、最大幅0.46m、深さ0.1mで、南西側に屈曲する。長軸方位は北から東に27° 振る。弥生土器甕の小破片が出土した程度であった。

12号溝（第67図）

調査区の南端中央で、11号溝の1.3m西側に位置する。北側を1号焼土坑・1号大溝に切られ、南側は13号溝に切られるため長さ0.9m、幅0.4mを検出した程度で、詳細は不明。埋土中からは弥生土器壺の小破片が出土している。

13号溝（図版34-1、第67図）

調査区の南端中央部に位置し、10・11・12号溝を切り、1号大溝に北東側先端を切られる。長さ9.4m、幅0.64mで、深さは25cmを測る。埋土は炭・焼土塊が混じる黒灰色土で、弥生土器甕の小破片が出土したにすぎない。炭・焼土塊が出土していることから1号焼土坑に関連するか。

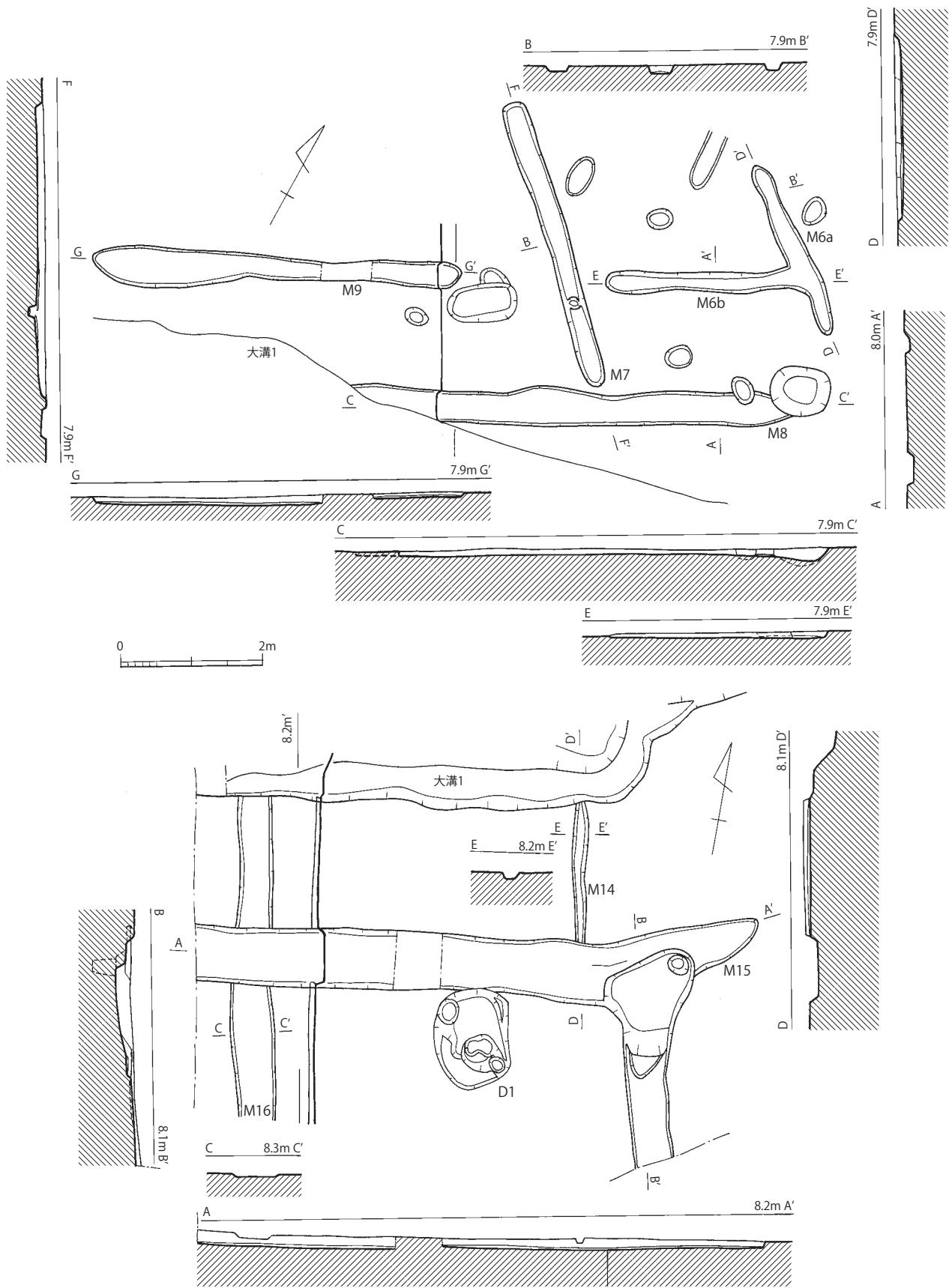
出土遺物（第65図）

14は須恵器壺蓋の天井部破片で、内面ナデ、外面は回転ヘラケズリによる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。15は弥生土器甕の底部破片で、底部は平底をなす。外面は丹塗り。また、底部外面には板状圧痕が見られる。底径は9.6cmに復原した。

14号溝（図版34-1、第66図）

調査区の南西隅部に位置し、両端を1号大溝・15号溝に切られる。残存長2.0m、幅0.23m、壁高

は8cmを測る。底面はほぼ水平で、長軸方位は、北から西に11° 振っている。埋土中からは弥生土器甕と土師器甕の小片が出土している。



第66図 6~9・14~16号溝実測図 (1/80)

15号溝（図版34-1、第66図）

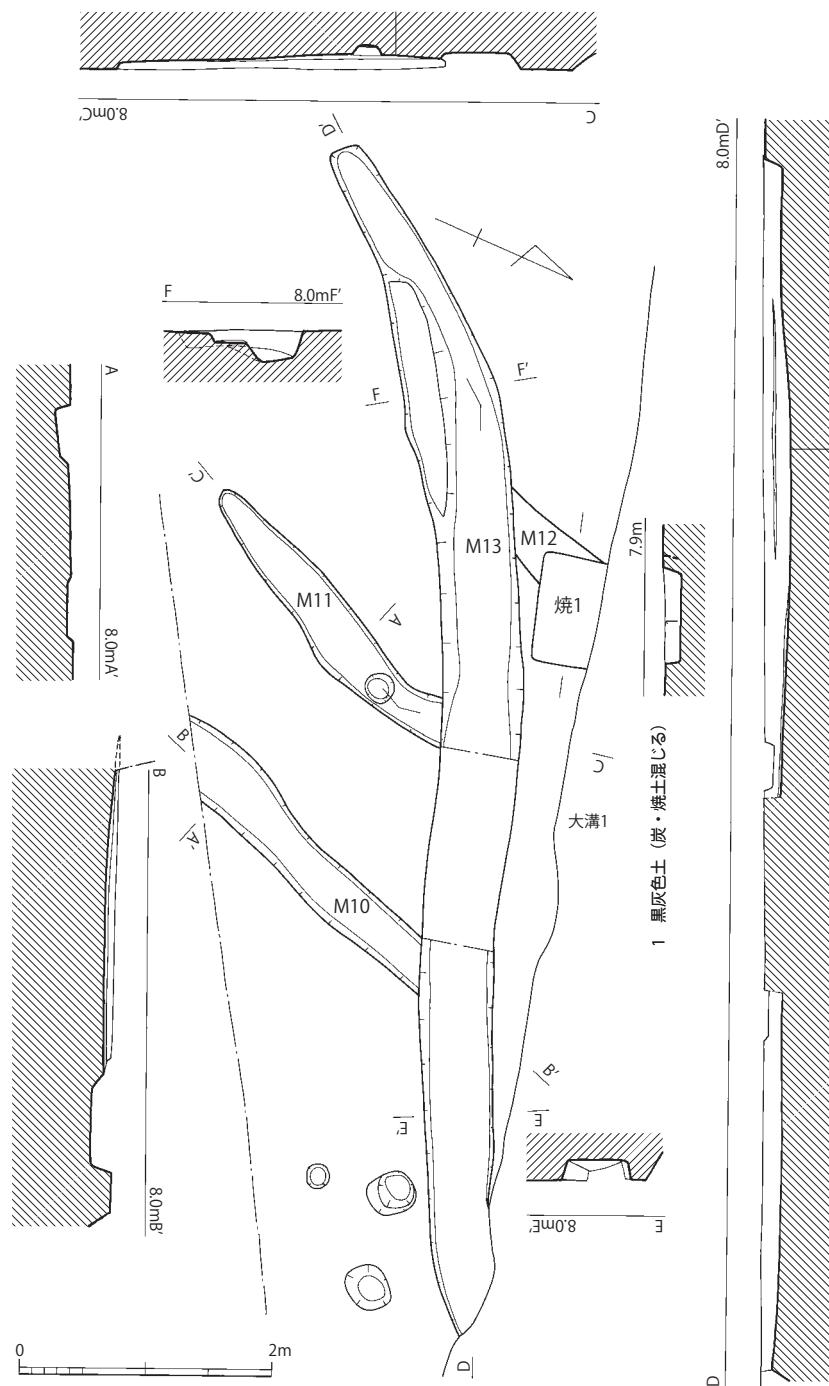
調査区の南西隅部に位置し、14・16号溝を切り、1号土坑と接する。平面はL字形を呈し、西側・南側は調査区外に伸びる。東西溝の検出長7.9m、中央での幅0.83m、壁高0.15mで、南北溝の検出長2.8m、南端での幅0.54mで、壁高は6cmと浅い。東西溝は中央に向かって低くなり、南北溝は北側に向かって下がる。南北溝の北側は一段深くなつており、本来別々の溝であったか。

出土遺物（第65図）

16は土師質土器で、鍋の口縁部破片。口縁端部に断面台形の粘土帯を貼付する。外面は煤が遺存する。

16号溝（図版34-1、第66図）

調査区の南西隅部に位置し、北側を1号大溝に、中程を15号溝に、南側を1号土壙墓に切られ、さらに調査区外に伸びる。検出長7.4m、最大幅0.54mで、壁高6cmを測る。底面は1号大溝側にやや傾斜する。長軸方位は北から西に10°振っている。



第67図 10～13号溝、1号焼土坑実測図 (1/60)

17号溝（図版34-1・2、第68図）

調査区の東側で、2号土坑のすぐ北西側に位置し、6号畝溝の南端を切る。L字形を呈し、東西長1.96m、幅0.52mで、南北長1.8m、幅0.28mで、壁高は何れも6cm。南北方向の溝は6号畝溝と並列することから畝溝であった可能性が考えられる。

(7) 敵 溝

調査区の北半部において、1m余りの間隔で南北方向に走る小溝を敵溝として報告する。都合23号まで番号を付した。

1号敵溝（図版34-1・2、37-1、付図）

調査区の東側で、1号溝の1m西側に位置する。長さ9.64m、幅0.4mで、壁高は7cmと浅い。底面は若干北側に下がる。長軸方位は、北から西に8°振っている。

出土遺物（第69図）

1は鞠花型押による白磁の小皿。口唇部は平坦面を持つ。2・3は陶器。2は糸切りによる底部破片で、皿になるか。3は捏ね鉢の底部破片で、高台を施す。外面は釉剥ぎを施し、沈線状の文様としている。内面は露胎。

2号敵溝（図版34-1・2、37-1、第68図）

調査区の東側で、1号敵溝の1.7m西側に並列して位置する。大きく四つに分かれるが、全長は8.8mで、幅は25~27cm、壁高は10cm遺存する。長軸方位は、北から西に8°振っている。遺物の出土はなかった。

3号敵溝（図版34-1・2、37-1、第68図）

調査区の東側で、2号敵溝の0.5m西側に並列して位置する。当敵溝も三つに分かれるが、全長は5.3mを測る。幅は20cm程で、壁高は7cmの遺存状態であった。長軸方位は、北から西に6°振っている。遺物の出土はなかった。

4号敵溝（図版34-1・2、37-1、第68図）

調査区の東側で、3号敵溝南端溝の0.7m西側に並列して位置する。長さ2.35mを測るが、2号土坑のすぐ東に位置する南北方向の小溝も当敵溝の延長部となる可能性があり、そこまで含めると全長6.4mとなる。なお、両者間の間隔は2.2mである。幅は0.25~0.35m。両小溝の長軸方位は、北から西に10°振っている。当敵溝も遺物の出土はなかった。

5号敵溝（図版34-1・2、37-1、第70図）

調査区の東側で、3号敵溝の2.7m西側に並列して位置する。長さ2.3m、幅0.25mで、南端が一段深くなり、深さ12cmを測る。長軸方位は北から西に10°振る。

出土遺物（第69図）

4は高壊の脚裾部破片で、端部に面を持つ。内外面ともハケ目後ヨコナデで、脚裾径は18.0cmに復原した。

6号敵溝（図版34-1・2、37-1、第68図）

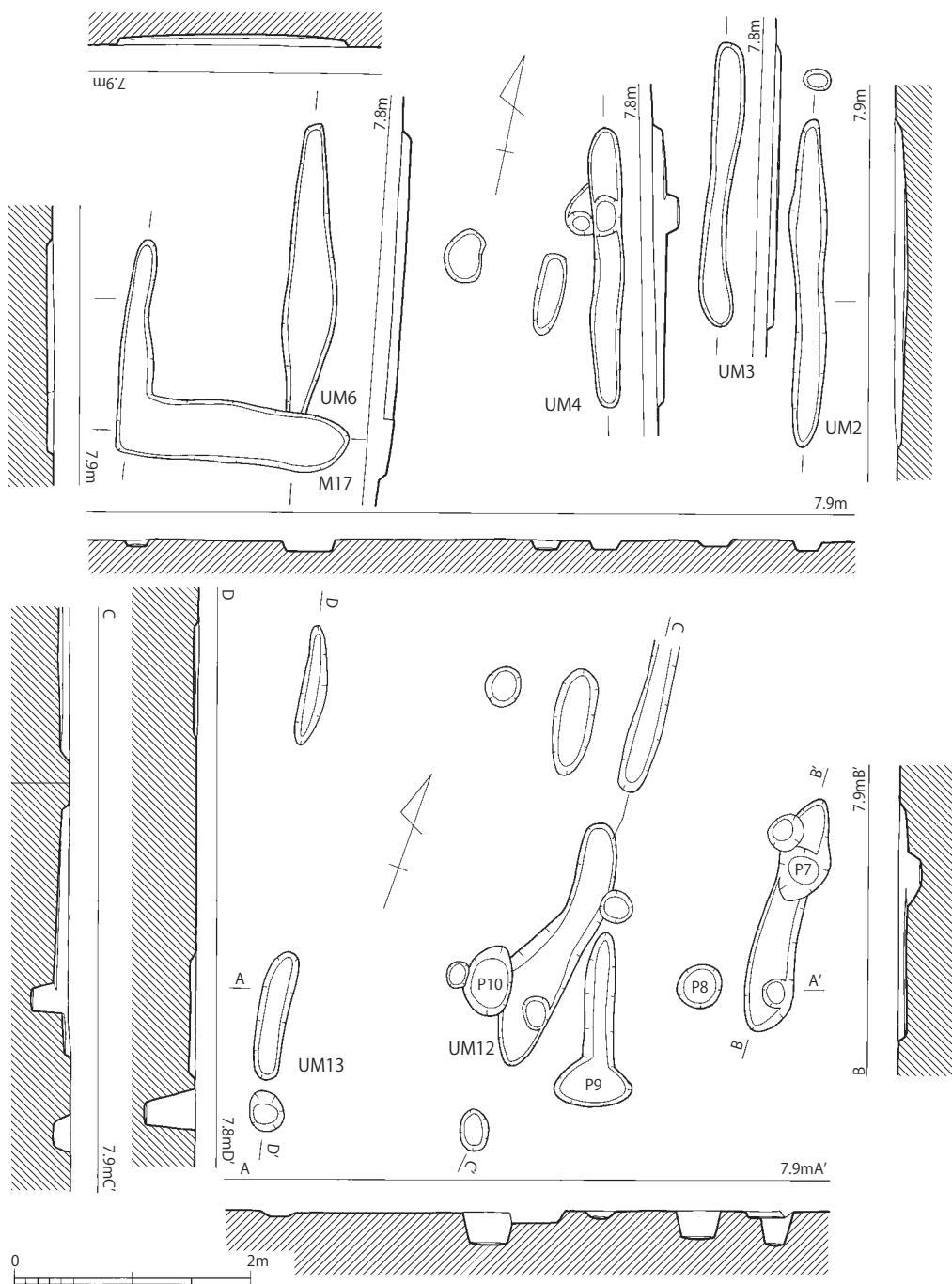
調査区の東側で、17号溝に切られてその北側に位置する。長軸2.43m、中央幅0.45mで、壁高10cmを測る。17号溝の北側溝と並列する敵溝の可能性がある。

出土遺物（第69図）

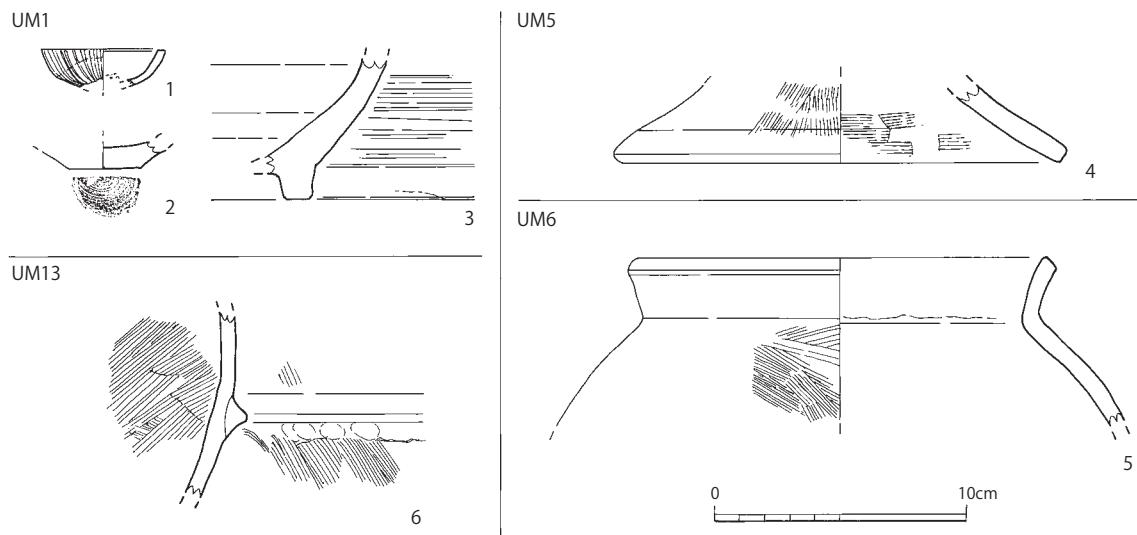
5は弥生土器で、「く」字形口縁を呈する。頸部の締まりは良く、短頸壺とすべきか。口径は17.0cmに復原した。内面ナデ、外面ハケ目調整による。また、外面は2次火熱により黒化する。

7号畝溝（図版34-1・2、第70図）

調査区の北東部で、5号畝溝の0.7m西側に位置する。北半部は調査区外に伸びるため長さ1.45m、北端幅0.45mの検出状況。遺物の出土も無く、詳細は不明。



第68図 17号溝、2～4・6・12・13号畝溝実測図（1/60）



第69図 1・5・6・13号畝溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

8号畝溝（図版34-1・2、第70図）

調査区の北側中央で、7号畝溝の2.1m西側に並走して位置する。北側が調査区外に伸びるので、検出長1.2m、北端幅0.25m、壁高0.1mを測る程度。遺物の出土は無く、詳細は不明。

9号畝溝（図版34-1・2、第70図）

調査区の北側中央で、8号畝溝の1.5m西側に並走して位置する。北側は調査区外にあり、南北二つの溝に分かれる。北側溝は長さ2.9m以上、幅0.37mで、南側溝は長さ2.56m、幅0.26mを測る。両者の間隔は0.2m空くが、全体の長さは5.7mで、壁高は5～7cmと浅い。長軸方位は北から西に18°振っている。両方の溝からは、弥生土器甕片が出土した。

10号畝溝（図版34-1・2、第70図）

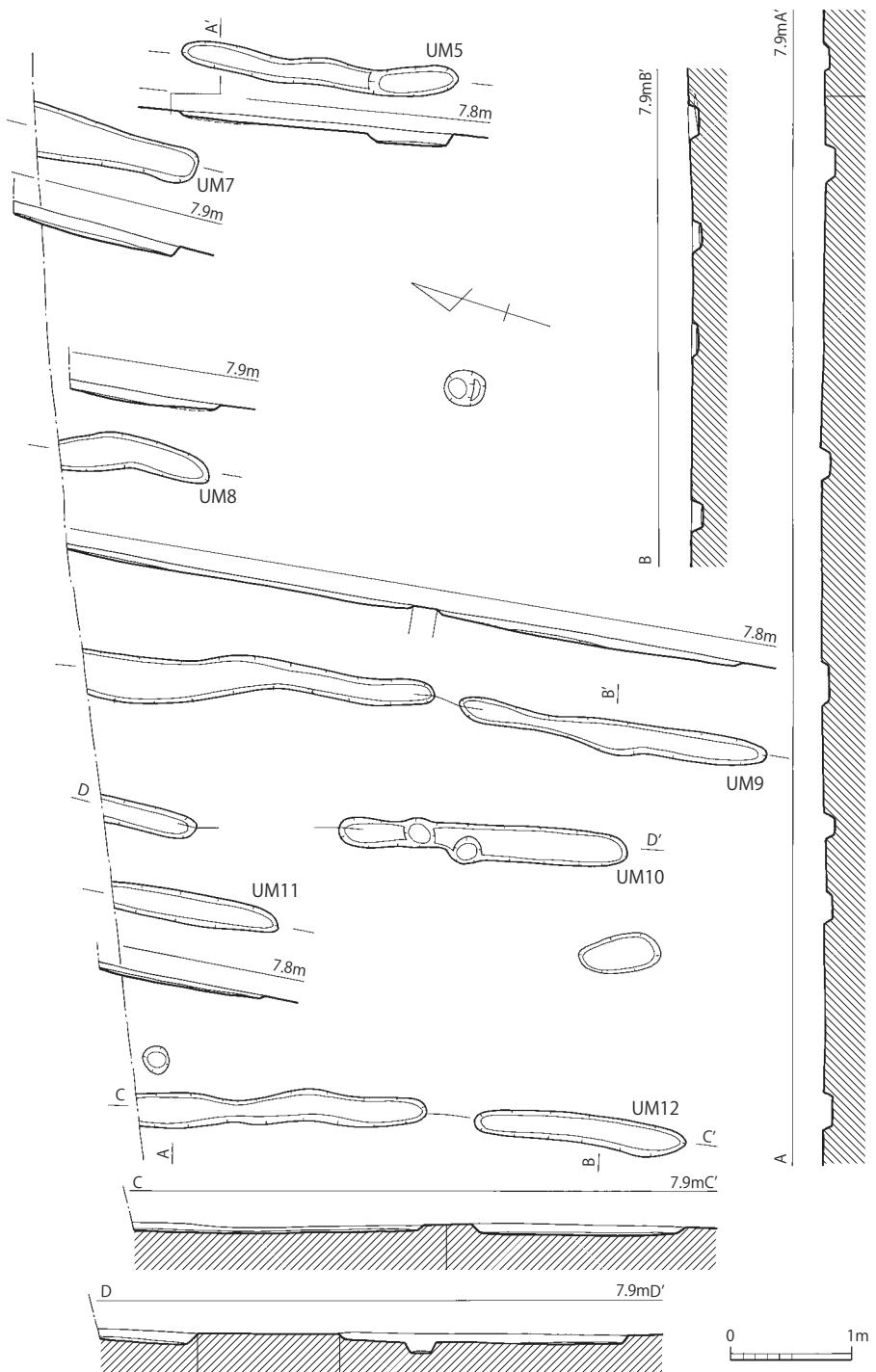
調査区の北側中央で、9号畝溝の0.9m西側に並走して位置する。当畝溝も北側は調査区外にあり、南北二つの溝に分かれる。北側溝は長さ1.3m以上、幅0.24mで、南側溝は長さ2.55m、幅0.25～0.3mを測る。両者の間隔は1.2m程空くが、全体の長さは4.35mで、壁高は5～7cmと浅い。遺物の出土は無かった。

11号畝溝（図版34-1・2、第70図）

調査区の北側中央で、10号畝溝の0.4m西側に位置する。北半部が調査区外に伸びるため長さ1.4m、北端幅0.22mの検出状況。遺物の出土も無く、詳細は不明。

12号畝溝（図版34-1・2、第68・70図）

調査区の北側中央で、11号溝の1.4m西側に並走して位置する。北側は調査区外にあり、四つの小溝に途切れ、南端の溝は左右に分かれている。全体の長さは11.5mを測り、北側に向かって緩くカーブしている。南端の小溝から弥生土器の甕小片が出土した。



第70図 5・7~12号畝溝実測図 (1/60)

13号畝溝 (図版34-1、第68図)

調査区の中央やや西寄りで、1号掘立柱建物の1.5m南側に位置する。南北二つの小溝に分かれるが、一連の畝溝とした。北側溝は長さ1.0m、幅0.2mで、南側溝は長さ1.1m、幅0.28mで、両者の間隔は1.75m空くが、全体として38mの長さを測る。長軸方位は北から西に13° 振っている。

出土遺物 (第69図)

6は弥生土器の胴部破片で、壺になるか。胴部には断面三角形の凸帯を貼付している。内外面ともハケ目調整による。

14号畝溝（図版35-1、第56図）

調査区の北側で、1号掘立柱建物の北西隅柱穴と重複して位置するが、建物が先行するものとみられる。長さ2.23m、幅0.22mで、北側が膨らむのは建物掘方と重複しているためである。

15号畝溝（図版35-1、第56図）

14号畝溝の0.5m西側に並走して位置する。建物掘方とは直接切り合わないが、当畝溝が後出するとみられる。長さ1.18m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。長軸方位は北から西に7°振る。

16号畝溝（図版34-1・2、第71図）

16～20号畝溝は、調査区の北西部に位置する一群。16号畝溝は北西畝溝群の最も東に位置し、三つの小溝に分かれる。全体の長さは5.7mで、幅は25～30cmで、壁高は5cm程の高さ。

17号畝溝（図版34-1・2、第71図）

16号溝の0.7m西側に並走して位置する。当畝溝も四つの小溝に分かれるが、途切れる間隔は0.2～0.7mで、全体としては11m程の長さ。北から2番目の中溝が最も長く、長さ4.25mで、幅0.37mを測る。埋土中からは、弥生土器甕の破片が出土した程度。

18号畝溝（図版34-1、第71図）

17号溝の1.3m西側に並走する畝溝で、三つに途切れる。真ん中の小溝が最も長く、長さ4.3m、幅0.2～0.55mを測る。途中の膨らみは、掘り直しによるものか。南端の中溝とは0.65mの間隔が空く。何れの中溝からも遺物は出土しなかった。

19号畝溝（図版34-1、第71図）

18号畝溝のすぐ西側に位置する二つの小溝を19号畝溝とした。二つの小溝が接し、全体としての長さは2.1mを測る。当溝からの出土遺物は無かった。

20号畝溝（図版34-1、第71図）

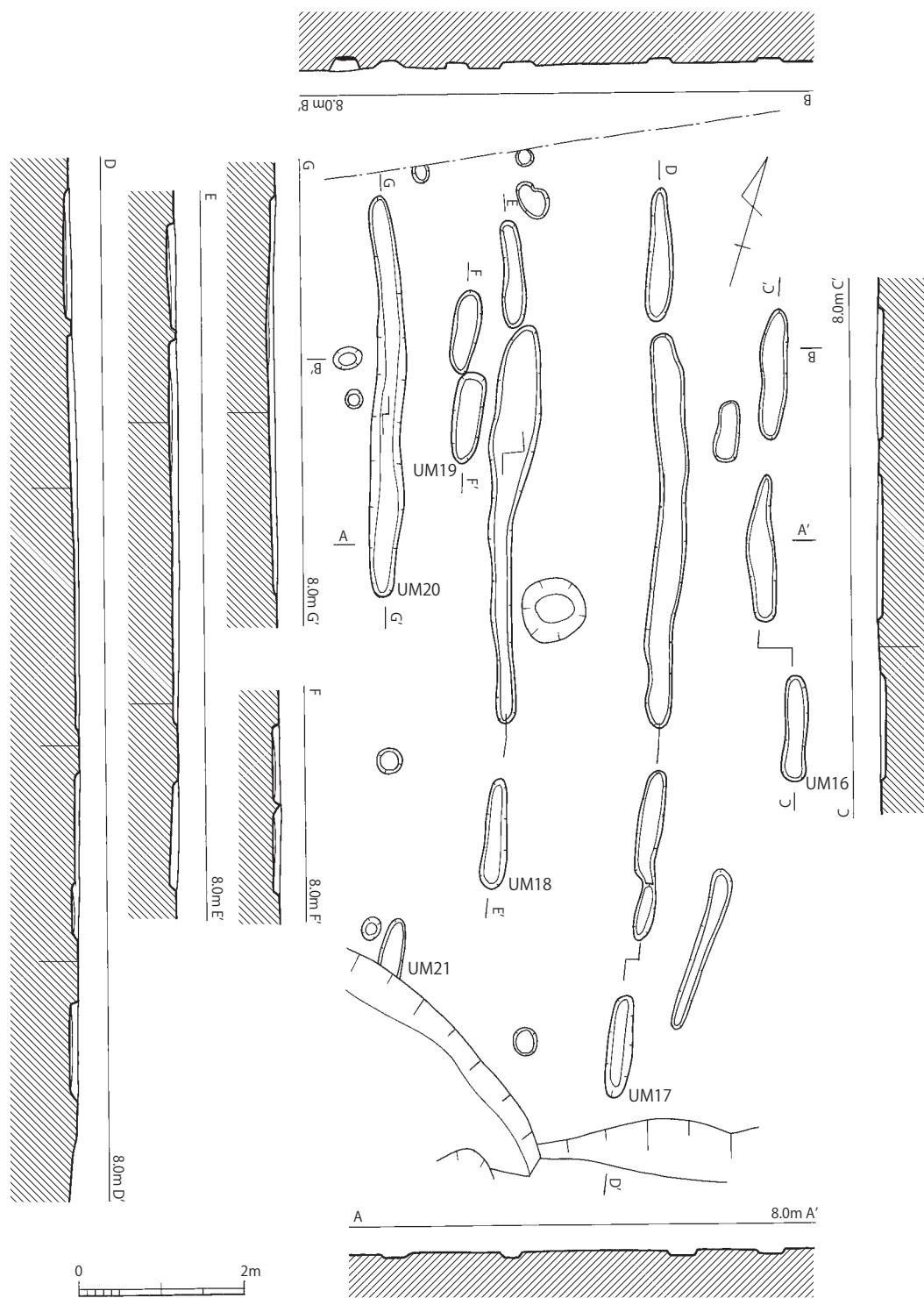
北西畝溝群の最も西で、19号畝溝の0.5m西側に位置する。長さ4.8m、幅0.4mで、壁高は0.1mを測り、北西側にやや湾曲している。長軸方位は、北から西に16°振る。埋土中からは弥生土器甕の小片が出土した程度。

21号畝溝（図版34-1、第71・72図）

調査区の西側に位置する。1号大溝のテラスに南側を切られるため長さ0.65m、幅は0.28mの遺存状況で、詳細は不明。遺物は出土しなかった。

22号畝溝（図版34-1、第72図）

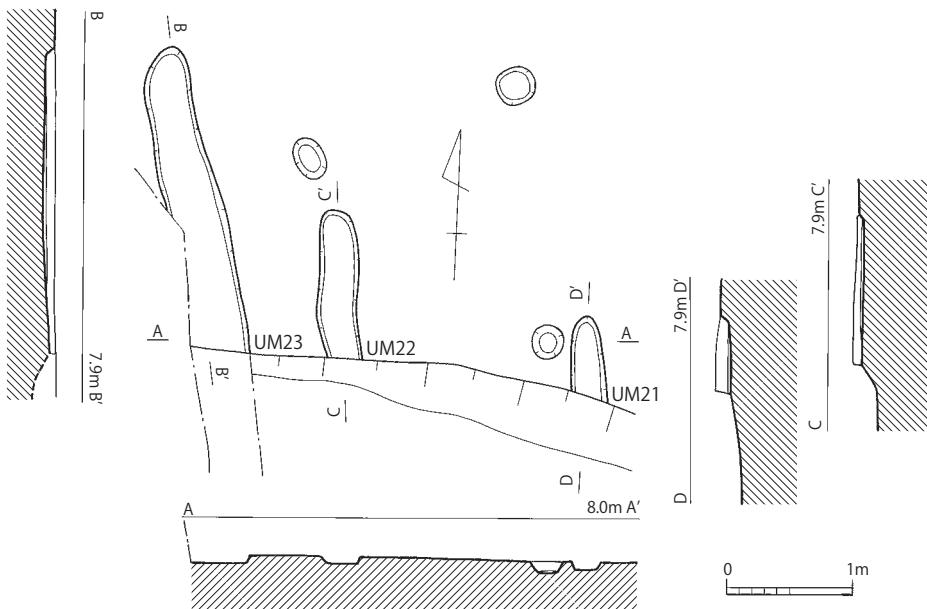
21号畝溝の1.7m西側に位置し、1号大溝のテラスに南側を切られるため長さ1.16m、幅0.32mの遺存状況で、詳細は不明。当溝も遺物の出土は無かった。



第71図 16～21号畠溝実測図 (1/80)

23号畠溝 (図版34-1、第72図)

調査区の西端部で、22号畠溝の0.5m西側に位置する。当畠溝も1号大溝のテラスに南側を切られるため長さ2.3m、幅0.45mの遺存状況。なお、調査区の南西端部で検出した16号溝とは、方位・規模を等しくすることから同一溝になるか。埋土中からは弥生土器甕の小片が出土した。



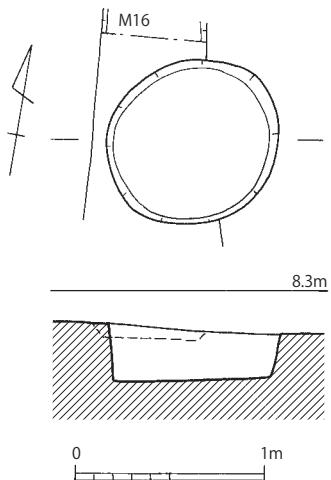
第72図 21～23号畝溝実測図 (1/60)

(8) 土壙墓

調査区の南西隅部で1基のみ検出した。

1号墓 (図版35-3・4、第73図)

調査区の南西隅部に位置し、16号溝を切っている。墓壙は径0.9mの円形を呈し、深さは0.4mを測る。埋土は暗灰褐色土で、墓壙の北側から人骨とおぼしき骨が出土している。他は弥生土器片が出土した程度で、埋葬時期は不詳。



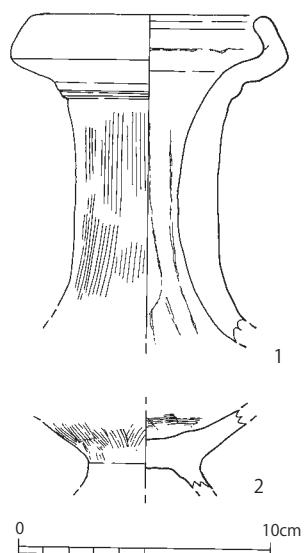
第73図 1号土壙墓実測図 (1/40)

(9) その他出土の遺物 (図版38-4、第74図)

遺構検出時及び土層出土の土器をここで紹介する。

1は遺構検出時出土の弥生土器。袋状口縁壺の口頸部破片で、口縁部は内側に屈曲する。口縁部直下に断面M字形の凸帯を施す。外面はハケ目で、内面に絞り痕を留める。口径は11.0cmを測る。

2は北西端部の緑褐色土出土の弥生土器。脚付甕の底部破片で、脚部は「ハ」字形に開く。内外面にハケ目を留める。



第74図 検出時出土土器実測図 (1/3)

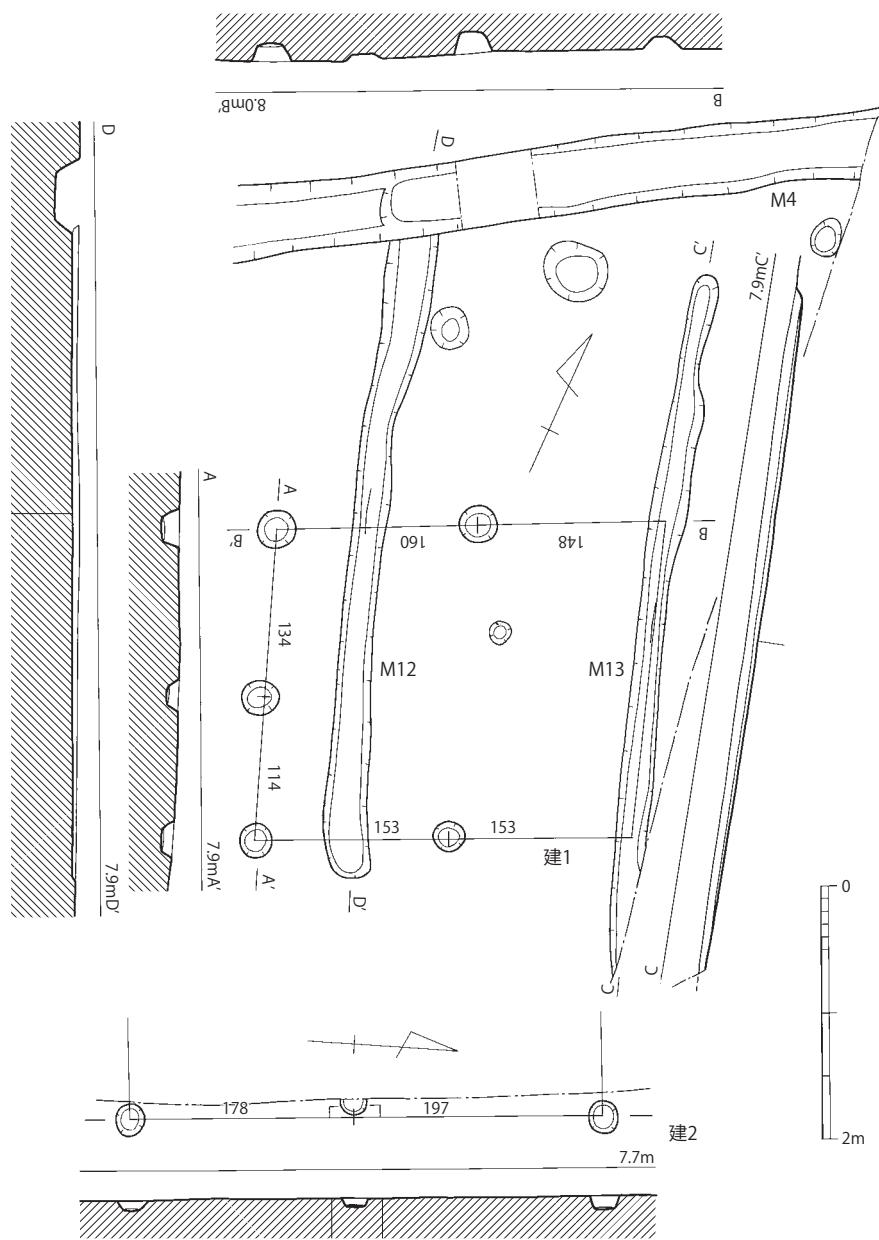
5 III区調査地の遺構と遺物

III区調査地は、II区調査地の東限となる民家への進入路を挟んだ東側にあたる。調査予定地の東端側には水路と耕作地に侵入するための農道が存在したため、水路を調査区の東限とした。既に表土の大半が持ち出されていたが、バックホーによる掘削土はII区南端に設けた仮設路を利用して既調査地であるI区東側調査地に搬出し、仮置きした。

調査区内には溝が縦横に走り、狭い調査区ではあったが、時期不詳の掘立柱建物2棟、土坑、区画溝、東西溝、畝溝等を検出した。

(1) 掘立柱建物

調査区の東西両端において2棟検出した。



第75図 1・2号掘立柱建物、4・12・13号溝実測図 (1/60)

1号掘立柱建物（図版41-1、第75図）

調査区の南東隅部に位置し、12・13号溝と切り合い関係にあるが、当建物が先行するとみられる。柱穴が13号溝と重複するため現状で桁行2間（3.08m）であるが、桁行は東側に伸びる可能性もある。梁行は2間で、柱間は1.14m・1.34mを測る。柱穴は30cm前後の円形を呈し、深さは15cm程度の遺存状況であった。梁行方位は北から西に20°振っている。柱穴からの出土遺物は無く、時期は不詳。

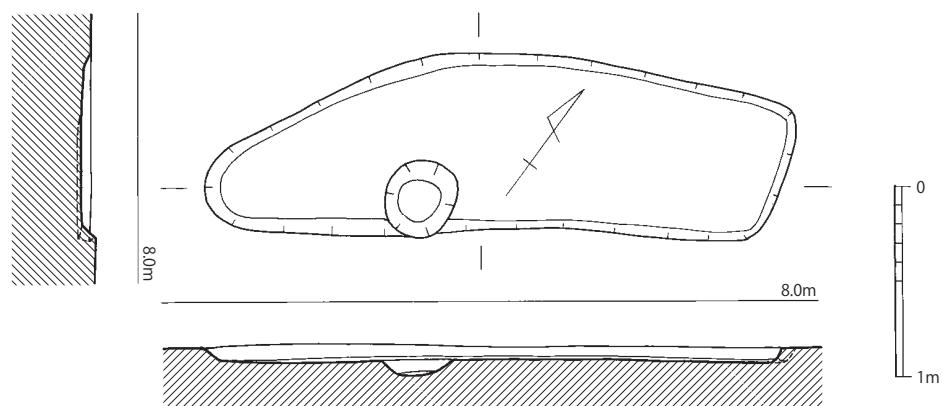
2号掘立柱建物（第75図）

調査区の南西隅部に位置する。南北方向に並ぶ柱穴を一応建物としたが、大半が調査区外にあるため詳細は不明。柱穴は径25cm前後の円形を呈し、柱間は北から1.97m、1.78mを測る。柱穴からの出土遺物は無く、時期不詳。

（2）土 坑

1号土坑（図版40-1・2、第76図）

調査区の東側で、4号溝の1.2m北側に単独で位置する。平面は舟形を呈し、長さ3.1m、幅0.95mを測る。底面は水平で、壁高は5cmの遺存状態であった。長軸方位は北から東に52°振っている。当土坑から遺物は出土していないが、南側の重複するピットからは弥生土器片が出土している。



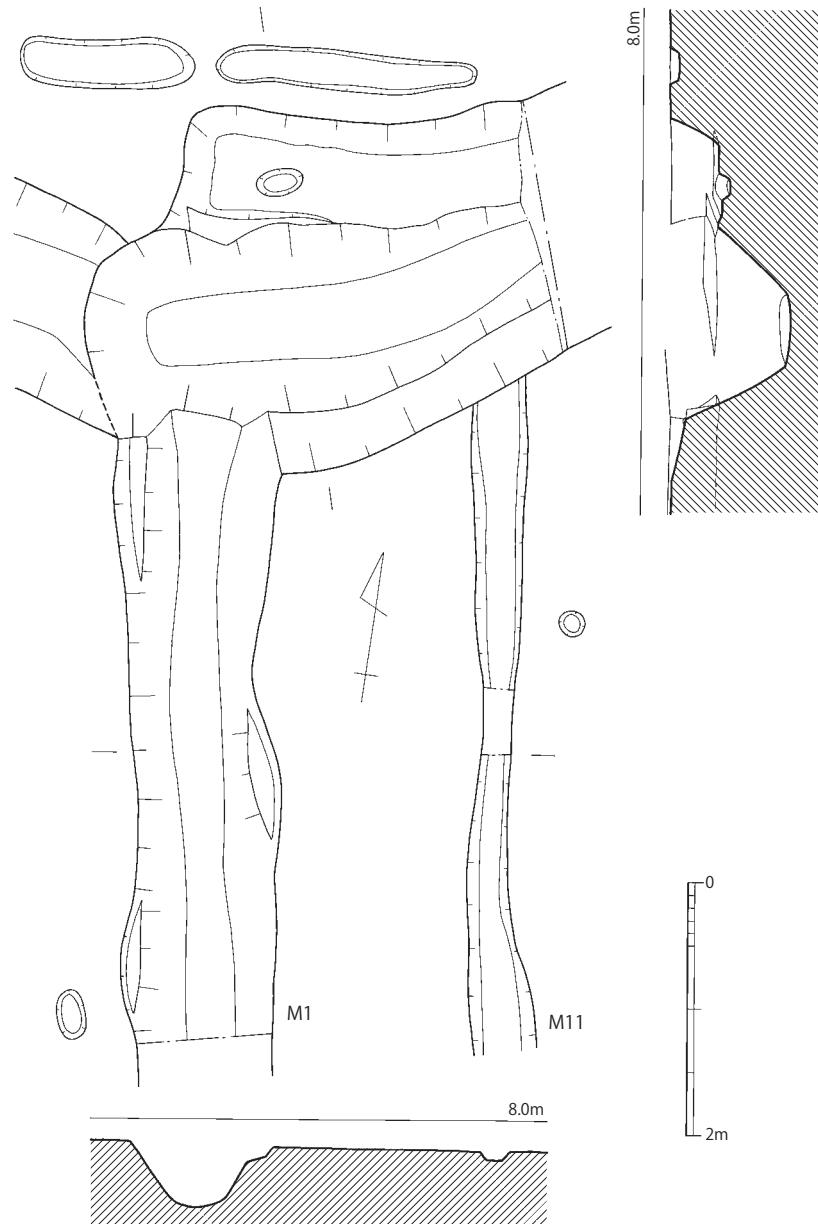
第76図 1号土坑実測図（1/40）

（3）区画溝

調査区の北側で2条（2・3号溝）、東側で1条（1号溝）の計3条検出した。

1号溝（図版40-1・2、第77図）

調査区の中央から東側にかけて位置し、11号溝の北端部を切っている。検出当初は、1号溝と2号溝とは別遺構と捉えていたが、掘削を進めていく過程で両者は陸橋部で繋がり、連続する溝であることが判明した。便宜上、東側の溝を1号溝、西側の東西溝を2号溝とした。第77図は1号溝の屈曲部付近を図示したもので、東側及び南側は調査区外に伸び、東西長9.0m、南北長15.5m分を検出した。東端部での幅1.5m、深さ0.6mで、南端部での幅1.0m、深さ0.5mで、溝底は南側に向かって下がっている。埋土中からは須恵器・土師器・土師質土器が出土した。



第77図 1・11号溝実測図 (1/60)

出土遺物（第80図）

1～6は土師質土器、7～9は土師器、10は須恵器。1・2は鍋で、ともに口縁端部に粘土帯を貼付し、1は断面蒲鉾形、2は三角形を呈する。1・2とも内面調整はハケ目によるが、1のハケ目は15～16条/cmと細かい。両者とも煤が付着する。3は片口の鍋で、口縁端部に面を持つ。外面には煤が付着する。4は胴部破片で、外面に煤が付着することから鍋になろう。5は擂鉢の底部破片で、5本一単位の櫛目を施す。外面には指頭圧痕が見られる。6は甕或いは鉢の底部小片で、外底面には離れ砂が付くことから素焼きの陶器かも知れない。

7～9は小皿の底部破片で、何れも切り離しは糸切り。7・8の口縁部は斜め上方に開く。7は器高3.2cmで、口径は9.6cm、底径は4.7cmに復原した。10は肉厚の胴下半部破片。大きさからして壺になろう。外面は格子タタキ目で、内面には細かいハケ目が見られる。

2号溝（図版40-1・2、第78図）

調査区の北側を東西方向に走る溝で、1号溝とは陸橋部で接続する。溝の西側は調査区外となる。陸橋部外側までの長さ15.0mで、陸橋部での上面幅1.76m、底面幅0.32m、壁高1.0mで、西端部での上面幅1.78m、底面幅0.3m、壁高1.06mで、底面はほぼ水平であった。陸橋部は長さ1.35m、幅0.63mで、上面までの高さ0.3mを測る。

西端部の堆積土は、最上層が暗緑褐色土（第78図⑤層）で、上層が焦げ茶色土（同⑥層）、中層が暗灰色粘質土+⑥層、下層が暗灰色粘質土（同⑩層）、最下層が暗灰青色粘土であった。

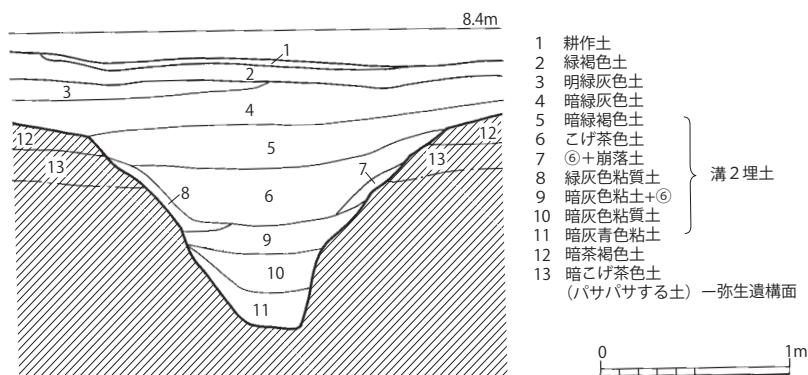
埋土中からは青磁・土師質土器、すり石等が出土している。

出土遺物（第80図）

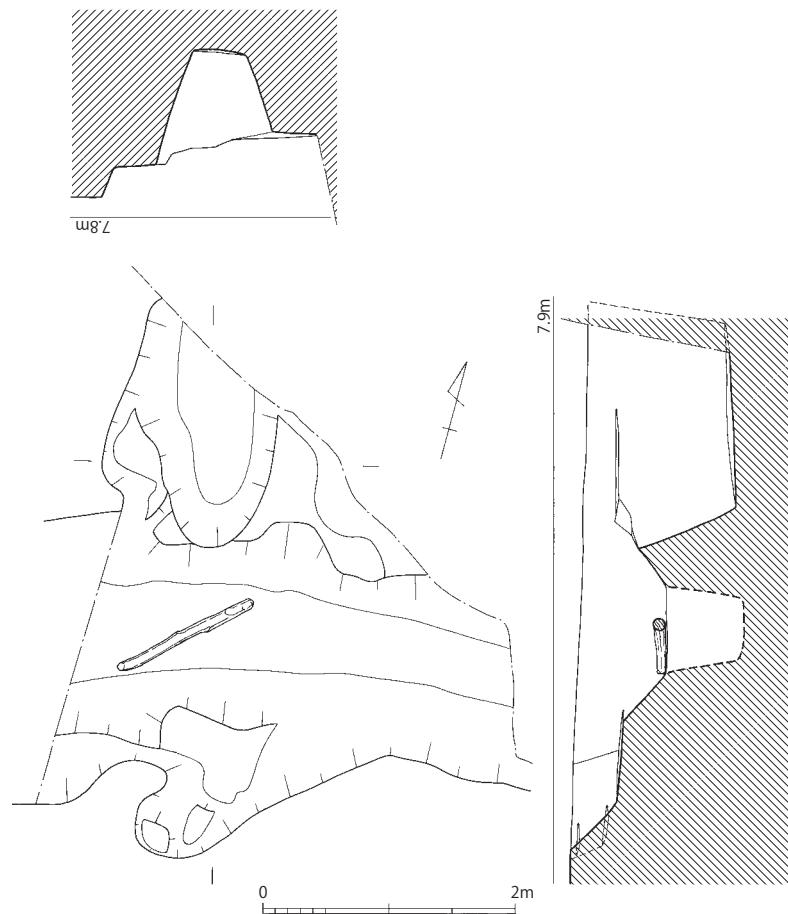
11は青磁碗の口縁部小片で、口唇部は肥厚する。外面にはヘラ先で模様が描かれる。胎土は灰白色で、緑色を帯びた透明釉を施す。口径は13.8cmに復原した。12は土師質鍋の口縁部破片で、口縁端部に蒲鉾形の粘土帶を貼付する。内面は横方向のハケ目による。口径は33.0cmに復原した。外面には煤が厚く付着している。13は土師質の擂鉢で、内面には4本一単位の櫛目を施す。14は土師器皿の底部破片で、口縁端部を欠く。切り離しは糸切りによる。底径は8.4cmに復原した。

3号溝（図版41-2・4、第79図）

調査区の北端部を東西方向に走る溝で、2号溝の2m北側に並走して位置する。東西両端部

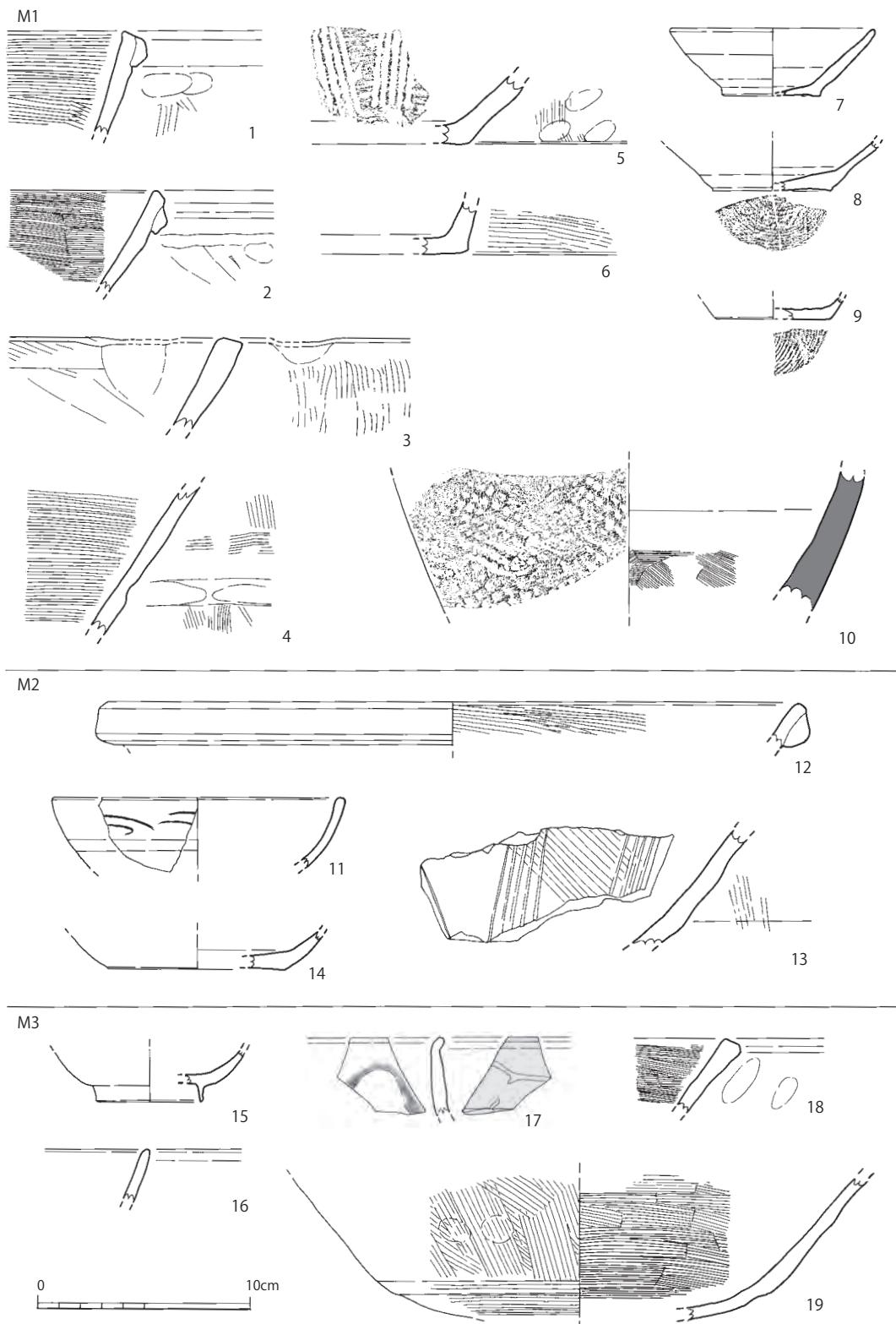


第78図 2号溝西壁土層実測図 (1/40)



第79図 3号溝東端部実測図 (1/60)

とも調査区外に伸びるため検出長は24mに過ぎない。また、調査期間の制約上、完掘には至らなかった。東側での上面幅2.3m、底面幅0.5m、壁高0.65mで、西側での上面幅2.3m、底面幅0.8m、壁高0.7mで、溝底は西側に若干傾斜するか。なお、溝の東端側の埋土中位から杭が出土しており、その北側は土坑状に一段深くなっていた。



第80図 1～3号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

出土遺物（第80図）

15は白磁碗の高台部付近の破片で、高台は高くシャープな作り。高台径は5cmに復原した。白色の胎土に透明釉を掛けている。16は陶器の口縁部小片で、色調は緑灰色を呈する。17も陶器の口縁部破片で、口唇部は小さく屈曲する。内外面には緑色・灰白色の釉薬を掛けている。18は鍋の口縁部小片で、内面は細かいハケ目による。外面には煤が付着している。19は瓦質土器で、鍋の底部破片。内外面ともハケ目によるが、外面のハケ目は粗い。内外面及び破断面にも煤が付着する。

（4）溝

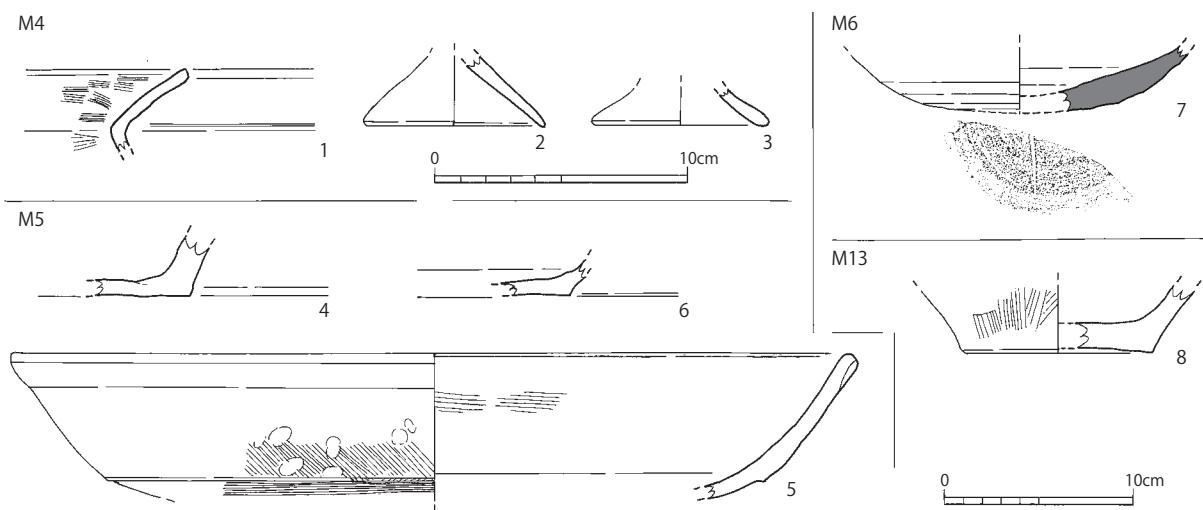
調査区の南半部において、主として南北方向に走る大小の溝を10条程を検出した。

4号溝（図版40-1・2、第75・82図）

調査区の南辺部を北東－南西方向に蛇行して走る溝で、1・11号溝に切られ、7～10・12号溝を切っている。東西両端部が調査区外に伸びるため29m余りの検出長であるが、Ⅱ区南東隅部にある小溝と接続するか。さらに、13号溝と接続する可能性がある。東端部での幅55cm、壁高5cm、中央部での幅65cm、壁高14cm、西端部での幅50cm、壁高10cmを測り、溝底は東西両端部で20cmの比高差があり、西側に低くなっている。因みに、Ⅱ区13号溝底面の標高は7.52mで、当溝の標高とほぼ等しい。埋土中からは、弥生土器が出土している。

出土遺物（第81図）

1～3は弥生土器で、何れも西半部の出土。1は「く」字形口縁を呈する甕の口縁部小片で、口唇部は丸く収める。内面にはハケ目を留める。2・3は高壺の脚部破片で、2の端部はシャープで、3は丸みを帯びる。脚径は2が7.2cm、3が7.0cmに復原した。



第81図 4～6・13号溝出土土器・陶器実測図（1/3、5は1/4）

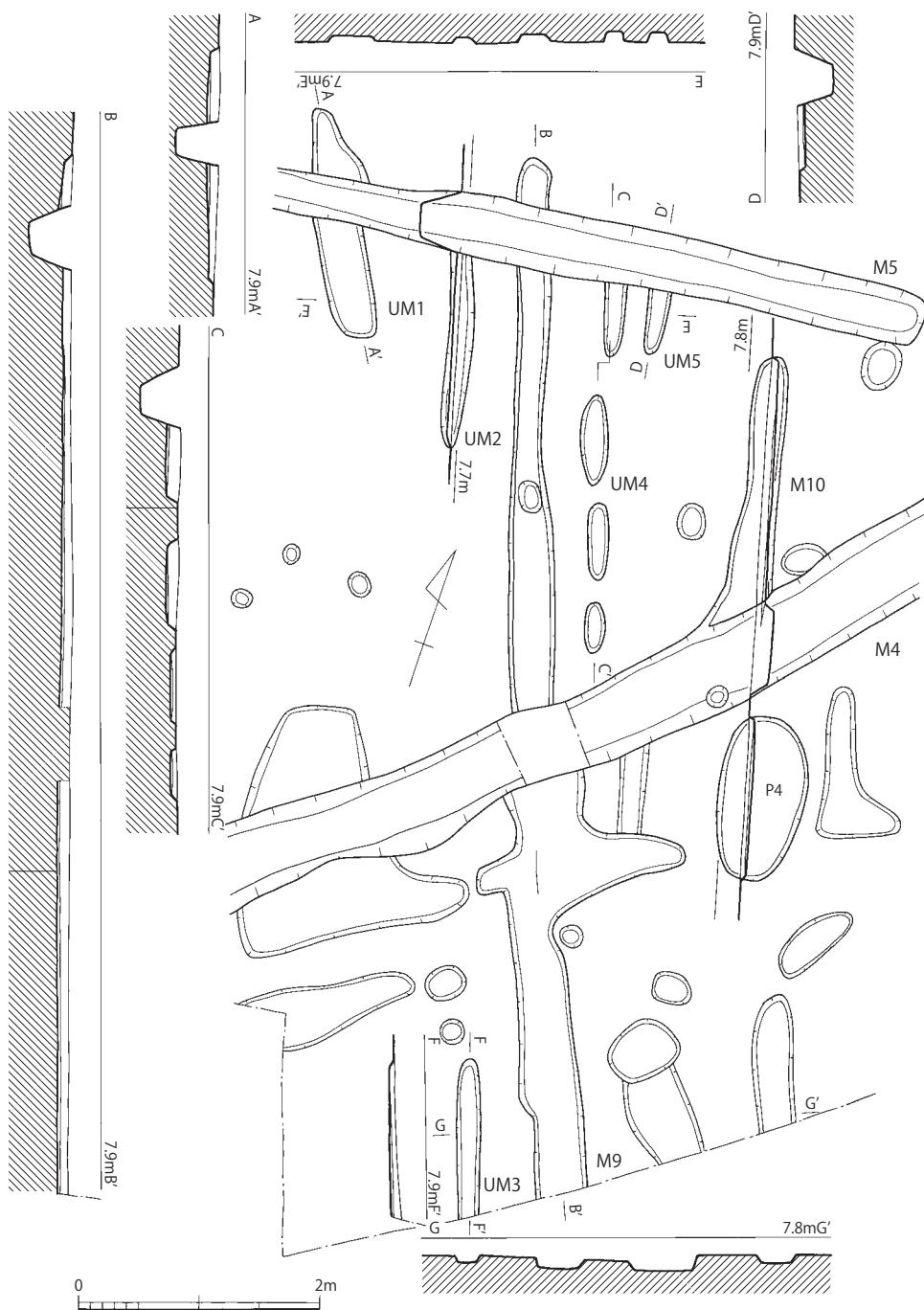
5号溝（図版40-1・2、第82図）

調査区の中央から西側にかけて東西方向に走る溝で、6・9号溝、1・2・4・5号畠溝を切る。西側は調査区外に伸びるため検出長は29m程であった。当溝の西側延長部には、Ⅱ区北東端部

で検出した2号溝が存在し、或いは一連の溝になるか。東端部での幅48cm、壁高30cm、西端部での幅35cm、壁高25cmを測る。壁は垂直に掘られ、埋土が暗灰色粘質土であることから新期の溝とみられる。

出土遺物（第81図）

4は陶器の底部破片で、焦げ茶色の釉薬を施す。甕の底部になるか。5は土師質鍋の口縁部から底部にかけての破片で、洗面器形を呈する。口径は45cmに復原できる大型品。口縁端部には粘土帯を貼付し、肥厚させている。内外面ともハケ目により、外面には煤が厚く付着している。6は土師器皿の底部破片で、底部切り離しは糸切り。何れも東半から出土した。



第82図 4・5・9・10号溝、1～5号畠溝実測図 (1/60)

6号溝（図版40-1・2、第83図）

調査区の中央に位置し、5号溝に南端を切られる。長さ5.5m、中央幅0.95mで、壁高は0.1mと浅い。底面は北側に若干下がっている。埋土中から須恵器が出土した。

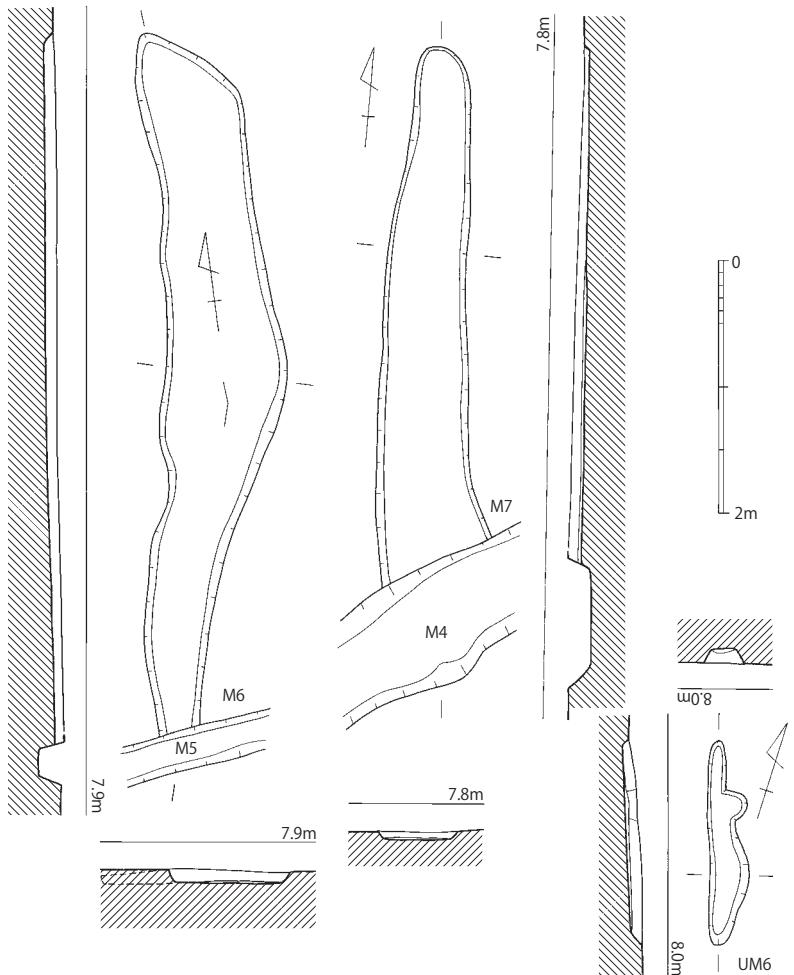
出土遺物（第81図）

7は須恵器壺の底部破片で、口縁部を欠く。内面ナデ、外面回転ヘラケズリによる。外底面には2本線のヘラ記号を施している。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。

7号溝（図版40-1・2、第83図）

調査区の南側で、5号溝の1.6m南側に位置する。南端部を4号溝に切られるが、それより南側には伸びない。検出長4.26m、4号溝での幅0.95mで、壁高は6cmの遺存状態。

第83図 6・7号溝、6号畝溝実測図（1/60）



溝底面は平坦で、長軸方位は北から西に4°振っている。埋土中から土師質土器片が出土した。

8号溝（図版40-1・2、付図）

調査区南西側にあり、4号溝に切られ、溝の南側は調査区外に伸びるため長さ5.6mを検出したのに留まる。また、北側にあるピットも当溝と一連のものとみられる。4号溝付近での幅0.3mで、壁高は8cmの遺存状態。遺物は出土しなかった。

9号溝（図版40-2、第82図）

調査区の南側中央に位置し、北端側を5号溝に、中程を4号溝に切られ、南端は調査区外に伸びる。検出長8.6m、南端部幅0.43mで、壁高は10cmと浅い。底面は北側に下がる。土師器片が出土している。

10号溝（図版40-2、第82図）

調査区の南側中央に位置し、4号溝に南側を切られるが、それ以南には伸びていない。検出長2.3m、4号溝側での幅0.4mで、壁高は10cm前後を測る。埋土中から軽石が出土している。

11号溝（図版40-1・2、第77図）

調査区の東側で、1号掘立柱建物の2m西側に位置し、4号溝を切っている。北端部は1号溝に切られ、南側は調査区外に伸びるため検出長12.4mで、北端部での幅0.44m、壁高0.1m、南端部での幅0.4m、壁高8cmを測る。溝底は南側に傾斜している。埋土中からは土師器の細片が出土した。

12号溝（図版41-1、第75図）

調査区の南東隅部に位置する。1号掘立柱建物と重複し、北端部を4号溝に切られるが、同溝以北には伸びない。また、20cm離れて南側にも溝が存在するが、同一溝とみられる。両者を含めた長さは6.9mで、最大幅40cm、壁高は7cm程度の遺存状態であった。長軸方位は北から西に19°振っている。埋土中からは土師質の胴部片が出土した。

13号溝（図版41-1、第75図）

調査区の南東隅部で、12号溝の2m東側に位置し、1号掘立柱建物柱穴と重複する。南端部は調査区外に伸び、長さ5.6m分を検出した。最大幅27cmで、壁高は10cmの遺存状況。長軸方位は北から西に19°振っている。埋土中からは弥生土器が出土した。

出土遺物（第81図）

8は甕の底部破片で、平底をなす。外面はハケ目で、外底面は工具による擦過痕が見られる。底径は7.4cmに復原した。

（5）畝 溝

調査区の南半部で6条検出した。

1号畝溝（図版40-2、第82図）

9号溝の1.2m西側に位置し、5号溝に中程を切られる。長さ1.93m、幅0.4mで、深さは9cmと浅い。長軸方位は、北から西に29°振っている。遺物の出土は無かった。

2号畝溝（図版40-2、第82図）

1号畝溝と9号溝との間に位置し、北側先端を5号溝に切られる。検出長1.6m、幅0.2mで、壁高は5cmの遺存状態。遺物の出土は無かった。

3号畝溝（図版40-2、第82図）

調査区の南側中央で、9号溝の0.3m西側に位置する。南側が調査区外になるため長さ1.3mを検出したのに留まる。南端部での幅は18cmで、壁高は7cm依存する程度。長軸方位は、北から西に18°振っている。遺物の出土は無かった。

4号畝溝（図版40-2、第82図）

調査区の南側で、9号溝と10号溝との間に位置する。四つに途切れており、北側の小溝は5号溝に切られる。全体として長さ3.1mで、幅0.2m、壁高0.1mを測る。長軸方位は、西に18°振る。

5号畝溝（図版40-2、第82図）

調査区の南側中央で、4号畝溝の東側に近接する。北側先端を5号溝に切られる。残存長0.55m、幅0.2mで、壁高は7cm依存する程度。遺物の出土は無かった。

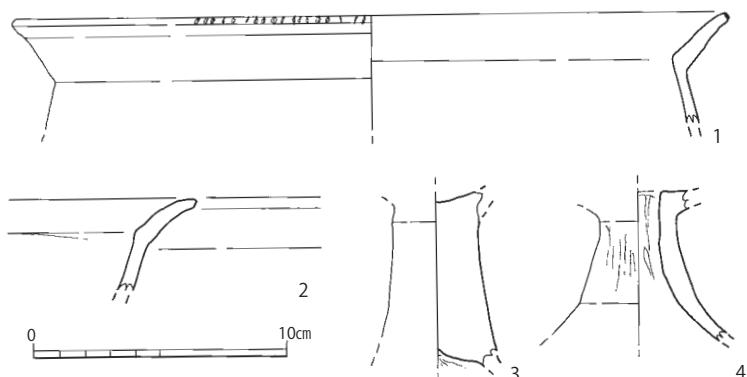
6号畝溝（第83図）

調査区の中央で、1号溝の1.5m西側に位置する。長さ1.6m、幅0.35mで、壁高は12cmの遺存状態。遺物は出土しなかった。

（6）その他出土の遺物（図版42-3、第84・85図）

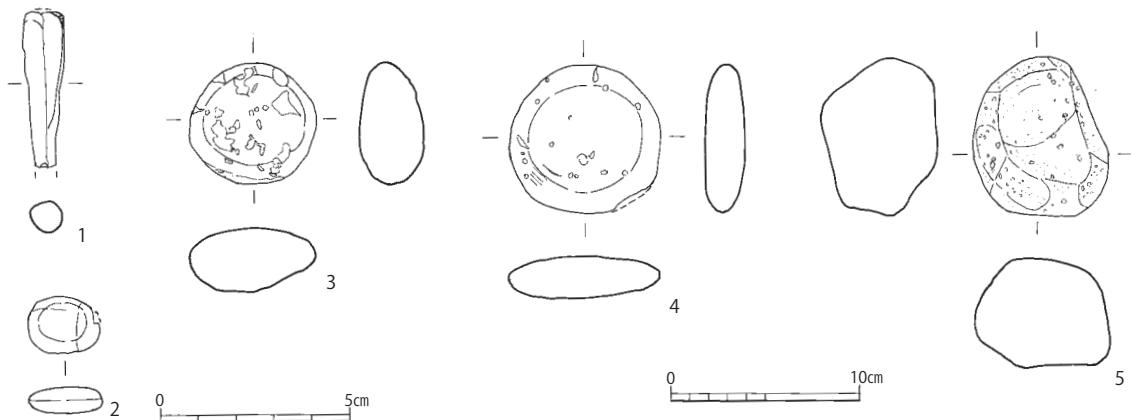
ここでは、2-3号溝間出土土器及び1・2号溝出土鉄器、石製品を紹介する。

第84図1～4は、2号溝と3号溝との間で出土した弥生土器。1は甕で、口縁部は「く」字形に外反する。口唇部にはキザミ目を施す。屈曲部内面の稜はシャープ。2は鉢の口縁部小片で、口唇部を若干欠損する。3・4は高壺の脚柱部破片で、3の脚柱部は中実で、4は壺部に円孔を施している。内面には絞り痕がみられる。



第84図 2-3号溝間出土土器実測図 (1/3)

第85図は1号溝及び2号溝から出土した石製品・鉄器である。1は1号溝北辺部から出土した鉄釘で、先端部を欠く。断面は錆膨れにより円形をなす。残存長4.2cm、頭部幅0.8cm。2は碁石で、乳白色を呈する。楕円形をなし、長径1.9cm、短径1.45cm、厚さ0.65cm、重さ2.84gを測る。1号溝の北辺部から出土した。3～5は2号溝出土の円礫で、3・4は円形を呈し、3は径6.4×6.7cm、厚さ3.4cm、重さ162gで、4は径7.8cm、厚さ2.2cm、重さ176gを量る。ともに表面は擦れている。5は不整形を呈し、長軸8.5cm、短軸7.2cm、重さ498gを量る。表面はやや擦れている。



第85図 1・2号溝出土石製品・鉄器実測図 (1/4、1・2は1/2)

IV 十郎丸長谷古遺跡から出土した赤色顔料について

九州国立博物館 志賀智史

1 はじめに

福岡県久留米市に所在する十郎丸長谷古遺跡から出土した赤色顔料の分析調査を行い、その結果について周辺地域の事例を交えて検討を行った。

墳墓の埋葬施設、古墳に配された埴輪、特殊な形態の土器等には赤彩が施されているものが多いことから、考古学での赤色は祭祀や儀礼と密接に関わる色と考えられている。この赤色は、赤色鉱物の粉末によるもので、考古資料としては赤色顔料と呼ばれる。古墳時代以前の赤色顔料はこれまでの調査によって、水銀を主成分元素とする朱（化学組成はHgS、鉱物名称は辰砂（Cinnabar））と、鉄を主成分元素とするベンガラ（化学組成は α -Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱（Hematite）等）の二種類が知られている。

2 調査資料

調査資料は、第1・2次調査で出土した弥生時代後半の甕棺墓2基に伴う15点である。

第1次調査の甕棺墓は削平により下甕のみが残り、上甕の有無は不明。副葬品は出土していない。赤色顔料は、甕棺内部の胴部上半～底面にかけて塗布されている（坂本(編)2023）。赤色顔料は口縁部内面まで面的に付着しており、内面全面塗布と推定される。

第2次調査の甕棺墓は合口甕棺で、副葬品は出土していない。赤色顔料は、甕棺内面全面に面的に付着しており、内面全面塗布と推定される。甕棺掘方壁面の一箇所からも赤色顔料が出土している。

3 調査方法

所蔵先を訪問し、目視と携帯型実体顕微鏡（20倍）を用いて赤色顔料の有無や遺存状況等の調査を行い、特徴的な部分から微量の資料を採取した。

九州国立博物館において採取資料を対象とし、実体顕微鏡観察（7-100倍）により資料採取時の観察結果を再確認しながら、赤色顔料の有無や遺存状況等の詳細調査を行った。赤色顔料か否かの判断や赤色顔料の種類等を判別するため、生物顕微鏡観察（50-1000倍）による粒子の色調や形態等の観察、および蛍光X線分析（HORIBA XGT-5200、管球Rh、電圧50kV、測定時間100s、検出器SDD、測定径100 μm、検出器付近真空、検出元素Na-U）による主成分元素の測定を行った。

また、赤色顔料の鉱物同定のため、ラマン分光分析（Bruker Optics、SENTERRA、785nm、測定径2 μm、波数分解能3-5 cm⁻¹）を行い、RRUFFのデータベース（Lafuente B et al.2015）と照合した。

4 調査結果のまとめと考察

調査結果を表1に、特徴的な写真等をPL1に示す。

（1）赤色顔料の種類

第1次調査甕棺の赤色顔料はベンガラ、第2次調査甕棺の赤色顔料はベンガラを中心に、極微量の朱と判断した（PL1-2～5）。両ベンガラには、パイプ状粒子が含まれていた。第2次調査の甕棺内で朱が最も多く確認されたのは甕棺内左壁（資料9）で、ベンガラの上に凝集点在した朱が見られた（PL1-1）。

なお、資料15については、生物顕微鏡観察では主にベンガラで、極微量の朱も確認されたが、蛍光X線分析ではFeだけが検出され、Hgは検出限界未満であった。これは、朱がそれほど微量であったことを示すものと思われる。

ラマン分光分析では、朱から辰砂が、ベンガラから赤鉄鉱（PL1-6）が同定されたため、科学的にも両鉱物の使用が明らかになった。

（2）赤色顔料の使用

西日本の弥生時代の墳墓主体部での赤色顔料の使用は、埋葬施設や遺骸に朱が塗布や散布されるものが多く、九州北部では弥生時代中期の甕棺墓で特徴的である。一方、弥生時代後期後半の九州北部の土壙墓や石棺墓等においては、埋葬施設にベンガラが塗布や散布され、遺骸の頭胸部を中心に朱が散布されるといったように、一埋葬施設で二種類の赤色顔料が使い分けられるものが一般的となる。このような赤色顔料の使い分けは、古墳時代に全国展開したとされる（本田1988・1995）。

九州北部の久留米周辺や糸島周辺では、弥生時代後期になっても甕棺墓が認められる。この時期の甕棺墓での赤色顔料の使用は、次のように整理できる（表2）。弥生時代後期前半の甕棺墓では、中期からの伝統により朱だけが使用され、弥生時代後期後半以降の甕棺墓では、同時期の土壙墓や石棺墓での赤色顔料の使い分けの影響により、朱とベンガラが認められるものと思われる。

弥生時代後半以降でどちらかの赤色顔料だけが検出されているものについては、非検出の方の赤色顔料が微量過ぎて検出できなかった可能性や、省略されていた可能性等が考えられる。今回の第1次調査の甕棺墓でのベンガラだけの検出は、朱を省略した可能性が考えられる。

第2次調査の甕棺墓については、甕棺掘方壁面から出土したベンガラに、極微量の朱が含まれていることに注目したい。この赤色顔料が、甕棺内で使用された残りが廃棄されたものであれば、甕棺内でもベンガラに朱を混合したものが使用されていた可能性がある。甕棺内での朱の分布には偏りが見られることから、一つの可能性として甕棺墓の構築時に甕棺内面全面にベンガラが塗布され、遺骸埋葬時にはベンガラに微量の朱を混合したもの（朱の增量？）が散布されていた可能性が考えられる。

これまで一埋葬施設で二種類の赤色顔料が確認された場合には、別々での使い分けが想定されてきた。しかし、取り上げ位置が明確な赤色顔料を分析すると、ベンガラと朱を混合したとしか考えられない事例が散見される（志賀2013、2024aなど）。このような事例が一定の時期や地域的なまとまりを持つかどうかについては、今後の検討課題である。

（3）ベンガラの特徴

日本列島の遺跡から出土するベンガラには、直径約 $1\text{ }\mu\text{m}$ のパイプ状粒子が含まれているものが一般的である（以下ではこの粒子を含むベンガラを「ベンガラ（P）」とする）。このパイプ状粒子は、鉄分の多い湧水に棲む鉄細菌*Leptothrix*に由来するものと考えられており（岡田1997）、こ

れを含む黄褐色の沈殿物を焼成して生産されたものと想定される。このベンガラ（P）は、縄文時代草創期から使用が認められる。

一方、日本列島には、不定形な粒子だけで構成されたベンガラも認められる（以下ではこの粒子だけを含むベンガラを「ベンガラ（不定形）」とする）。このベンガラ（不定形）は、鉄鉱石（褐鉄鉱、赤鉄鉱、磁赤鉄鉱、磁鉄鉱等）が原料と推定され、これをそのまま、もしくは焼成して生産されたものと想定される。九州北部、北陸、関東北部などで纏まって採用されている。特に、九州北部の弥生時代後期～古墳時代後期前半を中心に採用されるベンガラ（不定形）は、熊本県阿蘇の褐鉄鉱が原料になったと想定している（志賀2020a）。

今回調査を行った2基の甕棺墓ではベンガラ（P）が採用されていたが、パイプ状粒子が少ないものも多くみられた。資料10についてはベンガラ（不定形）としたが、本来はベンガラ（P）で、資料が微量であったためパイプ状粒子が見つからなかったものと考えた。

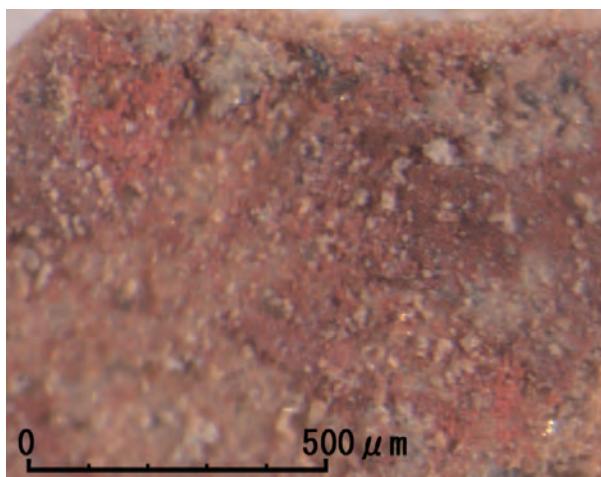
近隣の遺跡では、たとえば筑後市の高江辻遺跡においては、弥生時代後期前半の土壙墓等7基でベンガラ（P）が4基とベンガラ（不定形）が3基、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の箱式石棺5基ではベンガラ（P）が4基とベンガラ（不定形）が1基で採用されており（志賀2010）、一遺跡の中で採用ベンガラの異なる墳墓が共存する事例はしばしば認められる。どのようなベンガラを採用するかについては、時期、地域、墓制等によって一定の傾向があり、現在その採用状況と背景を検討しているところである。

〈謝辞〉

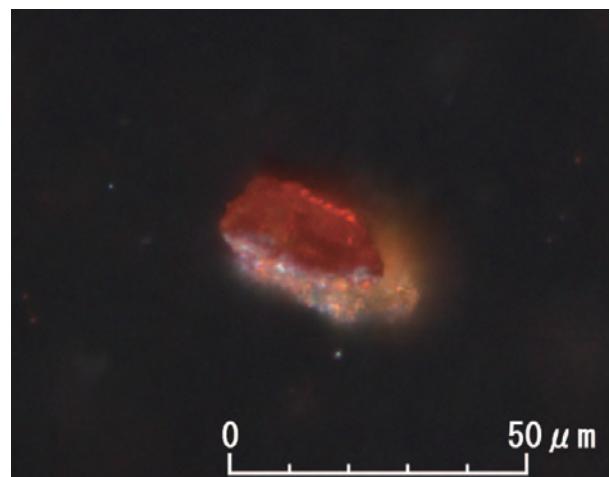
本研究を実施するにあたり、九州歴史資料館の坂元雄紀氏のご協力を得た。調査には科研費21K00967を使用した。

〈引用・参考文献〉

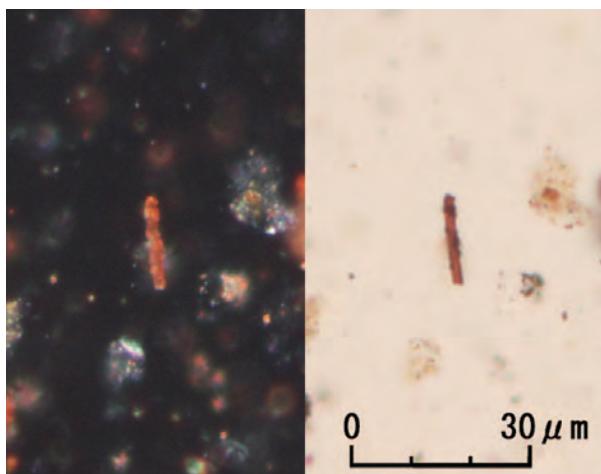
- 岡田文男 1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 坂本真一（編） 2023 『十郎丸長谷古遺跡』九州歴史資料館
- 志賀智史 2010 「高江辻遺跡出土の赤色顔料について」『高江辻遺跡』筑後市教育委員会
- 志賀智史 2013 「津古永前遺跡出土の赤色顔料について」『津古永前遺跡』小郡市教育委員会
- 志賀智史 2020a 「熊本県の弥生時代～古墳時代の墳墓出土ベンガラの分類と変遷」『遺跡学研究の地平』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 志賀智史 2020b 「高三瀬遺跡第5次調査で出土した赤色顔料について」『高三瀬遺跡－第5次発掘調査報告－』久留米市教育委員会
- 志賀智史 2024a 「島内139号地下式横穴墓から出土した赤色顔料について」『島内139号地下式横穴墓Ⅲ』えびの市教育委員会
- 志賀智史 2024b 「赤色顔料の分析」『須玖岡本遺跡8－岡本地区総括報告書1－』春日市
- 本田光子 1988 「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北九州地方にみられる使用と変遷－」『九州考古学』62号九州考古学会
- 本田光子 1995 「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』31・32(合併号) 日本文化財科学会
- Lafuente B, Downs R T, Yang H, Stone N (2015) The power of databases: the RRUFF project. In: High lights in Mineralogical Crystallography, T Armbruster and R M Danisi, eds. Berlin, Germany, W. De Gruyter, pp 1-30



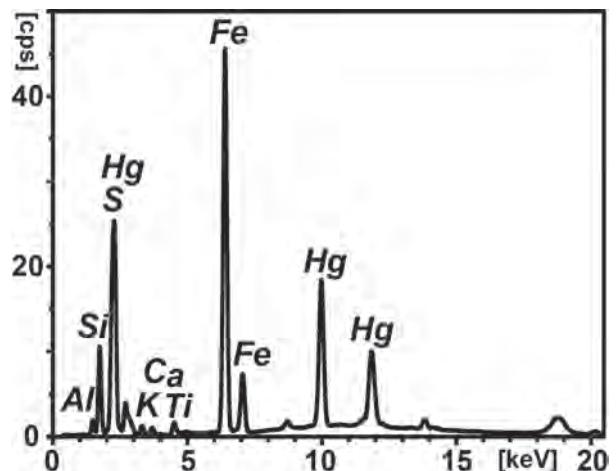
1 第2次調査の甕棺墓出土の赤色顔料（資料9,50倍）
ベンガラの上に微量の朱が凝集点在（写真左上と右下）。



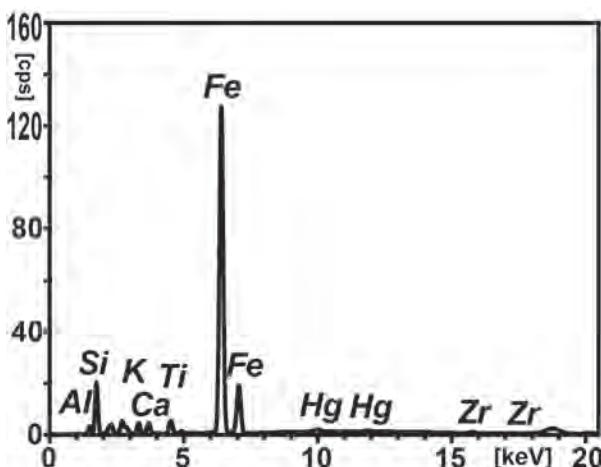
2 同朱粒子（資料9,側射光500倍）
朱は極微量であった。



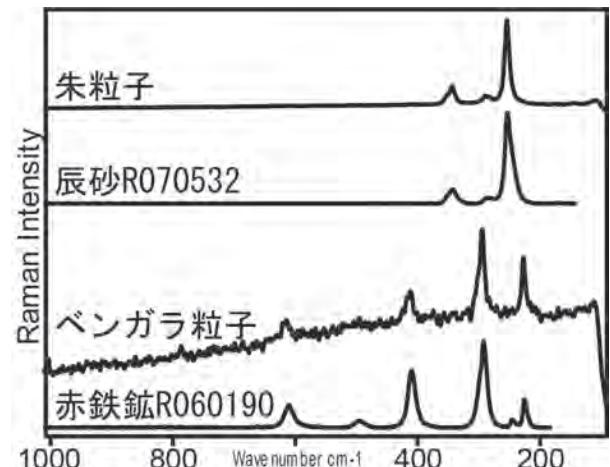
3 同ベンガラ粒子（資料9,側射光/透過光500倍）
ベンガラには、パイプ状の粒子が含まれていた。



4 同朱の蛍光X線スペクトル図（資料9）
Hg（水銀）は朱に由来。Fe（鉄）は下層のベンガラ、甕棺胎土、土壤等に由来。



5 同ベンガラの蛍光X線スペクトル図（資料9）
Fe（鉄）のほとんどはベンガラに由来。



6 同赤色顔料のラマン分光スペクトル図（資料6）
朱からは辰砂を、ベンガラからは赤鉄鉱を同定した。比較資料はRRUFFより引用。

表1 赤色顔料の分析結果一覧

資料	遺構	採取位置	調査結果			赤色顔料の種類	備考
			生物顕微鏡	XRF	Raman		
1	第1次 甕棺墓	棺内	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
2		棺内天井	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
3		棺内左壁	ベンガラ (P) ?	Fe	—	ベンガラ (P) ?	
4		棺内右壁	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
5		棺内底	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
6	第2次 甕棺墓	棺内	朱、ベンガラ (P)	Hg、Fe	辰砂、赤鉄鉱	朱、ベンガラ (P)	朱は極微量
7		上甕棺内天井	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
8		下甕棺内天井	朱、ベンガラ (P)	Hg、Fe	—	朱、ベンガラ (P)	朱は極微量
9		上甕棺内左壁	朱、ベンガラ (P)	Hg、Fe	—	朱、ベンガラ (P)	ベンガラ上に微量の朱が凝集点在
10		下甕棺内左壁	ベンガラ (不定形)	Fe	—	ベンガラ (不定形)	サンプル微量
11		上甕棺内右壁	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
12		下甕棺内右壁	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
13		上甕棺内底	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
14		下甕棺内棺底	ベンガラ (P)	Fe	—	ベンガラ (P)	
15		甕棺掘方壁面	朱、ベンガラ (P)	Fe	—	朱、ベンガラ (P)	朱は極微量

表2 弥生時代後期～古墳時代前期の甕棺墓出土の赤色顔料

時期	遺跡		赤色顔料の種類	文献
弥生 時代	後期初頭	春日市 須玖岡本遺跡 11・13号甕棺墓		朱 本田 1988、志賀 2024b
	後期前半	春日市 須玖岡本遺跡 6・19・20号甕棺墓		朱 同上
		久留米市 高三瀬遺跡第5次調査 3・40号甕棺墓		朱 志賀 2020b
	後期後半	春日市 須玖唐梨遺跡 4・5号甕棺墓		朱 本田 1988
		福岡市 飯氏馬場遺跡 9号甕棺墓		朱、ベンガラ 同上
		久留米市 十郎丸長谷古遺跡第1次調査甕棺墓		ベンガラ 本報告
		久留米市 十郎丸長谷古遺跡第2次調査甕棺墓		朱、ベンガラ 同上
	終末	小郡市 津古永前遺跡第3主体部(甕棺)		朱、ベンガラ 志賀 2013
	終末～ 古墳初頭	福岡市 野方中原遺跡 2号甕棺墓		朱 本田 1988
		福岡市 野方塚原遺跡 1・3号甕棺墓		ベンガラ 同上
		飯塚市 原田遺跡 D地点 1号甕棺墓		ベンガラ 同上
		北九州市 上徳力遺跡 1・2号甕棺墓		ベンガラ 同上
古墳時代前期	久留米市 祇園山古墳 1号甕棺		朱、ベンガラ	同上

V 総 括

1 検出遺構

十郎丸長谷古遺跡の2・3次調査で検出した遺構には、弥生時代として竪穴住居・土坑・甕棺墓があり、奈良時代の遺構としては竪穴住居・掘立柱建物・方形竪穴・土坑・溝・畝溝があり、江戸時代の遺構としては大溝・溝・杭列・近世墓群がある。他にも落込、谷部、時期不詳の土壙墓等を検出した。以下、1次調査の成果も踏まえて主要遺構の概要を記す。

〔竪穴住居〕

I区中央部下層において弥生時代の竪穴住居3軒（3～5号住居）を検出した。4号竪穴住居は短辺にベッド状遺構を付設した2本柱タイプの住居で、3号竪穴住居は4本柱タイプのもの。5号竪穴住居は、竪穴内部に柱穴は確認できなかったが、炉跡を検出したことから住居とした。1次調査では、竪穴住居は確認されていないが、土器が多量に投棄された竪穴遺構2基が検出されている。また、奈良時代の竪穴住居としては、I区で2軒、1次調査で11軒確認されている。カマドは何れも住居壁を掘り込む突出タイプで、竪穴内部に柱穴が見られない竪穴住居がある（1次2・3・6・12号竪穴住居等）。

〔掘立柱建物〕

I区中央部北側で1棟、II区で1棟、III区で2棟検出した。I区1号掘立柱建物は、桁行7間×梁行2間以上の東西棟建物で、柱掘方も1mに近い円形を呈する大規模なものであった。II区1号建物は桁行2間×梁行1間で、柱掘方は0.7m程の小規模な建物。III区1号建物は桁行2間以上×梁行2間の小規模な建物で、2号建物は一応掘立柱建物としたものの、詳細は不明。

掘立柱建物は共伴遺物に乏しいが、II区1号掘立柱建物は奈良時代の所産と考えられる。また、1次調査では、奈良時代の2間×2間の総柱建物1棟（1号）が確認されている。

〔土 坑〕

I区で17基、II区で3基、III区で1基の計21基を検出した。1次調査では4基確認されている。注目されるのがI区7号土坑で、破碎された多量の須恵器・土師器片とともに炭・焼土塊が出土している点で、住居に伴う廃棄土坑と考えられる。また、当土坑からは製塩土器も出土している。

〔大溝・溝〕

I区北辺部を東西方向に走り、II区東端部で南側に折れるが、東西長は100mを超え、上面幅3.6m、深さ2.0mを測る大規模な溝で、テラス及び階段状遺構を付設する。1次調査でも江戸時代の東西・南北方向に走る幅3～5mの大溝（4・6・19号溝）が検出されており、両者は直接的には繋がらないが、単なる区画溝ではなく物資運搬用の運河と考えておきたい。

溝はI区で16条、II区で17条、III区で13条の計46条を検出した。1次調査でも江戸時代以降の溝が15条程検出されている。III区1・2号溝は陸橋部を有し、区画溝と考えられる。

〔畝 溝〕

幅50cm前後で、南北方向に並走する溝の一群を畝溝とした。I区で18条、II区で23条、III区で6条検出した。出土遺物に乏しく、明確な時期決定はできないが、古代の範疇で捉えられよう。

〔甕棺墓〕

弥生時代終末期の甕棺墓をI区で1基、1次調査で1基検出した。被葬者としては、I区3号竪穴住居或いは4号竪穴住居の居住者が考えられる。

2 出土遺物

出土遺物には、弥生土器（壺・甕・鉢・高坏・器台・支脚等）、須恵器（蓋・坏・壺等）、土師器（坏・甕）、土師質土器（鍋・鉢）、須恵質土器（鉢・擂鉢）、陶磁器類（青磁碗・白磁碗・陶器碗等）及び石器（磨石）・石製品（勾玉・碁石）、土製品（管状土錘・製塩土器）、鉄器（鎌・刀子・釘）、木製品（杭・位牌）が出土している。ここでは、製塩土器を取り上げる。

〔製塩土器〕

従来、製塩土器は官衙的遺物の範疇で認識されてきたが、集落遺跡からも出土する遺物であることを以前指摘した。^(註2)当遺跡では、I区2号竪穴住居（第20図11～13）と7号土坑（第33図26～29）から逆円錐形の製塩土器が出土しており、もはや奈良時代の集落遺跡であれば拠点集落でなくとも普通に出土する遺物であるとの観点に立つ必要がある。

3 十郎丸長谷古遺跡の変遷

（1）遺構の時期

当遺跡の初見は、弥生時代後期にあり、後期前半の遺構としてI区12号土坑、1次1号竪穴がある。次に後期後半ないしは終末の遺構として、I区3号竪穴住居、8～10号土坑、12号溝、1号甕棺墓及び1次甕棺墓等があり、集落の最盛期を迎えるが、遺構が散在する小規模な集落形態を示す。次の画期は奈良時代で、I区1・2号住居、1号掘立柱建物、方形竪穴、7号土坑及び1次1～4・6～12号住居、1号掘立柱建物等があり、I区から1次調査地の広範囲に8世紀前半から中頃にかけての集落が営まれる。畝溝は当該期の所産と考えられる。ただ、住居は点在する様相を呈し、大規模な集落と言えるものではない。

出土遺物から中世の遺構も存在するものとみられるが、集落は明確ではない。遺跡の終焉は江戸期にあり、I・II区で検出された大溝やIII区の区画溝、1次調査の4・6・19号溝、近世墓群等が存在するが、居住域は現在の集落と重複するのであろう。

（2）遺跡の変遷

十郎丸長谷古遺跡においては、弥生時代後期の集落及び家族墓的な墓地が営まれ、その後奈良時代中頃の集落と畠地、そして江戸時代の運搬・水利施設へと変遷する。

弥生・奈良時代の集落が小規模なのは、遺跡の立地と深く関連するとみられる。遺構面の標高は8m前後であり、当遺跡から約1.8km南側には筑後川が流れ、幾度となく筑後川の氾濫による被害を被ったことが推測され、その都度、集落は消滅・移転したと考えられる。一方、河川の存在は、食料生産或いは物資運搬の有効な手段でもあり、上手に利活用して生活を営んだと思われる。

註1 九州歴史資料館 2023 『十郎丸長谷古遺跡』（福岡県文化財調査報告書第280集）

註2 小田和利 1996 「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』 九州歴史資料館

第36図 遺構変遷図 (1/600)

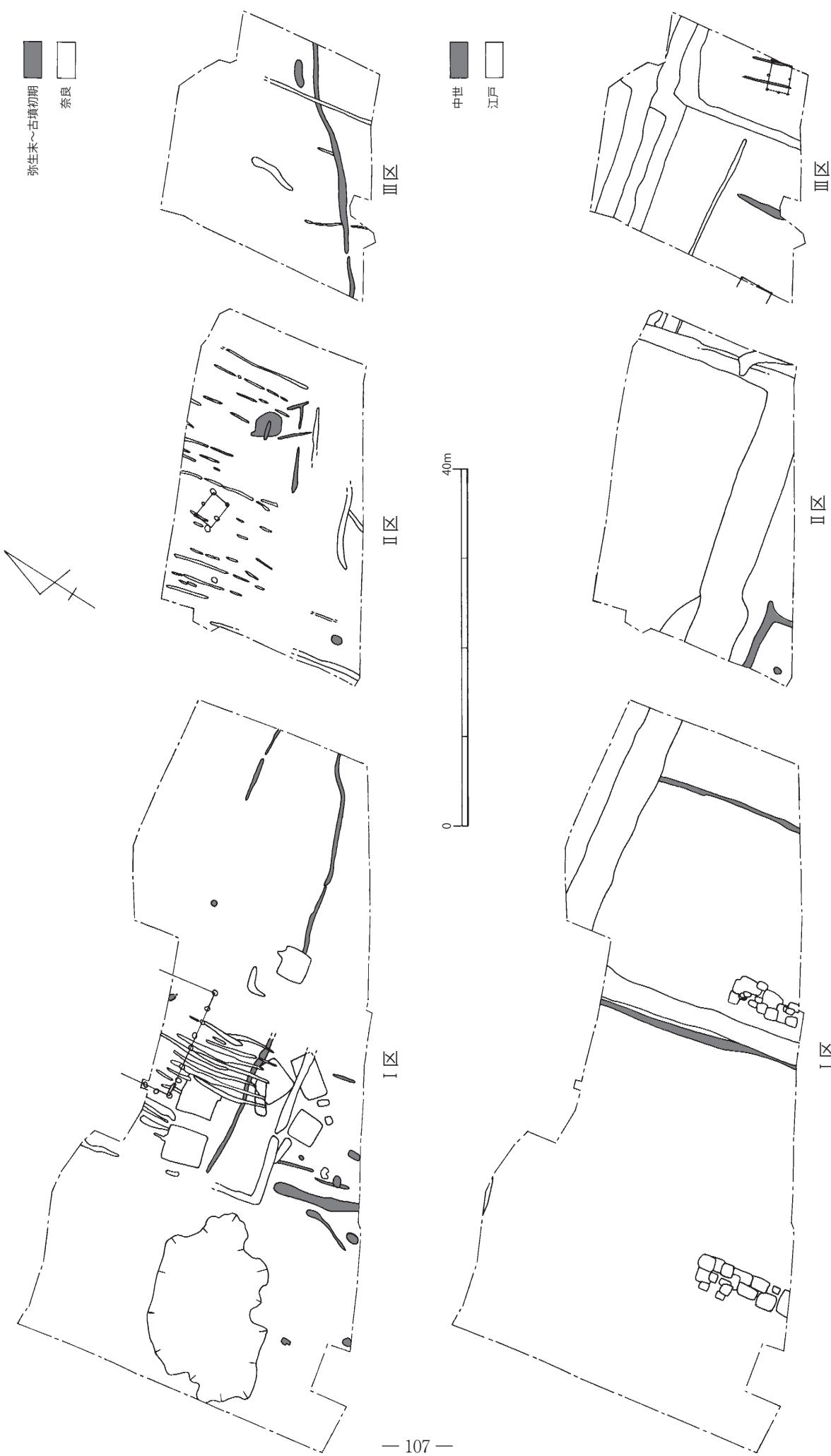


表3 遺構番号新旧対照表

地区	遺構	旧番号	新番号	前後関係(古→新、⇨重複)	時期
I区東側	豎穴住居	1号豎穴住居	変更なし	溝1→住1	奈良
	大溝	1号大溝		溝2→大溝1	近世
	溝	1号溝		落込1・3→溝1→住1・溝2	
		2号溝			
		3号溝			
		4号溝	2号溝	落込3→溝1→溝2→大溝1	
		7号溝			
		8号溝	3号溝	溝3→溝2	
	落込	1号落込		落込1→溝1	
		2号落込			
		3号落込		落込3→溝1→溝2→大溝1	
	甕棺墓	1号甕棺墓			弥生後期
I区西侧	土坑	1号土坑	変更なし		
		2号土坑			
		3号土坑			
	溝	5号溝			
		6号溝			
	谷部	谷部			
I区中央	近世墓	近世墓群	近影墓群B		近世
	豎穴住居	1号豎穴住居	2号豎穴住居	溝9→住2	奈良
		2号豎穴住居	3号豎穴住居	住3→土坑7・溝15	弥生後期
		3号豎穴住居	4号豎穴住居	住4→溝6	弥生後期
		4号豎穴住居	5号豎穴住居	土坑15→住5→溝16	弥生後期
	掘立柱建物	1号掘立柱建物	変更なし	掘立1→土坑6→大溝2	奈良?
	方形豎穴	1号方形豎穴		畝溝14→豎穴1→畝溝12・13	奈良
	土坑	1号土坑	4号土坑	土坑4→溝7	
		2号土坑	5号土坑	土坑5→大溝2	
		3号土坑	6号土坑	建1→土坑6	
		4号土坑	7号土坑	畝溝9・10・12→土坑7→畝溝8	奈良
		5号土坑	8号土坑		弥生後期
		6号土坑	9号土坑	溝11→土坑9	弥生後期
		7号土坑	10号土坑		弥生後期
		8号土坑	11号土坑		
		甕棺土坑	12号土坑	土坑12→大溝2	弥生後期
		P44・45	13号土坑		
		P46	14号土坑	土坑14→土坑9	
		P130	15号土坑	土坑15→住5	
		P125	16号土坑		
		P126	17号土坑		
	大溝	南北大溝	2号大溝	建1・土坑5→大溝2	近世
溝	溝	上層溝	上層溝		近世
		1号溝	1号畝溝		
		2号溝	2号畝溝		
		3号溝	4号溝	畝溝3→溝4	
		4号溝	3号畝溝	畝溝3→溝4	
		5号溝	7号溝	溝15→溝7	
		6号溝	4号畝溝	畝溝4→溝7	
		7号溝	5号畝溝	畝溝5⇨建1	
		7B号溝	11号畝溝	溝15→畝溝11	
		8号溝	7号畝溝	溝15→畝溝7	
		9号溝	6号畝溝	溝15→畝溝6	
		10号溝	8号畝溝	溝15→畝溝8⇨建1	
		11号溝	9号畝溝	溝15→畝溝9→土坑7	

地 区	遺 構	旧番号	新番号	前後関係(古→新、⇨重複)	時 期
I区中央	溝	12号溝	10号畠溝	溝15→畠溝10	
		13A・B号溝	12A・B号畠溝	豎穴1→溝15→畠溝12	
		14号溝	13号畠溝	豎穴1→畠溝13	
		15号溝	変更なし	溝15→溝7・畠溝6~12	
		16号溝		住5→溝16	
		17A・B号溝	6A・B号溝	溝10→溝6B、溝6A→溝7	
		18号溝	10号溝	溝10→溝6B	
		19号溝	11号溝	溝11→土坑9	
		20号溝	13号溝		
		21号溝	12号溝		弥生後期
		22号溝	14号溝	畠溝14→溝14→建1	
		23号溝	14号畠溝	畠溝14→溝14→建1	
		24号溝	8号溝		
		25号溝	16号畠溝		
		26号溝	9号溝	溝9→住2	
		27号溝	15号畠溝		
		28号溝	6号畠溝	溝15→畠溝6	
		29号溝	17号畠溝		
		新 規	18号畠溝		
	近世墓	1~11号近世墓	近影墓群A		近世
II区	溝	1号掘立柱建物	変更なし		古代
		1号土坑	変更なし		
		2号土坑			
		3号土坑			
		焼土坑	1号焼土坑	溝12→焼土坑1→大溝1	
		大 溝	東西大溝	溝8~12~14~16、焼土坑→大溝1	近世
		1号溝	変更なし	溝1→溝5→溝3	近世
		2号溝		溝2→溝1	
		2号溝南	4号溝	溝4→溝1	
		3号溝	変更なし	溝1→溝5→溝3→杭列	
		4号溝	1号畠溝		
		5号溝	変更なし	溝1→溝5→溝3	
		6号溝	5号畠溝		
		7号溝	6号畠溝	畠溝6→溝17	
		8号溝	変更なし	溝8→大溝1	
		9A・B号溝	9号畠溝		
		10号溝	11号畠溝		
		11号溝	12号畠溝		
		12号溝	変更なし	溝12→焼土坑1→大溝1	
		13号溝	17号畠溝		
		14号溝	20号畠溝		
		15号溝	23号畠溝	畠溝23→大溝1	
		16号溝	13号溝	溝10~12→溝13→大溝1	
		17号溝	15号溝	溝14~16→溝15	
		18号溝	14号溝	溝14→溝15~大溝1	
		19号溝	16号溝	溝16→溝15→大溝1、溝16→墓1	
	新 規	6A・B号溝			
		7号溝			
		9号溝			
		10号溝	溝10→溝13		
		11号溝	溝11→溝13		
		12号溝	溝12→溝13、溝12→焼土坑1		
		17号溝	畠溝6→溝17		

地区	遺構	旧番号	新番号	前後関係(古→新、△重複)	時期
II区	歓溝	新規	2号歓溝		
			3号歓溝		
			4号歓溝		
			7号歓溝		
			8号歓溝		
			10号歓溝		
			13号歓溝		
			14号歓溝	歓溝14△建物1	
			15号歓溝		
			16号歓溝		
			18号歓溝		
			19号歓溝		
			21号歓溝	歓溝21→大溝1	
			22号歓溝	歓溝22→大溝1	
	杭列	杭列	1~5号杭列	溝3→杭列1	近世
	墓	1号墓	変更なし	溝16→墓1	近世
	掘立柱建物	1号掘立柱建物	変更なし	建物1△溝12・13	古代?
		2号掘立柱建物			古代?
III区	土坑	P2重複土坑	1号土坑		
	溝	1号溝	変更なし	溝4・11→溝1	近世
		2号北溝	3号溝		近世
		2号南溝	2号溝		近世
		3号溝	11号溝	溝4→溝11→溝1	
		4号溝	変更なし	溝7~10→溝4→溝11→溝1	
		5号溝		歓溝1・2・4・5、溝6→溝5	
		6号溝		溝6→溝5	
		7号溝		溝7→溝4	
		8号溝		建物1△溝13	
		9号溝	12号溝	建物1△溝12→溝4	
		10号溝	変更なし	溝10→溝4	
		11号溝	9号溝	溝9→溝4・5	
		12号溝	8号溝	溝8→溝4	
	歓溝	新規	1号歓溝	歓溝1→溝5	
			2号歓溝	歓溝2→溝5	
			3号歓溝		
			4号歓溝	歓溝4→溝5	
			5号歓溝	歓溝5→溝5	
		P3	6号歓溝		

図 版

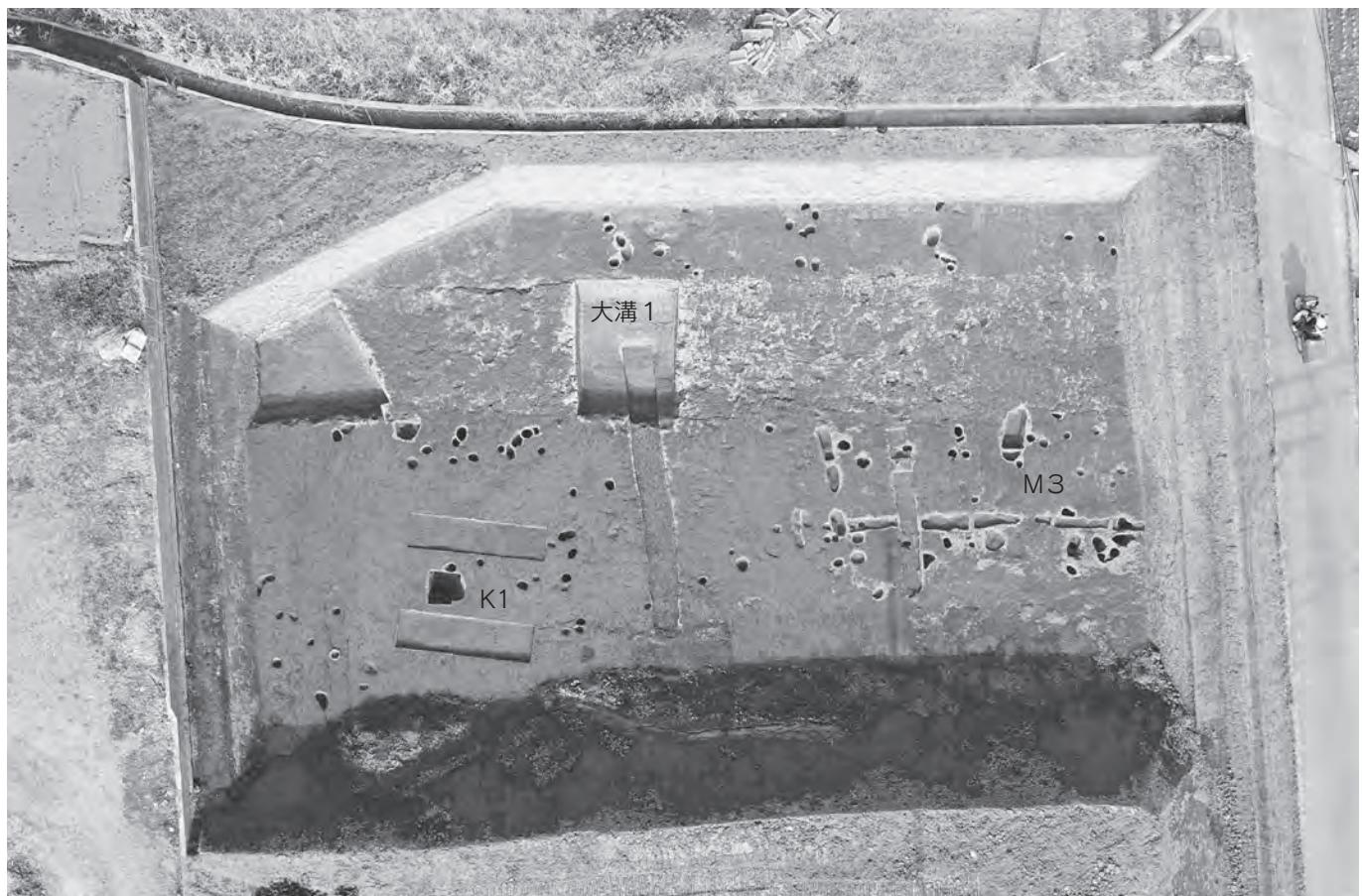


(1) 2次調査地遠景（東上空から）



(2) 2次I区調査地（北上空から）

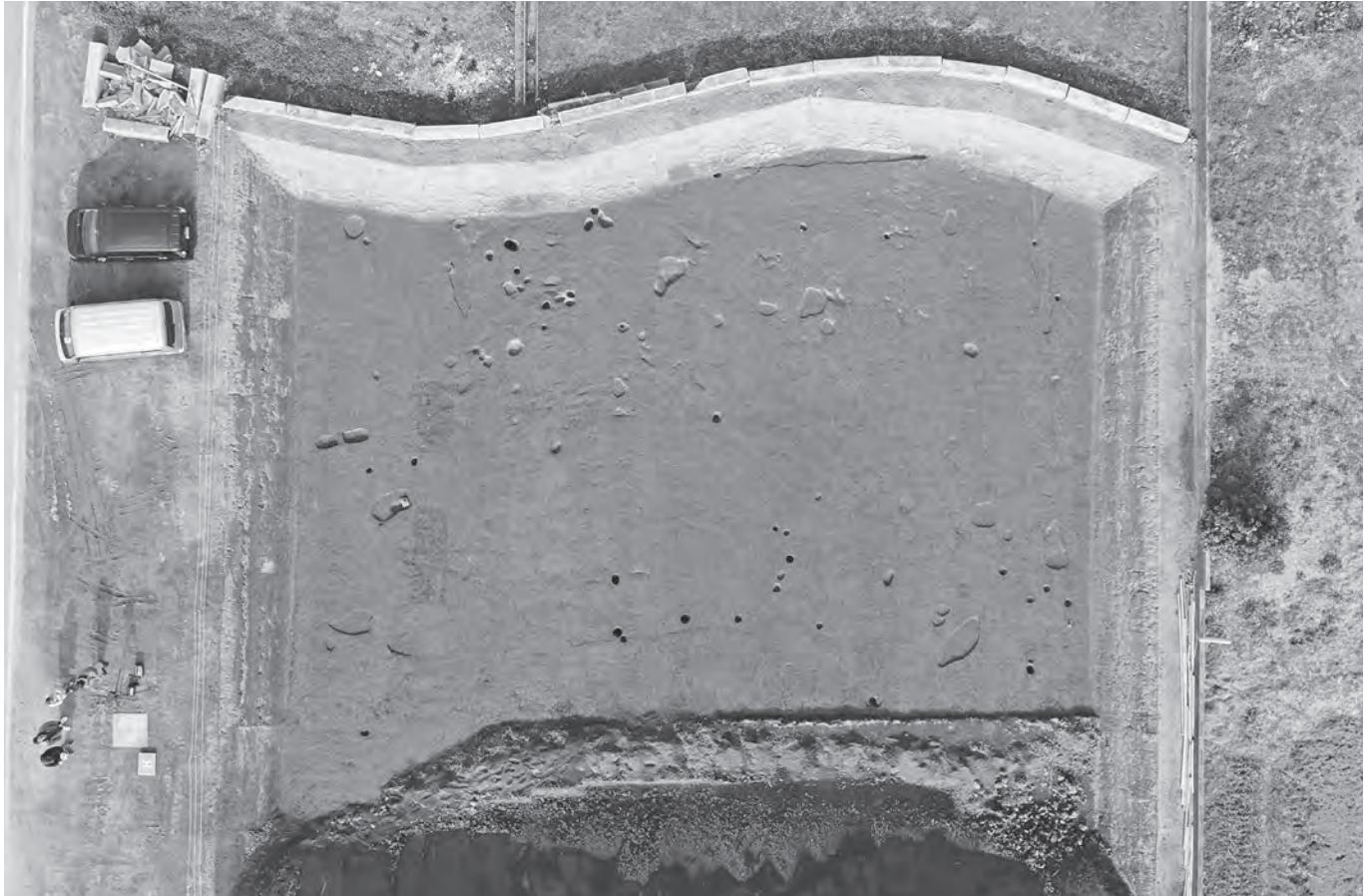
図版2



(1) I区東側調査区北半（真上から）



(2) I区東側調査区南半（南上空から）



(1) I区西側調査区北半（真上から）



(2) I区西側調査区南半（上空から）

図版 4



(1) 1号竪穴住居 (南から)



(2) 1号竪穴住居 (西から)



(3) 1号竪穴住居カマド
(南から)



(1) 1号土坑（東から）



(2) 2号土坑（北東から）



(3) 3号土坑（南から）

図版 6



(1) 1号大溝土層(東から)



(2) 1号溝土層①(東から)



(3) 1号溝土層②(西から)



(4) 1号溝土層③(西から)



(1) 2号溝土層①(南から)



(2) 2号溝土層②(南から)



(3) 5号溝(南東から)



(4) 6号溝(東から)



(5) 6号溝東壁土層
(西から)



(1) 1号甕棺墓検出状況
(南から)



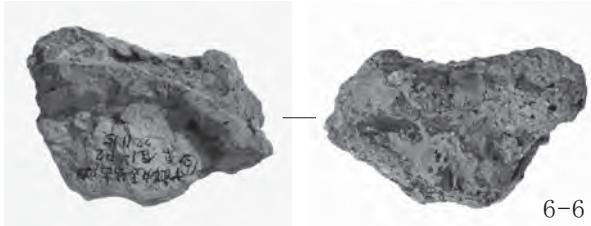
(2) 掘方半裁状況(南から)



(3) 棺外赤色顔料検出状況
(東から)



(4) 完掘状況(南から)



(1) 1号堅穴住居出土縄口



(2) 1~3号土坑出土土器



(3) 5号溝出土土器



(4) 3号落込出土土器

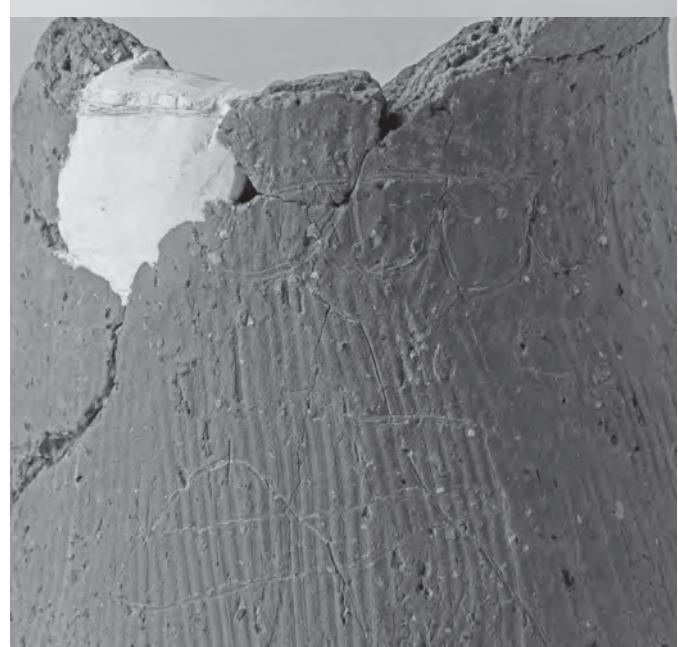
図版 10



(1) 1号甕棺



(2) 谷部出土土器①



(2) ピット、その他出土の土器

図版 12



(1) 3次調査地遠影（西上空から）



(2) 3次調査地遠影（東上空から）



(1) I区中央調査区、II・III区遠景（西上空から）



(2) I区中央調査区下層、II・III区遠景（西上空から）

図版 14



(1) I区中央調査区、II・III区（真上から）



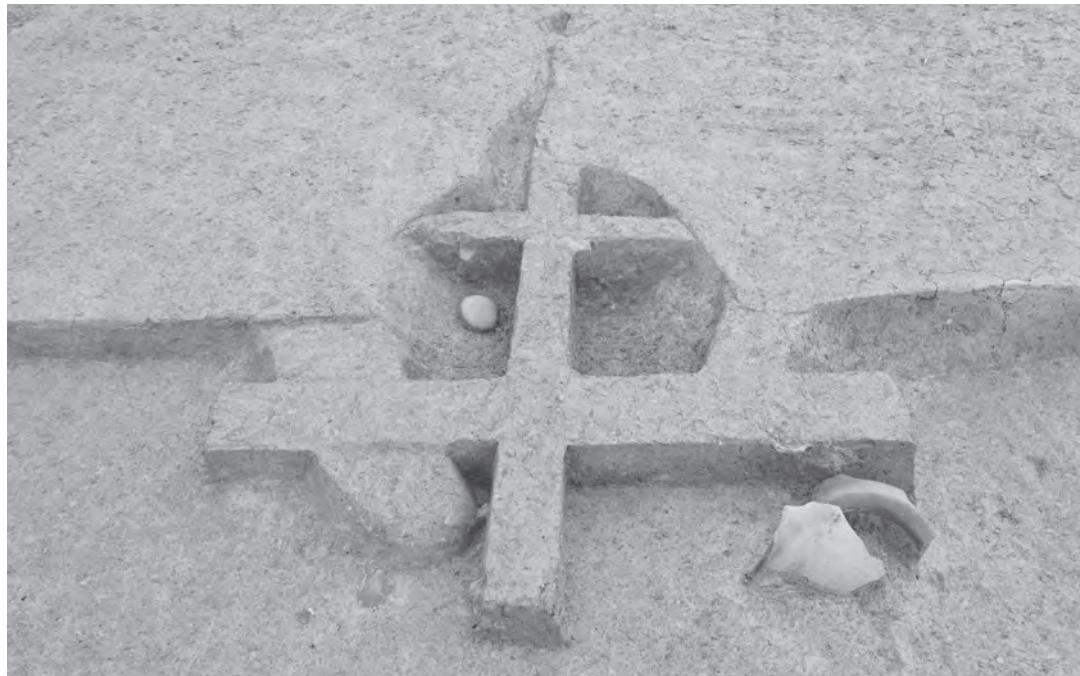
(2) I区中央調査区全景（南上空から）



(1) 2号竪穴住居（南から）



(2) 2号竪穴住居貼床下部（南から）



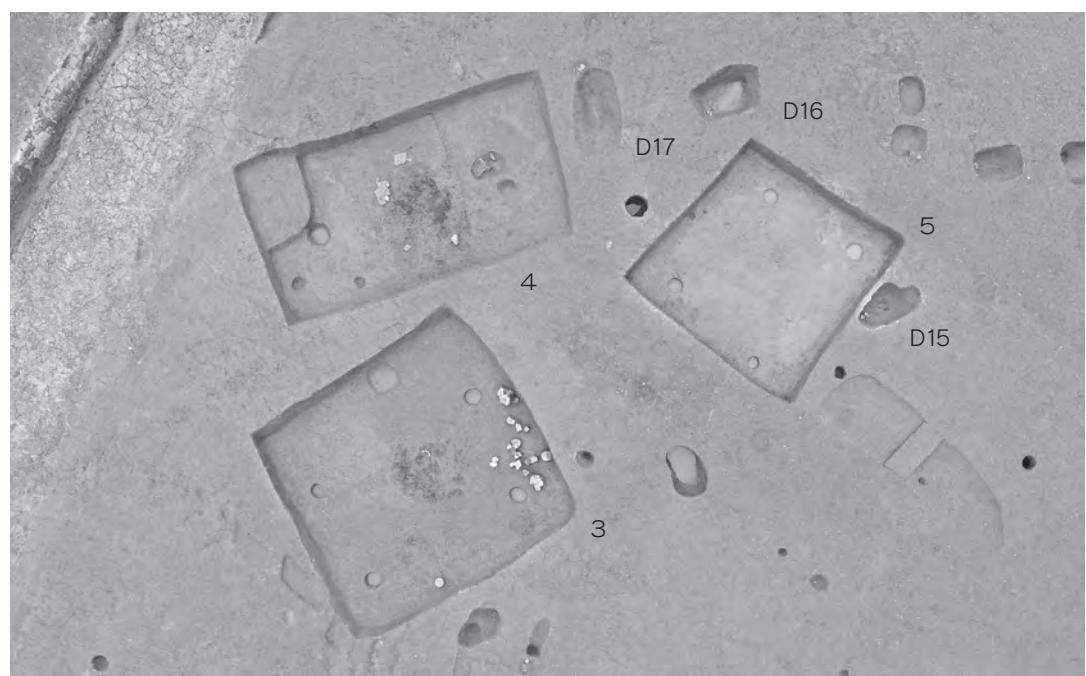
(1) 2号竪穴住居カマド
(南から)



(2) カマド完掘状況
(南から)



(3) 土器出土状況
(南から)

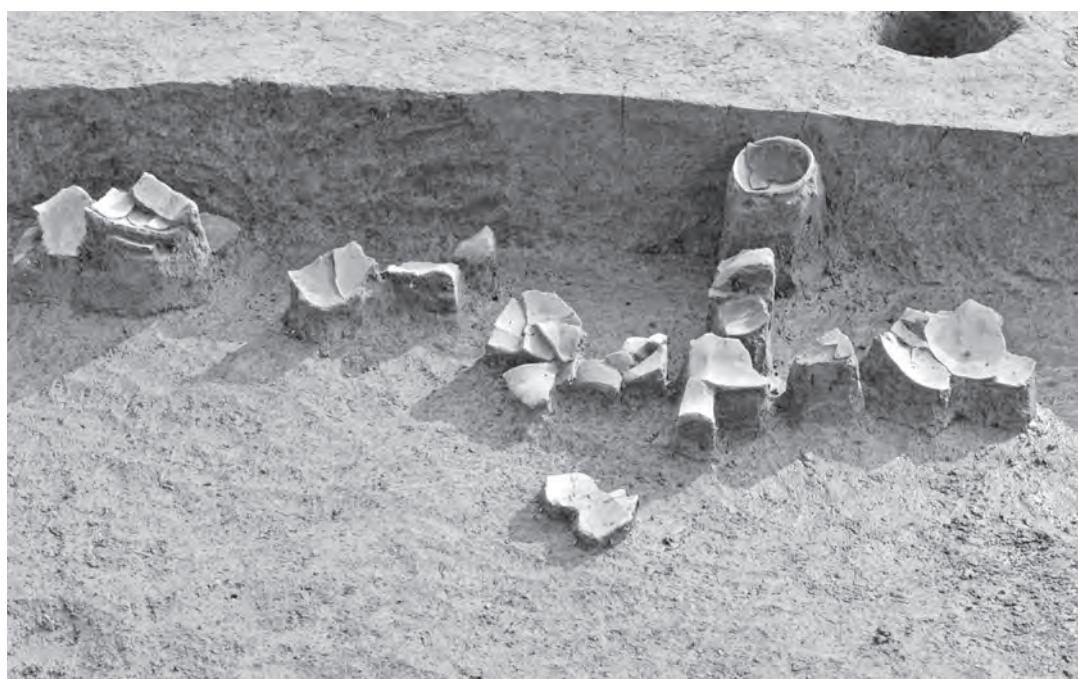




(1) 3・4号竪穴住居
(南東から)



(2) 3号竪穴住居
(南東から)



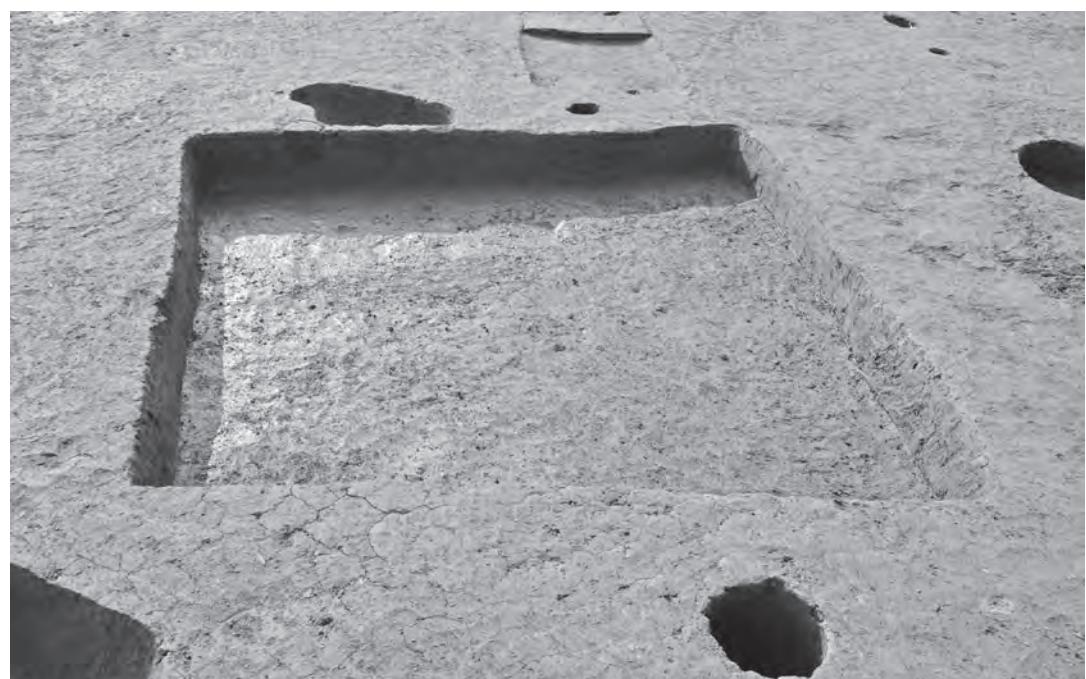
(3) 3号竪穴住居器
出土状況
(北東から)



(1) 4号竪穴住居
(北東から)

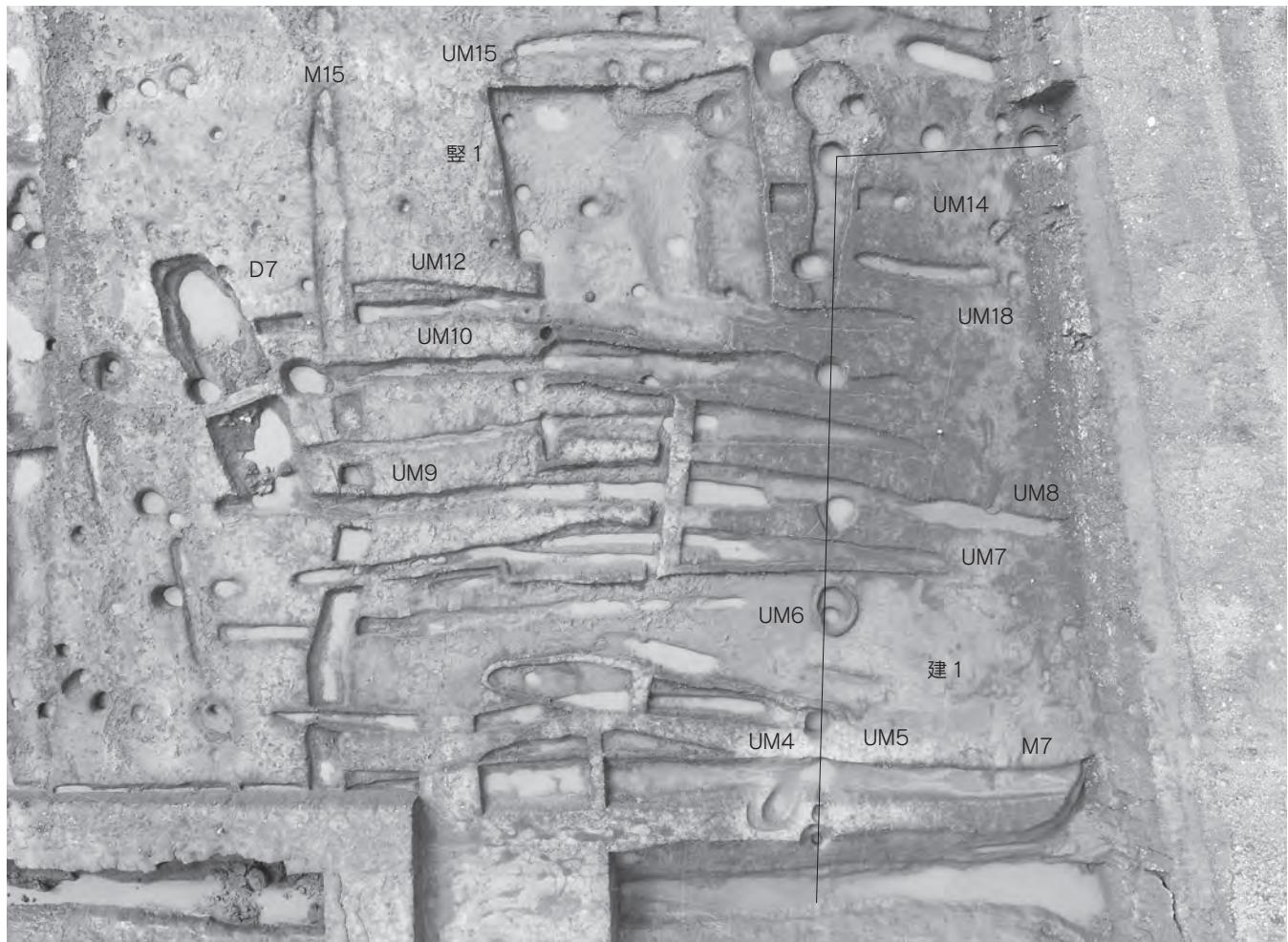


(2) 4号竪穴住居
炉跡 (南東から)



(3) 5号竪穴住居
(東から)

図版 20



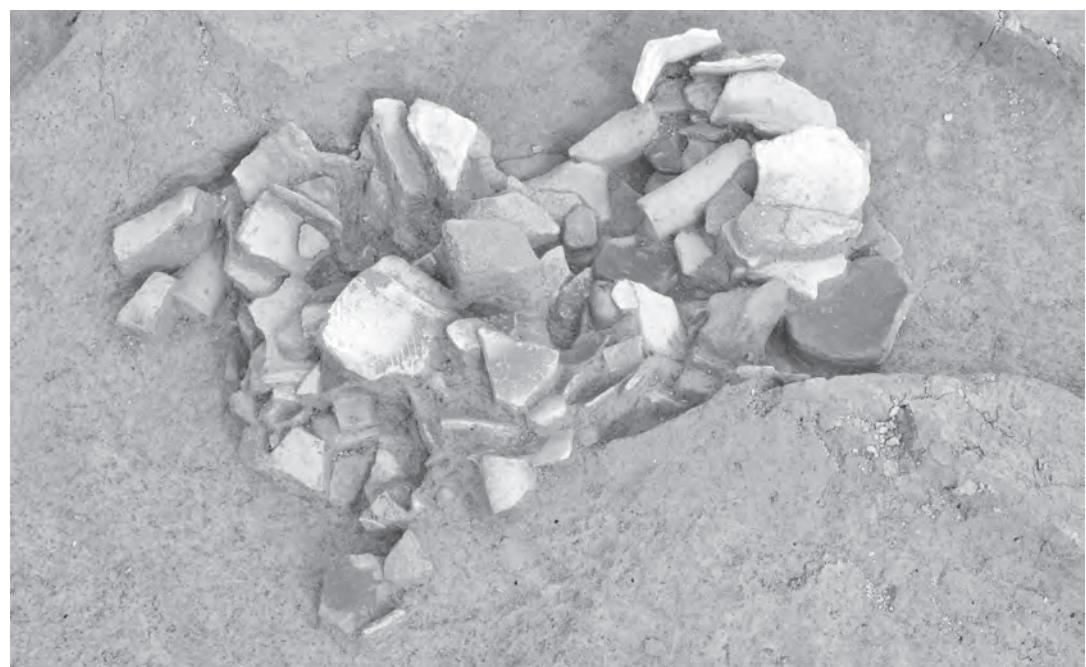
(1) 1号掘立柱建物、竪溝群（東上空から）



(2) 1号方形竪穴、2号竪穴住居、8・9・12・14・15号溝（東上空から）



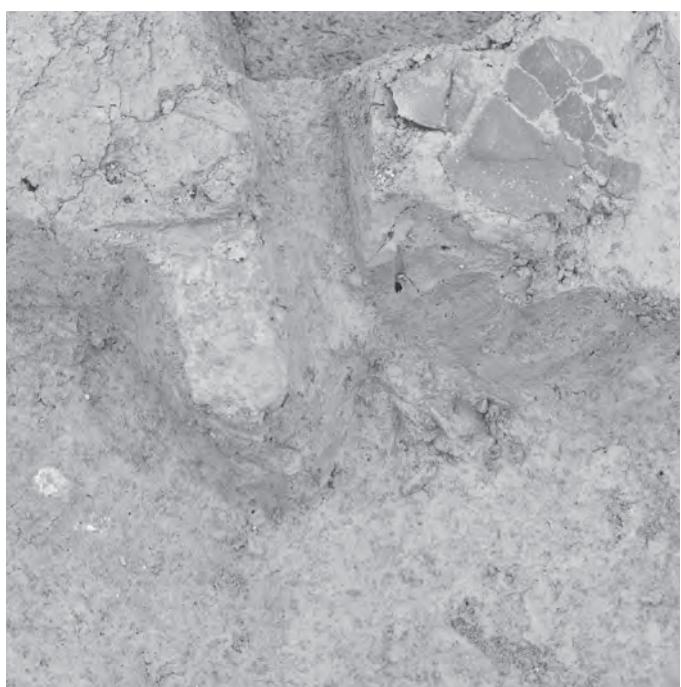
(1) 4号土坑（西から）



(2) 4号土坑土器
出土状況
(南西から)



(3) 9号土坑（南東から）



(4) 9号土坑鉄鎌出土状況（西から）



(1) 7号土坑（東から）



(2) 7号土坑東半部
土器出土状況
(北から)



(3) 7号土坑西半部
土器出土状況
(北から)



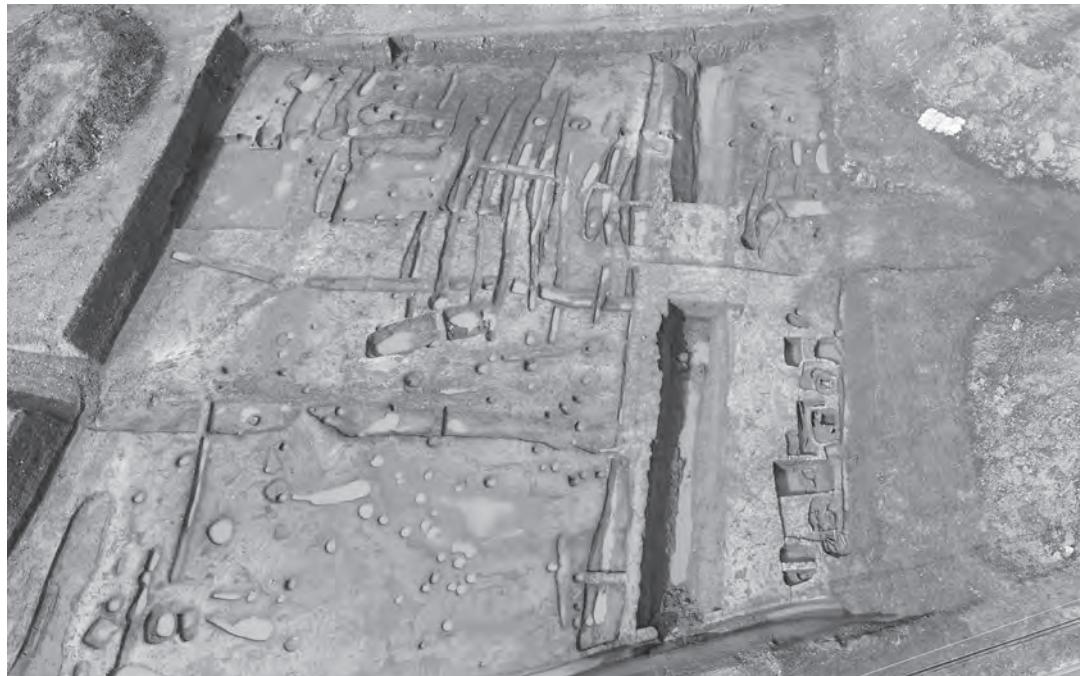
(1) 8号土坑(北から)



(2) 12号土坑(東から)



(3) 12号土坑(南から)



(1) I区中央調査区、
2号大溝（南から）



(2) 2号大溝北壁土層
(南から)



(3) 2号大溝中央部土層
(南から)



(1) 上層1号小溝（南から）



(2) 上層1号小溝（北から）



(3) 上層1号小溝
(西から)



(4) 上層1号小溝
南端土層
(北から)

図版 26



(1) I区中央調査区（真上から）



(2) 溝・畝溝群（南から）



(1) 近世墓群A
(南上空から)



(2) 近世墓群A
(西から)



(3) 11号近世墓 (東から)



(4) 11号近世墓位碑出土状況 (北から)

図版 28

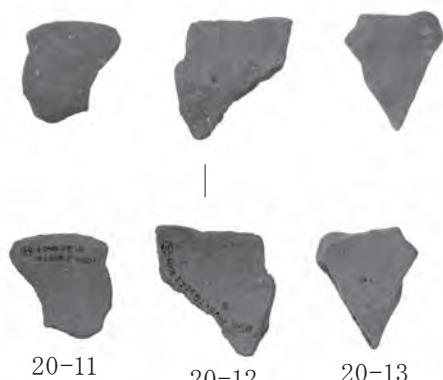
(1)



20-4



20-5



20-11

20-12

20-13



22-6



22-10



22-13

(2)



22-3



22-4



22-5



22-14



22-15



22-16

(1) 2号竪穴住居出土土器

(2) 3号竪穴住居出土土器①



図版 30

(1)



35-3

(3)



35-13

(2)



35-6

(4)

37-3



35-9



38-1

- (1) 8号土坑出土土器
- (2) 9号土坑出土土器
- (3) 10号土坑出土土器
- (4) 12号土坑出土土器

(1)



(2)



(3)

(1) 6号溝出土土器
(4) ピット他出土土器(2) 8号溝出土土器
(5) 層位等出土土器

(3) 16号溝出土土器



(1) 11号近世墓出土位牌



(2) I区出土土製品・石製品



(4) I区出土石器・石製品



(3) I区出土鉄製品



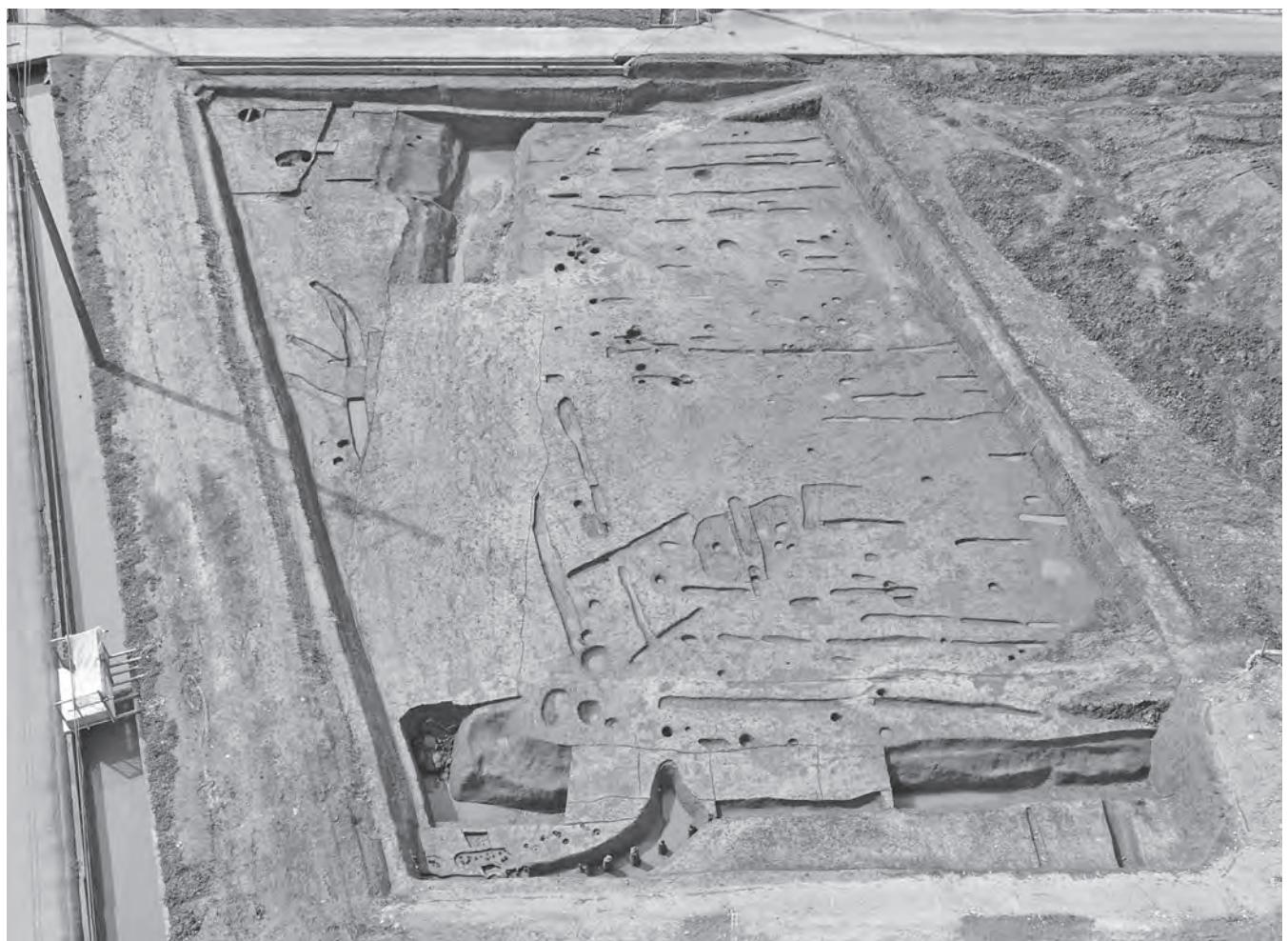
(1) 3次II・III区調査地遠景（西上空から）



(2) 3次II・III区調査地遠景（南上空から）



(1) II区調査地全景（真上から）



(2) II区調査地全景（南上空から）



(1) 1号掘立柱建物
(南から)



(2) 1号土坑 (南から)



(3) 1号土壙墓 (南から)



(4) 人骨出土状況 (東から)



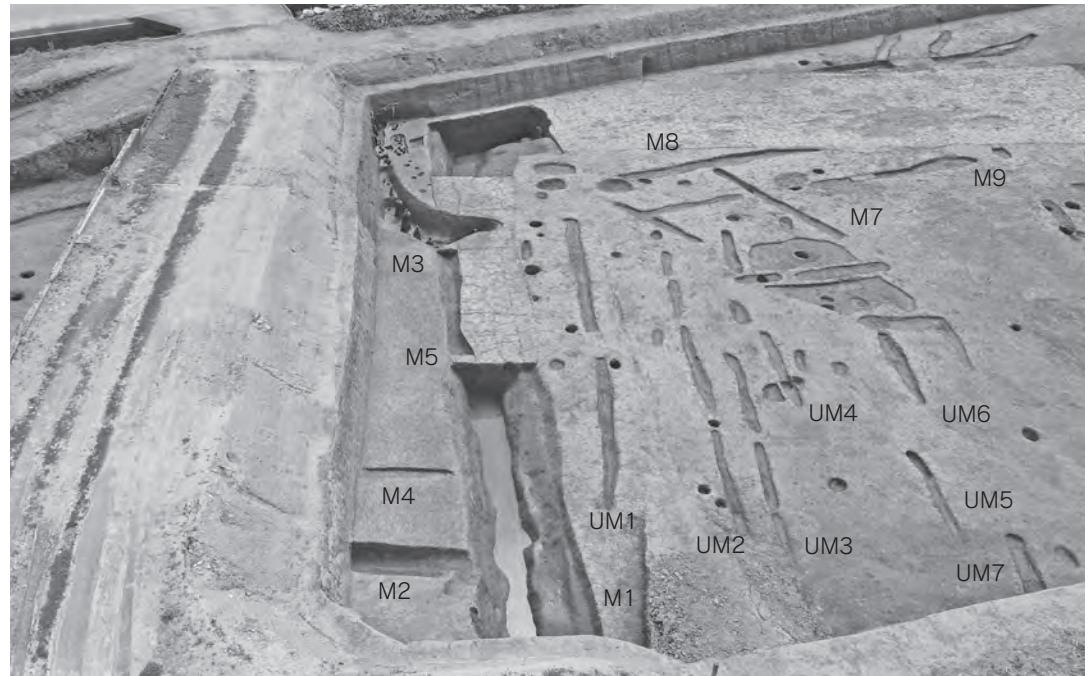
(1) 1号大溝（西から）



(2) 1号大溝西壁土層
(東から)



(3) 1号大溝東端部土層
(東から)



(1) 溝、畠溝群(北から)



(2) 1号溝北壁土層
(南から)



(3) 1・5号溝土層
(南から)

図版 38



(1) 1~5号溝、畝溝群、杭列（西上空から）



(2) 1~5号杭列（南から）



(3)



(4)

(3) 3号土坑出土土器
(4) II区検出時出土土器



(1) 3次I~III区調査地遠景（手前がIII区、東から）

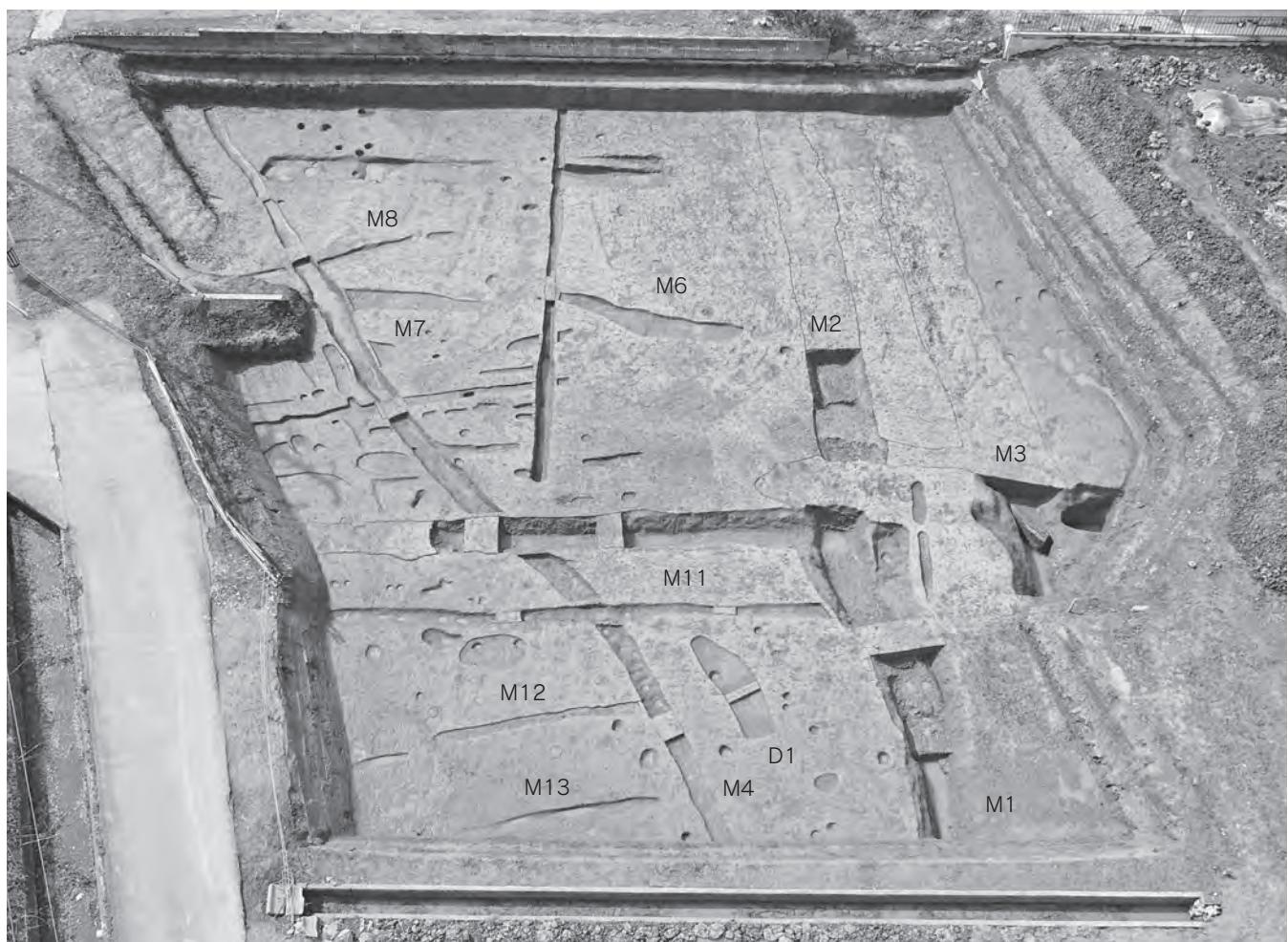


(2) 3次III区調査地全景（真上から）

図版 40



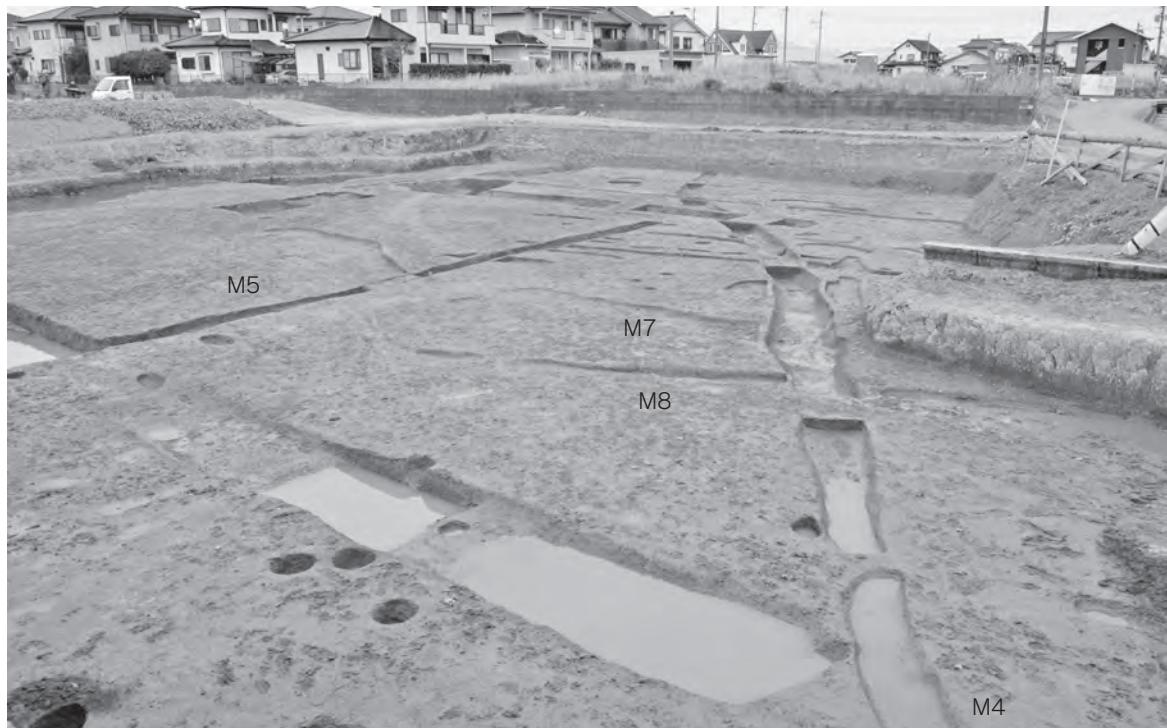
(1) III区調査地全景（北上空から）



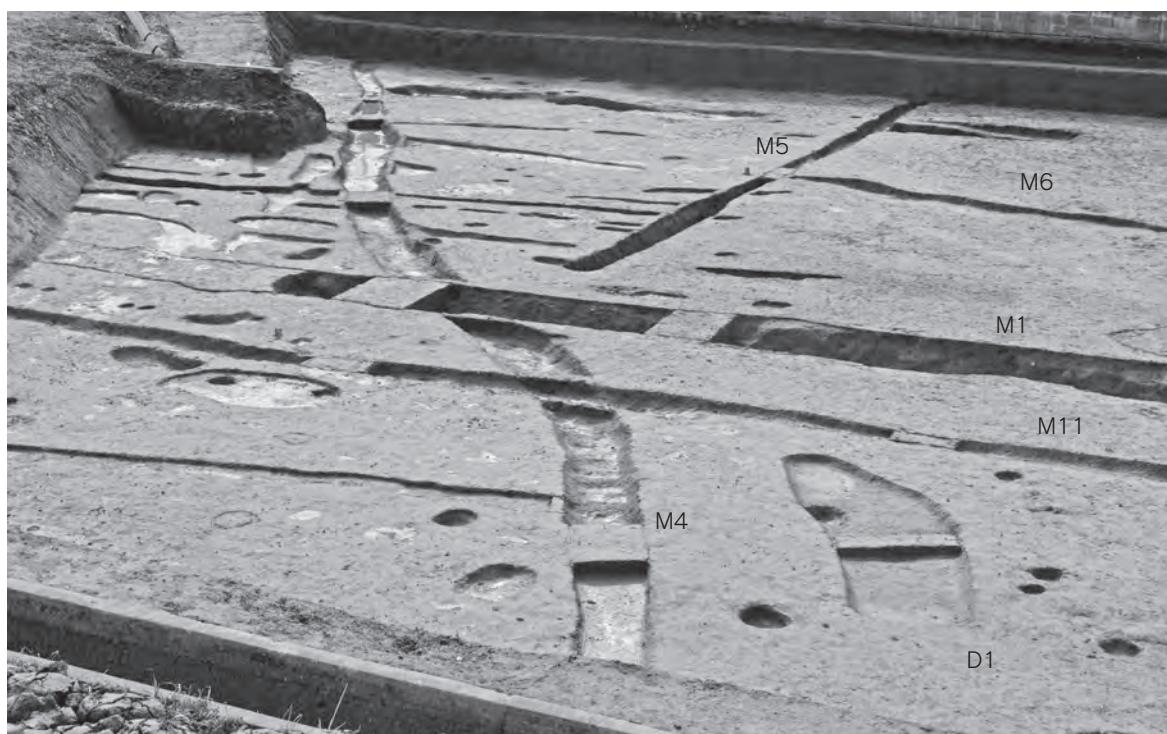
(2) III区調査地全景（東上空から）



図版 42



(1) 4号溝（南東から）



(2) 4号溝（北東から）



(3) 2・3号溝間出土土器



(4) III区出土石器・石製品・鉄器

84-4

報 告 書 抄 錄

ふりがな	じゅうろうまるはせこいせき に							
書名	十郎丸長谷古遺跡Ⅱ							
副書名	主要地方道久留米筑紫野線建設事業関係調査報告							
卷次	2							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第287集							
編著者名	小田和利(編集)、坂元雄紀、志賀智史							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 TEL 0942-75-9575							
発刊年月日	西暦2025年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じゅうろうまる 十郎丸 はせこいせき 長谷古遺跡	ふくおかんくろめし 福岡県久留米市 きたのまらひやま 北野町今山 いまやまうしろ 今山後1066~1068・ 1089・1090他			33° 20' 45.77"	130° 34' 32.6"	2022.10.24 ~ 2023.02.15 2023.10.10 ~ 2024.03.29	約4,070m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
十郎丸 長谷古遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代 江戸時代	竪穴住居 土坑 甕棺墓 竪穴住居 掘立柱建物 方形竪穴 土坑 畝溝 大溝 溝 近世墓	弥生土器 鉄器 甕棺 須恵器・土師器 陶磁器 位牌	江戸時代の大溝は、物資運搬に利用した運河とみられる			

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
6	2

主要地方道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 14

十郎丸長谷古遺跡Ⅱ

令和 7 (2025) 年 3 月 31 日

発 行 九州歴史資料館

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印 刷 株式会社 四ヶ所

朝倉市馬田 336